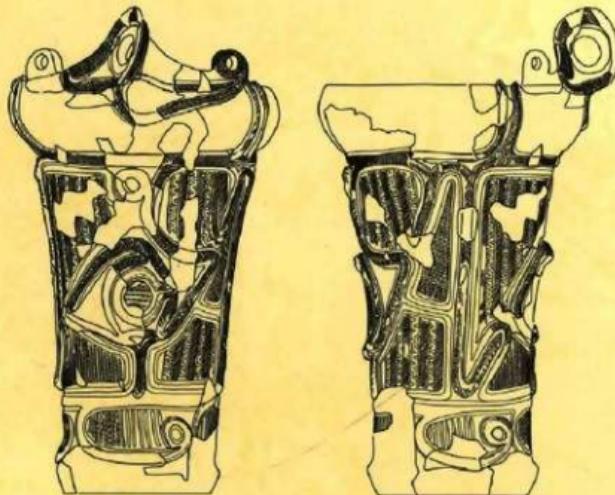


TSUBONOUCHI

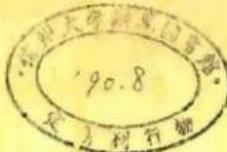
松本市坪ノ内遺跡

—緊急発掘調査報告書—



1990・3

松本市教育委員会



TSUBONOUCHI

松本市坪ノ内遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1990・3

松本市教育委員会

序

中山地区は古墳群が各所に点在し、また広く土器が出土することなどが古くから知られておりました。近年になり中山古墳群、向畠遺跡を始めとする幾多の調査から、中山地区は遺跡の宝庫であることが確認されています。

坪ノ内遺跡はそのような中山地区の遺跡の一つで、昭和63年に発掘調査が実施されましたが、このたび無事その結果をまとめることができました。調査はほ場整備事業に先立つ埋蔵文化財の記録保存を目的としたもので、松本市が松本地方事務所からの委託を受けて松本市教育委員会が実施したものです。

発掘調査は昭和63年8月から12月末までの4ヶ月の長きにわたって実施され、松本平有数規模の绳文時代の集落を発見し、膨大な数の土器を出土するなど多くの成果を収めることができました。今後の地域の歴史解明に大変役に立つ資料になると思います。しかしながら発掘調査を施すということは、同時に遺跡を失うことを意味します。開発事業が多発している昨今、文化財保護の機運がより一層盛り上がることを願ってやみません。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力をくださいました中山土地改良区をはじめ関係諸機関および地元の皆様に厚く御礼申し上げ序といたします。

平成2年3月

松本市教育委員会 教育長 松村好雄

例 言

1. 本書は昭和63年8月2日から12月24日にわたって実施された、長野県松本市中山5156番地付近に所在する坪ノ内遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2. 本調査は昭和63年度県営は場整備事業に伴なう事前の発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が行なったものである。
3. 本書の執筆は、第1章第1節 事務局、第2章第1節 太田守夫、第5章第4節1~4群 島田哲男、5群、6群1類A、2、3、5類 寺内隆夫、6群1類B、4類、7群 野村一寿、第5節1、3、第6節 関沢聰、第5節2平林彰、第8節1 西沢寿晃、その他の項目を新谷和孝が行なった。第5章第8節2は森義直のデータをもとに新谷が行なった。文責は新谷にある。
4. 本書の編集は事務局が行ない、滝沢智恵子の助力を得た。
5. 本書の作製にあたっての作業分担は次のとおりである。(順不同)
土器復元・拓影、滝沢智恵子、五十嵐周子
遺物実測 直井雅尚、三村竜一、土橋久子、沢柳秀利、金井ひろみ、関沢聰、寺内隆夫、
島田哲男、平林彰、新谷和孝
トレース 直井雅尚、三村竜一、土橋久子、沢柳秀利、関沢聰、平林彰、石合英子、伊藤智子、
鹿嶋八重子、竹内靖長
図版作成 関沢聰、久保田剛、平林彰、石合英子、寺内隆夫、竹内靖長、新谷和孝
遺構写真 二村竜一、新谷和孝
遺物写真 宮崎洋一、関沢聰
表作成 石合英子、平林彰、新谷和孝
6. 出土遺物の整理にあたっては、島田哲男、寺内隆夫、野村一寿、平林彰、山岸洋一、望月映、宮城孝之の諸氏に多人数の御教示、御協力をいただいた。
7. 本書作成にあたっては、次の方々の御協力を得た(順不同)。
山本裕子、久保下三枝子、後藤ひとみ、竹原学、山田真一、宮沢生代、中山ゆみ、河田庄司、蓮池ひろみ、小松正子、林和子、吉沢克彦、伊丹早苗、高瀬典子、塙原靖美
8. 本書中の寸の縮尺は、特に断りのあるものを除き、次のように統一した。遺構図 住居 $\frac{1}{50}$ 、土坑 $\frac{1}{50}$ 、 $\frac{1}{100}$ 、遺物 土器実測図 $\frac{1}{50}$ 、土器石影 $\frac{1}{50}$ 、土製品、石器、石製品は各項中に示した。
9. 図中の記号は以下の通りである。●土偶、■ミニチュア上墳、○骨類、□研磨砾、★埋葬、◎鉛貨、▲燒土、△炭化物
10. 出土遺物、既出遺物のうち整理作業の都合により、図版作成、原稿執筆後に図がでてきたものは図の最後にまとめて提示した。また図化できなかったものの一部は写真のみ掲載した。なお本書では、より多くの資料を図示するため、図の縦組、横組を併用した。
11. 土器実測図等のNo.は、各項ごとの通し番号の下に、遺物実測時のNo.を付した。土器集中区の遺物については、出土グリットと取り上げNo.を付した。45-30はN45E30を示す。
12. 委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記載を重視したため本書より削除したが、区類、川上遺物とともに松本市教育委員会が保管している。

目 次

序

例 言

目 次

第1章 調査経過

第1節 文書記録	4
----------	---

第2節 調査体制	5
----------	---

第3節 調査日誌	6
----------	---

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質	7
-----------	---

第2節 周辺遺跡	10
----------	----

第3章 坪ノ内遺跡をめぐる研究史

第4章 調査

第1節 調査の方法	19
-----------	----

第2節 調査の概要	21
-----------	----

第5章 調査結果

第1節 住居址	22
---------	----

第2節 上坑	68
--------	----

第3節 配石群	103
---------	-----

第4節 土器集中区	126
-----------	-----

第5節 土偶・土製品等	
-------------	--

1 土偶	204	2 ミニチュア土器	206
------	-----	-----------	-----

3 土製品	209		
-------	-----	--	--

第6節 石器・石製品	
------------	--

1 石器	227	2 石製品	234
------	-----	-------	-----

第7節 その他の出土遺物	
--------------	--

1 骨	268	2 炭化物	269
-----	-----	-------	-----

第6章 考察

1 坪ノ内遺跡における縄文時代集落の変遷	270
----------------------	-----

2 坪ノ内遺跡における縄文時代後期の住居址に関する諸問題	279
------------------------------	-----

第7章 調査のまとめ

挿図目次

第1図 遺跡の位置	9	第32図 第22号住居址(1)	59
第2図 周辺遺跡	11	第33図 第22号住居址(2)	60
第3図 距出遺物(1)	15	第34図 第21号住居址	61
第4図 距出遺物(2)	16	第35図 第23号住居址	62
第5図 距出遺物(3)	17	第36図 第3号住居址(1)	63
第6図 昭和40年の調査位置推定図	18	第37図 第3号住居址(2)	64
第7図 調査位置図	20	第38図 第6号住居址	65
第8図 第13・14号住居址	35	第39図 第20号住居址(1)	66
第9図 第9号住居址(1)	36	第40図 第20号住居址(2)	67
第10図 第9号住居址(2)	37	第41図 土坑(1)	74
第11図 第11号住居址	38	§	§
第12図 第19号住居址(1)	39	第51図 土坑(1)	84
第13図 第19号住居址(2)・第25号住居址	40	第52図 配石群	104
第14図 第18号住居址(1)	41	第53図 遺構出土土器実測図(1)	105
第15図 第18号住居址(2)	42	§	§
第16図 第17号住居址	43	第64図 遺構出土土器実測図(2)	116
第17図 第1号住居址(1)	44	第65図 遺構出土土器拓影(1)	117
第18図 第1号住居址(2)	45	§	§
第19図 第12号住居址	46	第72図 遺構出土土器拓影(8)	124
第20図 第15号住居址(1)	47	第73図 土坑145出土鐵拓影	125
第21図 第15号住居址(2)	48	第74図 土器集中区土層図	128
第22図 第24号住居址	49	第75図 上器集中区内遺構分布図	129
第23図 第4・5号住居址(1)	50	第76図 上器集中区内遺構図(1)	130
第24図 第4・5号住居址(2)	51	第77図 上器集中区内遺構図(2)	131
第25図 第2号住居址	52	第78図 土器集中区出土土器実測図(1)	143
第26図 第7号住居址(1)	53	§	§
第27図 第7号住居址(2)	54	第111図 土器集中区出土土器実測図(3)	176
第28図 第10号住居址(1)	55	第112図 土器集中区出土土器拓影(1)	177
第29図 第10号住居址(2)	56	§	§
第30図 第8号住居址	57	第138図 土器集中区出土土器拓影(2)	203
第31図 第16号住居址	58	第139図 土偶(1)	215

§	§	§	第151図 石器(1)	250
第145図 土偶(7)	221	§	§	§
第146図 ミニチュア土器(1)	222	第167図 石器(2)	266	
第147図 ミニチュア土器(2)	223	第168図 石製品	267	
第148図 ミニチュア土器(3)	224	第169図 集落変遷図(1)	274	
第149図 土製品(1)	225	§	§	§
第150図 土製品(2)	226	第173図 集落変遷図(5)	278	

付 図

- 1 坪ノ内遺跡遺構全体図
- 2 坪ノ内遺跡中期後葉遺構分布図
- 3 坪ノ内遺跡後期前葉遺構分布図

表目次

第1表 土坑一覧表	86
第2表 土偶一覧表	210
第3表 ミニチュア土器一覧表	212
第4表 土製品一覧表	213
第5表 石製品一覧表	236
第6表 石器一覧表	237

第1章 調査経過

第1節 文書記録

- 昭和62年9月7日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月21日 昭和63年度補助事業計画書提出。
- 昭和63年4月7日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月27日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月31日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 6月1日 昭和63年度県営ほ湯整備事業中山地区坪ノ内遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月14日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月31日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月22日 坪ノ内遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 8月25日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月12日 昭和64年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月22日 昭和64年度補助事業計画書提出。
- 平成元年2月9日 坪ノ内遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 4月3日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月3日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 5月24日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月15日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月18日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 7月20日 坪ノ内遺跡埋蔵物の文化財認定。
- 9月11日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節 調査体制

昭和63年度（調査・整理）

調査団長 中島俊彦（松本市教育委員会教育長）

調査担当者 神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）

現場責任者 三村竜一、新谷和孝（社会教育課埋文担当）

調査員 太田守夫、三村暉、土橋久子、西沢寿晃、野村一寿、石上周藏、綿田弘実

協力者 赤羽とみ子、赤羽章、赤羽包子、青木雅志、荒井唯邦、石井良子、伊丹早苗、遠藤栄治

浦沢久美子、小野光信、岡部登喜子、小川むつ子、大沢真二、奥原富蔵、川上とよみ、川上春子、金井ひろみ、川上典子、木下ふき菜、小松小さん、小島茂富、見玉春紀、五味聰一郎、小林文子、小松正子、小林謙次、下里順子、下里忠靖、下里みつ江、莊秀也、下里末子、瀬川長広、高山柳子、武居美保、田中泉造、鶴川登、多田邦彦、永沢周子、中田美智子、中島三寿子、中村文一、中村恵子、中嶋督朗、中島若子、中島世津子、中沢貴里子、中村安雄、中島新嗣、中島芳晴、降旗勇次、原初水、林和子、藤本利子、林伊和夫、堀洋子、長谷川作吉、林昭雄、洞沢武子、巾崎助治、北条多寿子、三沢元太郎、百瀬きゑ、百瀬良子、百瀬千恵子、百瀬邦子、丸山誠、宮嶋みづ代、丸山久司、村山正人、南山久子、百瀬正美、見村芳子、丸山よし子、宮嶋俊行、百瀬弘子、百瀬八江、山口順子、横山保子、横山小夜子、吉沢克彦、矢島利保、横山篤美、米山禎興、若井七十郎

平成元年度（整理）特に調査團の編成は行なわず以下の体制で実施した

責任者 新谷和孝 協力者 浅野八重子、五十嵐千恵、石合英子、石合佐子、五十嵐周子、稻葉富子、海野澄子、内沢紀代子、小沢泉、大久保幸子、神沢ひとみ、上条益子、川程命子、条井益子、鎌木なつ江、滝沢麗一、滝沢直美、高瀬小起子、開崎八重子、塚田つたえ、直井由加理、直井スガ子、中島治香、西川卓志、海野洋子、藤森久子、松森幸子、宮城晴美、水沢幸一、南山久子、六川由美子、松本かつよ、伊藤智子

事務局 浅輪幸市（社会教育課長）田口勝（文化係長）熊谷康治（課係長）降旗英明（主事）直井雅尚（主事）山岸清治（主事）三沢利子、佐々木仁美（S 63）赤羽美保（H 1）



第3節 調査日誌

昭和63年7月31日 調査位置決定のための試掘調査を行なう。1×1mの試掘ピットを10ヶ所設定し掘り下げる。住居址1軒（のちの第18号住居址）確認。のちの土器集中区部分の試掘ピットからは多量の土器片が出土する。

- 8月2日 重機による表土除去を行なう。（8月18日まで）
8月22日 本日より検出作業を開始する。
8月31日 土器集中区部分を除き遺構検出を終了、遺構の掘り下げを開始する。
9月7日 土器集中区部分の検出作業を行なう。覆土の表面より多量の遺物が出土する。検出面で若干の焼土を確認したが、明瞭に確認できた遺構はない。
9月9日 全体図の作成開始、住居址の掘り下げをほぼ終り土坑の掘り下げを開始する。土器集中区に2×2mのグリッドを設定する。
9月12日 遺構の測量を開始する。以降、住居址、土坑の掘り下げ、測量を併行して行なう。
9月26日 土器集中区東側より掘り下げを開始するが、溝水のため作業中止。測量は住居址の覆土中の疊が非常に多いため難航する。
10月3日 土器集中区掘り下げを再開する。多量の土器が相次いで出土する。
10月11日 集落が環状に展開する可能性が高いことが判明したため、土器集中区掘り下げを一時中止し、集落の南側の土坑群へ調査の中心を移す。以後中断されていた住居址、土坑の掘り下げ、測量を重点的に行なう。
10月30日 I区を南側へ拡張することを決定。重機により表土の除去、排土の移動を行なう。
10月31日 拡張部の遺構の検出作業を行なう。南側は土坑が非常に多いことが判明。
11月4日 拡張部分の遺構の掘り下げを開始する。
11月14日 拡張部分の遺構、土坑を除き掘り下げ終了。土器集中区の掘り下げ再開。
11月25日 土器集中区の土層図作製開始。終了後土層観察用のベルトを除去し、全面掘り下げる。
11月29日 向畠遺跡より作業員移動。拡張部分の土坑掘り下げを再開する。
12月13日 土器集中区写真測量実施。
12月15日 土器集中区遺物出土状態写真撮影。太田守夫氏による地質の調査を行なう。
12月19日 土器集中区遺物取り上げ開始。
12月20日 土坑掘り下げ終了。測量と併行して、航空写真の撮影準備を行なう。
12月22日 土器集中区遺物取り上げ終了。
12月23日 午前中航空写真撮影準備、昼、航空写真撮影、午後機材等の片づけを行ない調査終了。
12月24日 残りの土坑等の写真撮影を行ない、全ての現場作業を終了する。
以後報告書作成に向け、整理作業を行なう。

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

1. 位置と地形

本遺跡のある松本市中山坪ノ内地籍（標高700～710m）は、向畠遺跡（1988・1989報告）ののる向畠遺跡の台地の西側斜面に位置する。平均傾斜40/1000で向畠遺跡より地形面の傾斜度は高い。向畠の台地は特に南方と西方に斜面を広げ、微地形的には尾根筋、谷筋を作っている。この尾根や谷の起伏は末端になるほど大きくなる。本遺跡でも遺構が多く発見された場所は尾根筋、土器集中区は尾根筋から谷筋への斜面である。この尾根筋の北側と南側にある水田地域が谷筋に当たり、中川保育所の南方や西南方から始まる。谷頭には湧水が見られ浸凹が広がり、古くはこの湧水を田用水とした。現在は沖田などからの導水により尾根、谷筋の末端が水田化されている。

周辺は向畠遺跡報告Ⅰにも述べたように、更新世（洪積世）の断層活動による地盤変動や、その後の宮入川（千石沢）等の浸食作用により、狭い範囲内で地形が複雑となっている。本遺跡の西方はおよそ150mで牛伏川（松本盆地）への急崖（10数m）、北方は50mほどでガニ堀沢の浸食谷に臨んでいる。南方は末端が急斜となっていて、生活の舞台を提供している。

2. 地層と土壤

坪ノ内遺跡周辺の岩石は石英閃緑岩一色と思われるほど、遺構の場所はこの岩塊が広がっている。地層や土層の内部は土の深さでも、この岩石の風化岩塊と風化砂礫からなっている。石英閃緑岩は含有鉱物として、石英・長石・角閃石・黄鉄鉱等を含む。長石は風化して、白っぽい部分が層をなしたり、粘土化してローム質土と混じて塊状となる。一方石英粒はローム質土の中に、量が多いと砂層と間違えられる。

本遺跡は向畠遺跡と土層が異なり、長石による風化物よりも、石英粒のローム質土との混合比が高く、砂質分が多いのが目立つ。土層には、(1)ほとんど石英閃緑岩の岩塊と、その風化物が詰まつたところ、(2)石英閃緑岩の岩塊と風化物のローム質土を混じえたところ、(3)ローム質土が主で岩塊や風化物を混じているところと、場所によって違っているが一般に砂質分が多い。

これを地層断面でみると、地表から20cm（耕土）は農植物による灰黒～黒褐色土、20～40cmは農植物に石英閃緑岩の砂と礫とローム質土を混じる、40～100cmは石英閃緑岩の^中大・巨礫の角・亜角礫と、砂とローム質土が混じえる。下部になると大・巨礫の間隙が少くなり、礫とその風化物だけかと思われるほどである。

母材の石英閃緑岩は、東側の宮入山・高遠山などの石英閃緑岩の山から供給された板石である。ローム質土は千石や中山丘陵頂上部に見られる降下ローム（波田ローム）と考えられ、降下あるいは二次的に石英閃緑岩の岩塊に混じたものである。

土壤の色は黄褐色・赤褐色・暗褐色で、腐植物を混じえたものは黒褐色・黒灰色となっている。赤褐色土の赤味は風化した石英閃緑岩の鉄分などの影響である。向畠遺跡で白っぽい長石の風化層や、ローム質土と混じった赤褐色土に変わり、本遺跡では赤褐色土と腐植物とが混じった、黒褐色盤層状の堆積が各所に見られる。見遺構や遺物に附隨したものと見られたが、土壤の生成物であることがわかった。土器集中区は湿地の一部、あるいはその近辺であったためか、高植物による影響が大きく、土は黒色・黒褐色となっている。現在でもその北側には湿地や質性植物の密集が見られる。

他の場所から運び込まれた石の類では、第1・22号住居址の美ヶ原安山岩の鉄平石の敷石が最も目立つ。そのほかは河床疊の砂岩・緑色凝灰岩・安山岩・硬砂岩・石英閃緑岩等が主で、近くの薄川・牛伏川・田川・奈良井川で普通に見られるものである。

3. 地形の形成と遺跡

向畠や坪ノ内の地形の形成については、すでに向畠遺跡の報告で述べたので参照していただきたい。断層活動と火山灰の降下、石英閃緑岩疊の堆積は順次起きた現象で、縄文期の生活の始まる以前におさまっていたと思われる。その後周辺には沖積世の浸食や堆積（宮入川沿いなど）が始まると、この地形面には影響を及ぼしていない。したがって比較的浅い表層下で遺構の発見があったと思われる。また遺跡の複合が呼べたのは、岩塊の多い土層は地ドへの風化に時間をするため、土層の厚さに限界があったことも一因と思われる。さらに複合が行われるほど土壤が動かされるため、腐植の入る余地が多くなる。一方風化によって生じた鉄・マンガン分は腐植と結びやすいため、黒褐色盤層状の堆積が目立つようになったと思われる。



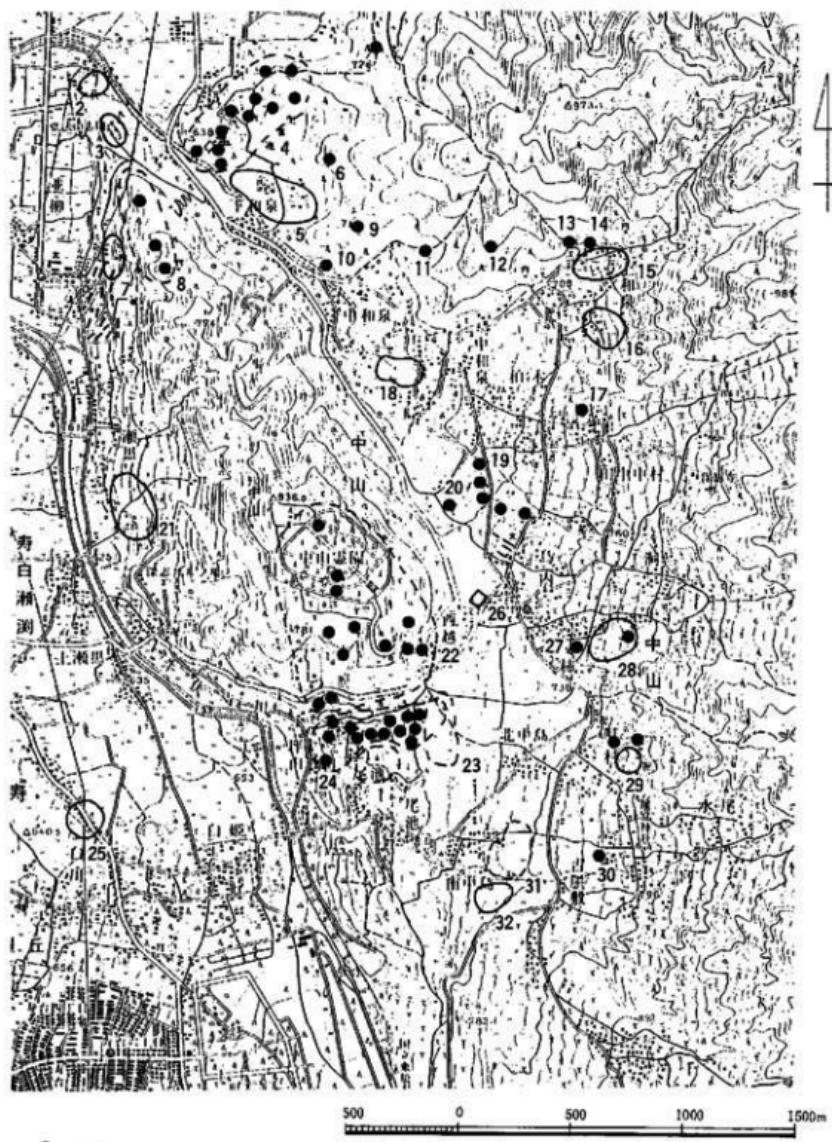
第1図 遺跡の位置

第2節 周辺遺跡

本遺跡の周辺遺跡については、隣接する白糸遺跡の報告書（松本市教委1988）で述べられているが、ここでは縄文時代の遺跡について、その後の調査分も含めて若干触れてみたい。松平の縄文時代の遺跡の分布は本址のある東山山麓と、朝日村、山形村、波田町などの西山山麓に集中して見られる。東山山麓の代表的な縄文時代の遺跡をあげると、塙尻市福沢、向陽台、鬼原、鬼屋敷、小丸山、松本市南郷、五斗林、エリ穴、石行、前田木下、白神場、深沢などがある。特に近年は縄文時代中期の環状集落が全面調査された鬼原遺跡など、大規模な調査が相次ぎ、その様相の解明が進んでいる。中山地区でも、本遺跡に隣接する向日遺跡で、中期初頭の住居址が9軒調査されたのをはじめ、本遺跡の調査が行なわれた翌年には、生妻遺跡で中期後葉の住居址が5軒、弥生前遺跡で中期後葉の住居址が28軒、南中島遺跡で中期中葉～後葉の住居址が33軒相次いで調査され、いずれも現在、整理作業が進められている。このうち、弥生前、南中島の両遺跡では、集落のほぼ全面が調査されており、本遺跡の成果と合わせて、中山地区の縄文中期の様相の解明が期待される。古くより多くの遺跡の存在が知られたこの地区であるが、その様相が明らかにされつつあるのは、ようやく近年になってからである。しかしそれと同時に、多くの遺跡が消え去っていることも忘れてはならないことである。

周辺遺跡地名表

1. 草内遺跡	(1965、88年発掘)	17. 大山古墳
2. 平糸遺跡		18. 弥生前遺跡 (1989年発掘)
3. 弘法山古墳	(1974年発掘)	19. 小丸山古墳
4. 桜原山古墳群	(1959、72年一部発掘)	20. 松木古墳 (1925年発掘)
5. 生妻遺跡	(1989年発掘)	21. 雨島遺跡
6. 生妻1号古墳		22. 敷形涼古墳群 (1923、26、67年一部発掘)
7. 山行法師遺跡		23. 向日遺跡 (1983、87、88年発掘)
8. 中山北尾板古墳群 (1937年発掘)		24. 塙内・向日古墳群 (1923、88年一部発掘)
9. 弥生山1号古墳	(1935年発掘)	25. 白川遺跡
10. 弥生山2号古墳	(1938年発掘)	26. 推定牧監厅跡 (1964年発掘)
11. 弥生山3号古墳		27. 小山下古墳
12. 和泉八幡山古墳		28. (仮称) 小山下遺跡 (1988年確認)
13. 中山26号古墳		29. 町村遺跡
14. 中山25号古墳		30. 鮎原 (1988年発掘)
15. 舟平八幡宮裏山遺跡		31. 南中島遺跡 (1988、89年発掘)
16. 和泉遺跡		32. 深沢遺跡 (1965年発掘)



● 古墳

第2図 周辺遺跡

第3章 坪ノ内遺跡をめぐる研究史

坪ノ内遺跡のある中山地区には、多くの遺跡や古墳があり、古くから遺跡の宝庫と呼ばれ、過去にも、多くの研究者が訪れている。この地区では人々の遺跡や遺物に対する関心も強く、耕作時等に出土した遺物は、中山小学校に持ち寄られ、やがて小学校内に、現在の市立考古博物館の前身的な施設である、中山考古館が作られ、展示、保管されていた。坪ノ内遺跡も古くより縄文時代の遺物が多く出土する遺跡として知られ、1965(昭和40)年には、小松達、井戸正二氏らにより、小規模な発掘調査が行なわれている。ここでは、この発掘調査と、それ以前の坪ノ内遺跡をめぐる研究について触れてみたい。

中山地区に關係した考古学の記事で最も古いものは、1703(元禄16)年の郷内の石橋に、穴蔵(古墳の横穴式石室)の蓋石を使用した記録(百瀬正武氏文書)である。その後、明治時代に入ると何人かの考古学研究者が、この地を訪れ、出土遺物の報告等を行なっている。

その中のひとつに明治26年4月の『東京人類学会雑誌』85号に掲載された、簗野秀雄氏の「信濃東筑摩郡埴原村地方ノ古物遺跡」という文がある。これは埴原村尾池(現・松本市中山尾池)周辺での表面採集の記録で、その当時の中山地区の遺跡や古墳の状況を伝える貴重な資料と言える。この報文は6ページあり、そのうち4ページには遺物の出土地の略地図と遺物のスケッチ(第3図)がある。この遺物は縄文時代中期の土器片と、後期の土偶と思われる。この地図をみると、右下の方に「塙ノ内」という地名がみえ、その周辺に石器、土偶発見地を示す斜線が、かかっている。現在の遺跡の分布と合わせてみると、これらの「尾池出土の遺物」は、坪ノ内遺跡より出土したものである可能性が強い。

その後、坪ノ内遺跡に直接関連した記事は、文献にはみられないが、現在松本市立考古博物館に収蔵されている遺物の中には、坪ノ内遺跡より出土したものが、多数存在し、中山考古館が設置された昭和初年代以来、多くの遺物の出土があったことを示している。遺物の中には坪ノ内遺跡の地主の名前が記されたものもあり、これらの人々が採集したものを考古館に寄せたものと思われる。

1965年11月の調査は、11月10、16、17日の3日間行なわれている。現在までに正式な報告書は刊行されていないが、『日本考古学年報』18、『松本市民館報中山版』昭和40年11月30日号に略報が、『東筑摩郡、松本市、塙戸市誌』2巻に遺構と遺物の箇の一節が報告されているので、それら一部を引用してみたい。

『日本考古学年報』15「長野県松本市中山坪内遺跡」

調査概要 調査はA、B、C、Dの4本のトレンチが設定されて作業がすすめられた。A、Bトレンチは平行して設けられ、加賀利E式、勝坂後の土器がかなり発見されたが、住居址を発掘するまではいたらなかった。上部の褐色土層には加賀利E式の住居址があるらしく、下部は勝坂式の住居址となるらしい。Dトレンチからは

遺物の出土ではなく、地質調査のため深く掘り下げる。Cトレンチよりは、縄文後期の平地式の住居址の石塀いの方形の炉が発見され、炉の中央に、火壇に利用されたと思われる土器の底部が埋設されている。炉を中心に作業がすすめられ、住居址と推定される区域は、日程の都合上掘あげることはできなかつたが、遺物として土偶の頭部、妻、注¹土器の一部が発見された。

(小松慶)

『松本市公民館報』中山版昭和40年11月30日号 「坪内発掘 古代住居跡」

(前略) その結果、第一には土器の破片が非常に沢山出土したが、殆んど縄文時代のもので、その中に珍しい土偶が1個と右図1個とあった。そして次にはその時代の住居址の炉が一ヶ所発見された。長さ約40~50cmの粗長い石を正方形に並べてあって、その石の中側は火に焼けていた。東側は石を2つ使ってある。こうした炉の周囲には必ず竪穴式住居の柱穴がある筈だが、生徒達の芋材の都合上、今回はそれ等の発掘ができなかつたことは遺憾であった。(後略)

(中山考古館 小松昌之)

『東筑摩郡、松本市、塙尻市誌』第二巻、「縄文時代後期の住居址」

松本市中山坪ノ内日向遺跡の調査で、Cトレンチの第四区から約五個の自然石を組んだ炉が発見された。が址は、地表下30cm、平地住居と推測されたが、炉址の両端から西方の自然石まで約2m、もしくこれを住居の西壁近くとすれば、径4mくらいの住居規模をもつものではないかと想われたが、全体の確認はできなかつた。

(藤澤宗平)

この時の調査に関する報告は以上の3篇が全てであると思われる。3番目の藤澤氏の文には住居址の図が掲載されているが、原図のコピーより再トレースして第4図に収録した。また同書には、土器の実測図が掲載されており、これも第5図に再録した。しかし残念なことに、調査した位置を記録した図が確認されていないため、この時の正確な調査位置は不明である。また前記の各報文を書いた3氏をはじめ、調査に参加した人の多くが故人となつたため、確認することもできなかつた。この時の調査で出土した遺物は現在、松本市立考古博物館に収蔵されており、その量は整理用デンバコで約20箱である。これらの遺物には出土トレンチ名を示すと思われる注記があり、その一部は今回の調査で出土した遺物と接合したものもある。接合したものは、いずれも土器集中区から山上した遺物であり、土器集中区の調査時には、極端に遺物の少ない部分や、埋め戻した跡と思われる部分も、平面的に把握できなかつたが、一部に確認されている。また今回の調査区の北西部では、前回の調査のものと思われるトレンチの跡を確認した。これらをもとに調査位置を推定したのが、第6図である。現存する遺物の注記は、アルファベットと数字の組み合わせで、TB 3-55、TB 2-40などとなっている。いずれもTから始まり、次の文字はA~Cの3種が存在する。おそらくTは、遺跡名の坪ノ内、もしくはトレンチの略で、A~Dは報文内の4本のトレンチを示すと推定される。TDの注記が存在しないのは、小松慶氏の報文中にある、Dトレンチからは遺物が出土しなかつたという記述と一致している。その次の数字はTAが1~6、TBが1~5、TCが0~4と16種ある。これは藤澤氏の報文中にある各トレンチ内の区画を示すものと推定される。末尾の2ケタの数字については、不明であるが、おそらく各トレンチの小区画内での原点からの距離を示すものではないかと思われる。各トレンチの位置推定の根拠を示すと、今回の調査区の北西部で確認されたトレンチは、地山の二次堆積ロームまで掘りこまれており、小松慶氏の報文中の地質調査の

ための深掘りと一致することから、T Dであると推定される。前回と今回の遺物が接合したものを見ると、接合した遺物は、全て T Bのもので、集中区のN43E28、N45E28、N45E30、N47E26のものと接合している。これらの遺物の出土位置及び出土状況より、T Bの位置は、土器集中区内のN47~43E28及び、N47~43E26付近にあったものと推定される。T Aは、遺物の接合例がなく確定できないが、小松慶氏の報文中のT Bと平行であったという記載と、遺物の出土状況及び覆土の状態から、土器集中区のN49~45E37付近と推定される。接合例はないが、集中区のこの付近出土の遺物と、T Aの注記のある遺物は同時期のものが多くみられる。なお前回の調査時のトレーニングは、東から西へA~Dの順に並んでいたと思われる。T Cの位置は明確でないが、BとDの間であるということと、T Cより後期の住居址が検出されたことから、第2号住居址の北側に隣接する付近と推定される。今回の調査の整理作業時には、T Cの遺物と、第2号住居址の遺物の接合は試みていないが、ほぼ同時期のものである。前回T Cより検出された炉の方向と、第2号住居址の主軸の方向も同じであることより、両者が同一の住居址である可能性は高い。

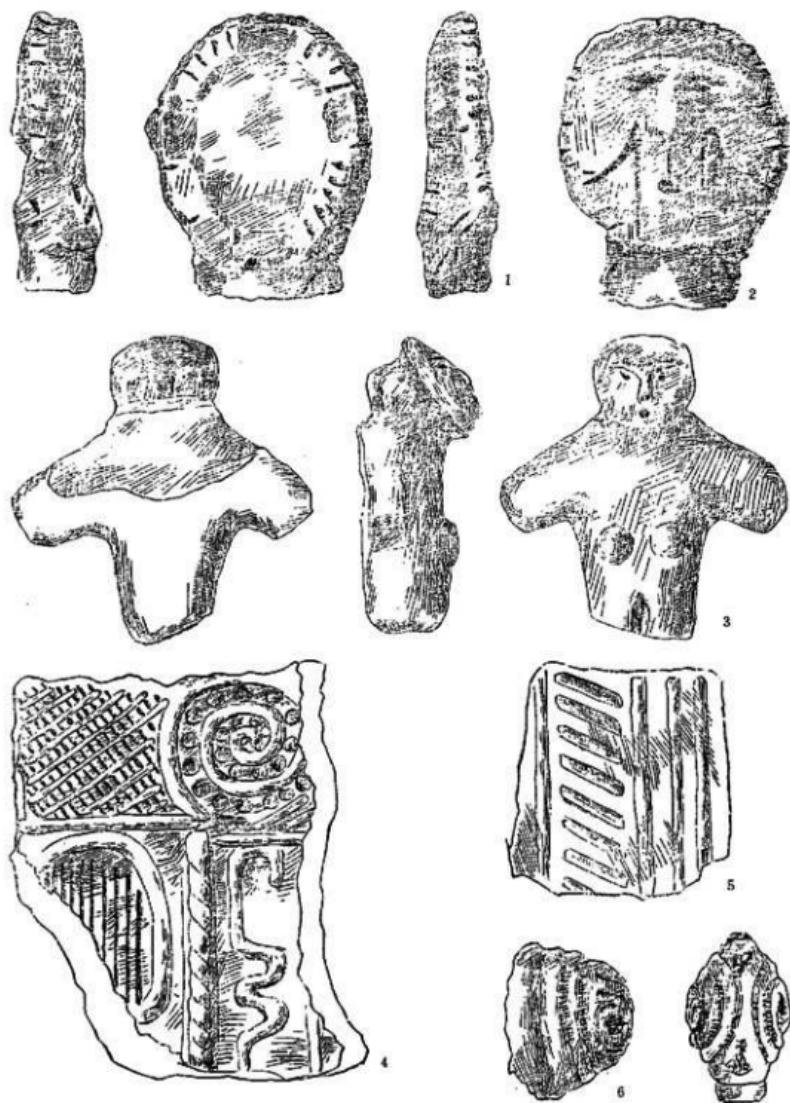
小松慶氏の報文中には、T A、T B付近に住居址が存在したのではないかと推定した記述があるが、これは土器集中区より多量の土器が出土する状況を、住居址が存在するものと考えたと思われる。

『東筑摩郡、松本市、塙尻市誌』に掲載された本遺跡出土の土器は、8点ある(第5図)。このうち、前回の調査で出土したものは、10、11、15の3点で、他は表面探査によるものである。注記によれば、1はT B、2はT A、6はT Cより出土している。1は同種では、他の7点とは別の区に組まれ、中山出土とされている。3は注記がなく、中山地区の他の遺跡より出土した可能性もある。表面探査による遺物の多くは、以前、今回の調査区の西側に隣接する畑の一部を掘った際出土したものと推定される。(市立考古博物館、神沢昌二郎館長の御教示による。) 第5図に示した遺物は、現在すべて松本市立考古博物館に所蔵されているが、同誌刊行以降、さらに復元が行なわれ、全体の器形が明らかになったものもある。このうち、17については今回再実測を行ない、他の都誌に掲載されていない、器形が復元された遺物とともに、本書に所収しているが、他の7点は再実測できなかった。また石器、石製品も数点が掲載されているが、今回は中山坪ノ内出土と記されているもののみを転載するにとどめた。なお、土器、石器とともに、中山出土として同誌に掲載されているものに、本遺跡出土のものが、かなり存在すると思われる。

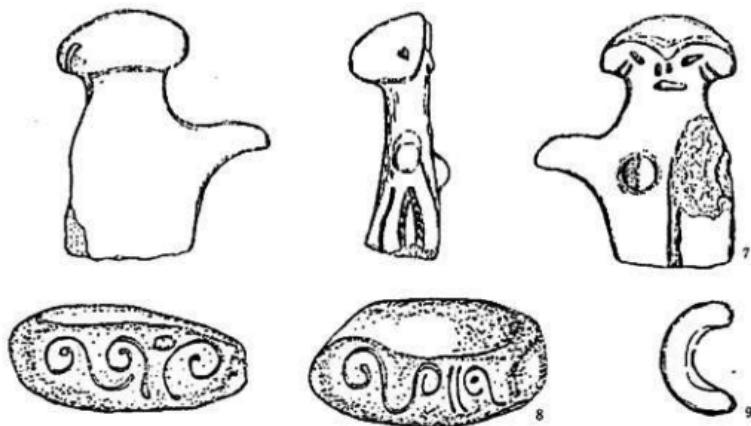
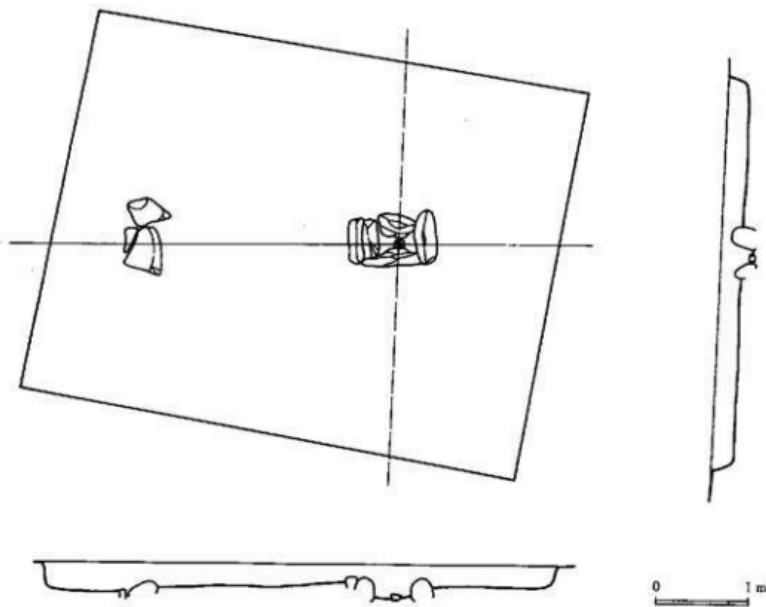
註1 このうちの1点(第5図2)は、『東筑摩郡、松本市、塙尻市誌』にも収録されている。

参考文献(五十項目)

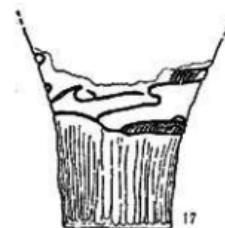
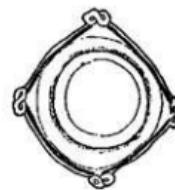
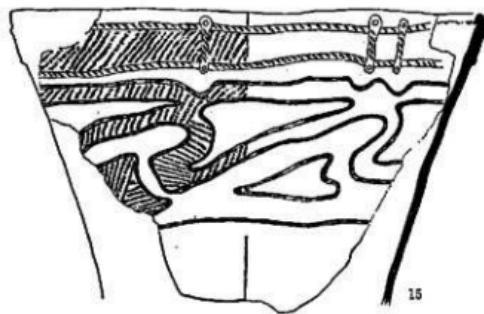
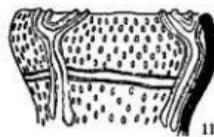
- 高野泰造 1963 「[山梨県東部]坂戸町地方の古物遺跡」「東京人類学会報」8号
- 小松慶之 1965 「坪内発掘、古代住居址」「松本市立民族学博物館」昭和40年1月30日号
- 小松慶之 1970 「長野県松本市中山坪付近」「日本考古学年報」18
- 高野泰造 1973 「縄文時代後期の住居址」「農業土器の変遷」「東筑摩郡、松本市、塙尻市誌」第二卷
- 吉下篤司 1968 「長野県の考古学史」「長野県史」考古資料編全一巻(四)遺物、遺物



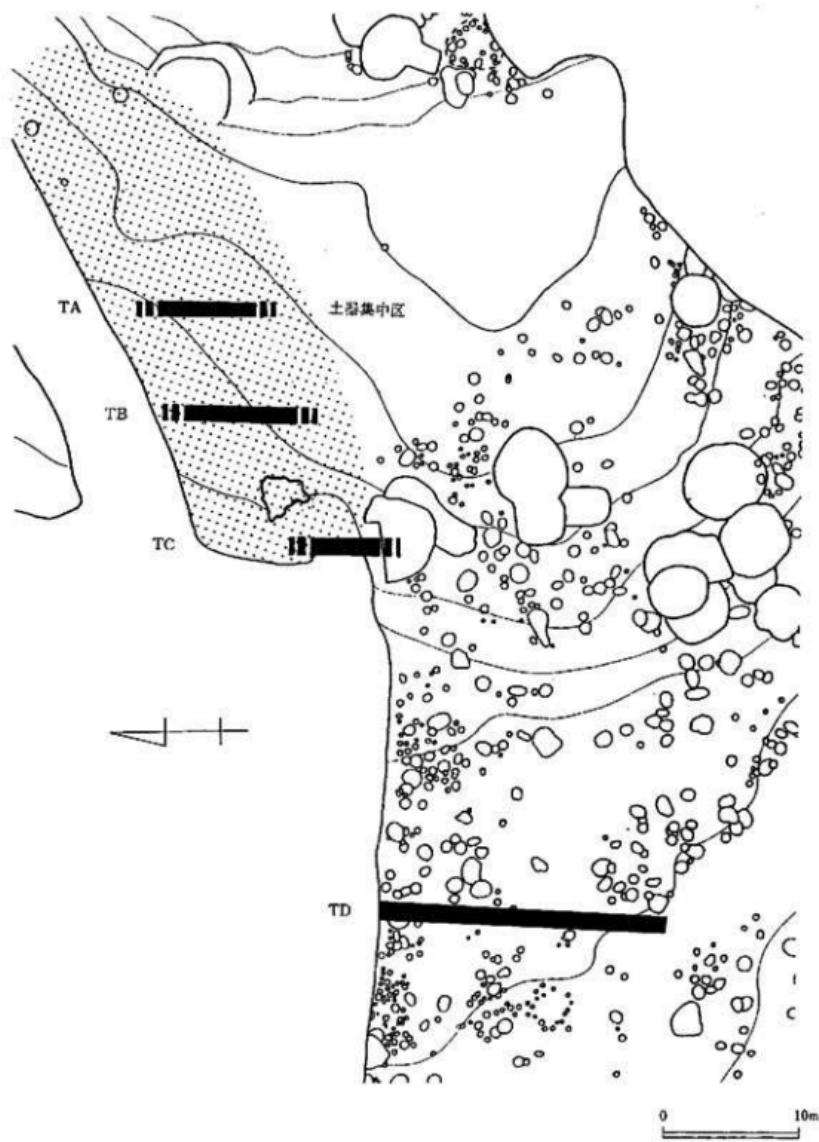
第3図 既出遺物 (1) (高野秀雄 1893より) 縮尺不詳



第4図 既出遺物 (2) (『東筑摩郡 松本市 堤尻市誌』より)
(7:6 8:6 9:3)



第5図 既出遺物 (3)



第6図 昭和40年の調査位置推定図 (1/400)
(TD以外のトレンチの位置・長さは推定)

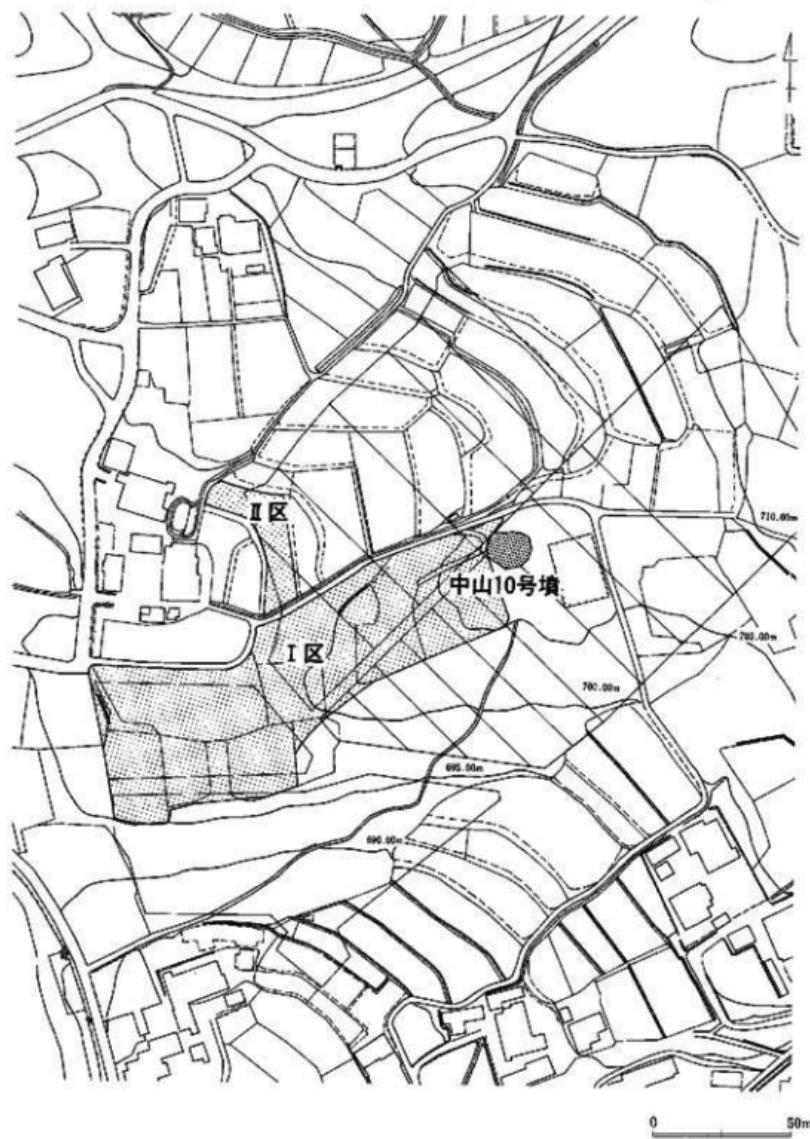
第4章 調査

第1節 調査の方法

遺跡のある台地のうち、園場整備の対象となる部分で試掘調査を行ない、その結果をもとに調査範囲を決定した。南側の台地部分をI区、北側の谷を挟んだ両側をII区とし、調査面積はI区が6484.8m²、II区が382.4m²、計6867.2m²である。調査は重機により、果樹園の部分の樹木を除去した後、全体の表土を地山の二次堆積ロームの上面まで剥ぎ、遺構検出及び掘り下げを行なった。調査の進行中に、本遺跡は縄文時代の環状集落であることが判明したため、全容を把握するため、調査区を南側へ拡張した。遺構番号は検出時に規模より住居址、土坑に大別し、全体図作製の際、いずれも1から順にNo.をつけた。土坑は直径50cm以上のもののみ通し番号をつけ、他はピットとして扱った。このため土坑の項で後述するような問題が生じている。当初住居址として扱ったもののうち、掘り下げ中に住居址でないと判明したものは欠番とし、堅穴、土坑とし、さらに整理の段階で整理し、土坑として統一した。欠番となった部分は、調査区を拡張後検出した遺構にその番号を付したため、欠番はないが、順序は不規則なものとなっている。特に柄鏡形の住居址を2軒の切り合いとしてとらえたため、数々の混乱が生じた部分がある。なお整理の段階では、最終的に確定した番号で注記等の作業を行なった。測量の方法は調査区の拡張前の中央部南隅に基点を設定し、南北及び東西の方位に合わせて3×3mの方眼で、調査区全体を覆い、これを基準として測量を行なった。測量は $\frac{1}{50}$ の全体図を作製し、調査区全体の平面図を作製した。ただしII区については検出された遺構が少ないため、 $\frac{1}{50}$ の平面図は作製していない。高さの基準については調査区全体の高低差が著しいため、数ヶ所に基準点を設定し標高測定を行なった。遺構の掘り下げは、住居址、大型の土坑は十字に土層観察用のベルトを残して掘り下げ、記録後完掘した。小型の土坑は半截した後、土層を観察し、柱穴等が明瞭なもの、特殊な遺物を伴なうもの等は土層断面図を作製、他は覆土と断面形を記録した後完掘した。遺物はある程度形の残るもの等について位置を記録し、取り上げを行なった。土器集中区の調査方法については、土器集中区の項で後述する。最終的な全体図は $\frac{1}{50}$ の平面図を接合し作製した。等高線は調査時に地表面の1mごとに標高を測定し、これをもとに作製した。全体図に直接標高を落としている。なおII区は遺構等が少ないので、本書の以後の表記では、特にことわらない限り「調査区」はI区を指すものである。

遺物整理の方法

住居址出土の土器は全て接合を行ない、区示可能なものを抽出し、図化した。土坑の遺物は、発掘時の記録及び洗滌時の判別により、接合以降の作業を行なうものを抽出し、以降の作業を行なった。土坑の全体数からみると抽出したのは全体の4割弱である。土器集中区の遺物については量が



第7図 調査位置図

膨大なため、調査時の記録をもとに遺物の量が多かったり、器形が判別できる状態のものが多いグリットを抽出して接合を行なった。接合時にはグリットごとに、まず早期及び前期の土器と、中期及び後期の土器に区分し、後者を中心に接合を行なった。前者についても接合を試みたが、ほとんど接合するものではなく、拓影による図示のみで、実測したものはない。グリット内では、器形が復元できるものを優先し、小片のみのものは、拓影で図示するものを抽出する程度にとどめている。グリット間の接合は基本的に行なわず、接合者の記憶により同一個体と判断したもののみを接合するにとどめた。また、前回（1965年）の調査時に出土した遺物についても同様で、前回出土分のみで、ある程度の器形が復元されており、それに今回出土した破片が接合するもののみ接合するにとどめた。実際に接合以降の作業を行なったのは土器集中区の全グリットの8割程度であった。接合が終った土器は、さらに抽出を行なったのち、図化を行なった。器形の大部分を復元できたものについては、写真実測による図化を行なった。

報告書の作製と表記

住居址の図は、原則として主軸を天地とし、入口と推定される方向を下に向けて統一した。ただし第5号、13号、14号の各住居址は、この限りではない。住居址を切る遺構は、位置を点線で示し、切られる遺構は図示していない。土坑は主要なものを抽出し、図示した。一部のものは遺物のみの図示にとどめた。他は一覧表を作成し、データを示した。直径50cm以下のものは通し番号をつけず表からは除外した。遺構図ではPと表記した。土器を埋設した施設については、住居址の入口部のものを埋甕、他は埋設土器とした。埋甕は住居の一施設との観点より、数え方は1基、2基とし、土器そのものを示す場合は1個体、2個体とした。土器は後述する基準により分類し、時期別、系統別に配列し、図示した。住居址の遺物については、覆土中に混入した時期の異なるものは排除した。住居址が切り合っている場合で、明らかに別の住居址からの混入と考えられるものは、本来帰属すると思われる遺構の項に含めた。

第2節 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は住居址25軒、土坑1618、配石5、土器集中区1である。住居址は時期別には、縄文時代前期2、中期6、後期17である。集落は、調査区西側の平坦部に中期後葉の集落が、それより一段高くなった中央部に後期の集落が、それぞれ環状に展開する様子が明らかになった。両者を比較すると集落内の土坑のあり方などに違いがあり注目される。土器集中区は縄文時代早期末葉～後期中葉と断続的ではあるが非常に多くの遺物が出土し、土器は復元できたものも非常に多く、松本平では有数の資料となった。土製品の量も多く特に土偶は、遺跡での出土量は松本市では最も多い。石器、石製品は全体の量は非常に多いが、遺構に伴なったものは少ない。これらについては、以下各項目の中で分析してゆきたい。

第5章 調査結果

第1節 住居址

1. 繩文時代前期の住居址

今回の調査では2軒検出されている。いずれも調査区の南西隅に位置し、切り合っている。同時期の土坑も、その周辺にまとめて検出されており、坪ノ内遺跡における前期の集落は、この付近に展開していたものと考えられる。

① 第14号住居址（第8図）

調査区の南西隅に位置する。南側を第13号住居址に切られ、西側は調査区外に延びる。全体を調査していないが、プランは直径4.2m程度の不整円形と推定される。覆土はロームをわずかに含む黒色土で、礫は混在していない。床は地山の2次堆積ローム（以下、ロームと省略）を固めており、やや軟質である。全体にやや傾斜をもち、西側には、大きな段がみられる。壁は高さ15cm程度で、ほぼ直に掘り込まれている。炉は調査範囲内では確認されていない。柱穴は壁に沿って巡るものと思われ、柱痕が明瞭に観察されたものもある。 P_1 からは骨片が少量検出されているが、細片のため何の骨か不明である。遺物は覆土及び、ピット内より出土しているが、量は少なく、全体の器形を復元できるものもない。本址に伴なうものの他、早期末葉～前期初頭、中期後葉の土器が若干混在する。

本址の時期は、出土遺物より、繩文時代前期後葉と推定される。

② 第13号住居址（第8図）

調査区の南西隅に位置する。第14号住居址を切り、西及び南側は調査区外に延びる。全体のプランは径5m程度の不整円形と推定される。覆土はロームをわずかに含む暗褐色土で、礫は混在していない。床は地山のロームを固めており、やや軟質である。わずかな起伏はみられるが、ほぼ平坦である。壁は高さ15cm程度で、ほぼ直に掘り込まれている。炉は調査範囲内では確認されなかったが、 P_2 の底部に焼土がわずかにみられた。柱穴は壁に沿って巡るものと思われるが、浅いものが多く、柱痕の明瞭なものはない。 P_3 、 P_4 、 P_5 の3つは本址に切られた第14号住居址に帰属する可能性が高いと思われる。遺物は覆土及びピット内より出土しているが、量は少なく、全体の器形を復元できたものはない。本址に伴なうものの他、早期末葉、第14号住居址からの混入と思われる前期後葉の土器が少量混在する。

本址の時期は、出土遺物より、繩文時代前期後葉と推定される。

2. 縄文時代中期の住居址

今回の調査では6軒検出された。いずれも中期後葉のもので、調査区西側の台地の平坦部を囲むように分布している。この住居址に囲まれた部分には中央の空間（広場）を取り囲んで、同期の土坑が分布しており、坪ノ内遺跡の縄文時代中期後葉の集落は、この部分に展開していたことがわかる。集落の始まりは、中期後葉の曾利III式期からで、中期終末の曾利V式期まで継続している。6軒の住居址は、さらに細分すると、3～4段階に分けられる。

① 第9号住居址（第9図）

調査区中央部の南側に位置する。南西の隅を第10号住居址に切られ、後世の攢乱により覆土の上部を数ヶ所壊されている。南西の約半分は床まで削平されており、柱穴と埋甕が遺存するのみである。プランは円形で、東西約5.4m、南北約5.5m、主軸方向は本址が作られた時点でN-60°-Eである。後述のように柱穴の配置及び埋甕より、数次の建て換えが行なわれたものと思われ、廃絶時には、主軸がさらに西へ寄っている。床は地山のロームを固めているが、他の部分に比べて、ローム中への砂礫の混入が少ない部分にあるため、やや軟質である。壁は最も遺存状態の良い北東部で、高さ約20cmで、やや斜めに掘り込まれている。炉は主軸上の中央よりやや奥寄りに位置する。廃絶時に石が抜かれているため、本来の炉と、掘り方の識別が不可能であり、規模は不明確だが、一辺約1mの方形の石囲い炉と思われる。炉石は炉内に数個遺存しているが、いずれも石英閃緑岩で、表面に被熱の痕がみられる。柱穴は壁に沿って巡っており、柱痕が明瞭に観察されたものはない。埋甕は南西の床の削平が最も著しい部分で検出されたため、いずれも底部及び副部下半が遺存するのみである。埋設の方向は、いずれも正位である。接合の結果No.3と、No.6が接合し、掘り方内に混入している破片を除くと6個体となった。切り合いより、3回以上に渡り埋設されたものと推定される。埋甕の切り合いと柱穴の配置から建て換えを復元すると、古い埋甕と炉を結ぶ線を主軸とし、P₁～P₄を主柱穴として住居の壁より、やや内側に巡る柱穴をつなぐプランが、古いプランとして想定される。新しい埋甕は、古い埋甕よりも北に寄って埋設されているため、新しいプランは、主軸がやや北へ寄り、P₅～P₈を主柱穴とし、全体に北へ拡大されて壁に沿った柱穴を結ぶプランが想定される。しかしP₄のように底に柱痕状の段を複数もつものがあり、さらに小規模な建て換えが何度か行なわれた可能性もある。また前述の想定では説明しきれない柱穴も多く存在し、柱穴と埋甕の帰属関係も確定なものではなく、なお検討を要するものである。遺物は覆土の大半が削平されているため、埋甕の他には、わずかに出土したのみであり、器形を復元できるものはない。埋甕の土器はNo.1のみ唐草文系、他は加曾利E系の土器が用いられている。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉、曾利III式期と推定される。

② 第11号住居址（第11図）

調査区の南隅に位置する。上坑581を切り、土坑582に切られる。南側の半分強は調査区外へ延びる。プランは東西約5.4m、南北は同程度、もしくはやや短い、角ばった円形と推定される。覆土は

褐色土で微量の焼土、炭化物を含む。床は地山のロームを固めており、平坦で堅くしまっている。壁は全体に上部を削平されており、高さ10cmほどである。炉は調査区の端にかかっており、約半分を調査したのみである。調査した方が住居の奥側で、住居址内での位置は、主軸上の中央よりやや奥と推定される。一辺約50cm強の方形の石窓い炉と思われ、炉石の残骸と思われる石が、数点炉の中から出土している。石はいずれも石英閃緑岩で、被熱がわずかにみられる。炉の上部からは骨片がわずかに出土しているが、細片のため何の骨か不明である。柱穴は南側の壁に沿って巡っており、柱痕が明瞭に観察できるものもある。遺物の量は少ないが、接合し器形が復元できたものが比較的多くある。器種別では、深鉢が主体で、大型の器台も存在する。土器は曾利系と加曾利E系が混在している。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉、曾利III式期と推定される。

③ 第18号住居址（第12・13図）

調査区の西側隅に位置する。第18号住居址に東側の覆土の上部を切られ、西側は調査区外へ延びる。プランは南北5.8m、東西約5.6m程度のやや角ばった円形と推定される。主軸はN-47°-Eである。覆土は暗褐色土で小石、骨片を少量含む。上部の一部は耕作時に搅乱を受け、覆土中より古錢（銭種不明）が1枚出土している。壁は約20cmの高さで、ほぼ直に掘り込まれている。北及び東側の一部には周溝が巡っている。床は地山のロームを固めており、平坦で堅くしまっている。炉は主軸上のやや突寄りに位置する。一辺60cmほどの方形の石窓い炉と思われるが、廃絶時に破壊されてしまい、わずかに炉石の残骸の石が残るのみである。石はいずれも石英閃緑岩で被熱が認められる。柱穴は壁に沿って巡っており、柱痕が明瞭に観察できるものも少なくない。埋甕は2基ある。No.1は大型の深鉢を正位で埋設している。口縁を欠いているが底部は欠かれていない。掘り方は土器に比べて、かなり大きく、底は地山の中の石に当たった所で止まり、その石の上に置くように土器を埋めている。口縁は床とほぼ同レベルで、北西側には平板の石皿が置かれていた。土器の中は土が詰まっており、拳大の石2個、石鏃2点、他の土器の底部破片1点が入っていた。No.2は小型の深鉢を正位で埋設している。口縁と胴部上半を欠いているが底部は欠かれていない。掘り方は土器より一回り大きい程度で、南側は地山の中の大きな石英閃緑岩に当たり、それに添わせるように埋設している。口縁は床とほぼ同レベルである。内部にはNo.1と同様に土が詰まっており、少量の炭化物と、微量の骨片が含まれていた。骨片は細片のため、種類等は不明である。

遺物の量は非常に多い。ほとんどが床面直上より出土し、接合し器形が復元できたものも多い。本址に伴なう上器はほとんどが加曾利E系の土器で、埋甕のみ唐草文系の土器が使用されている。土器以外の遺物も多く、土偶が南側の床面から、土鈴がP₁から出土している。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉、曾利IV式期と推定される。

④ 第25号住居址（第13図）

調査区の中央北側の土器集中区内のN41E20、N41E18、N39E20の3つのグリットにかかって

検出された。土器集中区の掘り下げ時に貼り床が検出され、確認された。床及び炉と3本の柱穴のみ遺存し、全体のプラン、規模は不明である。遺存部は南北3.2m、東西3.1mで、炉の形態等より、入口は南側にあり、主軸は、ほぼ南北の方位に一致するものと推定される。覆土は黒色土で、集中区の他の部分の覆土との差異は認められない。床は土器集中区の縄文時代早期窓～前期の土器の包含層の上にロームを貼っている。貼り床の厚さは3cm程度で、かなり荒れているが、遺存状態の良い部分は、かなり固く、しまっている。わずかに起伏をもつが、ほぼ平坦である。炉は貼り床の遺存部の、ほぼ中央に位置する。柱穴の配置から見ると、住居の中央よりやや奥にあったものと思われる。方形の石囲い炉と思われ、規模は掘り方で、南北約1m、東西約1.3m、深さ約15cmである。炉石は南側のみ遺存するが、原位置ではなく、抜かれて廻集されたと推定される。炉石は石英閃緑岩で被熱による風化が認められる。炉の中には2個体の土器が、つぶれて入っており、本址の廻絶時に入れられたと推定される。炉の中からは炭化物が若干検出されたが、焼土は認められない。柱穴は炉の北側に2本、南側に1本検出された。いずれも貼り床の面から約20cm掘り込んでいるが、柱痕が明瞭に観察されたものはない。遺物は覆土中及び炉の中から少量出土している。個体ごとにまとまって出土しているため、接合し器形が復元できたものが多い。土器は加曾利E系が主体で、唐草文系のものが少量混在している。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉、曾利IV式期と推定される。

⑤ 第16号住居址（第14・15回）

調査区の西端部に位置する。西側で第19号住居址の覆土上部を切り、炉及び柱穴は、第19号住居址の壁や床の一部を掘り込んでいる。南側の覆土の上部は、土坑77により切られている。試掘時のピットのひとつが、本址の入口部にあたっており、その際、壁の一部と埋甕の一部が壊されている。東西4.9m、南北5.3mのやや角ばった円形のプランで、主軸は廻絶時でN-62°-Eである。後述のように建て替えが行なわれ、主軸が当初の位置より、やや西に寄っている。覆土は砂を多く含んだ黒色土で、上部が削平されているため、全体に薄い。床は地山のロームを固めており、平坦で固く、しまっている。壁は削平のため、高さ10cmほどが遺存するのみである。炉は主軸上の中央やや奥に位置する。一辺約1m、深さ約30cmの方形の石囲い炉で、廻絶時に炉石の一部が抜かれている。炉の底には、一例の深鉢（第58図47）を大きく四つに割り、重ねて敷いている。破片は全て内面を上に向け、口縁の方向は揃えていない。最上部に敷かれた土器の表面には、被熱の痕が認められる。この土器は接合の結果一個体になり、さらにP₂及び覆土中より出土した破片と接合した。胴部の下半と底を欠くが、他はほとんど完存している。炉石は石英閃緑岩で、表面は被熱が認められる。炉内の覆土中には、焼土が部分的にブロック状にみられるが、炉穴の底や側面には特に認められない。柱穴は壁に沿って巡っており、柱痕の明瞭に観察できるものもいくつかある。埋甕は2基ある。No.1は試掘時に上部を掘られており、本来の埋設状態は不明である。調査時には副部の下半のみが遺存していた。底は欠かれており、遺存状態は不良のため、復元、図示することはできなかった。器

形は深鉢で、唐草文系の土器を用いている。掘り方は土器より、かなり大きく掘っている。西側は地山の中の大きな石にあたり、それに添わせるように埋設されていたものと思われる。埋設方向は正位である。No. 2 は No. 1 に切られている。土器はほとんど壊されており、底部がわずかに遺存しているのみである。小片のため、復元、図示することはできず、土器の系統も不明である。器形は深鉢で、正位で埋設されたものと思われる。埋臺と柱穴の配置から建て換えた様子を復元すると、炉を併んで 4 本の主柱穴があり、壁に沿って柱穴が巡るのが基本的な形態と推定される。最初の段階では P₄、P₅、P₆、P₇ の 4 本が主柱穴で、後に P₄、P₆ はそのまま、P₅ を P₇ に、P₇ を P₈ に移し、北東へ大きく拡張が行われたものと思われる。遺物の量は非常に多いが、接合し、器形が復元できたものは少ない。深鉢（第58図51）は床面の数ヶ所と炉内より出土した破片が接合しており、本址廃絶時に意図的に壊された可能性がある。その他の遺物では、壇土中より土偶の頭部破片、土鈴が各 1 点、炉の奥部の床面よりミニチュア土器が 1 点出土している。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉・曾利IV式期と推定される。

① 第17号住居址（第16図）

調査区の中央南側に位置する。土坑777、779、780、781、783、784、872に切られている。プランは東西約 5 m、南北約 3.6 m の不整規円形で、主軸は N-60°-W である。覆土は褐色土で、砂、コームを少量含んでいる。床は地山のロームを固めているが軟質である。全体に地形に沿って傾斜している。壁は平均約 30 cm の高さで、やや斜めに掘り込んでいる。炉は確認されていない。柱穴は壁に沿って巡るものと思われるが、中心部のもの多くは、本址に伴わない可能性が高い。遺物の量は少なく、接合、器形の復元ができたものはほとんどない。また本址の時期を決定できるものもほとんどない。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉・曾利V式期と推定される。

3. 縄文時代後期の住居址

今回の調査では 17 軒検出された。松本市内で調査された同期の遺跡では、最大の規模のものである。時期は後期前葉から中葉のもので、さらに大きく 3 時期に分けることができる。この時期の住居址は、調査区の中央部の台地の平坦部が、その上下で段状になる部分、つまり中央の平坦部の外縁に沿い、平坦部を取り囲むように分布している。縄文時代中期の集落よりは、一段高くなった部分にあり、西側の一部が重複している。住居址の周辺には若干の土坑がみられるが、切れている部分もあり、環状に分布している中期の集落とは様相が異なっている。また住居址に囲まれた中央部には、わずかに土坑がみられるものの、時期を確定できるものは少なく、集落との関係は不明確である。

① 第1号住居址（第17・18図）

調査区中央部の北隅に位置する。縄文時代中期中葉の埋設土器を切り、北西部を第 2 号住居址に大きく切られる。プランは柄鏡形で、主軸の長さ 7.8 m、幅は主体部で 4.1 m、柄部で 2.5 m、主軸は

N-37-Eである。主体部、柄部ともにやや角ばっている。検出時には本址が第2号住居址を切るものと誤認し、また柄部も別の遺構として掘り下げた。従って本址の遺物として上げたものの中には、第2号住居址に伴なうものが含まれている。西側の第2号住居址に切られた部分は、本址の柱穴が第2号住居址の床面より深く掘り込んでいたため、それから推定した。覆土は暗褐色土で廃絶時に投げ込まれたと推定される多量の石英閃綠岩を含んでいる。床は全体に西へ向かって傾斜している。地山のロームを固めており比較的軟質である。主体部の東側には、柱穴の内側に沿って敷石が遺存している。敷石は厚さ2~3cmほどの鉄平石を用いている。第2号住居址に切られた部分以外の覆土中にも、敷石に使用されたと思われる鉄平石が混在しており、廃絶時に剥がれた可能性が高い。このため、敷石以外の部分は本来の床面ではなく、張り方にあたり、本来の床は、どの程度まで敷石が存在したかは不明であるが、遺存する敷石と同レベルにあったものと推定される。なお柄部の覆土中には、鉄平石の混在は認められなかった。壁は遺存状態の良好な北東側で、高さ約20cmで、ほぼ直に掘り込んでいる。ゆるい斜面に位置しているため、西側は遺存状態が不良で、わずかに立ち上がりが認められる程度である。柱穴は主体部の壁に沿って巡っており、一部は壁の外に掘り込まれている。柱痕が明瞭に残るものも少なくない。柄部には柱穴は認められない。炉は僅認められなかったが、おそらく主軸上の第2号住居址に切られた部分に存在したものと思われる。主軸上には柱穴より大型のビットが3つならんで存在した。いずれも住居が作られた際に掘られたものと思われる。P₁は中心部と外側の土層に差異が認められた。入口部はP₁に対応するように、わずかに張り出している。P₃は非常に深く、中央部から炭化物、焼土が検出された。いずれも性格は不明である。主体部の奥にあるP₄からは、ほぼ一頭分と思われる焼けた鹿の角が出土している。このビットは敷石の鉄平石が一部だが、かかった下にあり、鹿の角は、住居が建てられた際に埋納されたものである可能性が高い。遺物は床面及び覆土中に疊に混じて存在した。量は多いが混入したものが多く、直接本址に伴なうものは少ない。第59図53の土器は在地のものではないが、系統は不明である。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代後期前葉、堀之内I式期と推定される。

② 第12号住居址（第19図）

調査区の中央部の南側に位置する。第10号住居址の床面精査中に存在が確認された。北側の一部を第7号住居址の柄部に切られ、主体部の大半の北部を第10号住居址に切られ、南西部を配石群に切られる。上部は全体に削平され、特に西側は遺存状態が悪い。プランは他の住居に切られたり削平された部分が多く不明瞭だが、柄鏡形と推定される。規模は主軸方向（東西）で約4m、幅は主体部で約4.2m、柄部で約3mと推定される。覆土は焼土、炭化物を多く含んだ褐色土で、全体に浅く、攪乱が多くみられる。床は地山のロームを固めているが、ローム中の砂等が少ないとあるため、やや軟質である。柄部とした部分の北側の掘り込みに沿って石が並んでおり、本来は敷石があった可能性がある。この石は上面の平らな石英閃綠岩が用いられている。主体部の中心部には床

面の広い範囲に焼土がみられる。炉は確認されていない。壁は削平されており、全体に遺存状態は良くない。柱穴は主体部の北側に寄った部分と、柄の端部で検出された。柱痕が明瞭に観察されたものはない。中央の大きなビットP₁をとり囲むように、小さなビットがあり、主体部のプランは、さらに北へ延びていた可能性が高い。遺物の量は非常に少なく、土器の他には、土偶とミニチュア土器が柄部の床面より出土している。土器は接合できたものも、ほとんどなく、後期前葉と中葉の土器が混在しているため、本址の時期を確定するのは困難である。

本址の時期は、出土遺物と、他遺構との切り合いより、縄文時代後期前葉、堀之内Ⅰ式期と推定される。

③ 第15号住居址（第20・21図）

調査区中央部の南端に位置する。南西の隅をわずかに土坑813に切られている。プランは不整椭円で、規模は南北5.5m、東西3.8m、主軸はN-67°-Eである。覆土は褐色土で、炭化物、焼土を多く含み、火災により廃絶された可能性が高い。床は地山のロームを固めているが、軟質である。床面の各部には焼土及び炭化材が認められている。北東部を中心に列状に並んだ石英閃緑岩が検出されており、敷石があったものと推定される。炉は確認されていない。壁は傾斜地にあるが、遺存状態は良好である。柱穴は多數検出されたが、壁に沿って巡るものが比較的深く、柱痕が明瞭に観察できたものが多いので、壁に沿って柱が巡っていたものと推定される。中央部の穴は、いずれも浅く、柱穴の可能性が薄い。

遺物の量は少なく、混入品と思われるものは少量である。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後期前葉、堀之内Ⅰ式期と推定される。

④ 第24号住居址（第22図）

調査区の中央部に位置する。第3号住居址の柄部に、本址の主体部のほとんどを切られている。切り合っている部分のレベル差がほとんどみられないため、調査時には、本址の柄部を豊穴として扱い、第3号住居址の柄部に一部を切られているものと考えたが、第3号住居址の柄部のプランが非常に丸くなり、別の住居址（本址）の主体部の存在が判明した。調査時には、切り合い部のビットの帰属は判別できなかったが、整理の段階で、切り合い及び配列から帰属を決定している。このため遺物については、本址主体部のものは、ほとんど第3号住居址の柄部に伴なうものとして取り上げている。本址のプランは柄鏡形で、主軸は7.2m、幅は主体部が推定4.8m、柄部が2.9m、主軸はN-9°-Wである。覆土は褐色土で、第3号住居址との切り合い部分は検出時には識別できなかった。床は地山のロームを固めており、堅く、しまっている。壁は柄の端部で、わずかに遺存する程度で、斜面の上側で約10cmと浅い。炉は確認されていないが、第3号住居址に切られた部分に存在したものと思われる。柱穴は主体部の西側と柄部に検出された。柱痕が明瞭に観察されるものではなく、特に主体部のものは柱穴とすることに疑問が残るものが多い。また前述の理由により、第3号住居址に帰属する可能性もある。遺物の量は非常に少ない。柄部の床面より、土偶の足が1点出

土している。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後期前葉、堀之内Ⅰ式期と推定される。

⑤ 第5号住居址（第24図）

調査区の中央部の北東側に位置する。第4号住居址に中央から北部を大きく切られ、西側は削平されている。このため全体のプランは不明であるが、遺存部から推定される南北の大きさは、およそ7.5m強と思われる。検出時には第4号住居址との切り合いが確認できず、一軒の住居址として掘り下げたが、掘り下げ中に2軒の住居址の切り合いであることが判明したため、第5号住居址とした。このため遺物のほとんどは、第4号住居址のものとして取り上げている。床は地山のロームを固めており、堅く、しまっている。斜面の傾斜に沿って北に向かってやや傾斜している。壁もほとんど削平されており、斜面の上側にあたる東及び南を除き、遺存状態は不良である。柱穴は壁に沿ってならんでおり、柱痕が明瞭に観察されるものが多い。遺物の量は多いが、前述の理由により、第4号住居址に伴なうものが多く混入していると思われる。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代後期前葉、堀之内Ⅰ式期の新しい段階のものと推定される。

⑥ 第2号住居址（第25図）

調査区の中央部の北側隅に位置する。縄文時代中期の土坑を削平し、北東で第1号住居址を大きく切る。北側は後世（現代）の搅乱により大きく破壊されている。西側は斜面に沿って削平されており、遺存状態は良くない。西側の端の壁は、完全に検出できなかったが、この部分に柄がつく可能性が高い。プランは、やや角ばった円形で、調査部分で東西約5.8m、主軸はN-115°-Wである。覆土は褐色土で、第1号住居址寄りの部分は、多量の石英閃緑岩を含む。床はわずかに南に向けて傾斜している。地山のロームを固めており、非常に堅く、しまっている。炉は確認されていない。壁は削平のため、遺存状態は不良である。柱穴は壁に沿って巡るものと思われ、柱痕が明瞭に観察できるものも多い。主軸上には大きなピットがならび、奥のP₁からは、微量の骨片が出土している。細片のため、何の骨かは不明である。遺物の量は多いが、混入しているものが多く、本址に直接伴なうものは少ない。P₁₆からは、土偶の足が1点出土している。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後期後葉、堀之内Ⅱ式期と推定される。

⑦ 第7号住居址（第26・27図）

調査区の中央部、やや南寄りに位置する。南側で第10号住居址の一部と、第12号住居址の覆土上部を切り、第6号住居址に、西側を大きく切られている。プランは、やや崩れた楕円形で、規模は南北約5.5m、東西約4.1m、主軸はN-23°-Wである。覆土は褐色土で、多量の焼土と礫を含んでいる。床は地山のロームを固めており、ほぼ平坦で堅く、良くしまっている。東側の一部には、敷石の残骸とみられる石が残っていた。全体に焼土や炭化材が多くみられ、火災により廃絶されたものと思われる。覆土中の礫は、床の焼土や炭化材の上にあり、廃絶時に投げ込まれたものと思われる。床面の一部からは少量の骨片が出土しているが、細片のため、何の骨かは不明である。柱穴は

多数検出されたが、比較的深いもの($P_1 \sim P_7$)が壁に沿って巡っており、柱痕が明瞭に観察できるものもある。柱穴の配置から推定すると西側は図示した推定プランより、やや西へ拡がるものと思われる。遺物の量は少なく、本址に伴なうものの他、周辺の遺構からの混入と思われるものが存在する。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後期前葉、堀之内II式期と推定される。

③ 第10号住居址（第28・29図）

調査区の中央部、やや南側に位置する。第9号住居址の入口部と、第12号住居址の主体部の覆土の上部を切り、土坑377を削平している。北の一部は、第7号住居址に切られる。南西側は、上部を削平されており、遺存状態は良くない。プランは不整円形で、入口部が、ごくわずか張り出している。主軸約4.7m、幅約3.2mで主軸はN-43°-Eである。床は地山のロームを固めており、堅く、しまっている。東側の壁に沿って敷石が遺存しているが、遺存状態は良くなく、廃絶時に剥がされたものと考えられる。敷石は石英閃綠岩を用いており、風化が著しい。床全体に炭化材、焼土があり、中央部の床面からは、焼けた鹿の角がまとまって出土している。本址は火災により廃絶されたものと推定される。炉は確認されなかった。柱穴は壁に沿って巡っており、柱痕が明瞭に観察されたものも多い。堀裏は入口部にアサガオ型の浅鉢を正位で埋設している。口縁の大部分を欠くが、体部の遺存状態は良好である。掘り方は、土器よりやや大きめの穴を掘り、その底に接するように埋めている。掘り方の中にも焼土がわずかに混入している。堀裏の中には上が詰まっており、中から微量の炭化物と骨片が検出された。骨片は細片のため、何の骨かは不明である。敷石を剝いだ下の P_{26} からは、ミニチュア土器（第148図11）、研磨鏡（第167図265）、崩裂石斧、蛇紋岩の原石が出土している。ミニチュア土器は、横向きで出土し、土器の口は、土器よりもひと回り大きい石でふさがれたようになっていた。土器の中からは、微量の炭化物、焼土、骨片が検出されている。骨片は細片のため、何の骨かは不明である。遺物の量は多いが、堀裏以外には器形を復元できたものは、ほとんどない。

本址の時期は出土遺物より縄文時代後期中葉、堀之内II式期と推定される。

④ 第8号住居址（第30図）

調査区の中央部南寄りに位置する。縄文時代中期の土坑を切り、第6号住居址に東側の大半を切られる。南及び西側は斜面に沿って削平されており、遺存状態は不良である。プランは東側が不明のため、はっきりしないが、南東側（入口部）が張り出した五角形、あるいは不整の方形になるものと思われる。規模は主軸4.7m、幅は推定3.6mで、主軸はN-36°-Wである。床は地山のロームを固めており、堅く、しまっている。炉は確認されていない。壁は削平のため、遺存状態は不良である。柱穴は壁に沿って巡っており、柱痕が明瞭に観察されたものも多い。中心部の P_1 の中からは、微量の骨片が出土しているが、細片のため、何の骨か不明である。

遺物の量は多いが、ほとんどが粗製の無文土器で本址の時期を決定できるものは、ほとんどない。

また接合し、器形を復元できたものもない。

本址の時期は出土遺物及び他の遺構の切り合いより、縄文時代後期前葉と推定されるが、さらに詳細な特定は困難である。

⑩ 第16号住居址（第31図）

調査区の中央部の南寄りに位置する。傾斜に沿って上部を削平されており南西部は遺存状態が良くない。主軸3.4m、幅3.7mの角ばった円形で、主軸はN-25°-Eである。床は地山のロームを固めており、やや軟質である。床には石英閃緑岩があり、敷石があった可能性があるが、石の表面があまり平らでないため微妙である。中央部の床面には焼土がみられる。覆土には多量の石英閃緑岩が含まれておらず、廃絶時に投げ込まれたものと推定される。炉は確認されていない。柱穴は壁に沿って巡っており、本遺跡の他の住居に比べ深く、柱痕が明瞭に観察できるものが多い。遺物の量は少なく、粗製の無文土器が主体のため、本址の時期を決められるものは、ほとんどない。また接合し、器形を復元できたものもない。覆土中より、被熱粘土塊が1点出土している。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後期前葉と推定されるが、他の遺構との切り合い等もないため、それ以上の詳細な時期の特定は困難である。

⑪ 第22号住居址（第32・33図）

調査区の中央部の東寄りに位置する。北西部を第21号住居址に切られ、西側は傾斜に沿って削平されている。プランは不整の方形で、第21号住居址に切られた部分、あるいは西側の削平された部分に柄があった可能性が高い。第21号住居址に切られた部分は、第21号住居址の床より深く本址のピットが掘り込んでいるため、本址に伴なうと推定されるピットを抽出して、プランを推定している。覆土は砂礫を多く含んだ褐色土で、上部は植物の根による搅乱を多く受けている。敷石部分の上部には、廃絶時に投げ込まれたと思われる多量の石英閃緑岩が混在し、集石状になっている。下部には炭化物が多く含まれている。床は地山のロームを固めており、堅くしまっている。東側には壁に沿って敷石が遺存している。敷石には、厚さ2cm程度の鉄平石が用いられているが、あまり大きな石はない。今回検出された住居址の中では、遺存状態は最も良好である。敷石は単層で、北壁の一部には板状の石英閃緑岩が、立石状に立てられている。炉は確認されていないが、おそらく、第21号住居址に切られた部分に存在したものと推定される。柱穴は壁に沿って巡っており、柱痕が明瞭に観察できたものも多い。敷石を刻がした下も精査を行なったが、ピット等の施設は認められなかった。遺物の量は少なく、無文の粗製土器が主体であるが中には様々な器種の精製土器の破片も存在する。しかし接合し、器形を復元できるものは、ほとんどなく、本址の時期を決定できるものもない。

本址の時期は出土遺物及び、他の遺構の切り合いより、縄文時代後期前葉と推定されるが、それ以上の詳細な時期の特定は困難である。

⑫ 第21号住居址（第34図）

調査区の中央部の東寄りに位置する。南東部で第22号住居址を大きく切り、西側を第20号住居址と土坑878に切られる。プランは角ばった不整楕円で、第20号住居址に切られた部分に柄があった可能性が高い。規模は南北6.1m、主軸はN-112°-Wである。床は全体に斜面に沿ってゆるく傾斜している。ロームを固めており、堅くしまっている。炉は確認されていないが第20号住居址に切られた部分に存在したと推定される。壁は傾斜に沿って西側が削られているが、掘り込みが深く、遺存状態は良好である。柱穴は壁に沿って巡っているが、柱痕が明瞭に観察できたものはない。中心部のP₁にも柱痕がみられるが、このピットは第20号、22号のどちらかの住居址に伴なう可能性が高い。奥壁部のP₃₃の底近くからは、大型の石棒の頭部が出土している。

遺物の量は多いが、無文の粗製土器が主体で、接合し全体の器形が復元できたものはない。また時期を決定できるものは非常に少ない。

本址の時期は出土遺物及び、他の遺構との切り合いより、縄文時代後期前葉と推定されるが、それ以上の詳細な時期の特定は困難である。

⑬ 第23号住居址（第35図）

調査区の中央部の東寄りに位置する。第22号住居址に隣接し、南側の一部は調査区外に延びる。住居址の上部が削平されたものというより、窓穴を伴なわない住居址、あるいは建物址の可能性が高い。12のピットが、やや角ばった円形にならんで検出されている。規模は主軸（北西-南東）4.7m、幅（南西-北東）3.1m、主軸はN-47°-Eである。明瞭な柱痕がみられるものは、わずかであるが、いずれのピットも形態より柱穴と推定される。床は削平のため認められない。炉や焼土も確認されない。

遺物はピット内及び検出面より若干の土器片が出土しているが、時期を確定できるものは少なく、本址に伴わない可能性もある。

本址の時期は出土遺物より縄文時代後期前葉と考えられるが、前述の理由により確実ではない。

⑭ 第3号住居址（第36・37図）

調査区の中央部に位置する。柄部で第24号住居址の主体部を切っている。プランは柄鏡形で主軸8.3m、幅は主体部で5.3m、柄部で推定3.4m、主軸はN-78°-Eである。調査時には当初、主体部と柄部を別の住居の切り合いとして掘り下げたが、一軒の住居と判明した。また第24号住居址との切り合い部分は、同住居址の項で述べたように、レベル差がほとんどなく、調査時には同時に掘り下げ、整理の段階で推定したものである。覆土は黒色土で、石英閃緑岩を多量に含み、特に主体部には大きなものが含まれている。床は地山のロームを固めている。堅くしまっているが全体に凹凸が著しい。炉のレベルが床とした面より非常に高く、覆土中に敷石の残骸とみられる石英閃緑岩が多く含まれているため、本址の床として扱った部分は掘り方の底にあたり、炉石の上部に近い高さに、敷石を有する本来の床があり、廃絶時に破壊されたものと考えたい。炉は主体部の中心より、やや入口寄りに位置する。長さ90cm、幅60cm、深さ25cmほどの方形の石囲い炉で、底にも石を敷

いている。主軸に直交する石は、いずれも大型の板石が用いられ、入口側は2段に石を重ねて使用している。左右の石はやや小型である。炉石はいずれも石英閃緑岩で、他の住居のものに比べ、被熱による風化が著しく認められるが、炉全体の遺存状態は非常に良好である。炉の中には焼土と炭が若干存在していた。壁は全体に削平されており、柄の端部では、ほとんど遺存していない。柱穴は主体部の外縁に沿って巡っており、一部は壁外に掘り込まれている。柱痕が明瞭に観察できたものは少ない。柄部には端部にごく浅い掘り込みが2ヶ所存在するが、明確な柱穴は認められない。主体部の主軸上の炉の前後には大きなピットがあり、中から被熱した粘土の固まりが出土している。このピットは敷石より下にあり、住居址が作られた際に掘られたものと推定される。遺物の量は多いが、接合し、全体の形が復元できたものは、ほとんどない。主体部の南側の覆土中からは、敷石の残骸と推定される石に混じって、ミニチュア土器（第148図6）、磨石などが出土している。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後期中葉、加曾利B I式期と推定される。

⑯ 第4号住居址（第23・24図）

調査区の中央部の北東側に位置する。第5号住居址の大半を切っている。第5号住居址の頭で述べたように、当初は切り合いを確認できず、一軒の住居址として掘り下げていた。プランは方形に近く、遺存部の規模は、各辺約5mで、主軸はN-95°-Wである。西側が、かなり大きく削平されているため、全体のプランは不明であるが、本址のすぐ西側より、本址とほぼ同時期のものと推定される土偶が2点出土しており、また炉の形態や柱穴の配置を合わせて考えると、西側に柄がつく柄鏡形であった可能性が高い。床は東及び南側は地山のロームを、西及び北側はロームの上に堆積した黒色土を固めており、いずれも軟質である。東側の一部には周溝状の落ち込みがみられるが、巡っていたのかは不明である。炉はほぼ中央に位置する。…辺約70cmの方形の右囲い炉で、中央には土器の底部が置かれていた。この土器は埋設されていた痕跡はない。炉石は、いずれも石英閃緑岩で、被熱は、わずかに認められる程度である。炉の中を埋めていた土には焼土と微量の骨片が含まれていた。骨片は小片のため、何の骨かは不明である。炉の底は、わずかに焼けている程度であった。柱穴は壁に沿って巡っており、柱痕が明瞭に観察されるものもある。遺物の量は多いが、無文の粗製土器が主体で、接合し全体の器形が復元できたものはない。北側の床面より、スプーン等の土製品が1点出土している（第146図13）。

本址の時期は、出土遺物より縄文時代後期中葉、加曾利B I式期と推定される。

⑰ 第6号住居址（第38図）

調査区の中央部の南寄りに位置する。第7号住居址の西側と、第8号住居址の東側を切っている。プランは不整円形で、南北4.3m、東西3.8m、主軸はN-10°-Eである。覆土は褐色土で焼土、炭化物を多量に含む。上部は傾斜に沿って削平されており、全体に浅い。床は地山のロームを固めており、堅くしまっている。床面には多量の炭化粙、焼土がみられ、火災により焼絶されたものと推定される。炉は確認されていない。主軸上の中央よりやや奥には大きな石を数個ならべた配石があ

った。この配石の下には、非常に深いピットがあった。柱穴は壁に沿って巡っているが、柱痕が明瞭に観察できたものはない。遺物の量は少なく、無文の粗製土器が主体で、時期を決定できるものは少ない。また接合し器形を復元できたものも、ほとんどない。

本址の時期は出土遺物より、縄文時代後期中葉、加曾利B I式期と推定される。

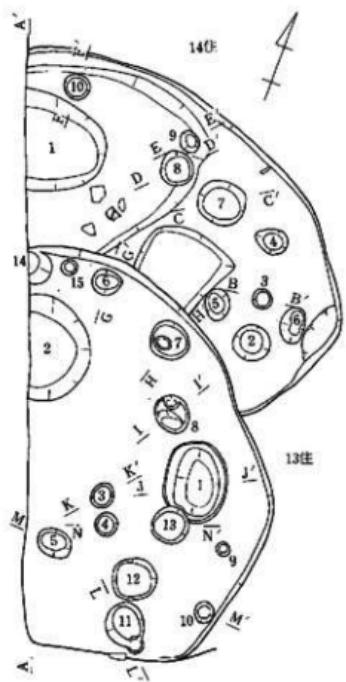
⑪ 第20号住居址（第39・40図）

調査区の中央部の東寄りに位置する。東側で第21号住居址を大きく切っている。調査時には当初主体部の北西側半分のみを検出し、南東の半分と柄部は調査区外へ延びていたため、北西側の半分のみを調査した。しかし調査の後半には、調査区を南側へ拡張したため、全体を調査することができた。その際、北西側で床を誤認し掘りすぎたため、完掘時には、この部分が低くなってしまった。

プランは柄鐘形で主軸5.2m、幅は主体部で3.9m、柄部で1.9m、主軸はN-29°-Eである。覆土はロームを少量含む褐色土で、I部は植物の根による搅乱を多く受けている。床は全体に地形に沿ってわずかに傾斜している。地山のロームを固めており、堅くしまっている。炉は確認されなかつたが、主体部のほぼ中央に土器が1個体つぶれて出土しており、若干の焼土が認められたのでこの部分にあった可能性が高い。壁は全体に削平されており、遺存状態は良くない。特に西側は、ほとんどが削平されている。柱穴は壁に沿って巡っており、一部は壁の外に掘り込まれている。柄と主体部の接点の床下には、段差のある大きなピット（P₂₄）があり、中からは炭と焼土が少量検出されている。遺物の量は多いが、無文の粗製土器が主体で、時期を決定できるものは少なく、接合し器形が復元できたものも、ほとんどない。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後期中葉、加曾利B I式期と推定される。

14住



P₁₄
P₂
P₁

1: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)
2: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)
3: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂・ワーム便混入)
4: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)

14住



B
B'
695.32m

1: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)



C
C'
695.32m

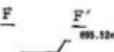


D
D'
695.32m



E
E'
695.32m

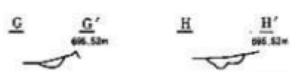
1: 黄褐色土 (ローム粘土質・砂混入)
2: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)



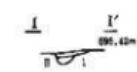
F
F'
695.32m

1: 黄褐色土 (底色黒紺、砂・ローム粘少量混入)
2: 黄褐色土 (砂・ローム粘少量混入)

13住



1: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)
2: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)



1: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)
2: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)



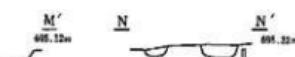
1: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)
2: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)
3: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)
4: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)



1: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)



1: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)
2: 黄褐色土 (砂・0.5m大の砂少量混入)
3: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)

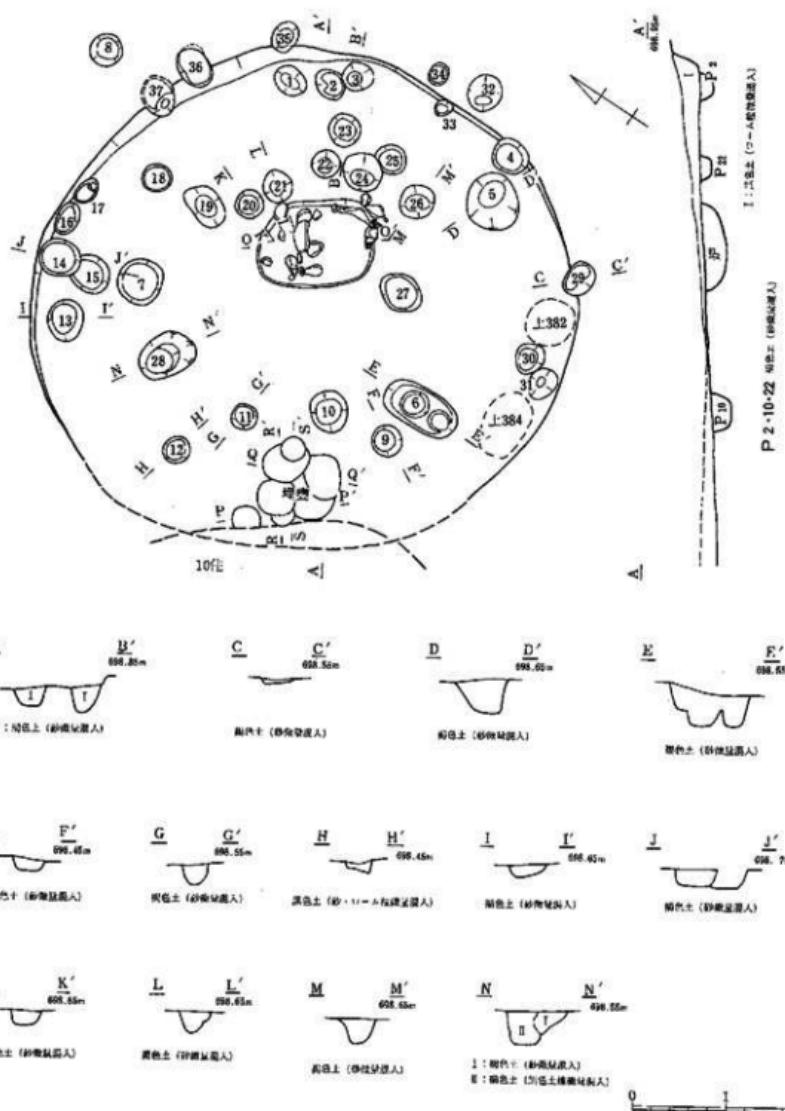


1: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)

2: 黄褐色土 (砂・0.5m大の砂少量混入)
3: 黄褐色土 (砂・ローム粘土質・砂混入)

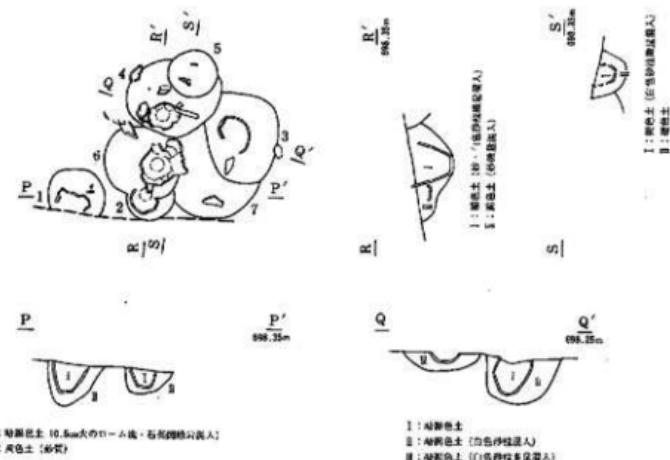
0 1 2 m

第8図 第13・14号住居址

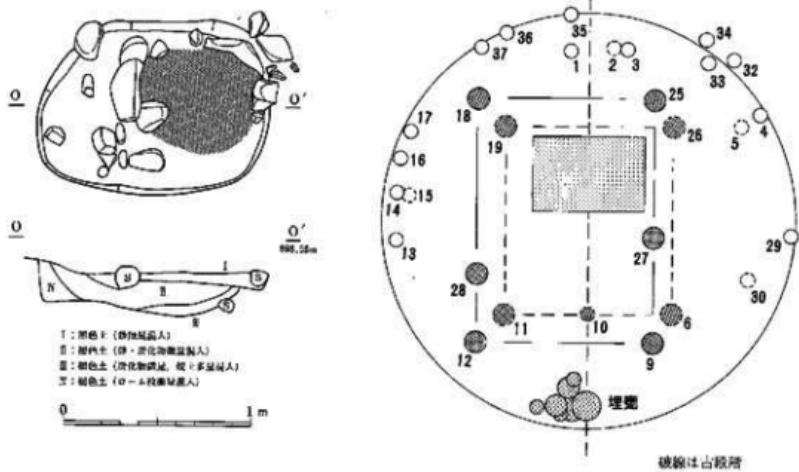


第9図 第9号住居址 (1)

埋 窟

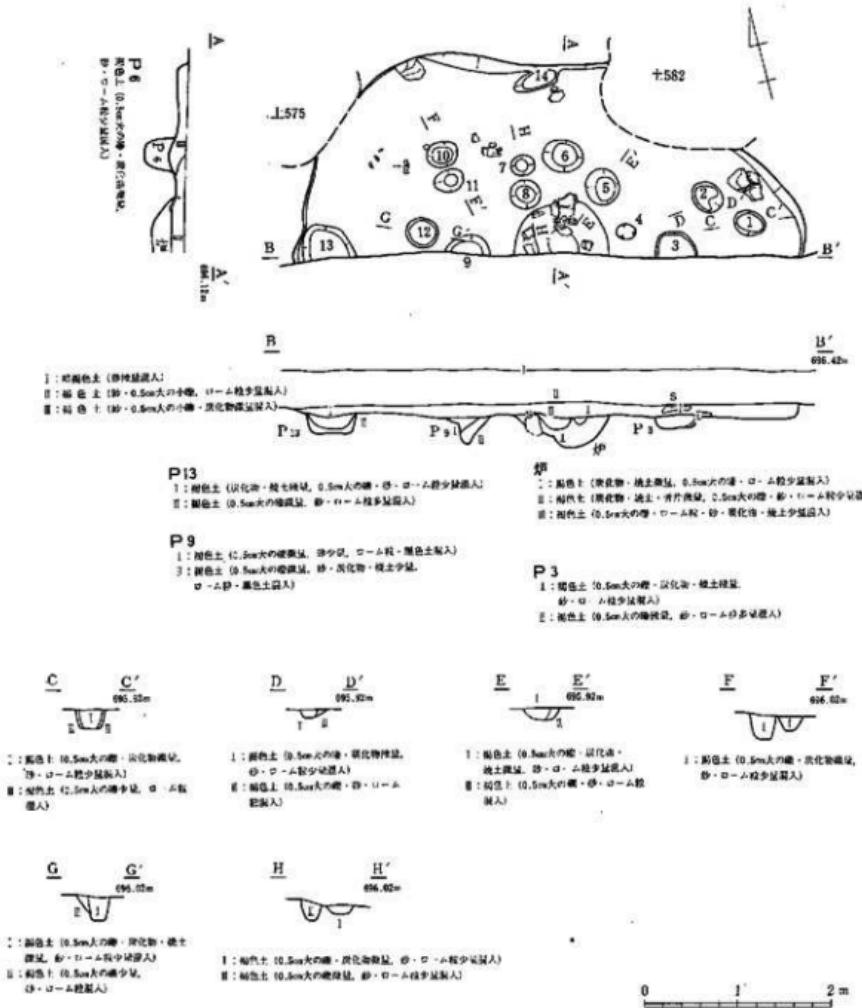


炉

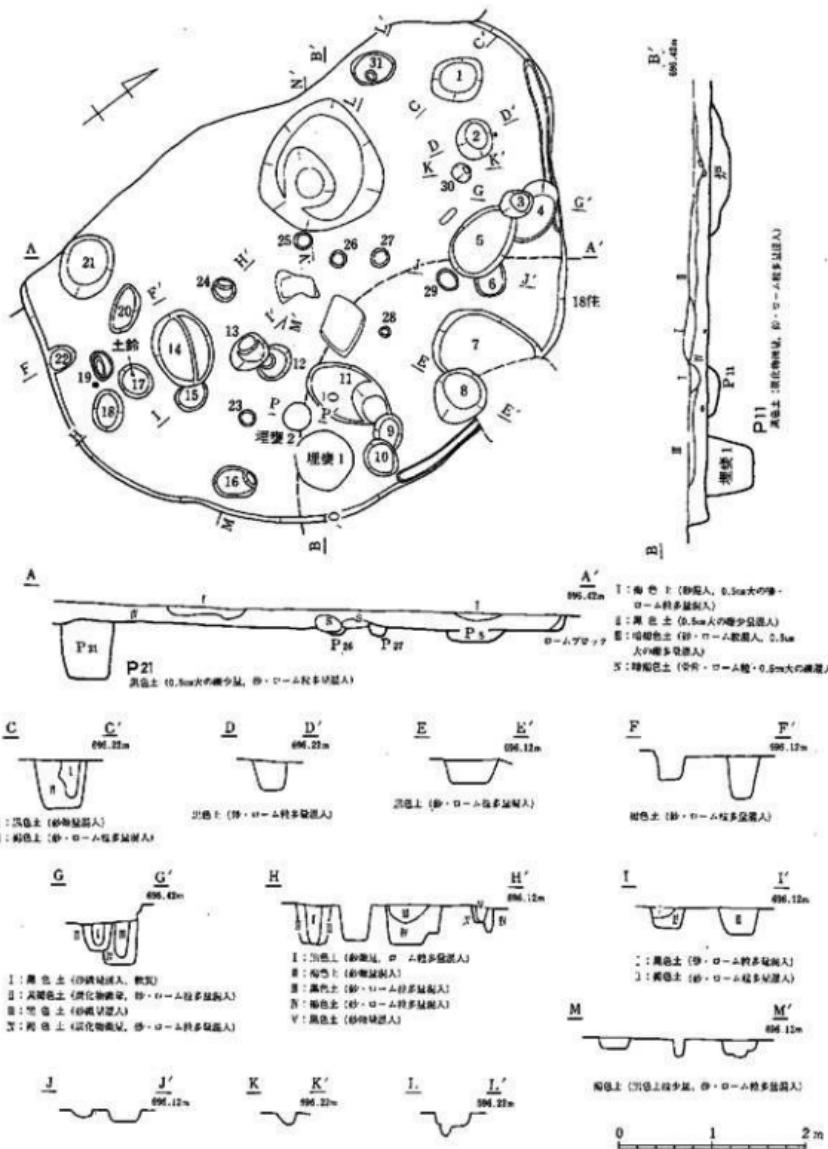


第9号住居址 柱穴配置模式図

第10図 第9号住居址 (2)

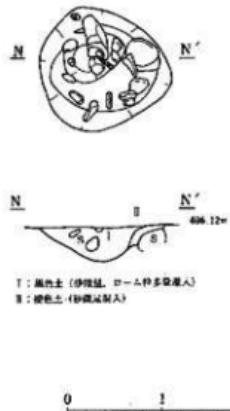


第11図 第11号住居址



第12図 第19号住居址 (1)

19住 炉



埋 窓

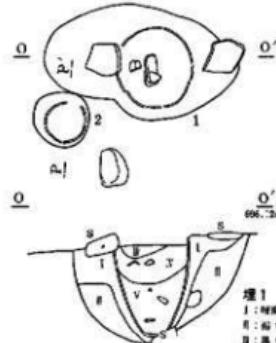
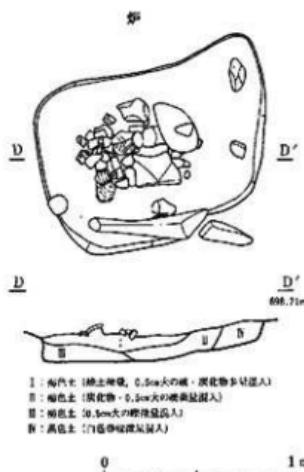
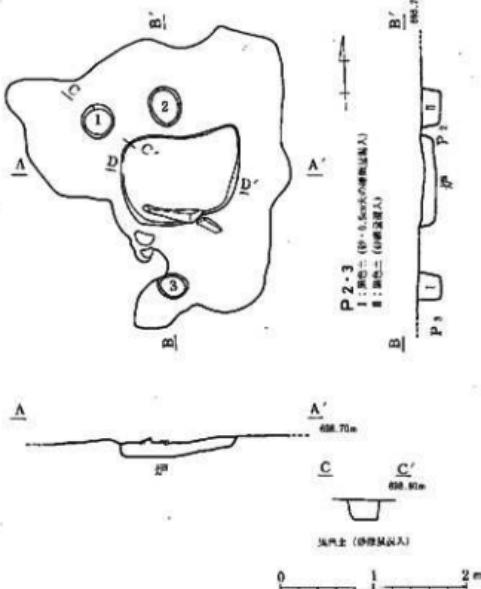
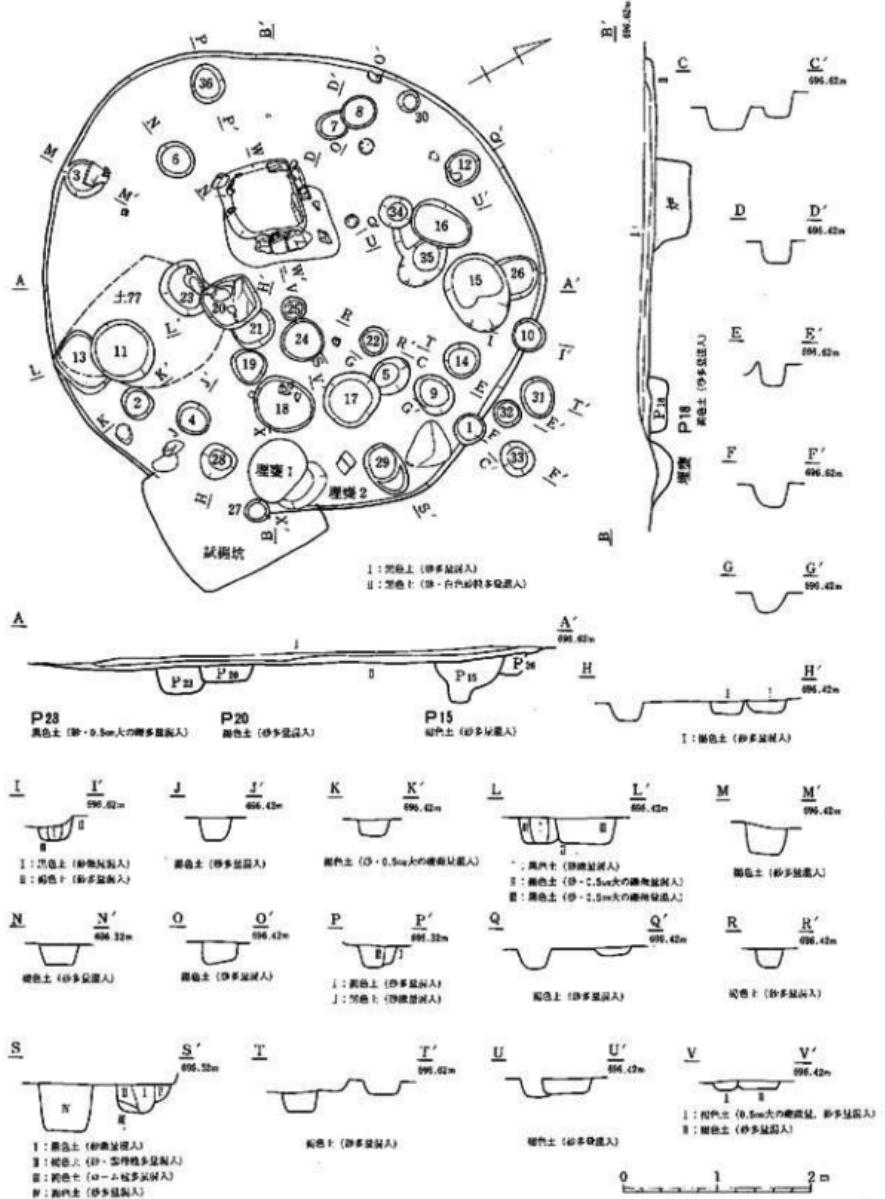


図2
1 : 棕褐色土 (炭化物・鉄・錆・0.5cm大的礫少見、ローム特多量混入)
2 : 黒色土 (砂・0.5cm大的礫少見、ヒートメタル多量混入)
3 : 黒色土 (炭化物混入、0.5cm大的礫少見、錆少見)
4 : 黒色土 (泥灰・ローム混・砂少見、0.5cm大的礫少見、炭化物多量混入)
5 : 黒色土 (浮遊灰・炭化物・錆土・ローム特多量混入)

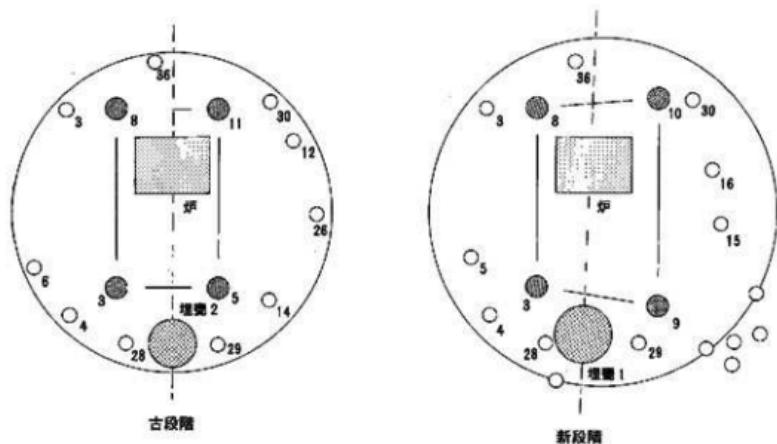
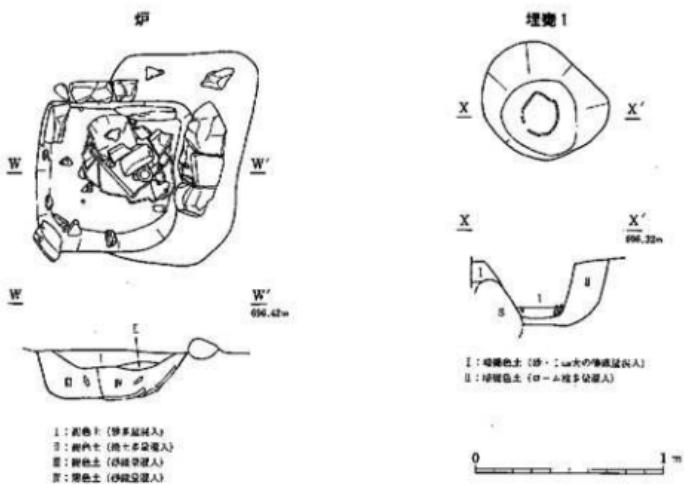
25住



第13図 第19号住居址(2)・第25号住居址

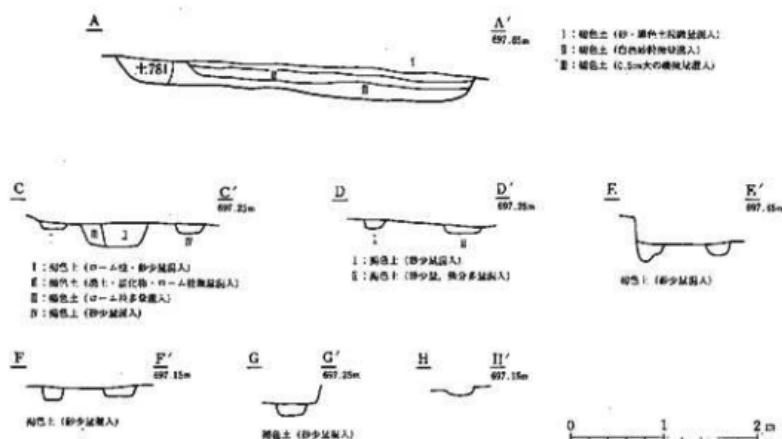
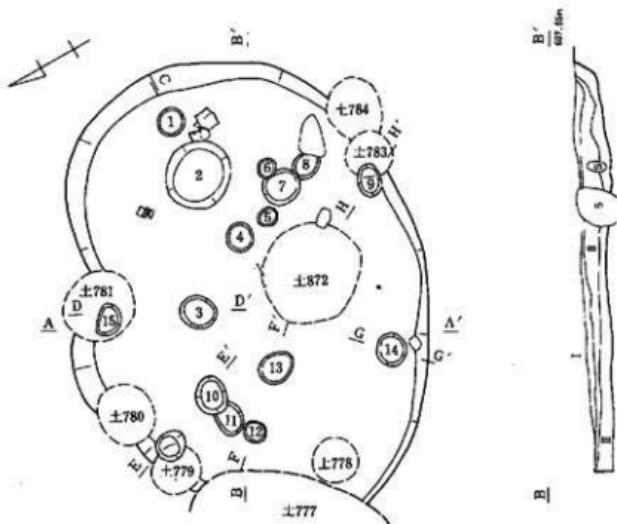


第14図 第18号住居址 (1)



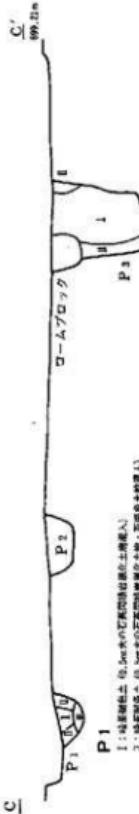
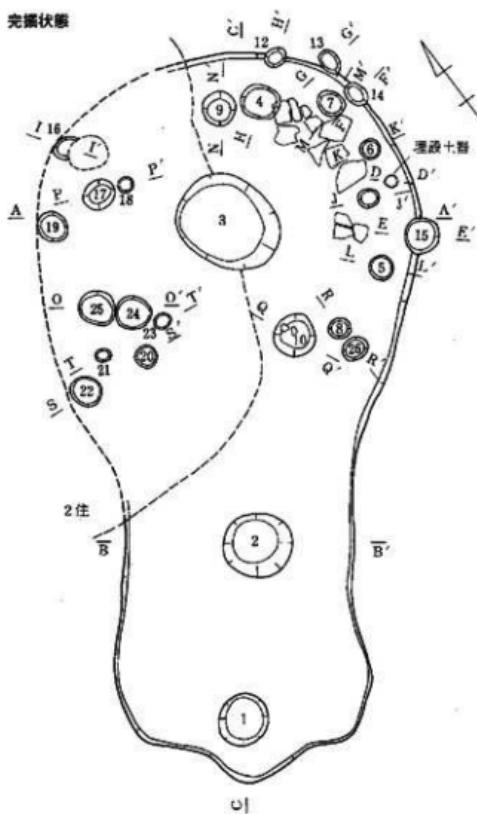
第18号住居址 柱穴配置模式図

第15図 第18号住居址 (2)



第16図 第17号住居址

完掘状態

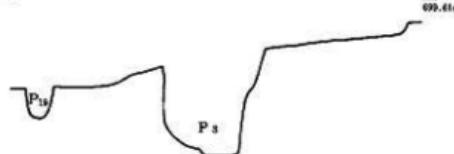


P3
1:赤褐色土(褐色地盤)
2:褐色土(褐色地盤)
3:褐色土(褐色地盤)

P1
1:褐色土(褐色地盤)
2:褐色土(褐色地盤)
3:褐色土(褐色地盤)

P2
褐色土
3:褐色土(褐色地盤)

A

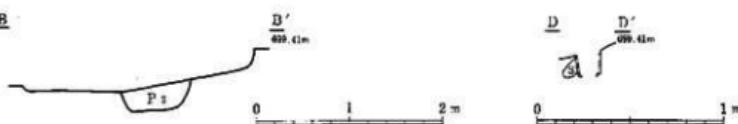


$\frac{A'}{69.61m}$

埋設土器

D D'

B



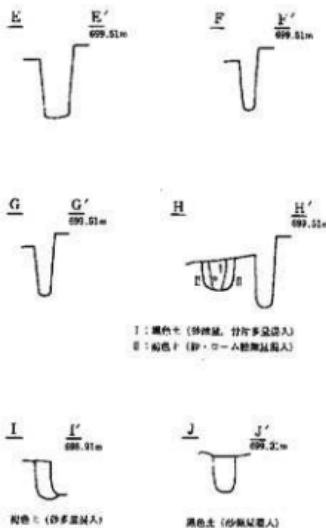
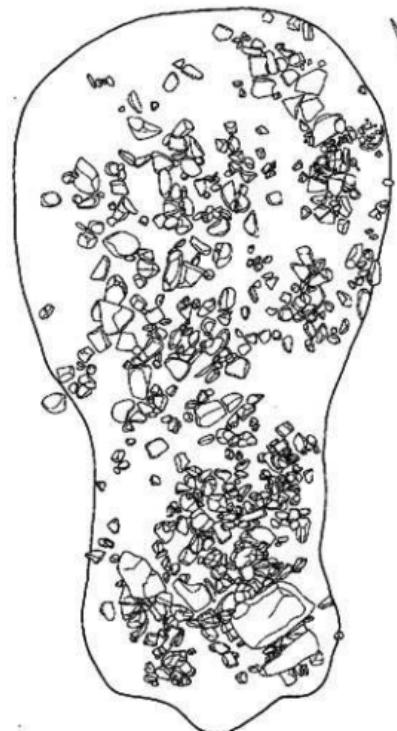
$\frac{B'}{69.61m}$

D D'

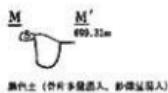
1m

第17図 第1号住居址 (1)

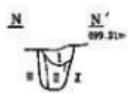
櫻土内発出土状態



I : 黒色土 (砂質混入、分界多量混入)
II : 黑色土 (砂・ローム粘性混入)



M M' 699.51m
黒色土 (砂多量混入、砂質混入)



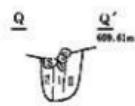
N N' 699.51m
I : 黒色土 (砂・氯化物少量混入)
II : 黒色土 (砂混入、可溶多量混入)
III : 黒色土 (砂・ローム粘性混入)



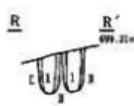
O O' 699.51m
I : 黒色土 (砂・氯化物少量混入)
II : 黒色土 (砂少量混入)
III : 黒色土 (砂・0.5mの大層、泥炭土少量混入)



P P' 699.51m
I : 黒色土 (砂・0.5mの大層少量混入)
II : 黒色土 (砂・0.5mの大層、泥炭土少量混入)
III : 黒色土 (砂・0.5mの大層、ローム粘性少量混入)



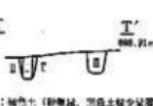
Q Q' 699.61m
I : 黒色土 (砂質混入)
II : 黒色土 (砂多量混入)



R R' 699.51m
I : 黒色土上 (液化堆積、0.5mの大層の
石英閃石岩化・漂砾混入、柱狀)
II : 黒色土 (漂砾混入、0.5mの大層の
右表同様の液化土堆積混入、H60)



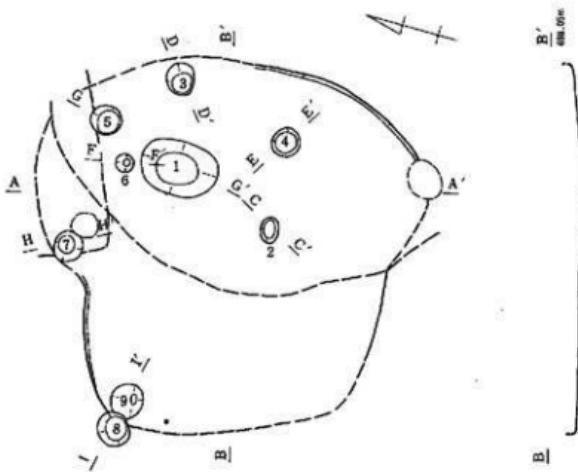
S S' 699.51m
I : 黒色土 (砂・0.5mの大層少量混入)
II : 黒色土 (砂少量混入)
III : 黑色土 (砂混入、0.5mの大層少量混入)



T T' 699.51m
I : 黒色土 (砂質混入、黑色土少量混入)
II : 黒色土 (砂少量混入)
III : 黑色土 (砂少量混入)

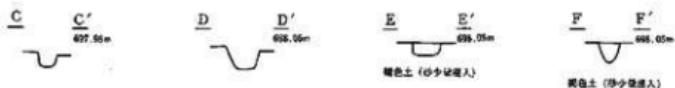
0 1 2 m

第18図 第1号住居址 (2)

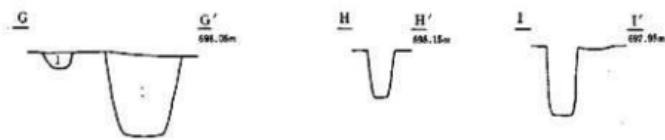


B'
696.00m

B



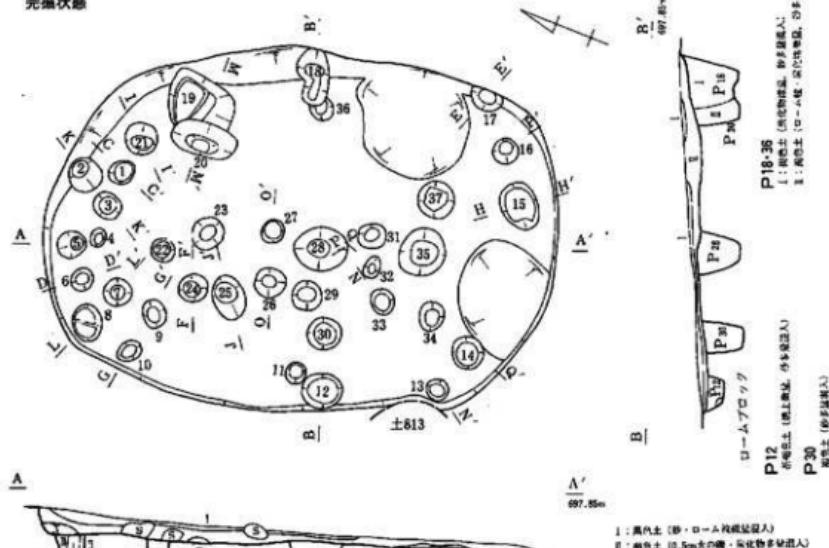
F-F' 698.00m
褐色土 (少少侵入)



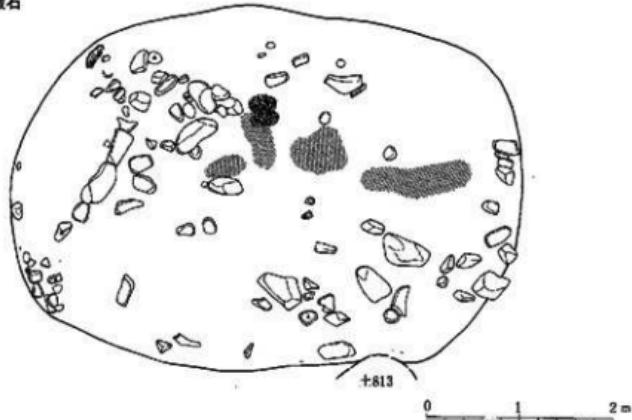
0 1 2 m

第19図 第12号住居址

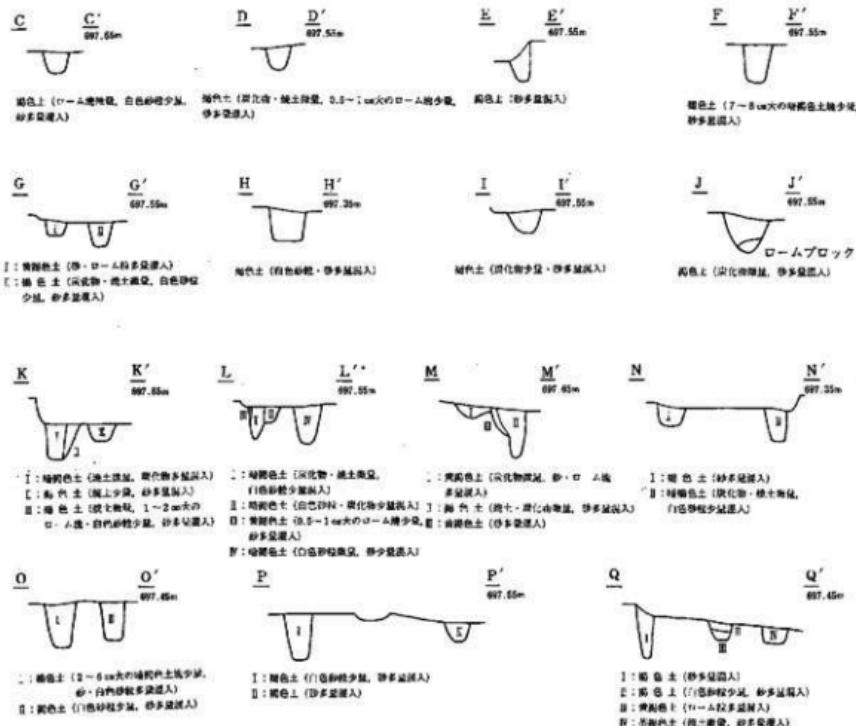
完掘状態



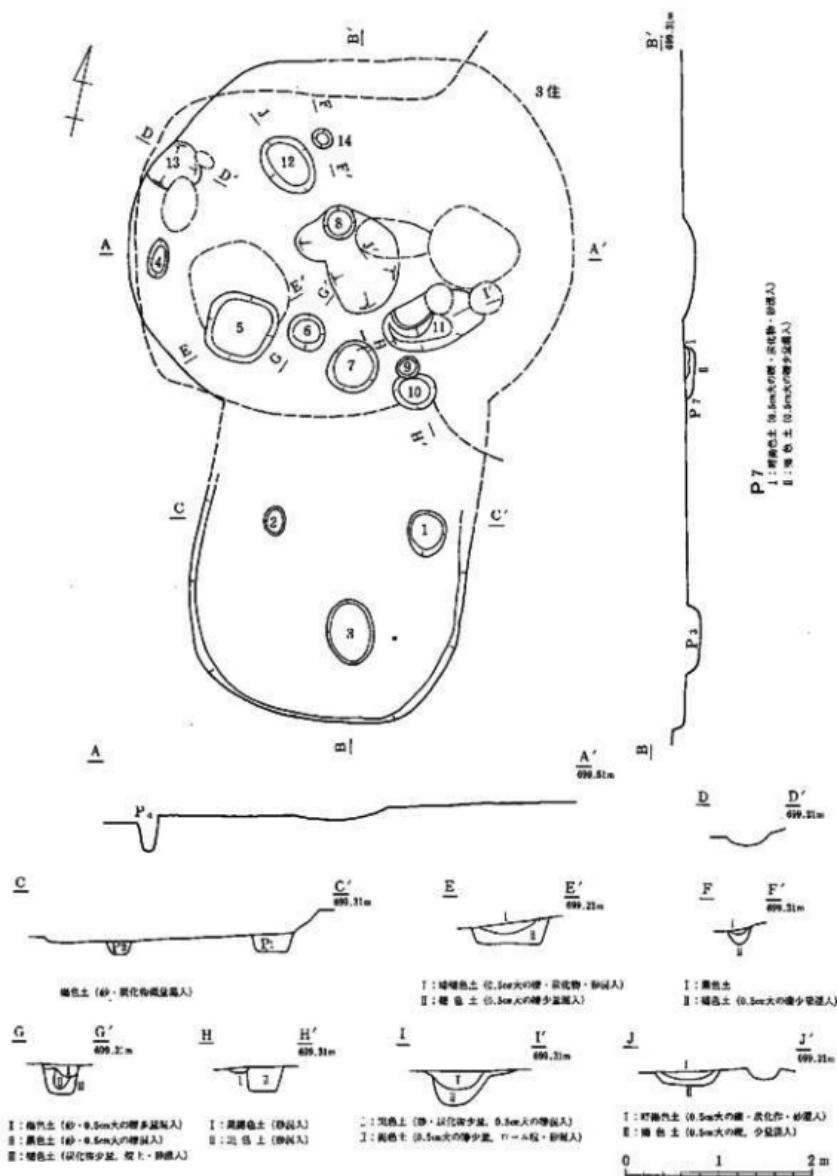
床面敷石



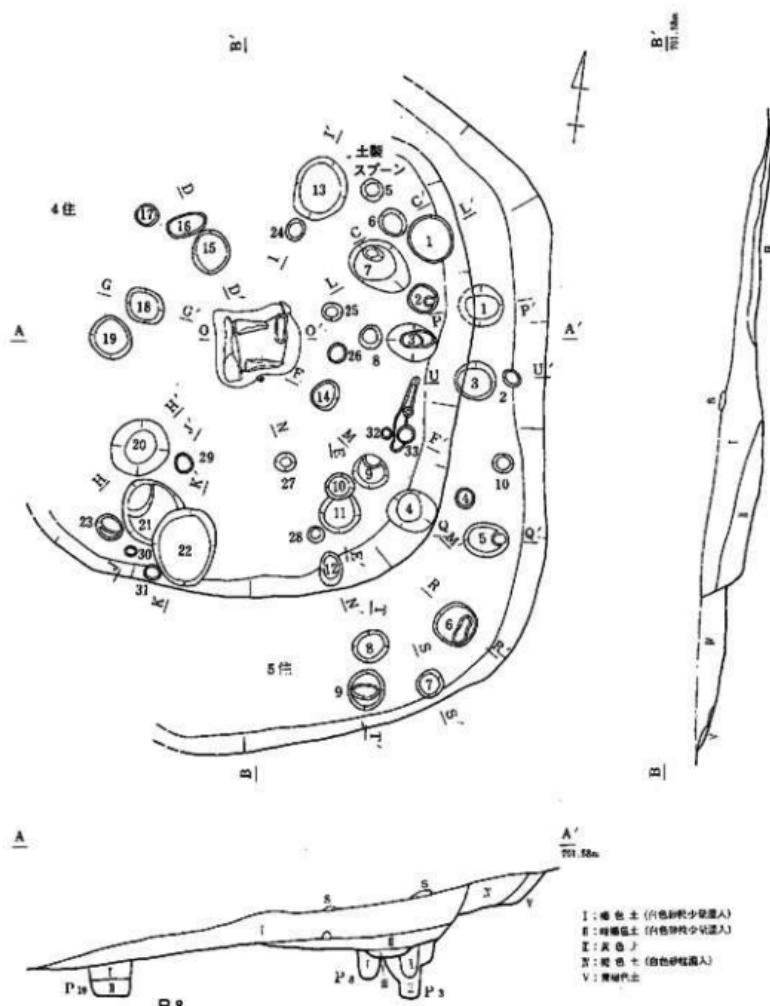
第20図 第15号住居址 (1)



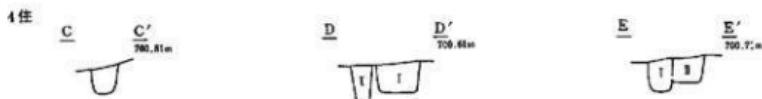
第21図 第15号住居址 (2)



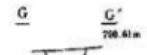
第22図 第24号住居址



第23図 第4・5号住居址 (1)

4住 C 700.81m
中褐色土 (砂・ローム較多量混入)D D' 700.81m
I : 暗褐色土 (砂・ローム較少量混入)E E' 700.71m
I : 黄褐色土 (砂・ローム較多量混入)

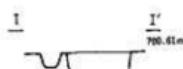
褐色土 (砂・ローム較多量混入)



暗褐色土 (砂・ローム較少量混入)



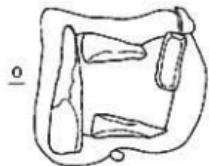
褐色土 (砂・ローム較少量、炭化物混入)



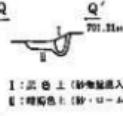
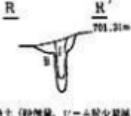
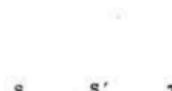
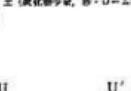
暗褐色土 (炭化物少見、砂・ローム較多量混入)



褐色土 (砂・ローム較少量混入)

I : 暗褐色土 (炭化物混見、砂・ローム較多量混入)
II : 褐色土 (0.3mの右側同様に炭化土被覆。
砂・ローム較多量混入)I : 褐色土 (砂・ローム較少量混入)
II : 褐色土 (砂・ローム較多量混入)I : 暗褐色土 (砂・ローム較少量混入)
II : 褐色土 (砂・ローム較多量混入)I : 暗褐色土 (砂・ローム較少量混入)
II : 褐色土 (0.3mの右側同様に炭化土被覆。
砂・ローム較多量混入)

5住

I : 黑褐色土 (砂・ローム較少量混入)
II : 暗褐色土 (炭化物少見、砂・ローム較多量混入)I : 褐色土 (砂・ローム較少量混入)
II : 暗褐色土 (砂・ローム較多量混入)I : 暗褐色土 (砂・ローム較少量混入、砂質)
II : 暗褐色土 (砂・ローム較多量混入、砂質)
III : 褐色土 (炭化物少見、砂・ローム較多量混入、
砂質)I : 褐色土 (白色砂質、炭化物多量混入)
II : 褐色土 (漂片・結晶・白色砂質混入、砂質)
III : 暗褐色土 (1cmの灰土被覆混入)I : 黑褐色土 (砂・ローム較少量混入)
II : 暗褐色土 (炭化物少見、砂・ローム較多量混入)I : 褐色土 (砂・ローム較少量混入)
II : 暗褐色土 (砂・ローム較多量混入)

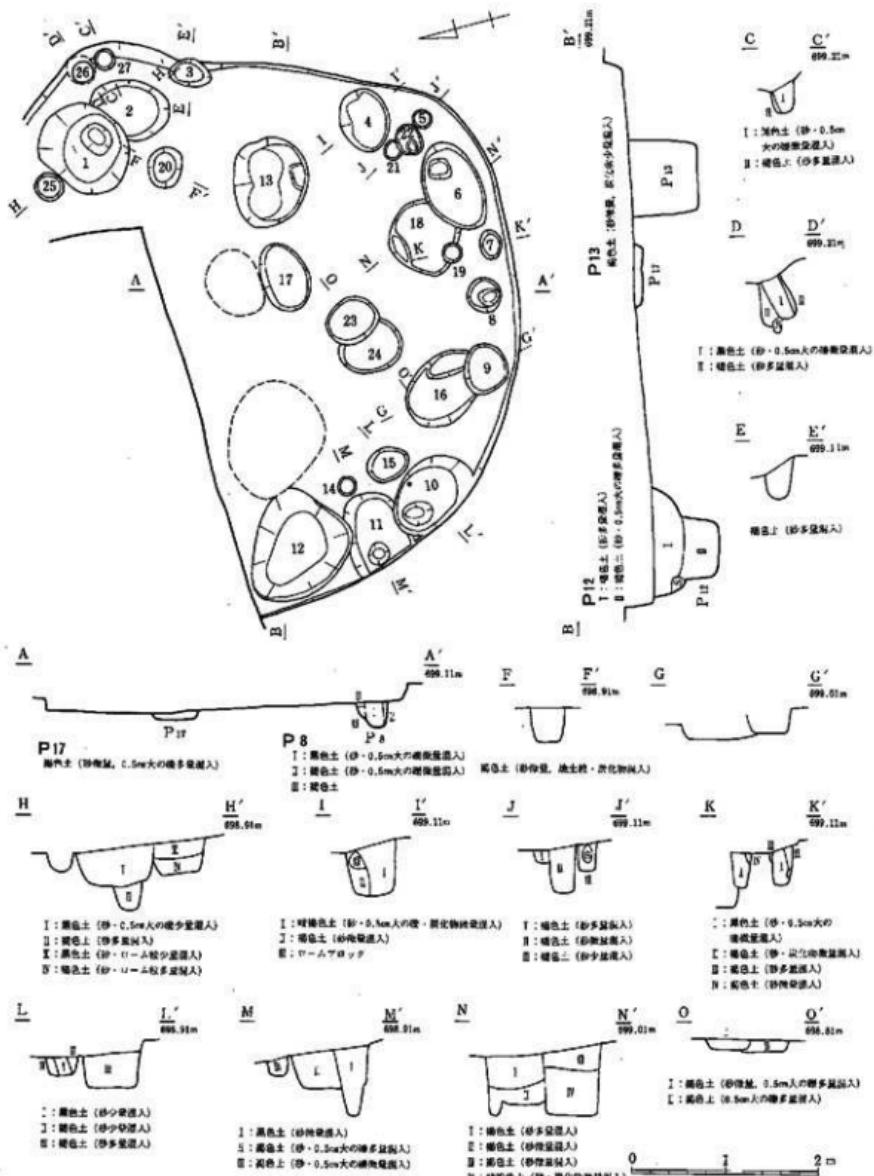
褐色土 (砂・ローム較多量混入)

0 1 2 m

I : 暗褐色土 (砂・ローム較少量混入)
II : 褐色土 (0.5mの右側同様)
III : 灰化土被覆入、砂・ローム較多量混入)
IV : 暗褐色土 (砂・ローム較多量混入)

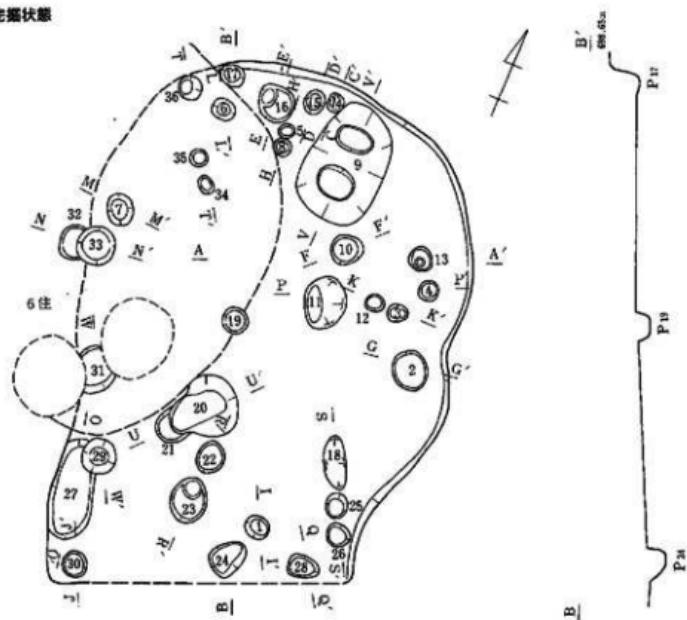
0 1 2 m

第24図 第4・5号住居址 (2)

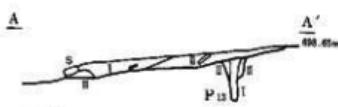


第25図 第2号住居址

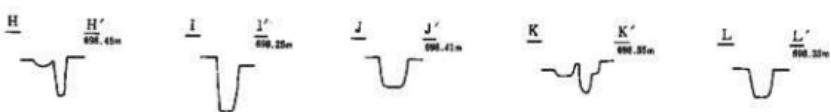
完掘状態



□：泥質土（砂少量混入）
△：褐色土（砂・2.5～1cmの大粒砂多量混入）
■：褐色土（砂・0.5mm大粒砂多量混入）



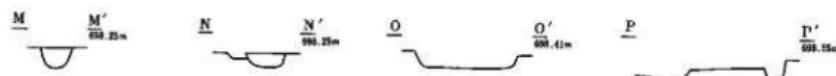
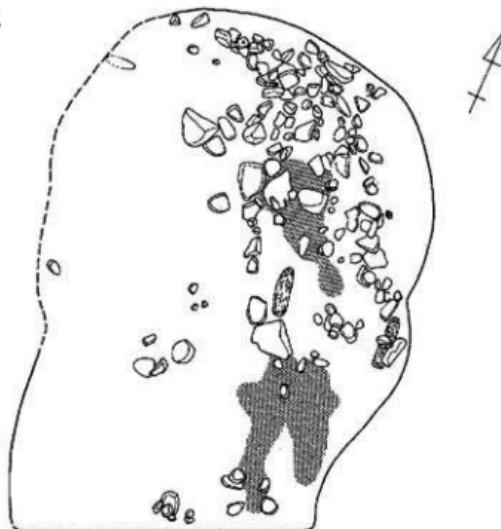
P13
□：泥質土（砂少量混入）
△：褐色土（砂・0.5mm大粒砂多量混入）



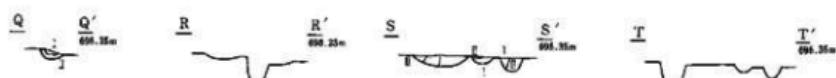
0 1 2 m

第26図 第7号住居址 (1)

覆土内壁出土状況

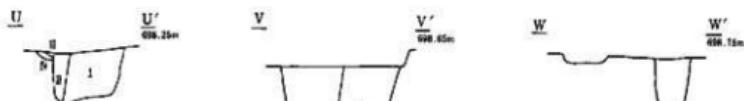


黄色土 (0.5m大的壁少量、砂多量流入) 塗色土 (0.5m大的壁多量、砂多量流入)



1: 黄色土 (0.5m大的壁少量、砂流入、ローム少量流入)
2: 黄色土 (塗色物少量、砂流入、ローム多量流入)

3: 黄色土 (塗色物少量、ローム多量流入)
P: 098.35m, T: 098.1m 黄土少量流入



1: 黄色土 (塗色物少量、0.5m大的壁少量、砂流入)
2: 黄色土 (0.5m大的壁少量、砂流入、ローム少量流入)
3: 黄色土 (0.5m大的壁少量、砂多量流入)
4: 黄色土 (0.5m大的壁少量、砂多量流入)

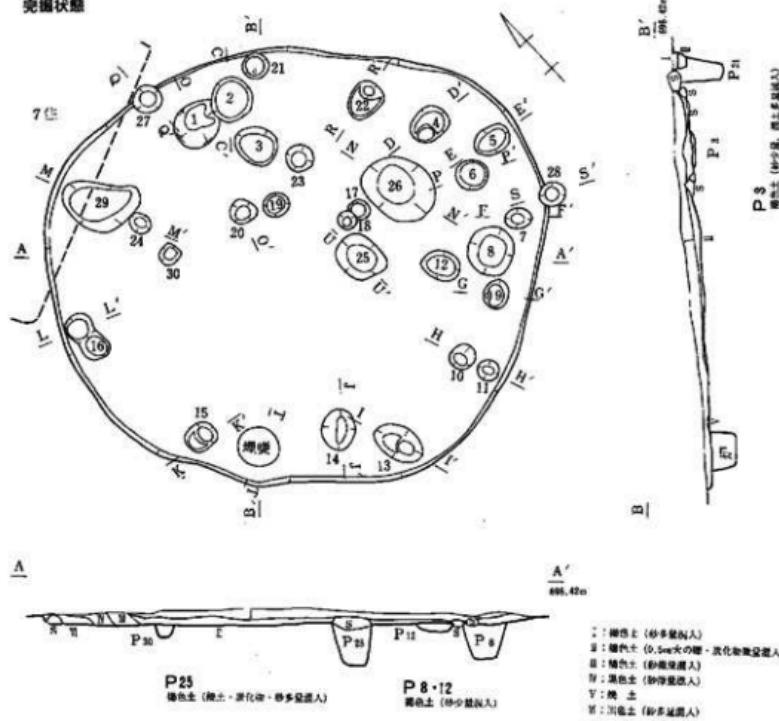
黄色土 (ローム少、0.5m大的壁少量流入)

T: 黄色土 (塗色物・塗土流入)
B: 黄色土 (塗土・砂少量、ローム少、0.5m大的壁流入)

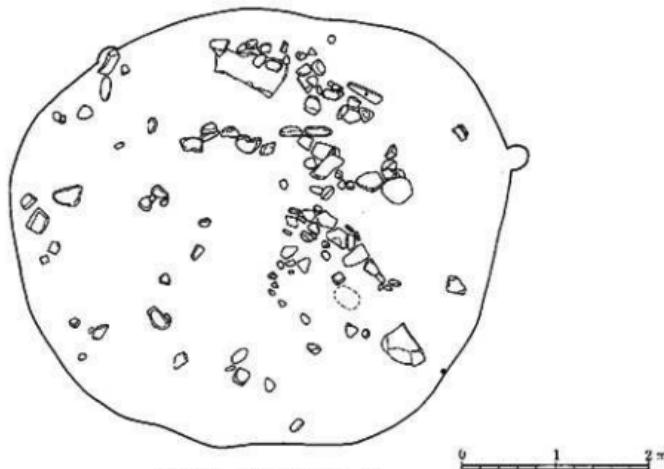
0 1 2 m

第27図 第7号住居址 (2)

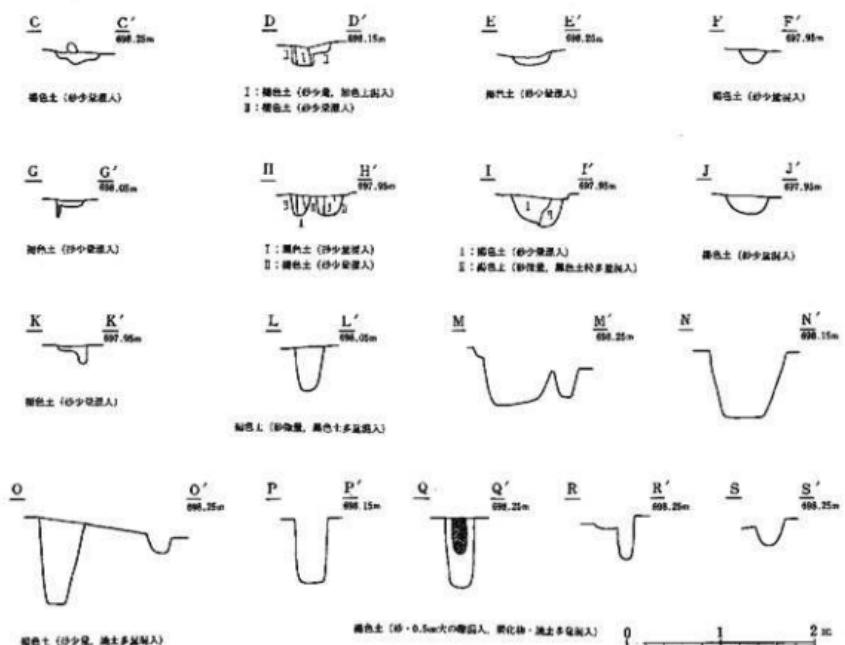
完掘状態



床面敷石

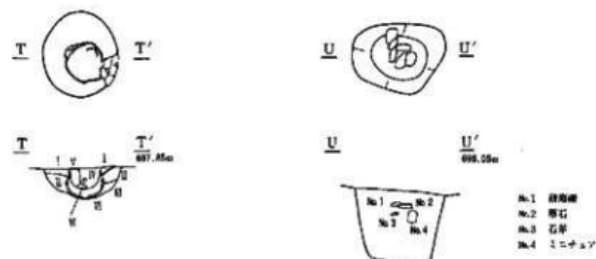


第28図 第10号住居址 (1)



埋甌

P25

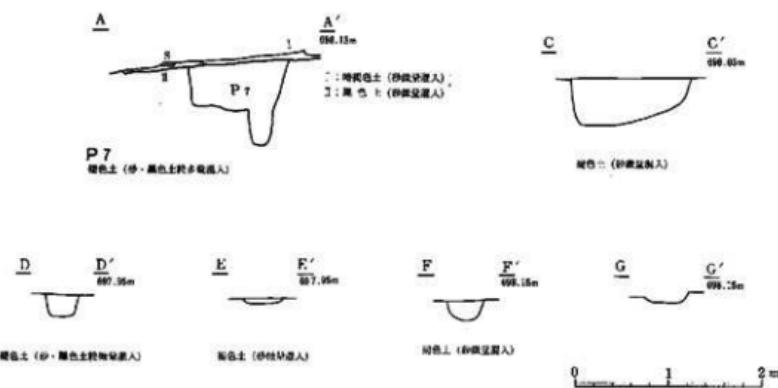
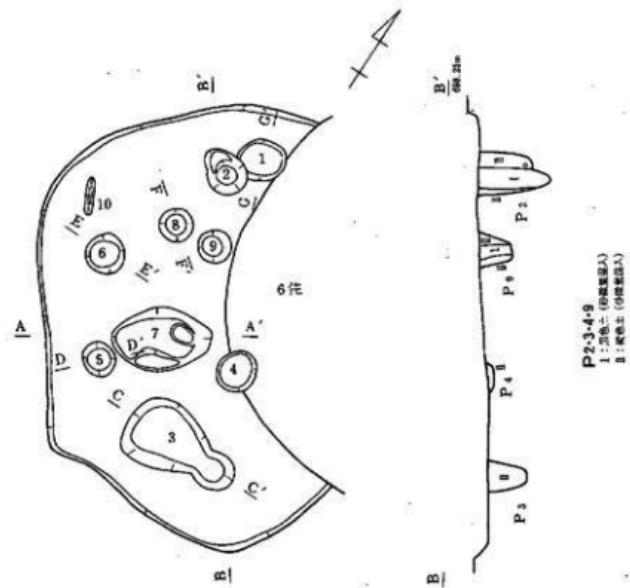


- I : 灰色土 (沙・0.5cm大的骨透入量透入)
 II : 灰色土 (沙・網上多量透入)
 III : 灰色土 (ヨードムシ多量透入)
 IV : 灰色土 (砂・白色砂粒・青苔透入)
 V : 灰色土 (黑化物透入, 骨透入)
 VI : 灰色土 (砂・灰化物底及透入)
 VII : 灰色土 (灰化物作底, 灰化土透入)

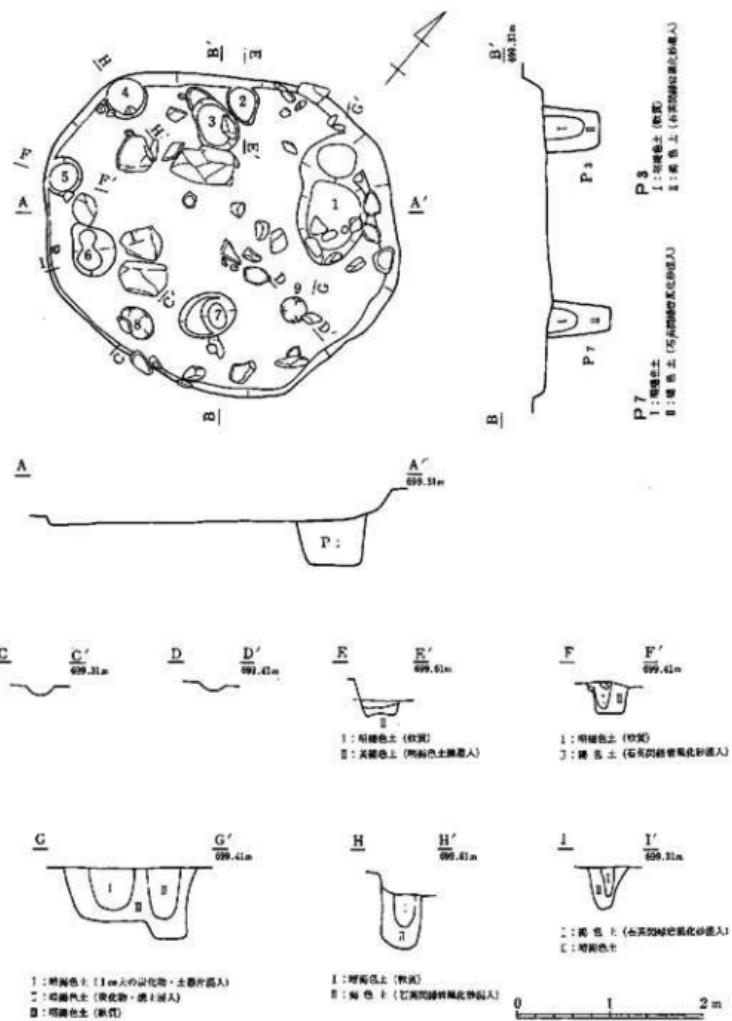
灰色土 (埴土・灰化物・砂多量透入)

0 1 m

第29図 第10号住居址 (2)

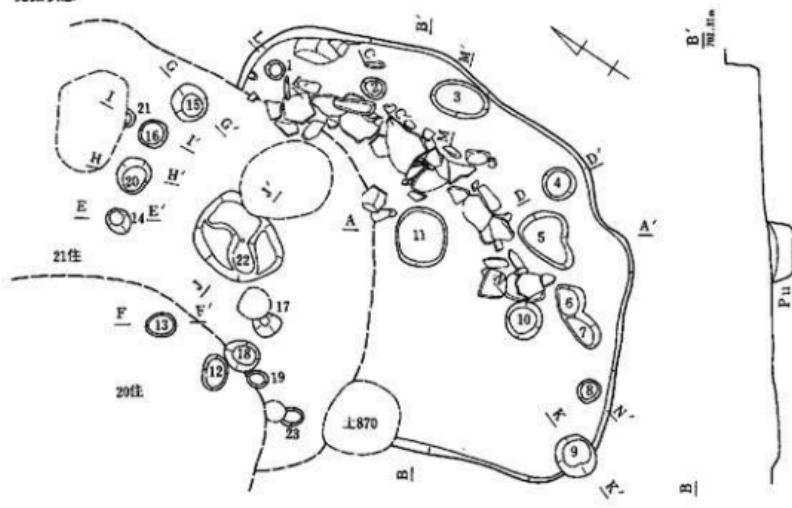


第30図 第8号住居址



第31図 第16号住居址

先報状態



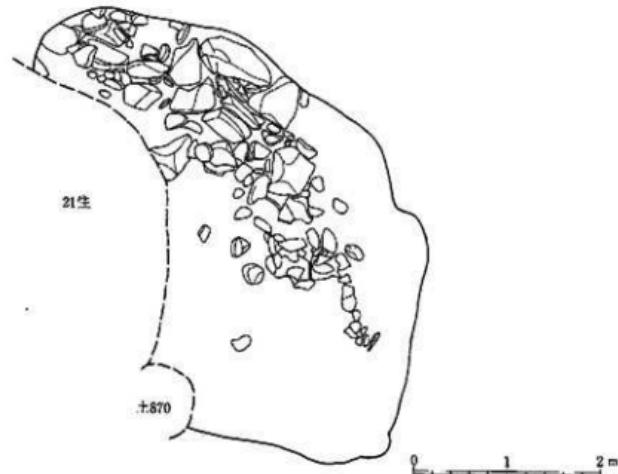
I: 棕色土 (0.5m大的砂礫層・砂多量混入)
II: 帶褐色土 (砂・0.5m大的砂・灰化物多量混入)

PII
I: 棕色土 (砂多量・0.5m大的砂多量混入)
II: 帶褐色土 (砂多量混入)

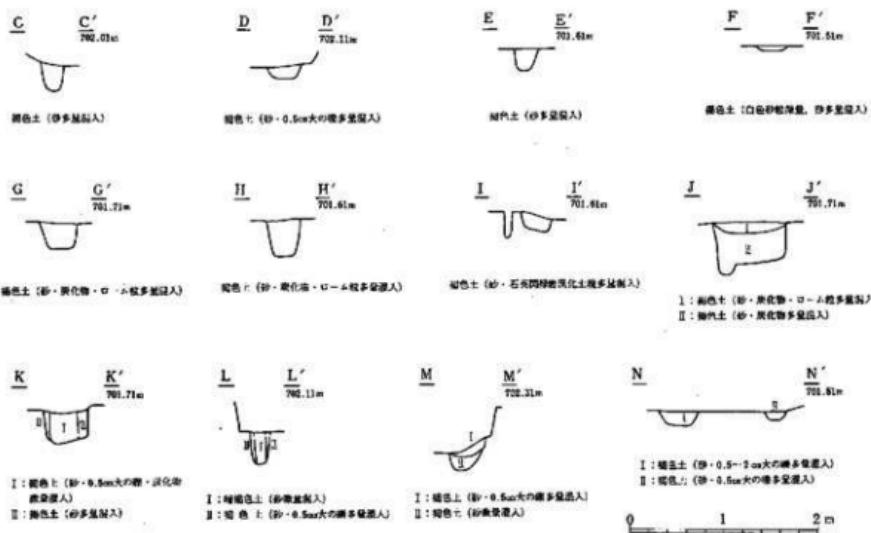
A' 202.91m

I: 帯褐色土 (砂多量混入)
II: 棕色土 (砂多量混入)

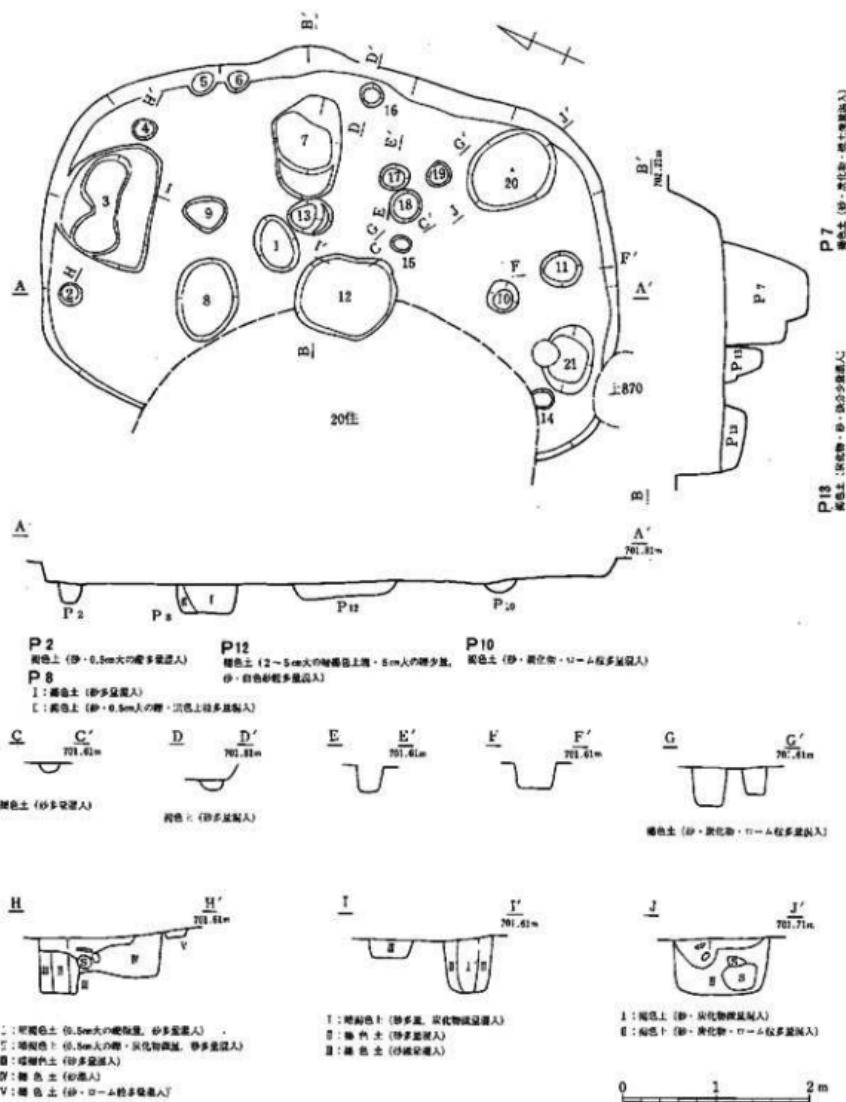
植土中出土状態



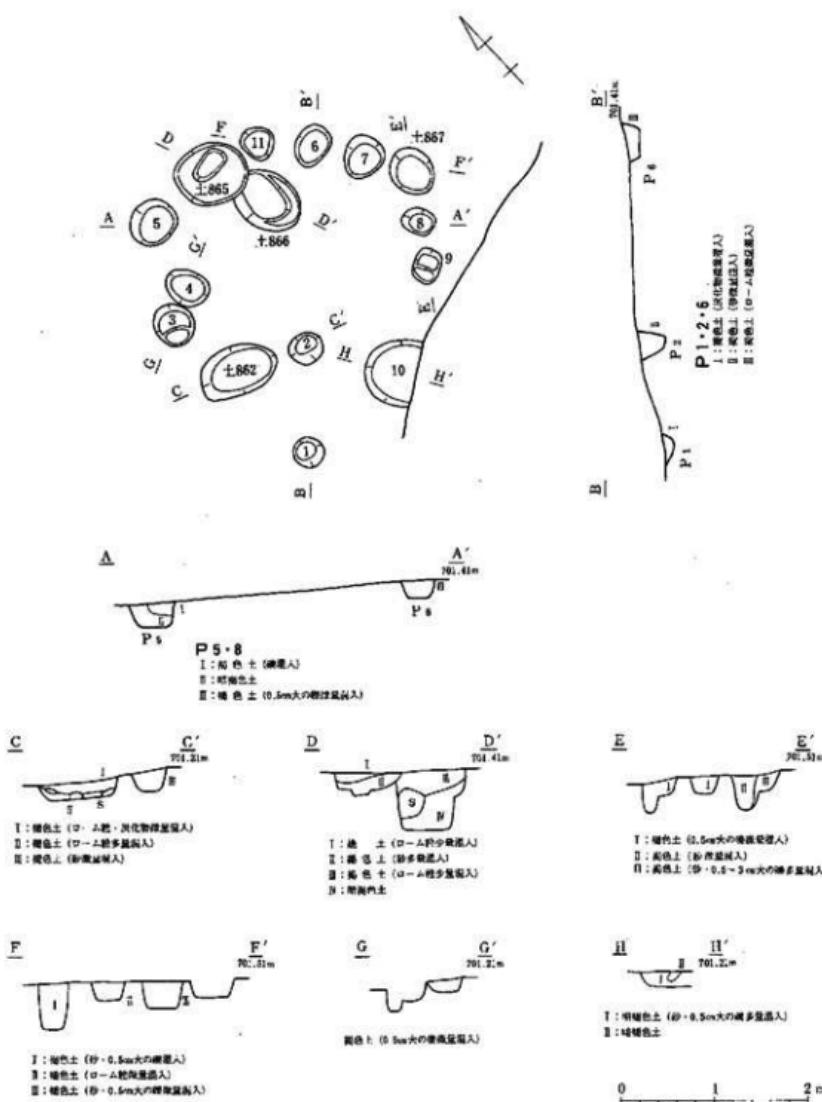
第32図 第22号住居址 (1)



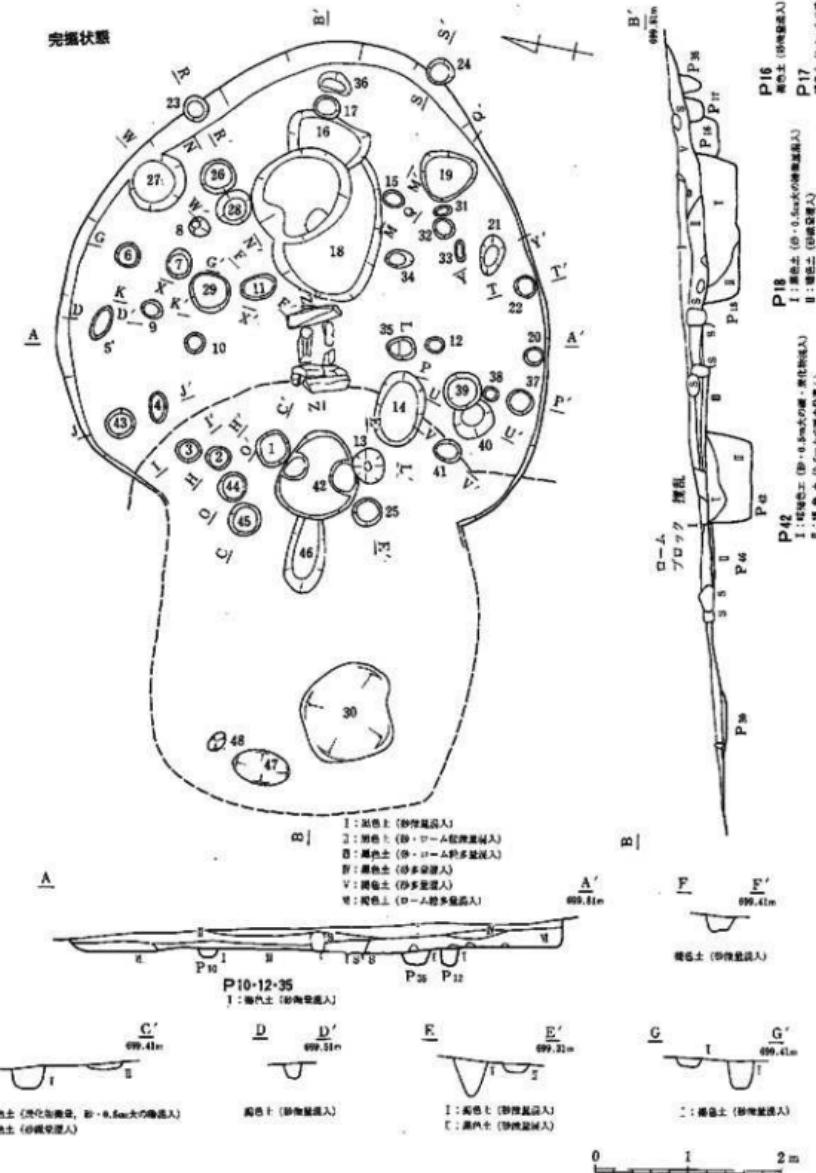
第33図 第22号住居址 (2)



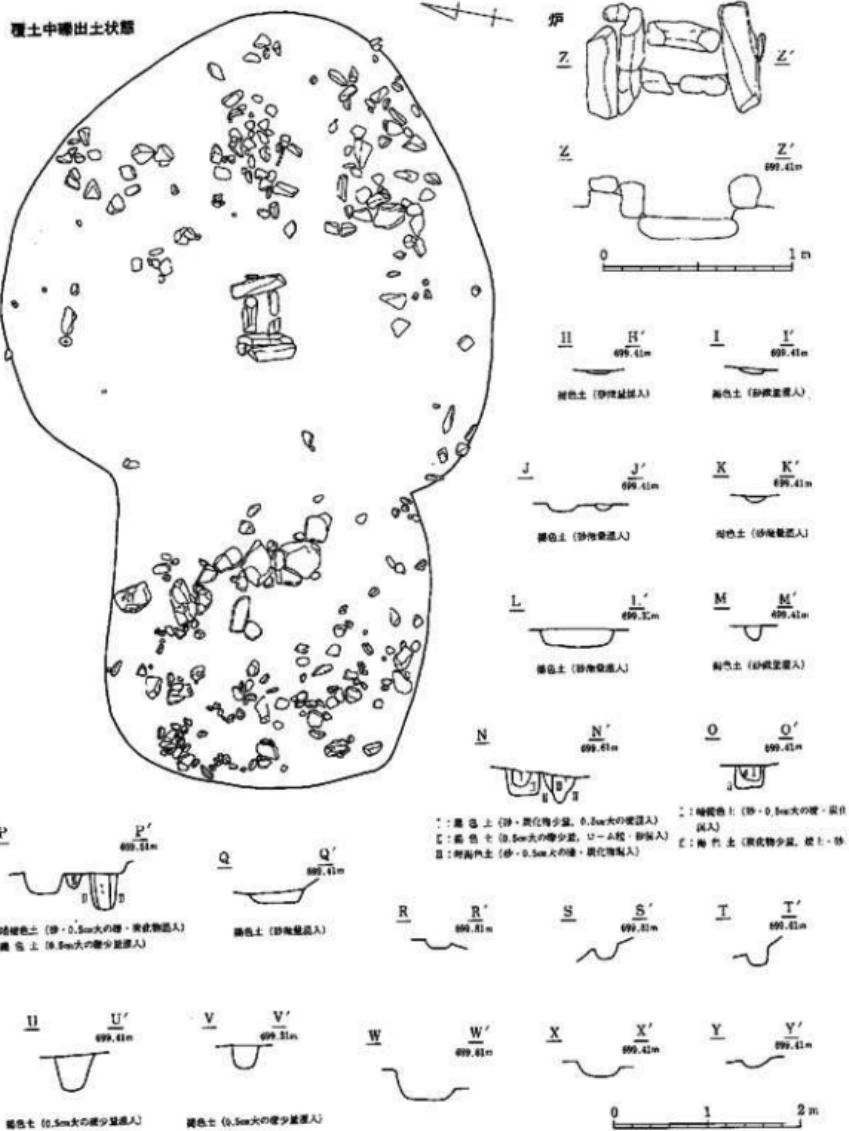
第34図 第21号住居址



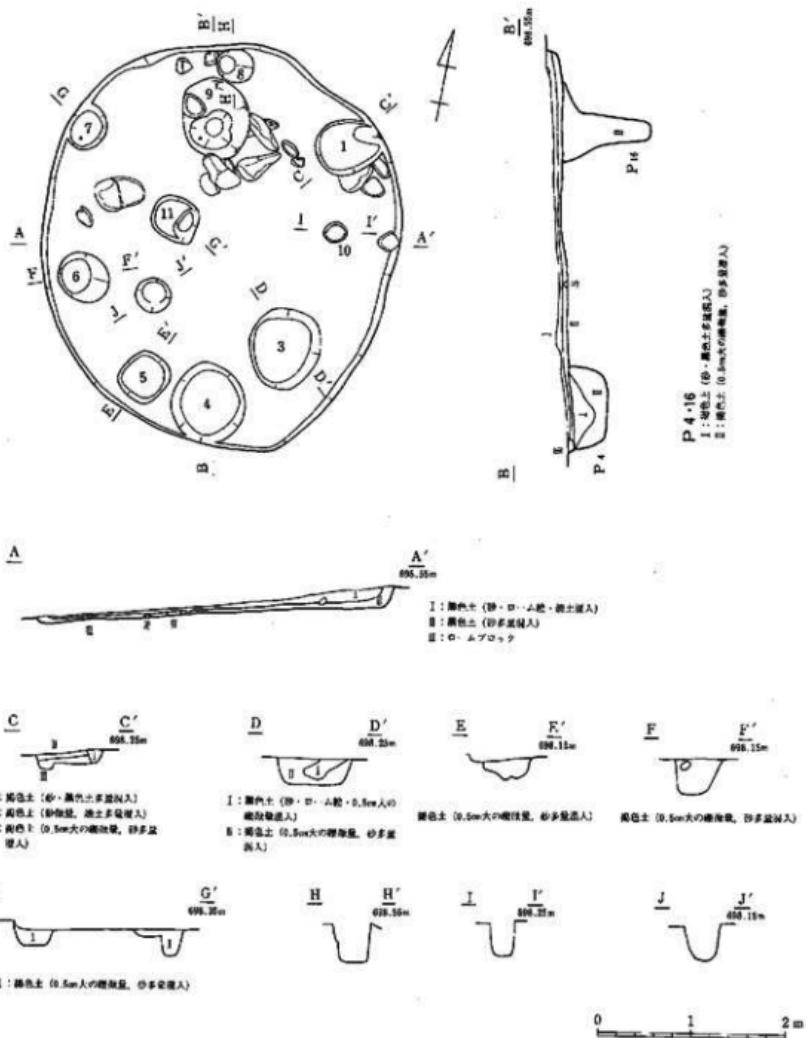
第35図 第23号住居址



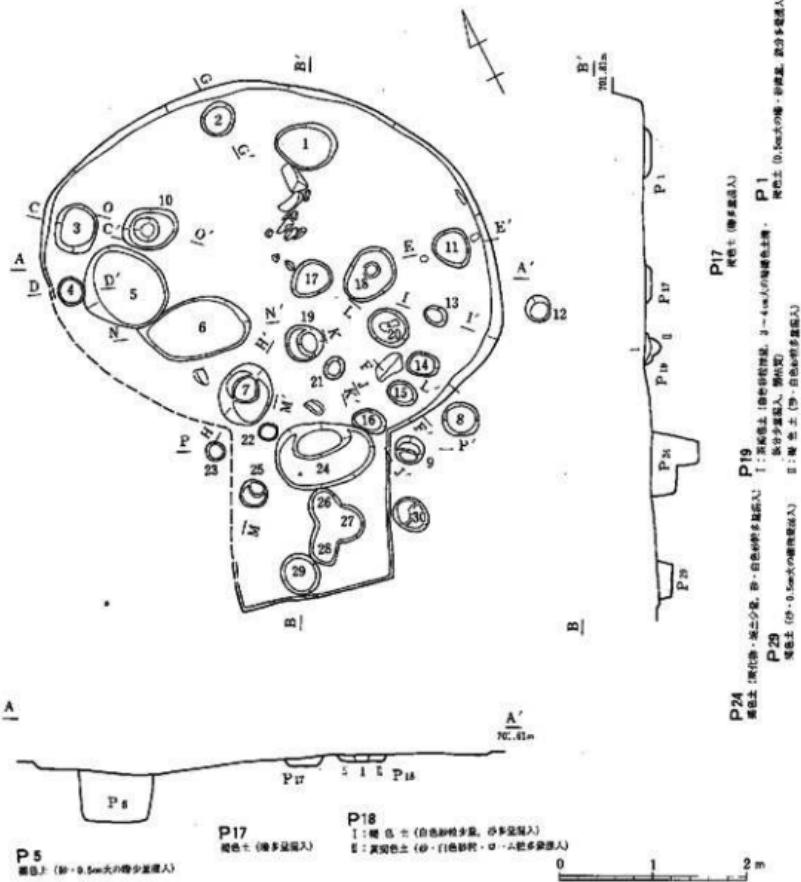
第36図 第3号住居址 (1)



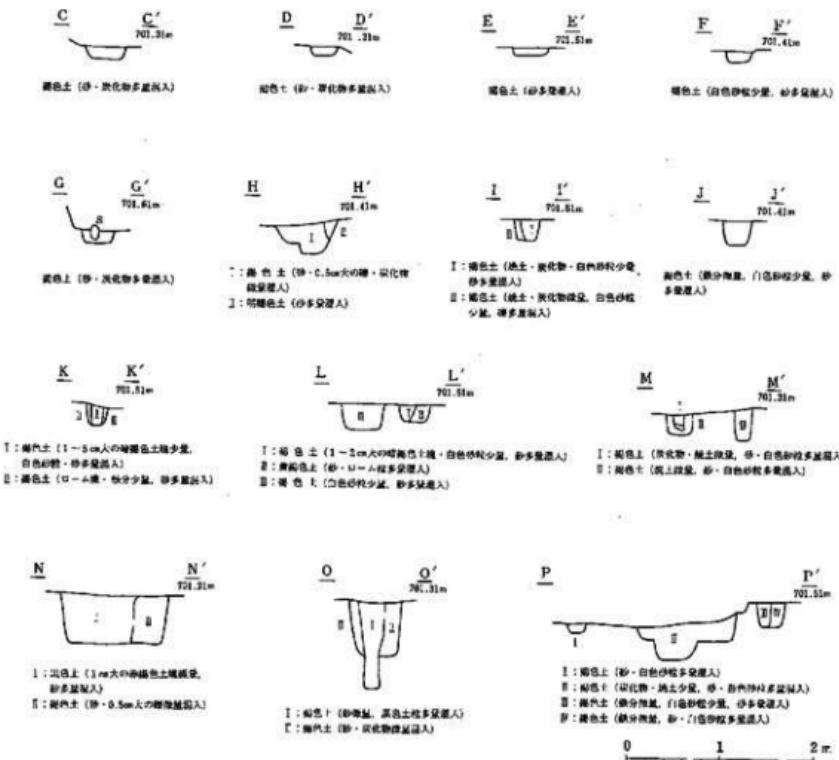
第37図 第3号住居址 (2)



第38図 第6号住居址



第39圖 第20号住居址 (1)



第40図 第20号住居址 (2)

第2節 土坑

今回の調査では、1618基検出された。地区別にみると、I区が1606基、II区が12基である。調査時には検出後攪乱と思われるものを除外し、直径50cm以上のものに通し番号を付け、掘り下げ、上層の記録を行なった。直径50cm以下のものについては、位置のみを記録し、掘り下げは一部のみにとどまった。このため整理の段階で、配置より建物址の可能性があるものが、いくつか存在することが判明したが、調査できずに終ってしまったことを反省している。調査したものの中には、配石を伴なうものがいくつか存在するが、調査区中央部南寄りの、第8号住居址の南側に位置する、当初住居址として掘り下げたところ、配石の切り合いと判明した配石群を除き、全て土坑で統一している。また、埋設土器を伴なうものも同様である。報告書作成にあたっては、数が非常に多いため、配石を伴なうもの、柱痕が明瞭に観察できるもの、焼土を伴なうもの、特殊な遺物を伴なうもの、埋設土器を伴なうもの等を基準とし、抽出した一部のみを図示し、他は・観表でデータを示し、形態等による分類を行なうにとどめている。直径が50cm以下のものについては、前記の理由により・観表からは除外している。

検出された土坑は時期でみると、縄文時代早期末～後期中葉、中世、近世のものに分けられる。ほとんどが縄文時代のもので、確実に中世と思われるものは2基、近世のものは3基が検出されたにすぎない。縄文時代のものは、細分すると、早期末～前期初頭、前期後葉、前期末～中期初頭、中期前葉、中期中葉、中期後葉、中期末～後期初頭、後期前葉、後期中葉に分かれる。時期を決められる遺物が伴なうものは少なく、ほとんどの土坑が、土壁が出土しても小片で時期を特定できない。このため付図に示した時期別の細分は、中期後葉、後期前葉という大まかな区分で行なっている。時期別の数は中期後葉のものが最も多く、大半を占めている。これに次ぐのが後期前葉のもので、前述した他の時期のものは各期とも數基ずつ確認されたにすぎない。各時期の土坑の分布については考察の中でふれるものとしたい。報告書での提示は、配石、埋設土器などの共通した要素をもつものごとにまとめ、時期は順番になっていない。

1 土坑372 調査区の中央部北西寄り、第24号住居址の南に位置する。南北68cm、東西64cmの不整円形で、深さは15cmである。覆土は砂を少量含んだ褐色土で、中央部に土器が埋設されている。土器（第61図94）は無文の深鉢で、胴部下半と底部が完存しており、穴の底からわずかに浮いた状態で正位で埋設している。本址の時期は、土器より、縄文時代後期前葉のものと推定される。

2 土坑908 調査区の南西部に位置する。南側の約半分は調査区外へ延びる。東西38cm、南北は調査部分で、35cmで平面形は梢円形である。深さは28cmで中央部に深鉢の胴部を正位で埋設している。掘り方は土器とほぼ同じ大きさである。土器は唐草文系で、胴部の約1/2が遺存している（第61図93）。本址の時期は、遺物より、縄文時代中期後葉、曾利III式期のものと推定される。

3 土坑801 調査区の南内部、第11号住居址の北側に位置する。東側で土坑581を切る、南北48cm、東西46cmの円形で、深さは15cmである。深鉢の口縁部が正位で埋設されているが、土器の破損が著しいため、本末の埋設状態は不明である。土器の中央部からは、拳大の石英閃綠岩が出土した。本址の時期は、遺物より、縄文時代中期後葉・曾利V式期のものと推定される。

4 土坑94 調査区の西部、第18号住居址の東側に位置する。南北70cm、東西68cmのやや角ばった円形で、深さは22cmである。中央のやや南寄りに、無文の粗製の深鉢の底部が正位で埋設されている。土器は胴部下半及び底部が完存している(第61図92)。土器の中には暗褐色土が詰まっていた。本址の時期は、遺物より、縄文時代後期前葉のものと推定される。

5 土坑518 調査区の南西部、第14号住居址の北東に位置する。南北60cm、東西60cmの円形で、深さは18cmである。北西部の底は地山の中の大きな石英閃綠岩にあたっている。北西の隅に深鉢の底部が正位で埋設されている。土器は無文で底部の約 $\frac{1}{4}$ を欠く(第61図99)。土器及び土坑の覆土には微量の焼土が含まれていた。本址の時期は、縄文時代中期後葉のものと推定される。

6 土坑602 調査区の中央部南西、第17号住居址の南西に位置する。南北78cm、東西68cmの不整円形で、深さは32cmである。中央部に2個体の土器を埋設している。北側の土器は、小型の浅鉢を正位で埋設しており、ほぼ完存している(第61図102)。南側の土器は無文の深鉢の胴部を逆位で埋設している。遺存状態は不良で復元、図示できなかった。南側の土器の両側には、石英閃綠岩が入っていた。本址の時期は、遺物より、縄文時代後期中葉・加曾利B I式期のものと推定される。

7 土坑910 調査区の中央西側に位置する。南北72cm、東西48cmの不整梢円形で深さは20cmである。中央部に土器が埋設されているが、遺存状態は悪く、復元、図示はできず、器種も不明である。穴の底は土器の部分が少し凹んでいる。覆土は褐色土で、土器の内外で差が認められない。本址の時期は、埋設土器より、縄文時代中期後葉と推定される。

8 土坑803 調査区の南西隅に位置する。西側は調査区外に延びる。南北126cm、東西は調査部分で110cmの不整円形で、深さは50cmである。中央部の南寄りに、深鉢の底部を正位で埋設している。穴の底はほぼ平坦で、一部にわずかに段がある。土器(第62図103)は加曾利E系で胴部下半～底部が完存する。土器の内部及び土坑の覆土には少量の炭化物と焼土が認められる。本址の時期は、埋設土器より、縄文時代中期後葉・曾利V式期と推定される。

9 土坑735 調査区の中央部南隣に位置する。南北138cm、東西106cmの梢円形で、深さは34cmである。中央部の東寄りに、深鉢の底部を正位で埋設している。穴の底は、ほぼ平坦で、北側がわずかに段になっている。土器は加曾利E系で胴部下半～底部が完存する(第63図124)。本址の時期は、埋設土器より、縄文時代中期後葉・曾利V式期と推定される。

なお本址の覆土中より西日本の船元III式土器と推定される土器片が数点出土している(第71図137、140)。船元III式そのものではなく、西日本と本遺跡の間のどこかで模倣して製作されたものと推定される(島田哲男氏の御教示による。第5章第4節参照)。

10 土坑28 調査区の西隅中央部に位置する。南側で土坑27を切っている。南北132cm、東西120cmの不整方形で、深さは20cmである。南西の隅寄りに、深鉢の底部を正位で埋設している。穴の底は平坦で、土器の底は、穴の底につけている。土器は無文の粗製の深鉢で、副部下半～底部がほぼ完存している（第61図97）。本址の時期は、埋設土器より、縄文時代後期前葉と推定される。

11 土坑29 調査区の西隅中央部に位置する。南北110cm、東西86cmの橢円形で、深さは36cmである。覆土は褐色土で、ロームを少量含む。底はほぼ平坦である。床の中央部より、ミニチュアの有孔鋸付土器（第149図21）が1点出土している。ミニチュア土器以外には土器片が数点出土している。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

12 土坑720 調査区の中央部南寄りに位置する。西側で土坑719を切る。南北56cm、東西40cmの橢円形で、深さは16cmである。底は平坦で、中央部より、浅鉢の破片が出土している。やや上げ底の鉢で、底から口縁の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している（第111図222）。本址の時期は出土遺物より、縄文時代後期前葉、堀之内I式期と推定される。

13 土坑113 調査区の南東部に位置する。南側で縄文時代の土坑を切る。南北96cm、東西84cmの隅丸方形で、深さは68cmである。覆土は褐色土で、多量のロームブロックを含んでいる。本址に伴なう遺物は内耳錐と思われる土器が數片出土したのみである。覆土の状態は、本遺跡に隣接し同時に調査された向畠遺跡の中世の土坑墓群のものと、非常に良く似ている。本址の時期は、遺物が小片のため確定はできないが、中世のものと推定される。また性格は土坑墓と考えたい。

14 土坑183 調査区の北西部に位置する。直径50cmの円形で、深さは58cmである。断面の土層で柱痕が明瞭に観察されており、柱痕の径（太さ）は、約30cmである。周辺に同時期のものと思われる小形の土坑が集中しており、建物址が存在したものと推定されるが、全容を調査することはできなかった。本址に伴なう遺物は、掘り方内より、土器片が數片出土したのみである。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉のものと推定される。

15 土坑17 調査区の西隅の中央部に位置する。西側で縄文時代の土坑を切る。南北96cm、東西70cmの橢円形で、深さ23cmである。覆土は砂を含んだ黒色土で、底は平坦である。中央や南寄りの上部より、土偶が1点出土している（第142図9）。胴体が板状の土偶で、胸部上半の表側のみ遺存している。土偶の出土状態は、表側を下にしており、頭部がやや下向きになっていた。土偶の他には、遺物は出土していない。本址の時期は土偶より、縄文時代後期のものと推定される。

16 土坑500 調査区の南西の隅、第14号住居址の東側に位置する。北及び西側で縄文時代の土坑を3つ、さらに南側で土坑501を切る。東西94cm、南北62cmの不整橢円形である。深さは28cmで、底は西側が段状になっている。覆土には焼土が多量に含まれており、炉であった可能性が高い。遺物は土器片が数点出土しているのみである。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

17 土坑546 調査区の南西の隅、第11号住居址の西側に位置する。北側を土坑540にわずかに

切られる。南北100cm、東西86cmの円形で、深さは20cmである。覆土は砂を少量含む黒色土で、底は平坦である。覆土中より、器形が一部復元できる深鉢の脚部が出土している(第61図92)。本址の時期は、出土遺物より縄文時代中期後葉・曾利II式期と推定される。

18 土坑152 調査区の北西隅に位置する。東西96cm、南北84cmの不整円形で、深さは70cmである。覆土は砂をわずかに含む黒色土で、北東部に段をもつ。覆土中より、器形を一部復元できる無文の精製土器が出土している(第63図122)。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後期前葉と推定される。

19 土坑509 調査区の南西部、第14号住居址の東側に位置する。土坑510、518に切られている。切り合が著しく、全体の形、規模は不明である。覆土は褐色土で、炭化物及び焼土が、わずかに含まれている。東側の底より、器形が一部復元できる深鉢の破片が出土している(第62図104)。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉・曾利V式期と推定される。

20 土坑400 調査区の中央部、第3号住居址の北東に位置する。南側をわずかに上坑399に切られる。南北84cm、東西78cmの円形で、深さは21cmである。覆土の上部に焼土が層状に観察され、炉であった可能性が高い。遺物は、覆土中より土器片が数点出土したのみである。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

21 土坑858 調査区中央北東部、第20号住居址の南西に位置する。南北88cm、東西76cmの梢円形で、深さは22cmである。中心部に径10cmほどの石英閃緑岩が並べられている。遺物はなく、時期は不明である。

22 土坑494 調査区の南西隅、第14号住居址の北側に位置する。南側で土坑495を切る。長軸160cm、短軸146cmの不整円形で、深さは60cmである。北西の隅は、地山の大きな石英閃緑岩にあたり、その周りを少し掘っている。覆土には少量の焼土、炭化物が含まれる。覆土中より、2個体の無文の精製土器が出土している。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後期前葉と推定される。

23 土坑905 調査区の中央部西寄りに位置する。南北154cm、東西144cmのやや角ばった円形で、深さは43cmである。覆土は砂をわずかに含む黒色土である。北側の半分は地山の中の石英閃緑岩にあたり、その回りを掘り下げている。南側は10cmほどの石英閃緑岩を並べている。遺物はなく、時期は不明であるが、形態より、縄文時代後期のものの可能性が高い。

24 土坑863 調査区の南東部、第20号住居址の南西に位置する。北側で土坑864を切っている。東西186cm、南北152cmの隕丸方形で、深さは47cmである。上部には人頭～拳大の石英閃緑岩が20数個ある。意識的に並べられたという感じではなく、やや乱雑に入っていた。穴の底は平らで、地形に沿って、わずかに傾斜している。遺物はなく、本址の時期は不明である。

25 土坑864 調査区の南東部、第20号住居址の南西に位置する。南側を土坑863に切られる。東西298cm、南北146cmの不整梢円形で、深さは62cmである。上部には土坑863と同様に多量の石英閃緑岩がある。人為的なものは不明で、入り方は、かなり乱雑である。底は平らで、地形に沿

って傾斜しており、2カ所に小さなピットが検出された。遺物はなく、本址の時期は不明である。

26 土坑696 調査区中央部の南西に位置する。北側で土坑694を切る。東西114cm、南北102cmの楕円形で、深さは37cmである。ほぼ長軸に沿って3個の石英閃綠岩を並べており、中心の1個は立石状になっている。底は凹凸が著しい。遺物は覆土中より土器片が数点出土している。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

27 土坑882 調査区の中央やや西寄りの南端に位置する。東西148cm、南北88cmの、やや角ばった楕円形で、深さは約30cmである。中心部は地山の中の大きな石英閃綠岩の目りを掘り、東側には10cmほどの大きさの石英閃綠岩が数個入っている。遺物は土器片が数点出土したのみである。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

28 土坑370 調査区の中央やや西寄り第6号住居址の北側に位置する。南側で土坑371を切る。南北106cm、東西100cmの円形で、深さは32cmである。中央やや南寄りに大型の砥石が置かれ、その回りに10cmほどの大きさの石英閃綠岩が数個入っていた。砥石の上面は使用により生じた凹みが明瞭に観察できた。遺物は土器片が数片出土したのみである。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

29 土坑450 調査区の南西隅、第14号住居址と第19号住居址の間に位置する。北側で土坑448を切る。東西140cm、南北110cmの楕円形で、深さは42cmである。底面には人頭大の石英閃綠岩を10個備配している。遺物は土器片が数片出土したのみである。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

30 土坑311 調査区の中央やや西側、第8号住居址の西側に位置する。南側で土坑312に、わずかに切られている。規模は、南北100cm、東西86cmの、角ばった円形で、中心の60×45cmの大きな石の周辺に人頭～拳大の石を15個並べている。石が巨大で動かせなかったため、下面の様子は不明である。石は全て石英閃綠岩が使用されている。本址に伴なう遺物はなく、明確な時期は不明であるが、形態より、縄文時代後期のものと推定される。

31 土坑312 土坑311に隣接し、北側で同土坑をわずかに切る。規模は南北94cm、東西86cmの角ばった円形である。形態は土坑311とよく似ており、中心の80×60cmの大きな石の周辺に人頭～拳大の石を18個並べている。北側の一辺のみは石が見られない。石は全て石英閃綠岩を使用している。土坑311と同様の理由により、下面の様子は不明である。本址に伴なう遺物はなく、明確な時期は不明であるが、土坑311と同様に、縄文時代後葉のものと推定される。

32 土坑489 調査区の中央部のやや西寄りに位置する。南北198cm、東西124cmの不整形で、深さは25cmである。中央に地山の大きな石英閃綠岩が2つならび、その周辺に数個の石英閃綠岩を並べている。本址に伴なう遺物はなく、時期は不明である。

33 土坑582 調査区西部の南隣に位置する。南側で第11号住居址を切り、東の隅を土坑612に切られる。南北168cm、東西194cmの方形で、南半分に配石をもつ。中心部に地山の、40×40cmほ

どの大きな石英閃綠岩があり、これを中心に東西を掘り下げて配石を作っている。東側は中心の石に沿うように鉄平石を立て、東側の穴に拳大の石を敷くように詰めている。西側は東側より、やや小さめの穴を掘り、その周りにやや大きめの石を置き、中央に石を敷いている。東側、西側とも上部は20cmほどの石を積み上げるように固めている。石は鉄平石以外は、全て石英閃綠岩が使用されていた。穴の底は、東側、西側とも、やや凹凸のある丸底になっている。北半分は南に比べて浅く、東西の隅には小さなピットがある。本址に伴う遺物はなく、明確な時期は不明である。

34 土坑84 調査区の南西部、第18号住居址の南東に位置する。南北100cm、東西92cmの円形で深さは60cmである。覆土の上部より器形の復元できる深鉢が出土している(第62図105)。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

35 土坑247 調査区の西部、やや北寄りに位置する。南北100cm、東西60cmの楕円形で、深さは56cmである。底部より骨片が少量出土している。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後葉前葉と推定される。

36 土坑366 調査区の中央西側、第6号住居址の北側に位置する。南北94cm、東西64cmの楕円形で、深さは50cmである。底部より骨片が多く出土している。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。なお本址の周辺には、骨の検出された土坑が集中しており、墓に間連する何らかの施設があったと推定される。

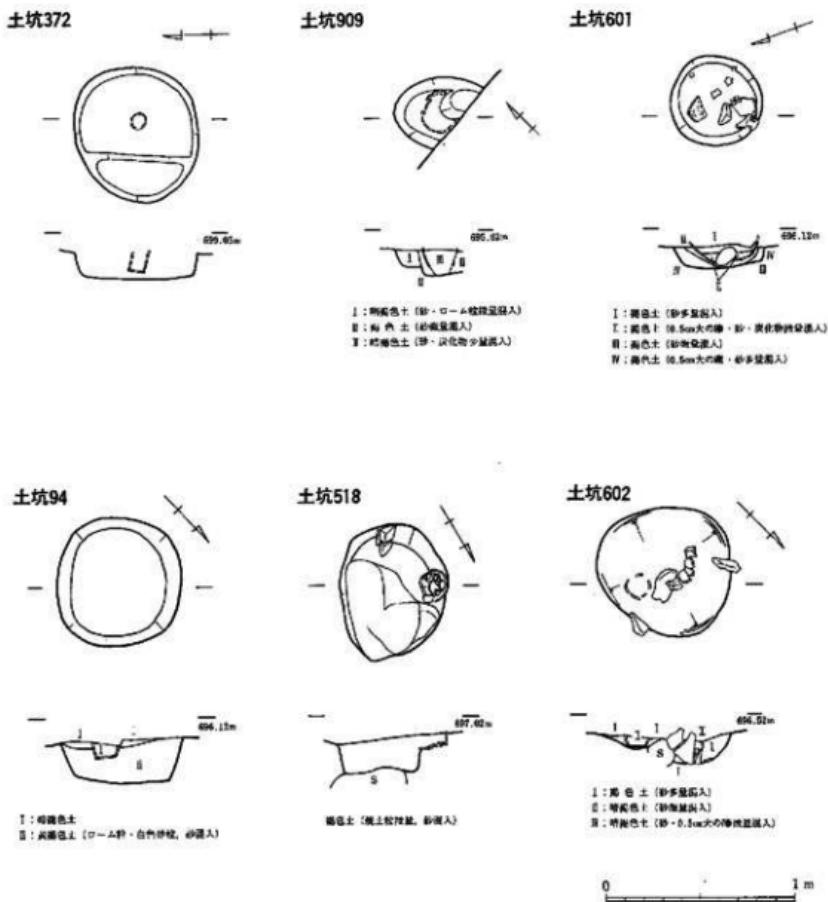
37 土坑361 調査区の中央西側、第24号住居址の西側に位置する。東側で土坑362を切っている。東西144cm、南北88cmの楕円形で、深さ52cmである。覆土の下部より骨片がまとまって出土している。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

38 土坑92 調査区の西側中央部、第18号住居址の東側に位置する。南北118cm、東西90cmの楕円形で、深さ46cmである。覆土中より、深鉢の口縁部が出土している(第62図102)。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

39 土坑360 調査区の中央西側、第24号住居址の西側に位置する。南北84cm、東西78cmの不整円形で、深さ16cmである。覆土中より、無文の粗製の深鉢が出土している(第64図130)。本址の時期は、出土遺物より、縄文時代後葉前葉と推定される。

40 土坑501 調査区の南西隅、第14号住居址の東側に位置する。北側を土坑500に切られる。南北142cm、東西130cmの不整円形で、深さは50cmである。底部には径10cmほどの石英閃綠岩を数個敷くように置いてある。底から数cm上の覆土中にも、同一レベルに数個入っている。覆土中には骨片がわずかに含まれていたが、細片のため何の骨か不明である。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

41 土坑145 調査区の北西隅に位置する。南東で土坑147を切る。南北162cm、東西110cmの不整楕円形で、深さ52cmである。覆土の褐色土にはロームが混在し、故意に埋められたものと推定される。覆土の上部には人頭大の石が10数個入っていた。覆土中より錢が34枚出土している(第73



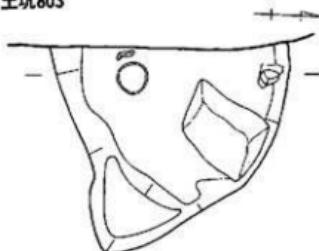
第41図 土坑 (1)

土坑910



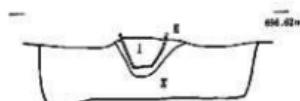
褐色土 (砂・0.5m大的砂多量混入)

土坑803



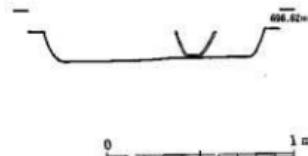
- I : 褐色土 (炭化物・純土埋没。ローム鉢少量、砂混入)
 II : 褐色土 (砂・ローム鉢混入)
 III : 黑色土 (粘土・0.5m大的砂多量、ローム鉢少量、砂混入)
 IV : 黑色土 (ローム鉢無量、0.5m大的砂少量、砂混入)
 V : 黒色土 (0.5m大的砂多量、炭化物・根少少量、砂混入)

土坑735



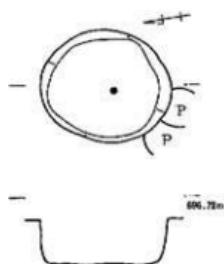
- I : 明顯白色土 (砂・0.5m大的砂多量混入)
 II : 棕色土 (砂少量混入)
 III : 明顯白色土 (砂多量混入)

土坑28

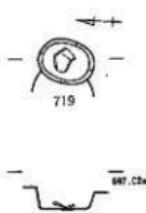


第42図 土坑 (2)

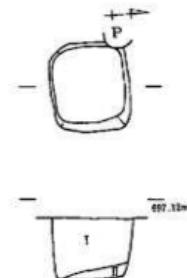
土坑29



土坑720

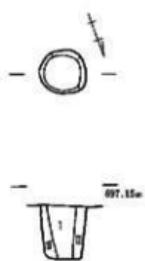


土坑113



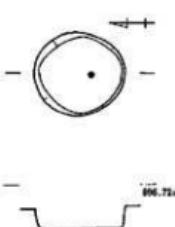
I: 黄色土 (0.5~5cmのローム塊多量混入)
II: 黄褐色土 (2~3cmの大ローム塊多量混入)

土坑183

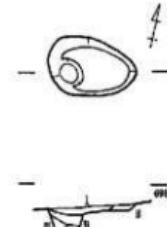


I: 黄褐色土 (砂混入)
II: 黄色土 (砂・ローム塊混入)

土坑17



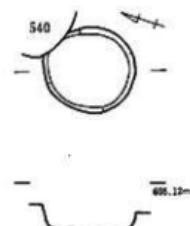
土坑500



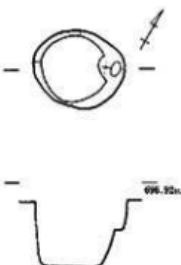
ロームブロック

I: 黄色土 (1~5cm大塊・砂混入、枝・木茎混入)
II: 砂色土 (赤土質鉄化、0.5cm大塊・砂混入)
III: 紅色土 (0.5cm大塊・透土状鉄化物質、砂混入)

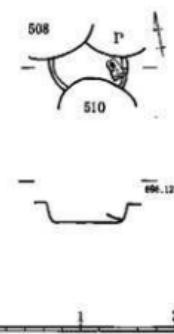
土坑546



土坑152



土坑509

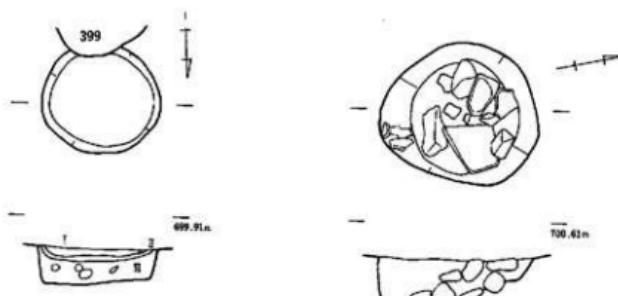


0 1 2 m

第43図 土坑(3)

土坑400

土坑859

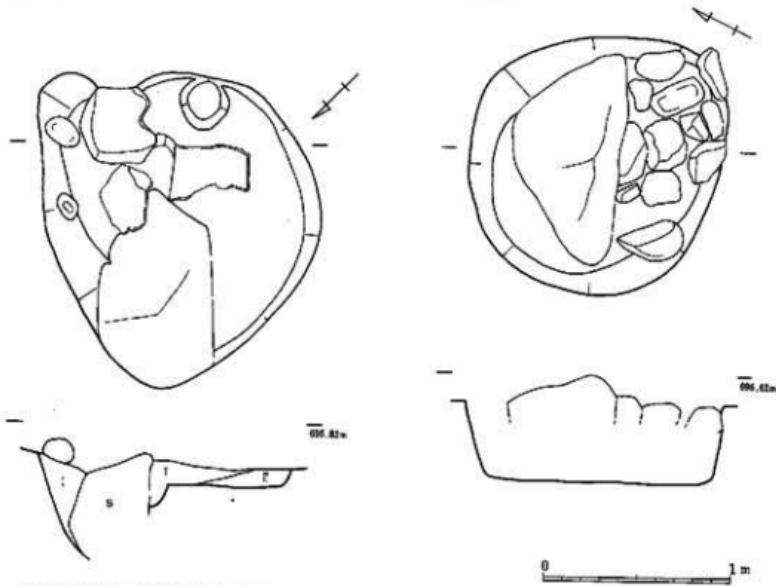


I : 黒色土 (0.5m大の層・較多量混入)
II : 棕色土
III : 灰白色土 (较少量混入)

褐色土 (较少量混入)

土坑494

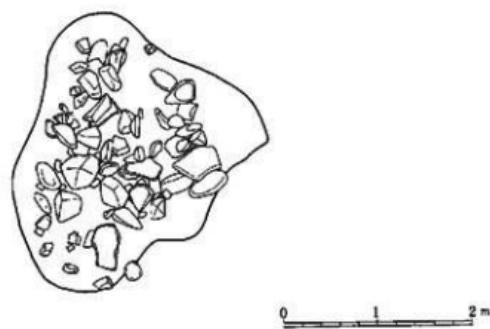
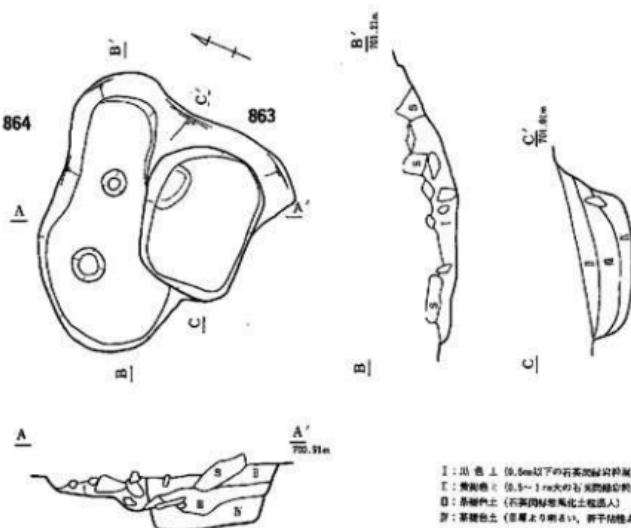
土坑905



I : 第三紀土 (炭化物・熱土特徴有、0.5m大の層少有、鉱物入)
II : 黄褐色土 (0.5m大の層・鉱物入)

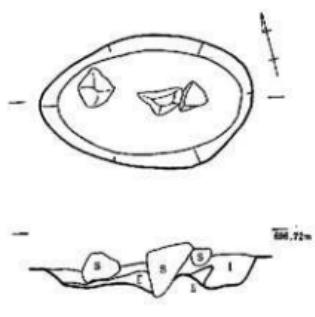
第44図 土坑 (4)

土坑863・864



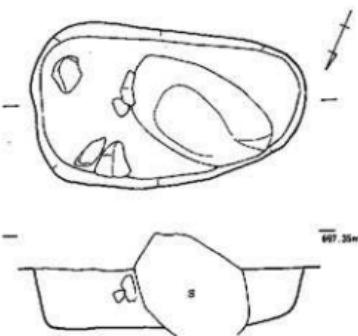
第45図 土坑(5)

土坑696



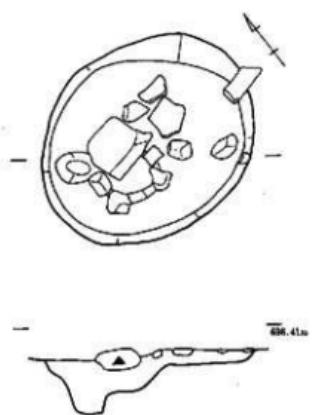
I: 黒色土
II: 細粒土 (砂透入)

土坑882



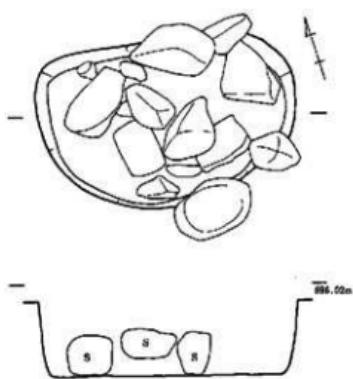
II: 黒色土 (砂少度透入)

土坑370



II: 黒色土 (砂多度透入)

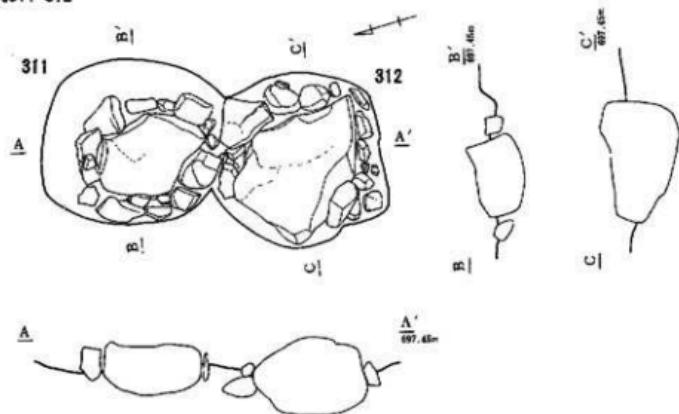
土坑450



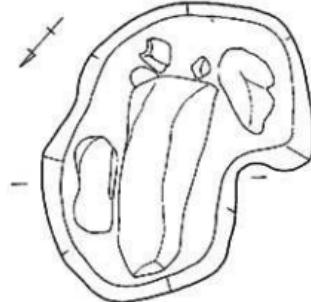
0 1 m

第46図 土 坑 (6)

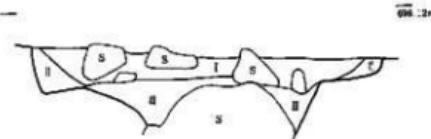
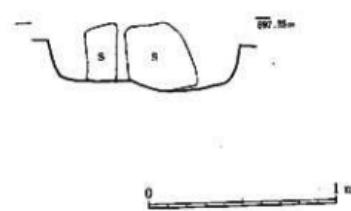
土坑311・312



土坑489



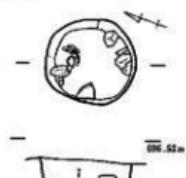
土坑582



I : 灰褐色土 (砂質混入)
II : 黑 色 土 (砂少泥質)
III : 黑 色 土 (砂・礫混入・骨片混在。口 - 人骨多量混入)

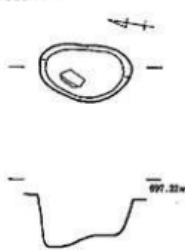
第47図 土 坑 (7)

土坑84

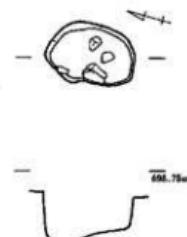


I: 暗褐色土 (砂・ローム混入)
II: 黄褐色土 (砂・ローム混入)

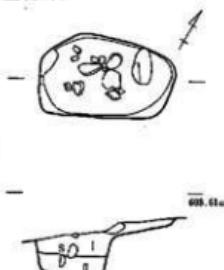
土坑247



土坑366

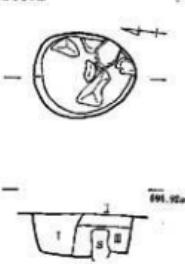


土坑361

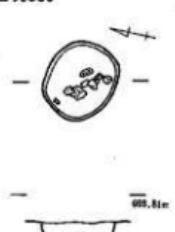


I: 黑色土 (砂・1~5cm大的礫多量混入)
II: 黑色土 (少少砂・0.5~1cm大的礫多量混入)

土坑92

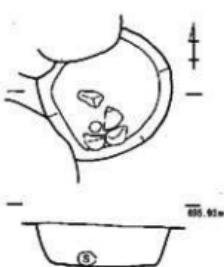


土坑360



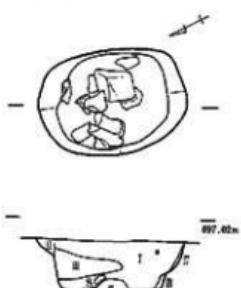
黑色土 (砂・1~5cm大的石多量混入)

土坑501



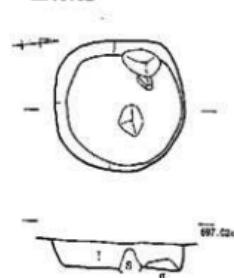
褐色土 (炭化物・根上枝痕量・0.5cm大的礫少見・粘土質)

土坑145



I: 暗褐色土 (砂・1~3cm大的ローム混入)
II: 黑色土 (砂・ローム混入)
III: 暗褐色土 (砂・1cm大的礫多量混入・粘土質)

土坑132

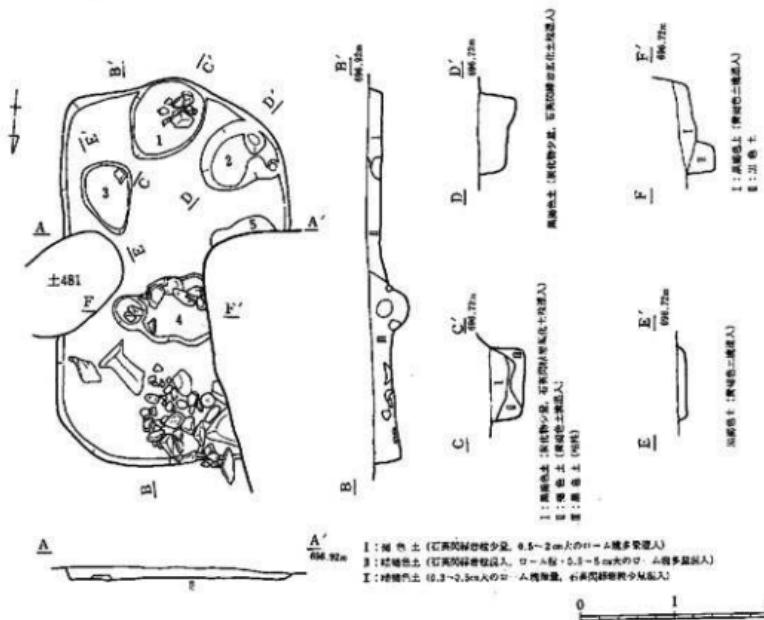


I: 暗褐色土 (砂・1~3cm大的ローム混入)
II: 黑色土 (砂・ローム混入)

0 1 2

第48図 土 坑 (8)

土坑488



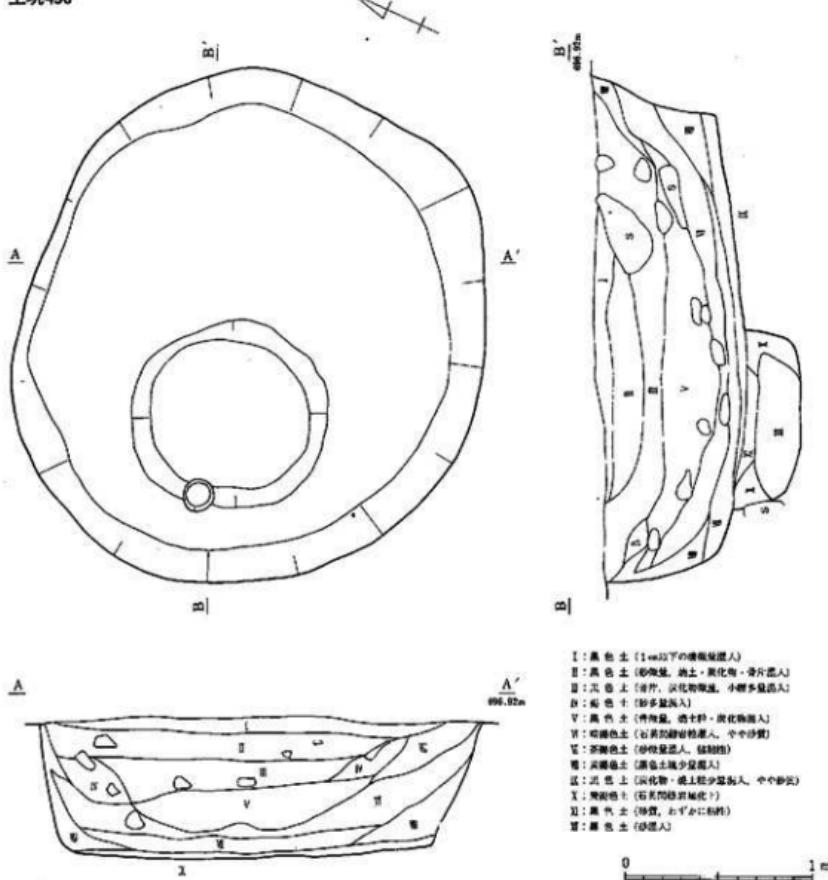
第49図 土坑(9)

図)。種別では寛永通宝31枚、型宗通宝、元豊通宝が各1枚である。寛永通宝のうち11枚には「文」の背文がみられる。本址は出土遺物等から近世の墓と推定される。

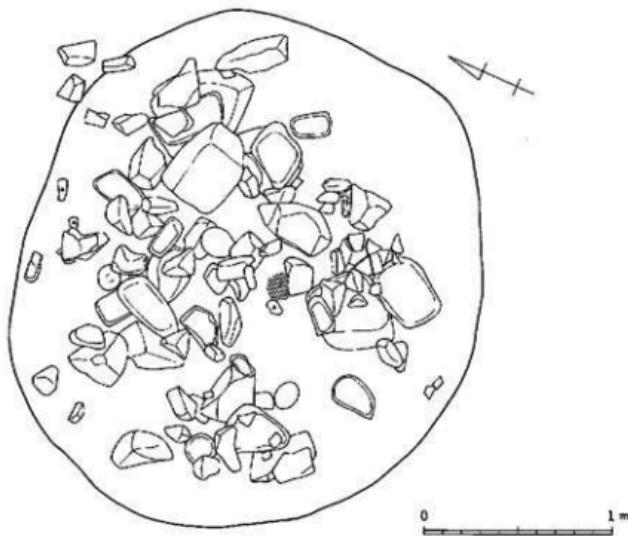
42 土坑132 調査区の北西隅に位置する。南北142cm、東西48cmの円形で深さは28cmである。遺物はないが、覆土が土坑145とよく似ており、近世の墓と推定される。

43 土坑488 調査区の西隅中央部に位置する。東端で土坑481を切り、北西は調査区外へ延びる。当初住居址として掘り下げたが、土坑と判明した。南北416cm、東西238cmの隅丸方形で、深さは25cmである。南側には底に小さなピットが5つあり、一部は壁にかかっている。北側には覆土から床にかけて集石がある。約1mの円形に拳大の石を數十個集めている。石は全て石英閃緑岩である。この集石の下にはピットなどは認められなかった。遺物は、覆土中より少量の土器が出土したのみである。少片のため、接合復元できたのは深鉢(第62図106)1点のみである。加曾利E系の土器で還存部は少ない。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉、曾利IV式期と推定される。

土坑490



第50図 土坑 10



第51図 土坑 II

44 土坑490 調査区の西端部の北寄りに位置する。当初住居址として掘り下げたが、掘り下げ中に土坑と判明した。南北248cm、東西284cmの不整円形で、深さは107cmである。底は平らで中心より西に寄って直径100cmの一段深い部分がある。覆土は多量の礫を含み、層状に炭化物、焼土が堆積しており、中に多量の遺物が混在している。特に覆土の中央部の層には多量の遺物が入っていた。底の深い穴の中には遺物はみられない。上部の層には多量の骨片が混在していたが、いずれも細片で、何の骨か、わかるものはない。遺物は非常に多いが、主体は、無文の粗製土器で、接合し器形を復元できたものは少ない。本址の時期は出土遺物より、縄文時代後期前葉編之内II式期と推定される。

凡　例

土坑の分類と一覧表の表記について

1. 座標　調査区中央部の拡張前の南隅に設定した座標原点からの距離を示した。基点から東西、南北の方位に沿った 1×1 m のグリットを想定し、各グリットの北東隅の点の座標を、そのグリットの座標とした。土坑がひとつのグリット内にある時には、グリットの座標を、そのまま土坑の座標とし、複数のグリットにかかる場合は、多くかかっているグリットの座標をとった。複数のグリットに、ほぼ均等にかかる場合は、北または東側のグリットの座標をとるものとした。

2. 大きさ　長軸、短軸の長さは平面図上で測った。深さは検出面から最深部までの垂線の長さで表わした。ただし底に石等があり、底が不明の場合は石の上端までとした。検出面が傾斜し、最高部と最低部の差が 5 cm 以上あった場合は、両者の平均値を検出面の高さとした。

3. 平面形　次の 5 種類に分類した。

- ・円形　(短径と長径の比が 1 : 1.2 以下)
- ・橢円形　(短径と長径の比が 1 : 1.2 以上)
- ・双円形　(円形が 2 つつながった形、薔薇形)
- ・満丸方形
- ・不整形

4. 断面形　次の 7 種類に分類した。

- a. 深さと長径の比が 1 : 3 以上で、浅く断面形が方形または逆台形のもの。
- b. 深さと長径の比が 1 : 3 以上で、断面が丸みをもつものなど a 以外のもの。
- c. 深さと長径の比が 1 : 3 ~ 1 : 1 で、断面形が方形または逆台形のもの。
- d. 深さと長径の比が 1 : 3 ~ 1 : 1 で、断面が丸みをもつものなど c 以外のもの。
- e. 深さと長径の比が 1 : 3 ~ 1 : 1 で、底が二段、あるいはビットを有するもの。
- f. 深さと長径の比が 1 : 1 以下で、断面形が方形または逆台形のもの。
- g. 深さと長径の比が 1 : 1 以下で、断面が f 以外の形のもの。

5. 時期　埋設土器や器形を復元できる土器があった場合は、その遺物の時期とした。複数の時期の土器片が出土している場合は、明らかに混入と推定される場合を除き、最も新しい遺物の時期をとった。遺跡が広い年代に渡っているため、切り合いでによる年代決定は行なわないものとした。

6. その他　備考欄の記載は以下のようないものを記した。柱洞、配石、埋設土器、焼土を作り合う場合、骨、土偶、土製品が出土した場合。石器、石製品は各項の概要表に示した。

平面形、断面形の分類は阿久遺跡の分類(『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書』原村その 5)を参考にした。欠番となつたものについては、一覧表より削除した。

第1表 土坑一覧表

()は深さ値

No.	部位	大きさ (cm)	平面形	断面	透視、傾斜	測量	大きさ (cm)	平面形	透視、傾斜	測量	切合、 >切らる 不均一	測量、傾き
1	S 9 W 60	120× 90× 43	楕円形	d	>P + 44°, <± 2	中間後廻	27	N 16 W 37	132× 120× 20	(円形)	<+20°+20°	後側削出
2	S 9 W 70	130× 94× 31	楕円形	a	>P ± 1	-	28	N 16 W 37	116× 118× 47	楕円形	>±27°	後側削出
3	S 8 W 60	80× 69× 29	楕円形	a	>P ± 1, <P	-	29	N 16 W 37	116× 118× 47	不規形	a	>P
4	N 1 W 60	80× 63× 6	楕円形	b	-	-	30	N 16 W 39	76× 74× 9	四角	a	>±31°<P
5	N 2 W 62	96× 86× 19	楕円形	a	-	後側削出	31	N 17 W 37	148× 20	-	a	>±32°<P ± 10°
6	N 3 W 62	76× 89× 22	楕円形	b	-	-	32	N 17 W 37	76× 70× 16	楕円形	b	>P, <±22°
7	N 3 W 60	64× 59× 25	円形	c	-	中間後廻	33	N 17 W 37	70× 110× 20	楕円形	-	中間削出
8	N 3 W 20	94× 90× 27	円形	c	-	中間後廻	34	N 17 W 36	140× 96× 38	楕円形	a	>P
9	N 6 W 20	154× 100× 26	不規形	a	-	後側削出	35	N 19 W 36	116× 96× 38	楕円形	b	中間削出
10	N 5 W 41	82× 72× 28	円形	b	-	-	36	N 18 W 37	60× 52× 19	円形	a	>±27°, <+35°
11	N 8 W 60	60× 58× 36	円形	b	>±14°, -16°, <±12°	-	37	N 18 W 37	90× (70)× 15	楕円形	a	<±24°, +36°
12	N 8 W 60	56× 54× 29	円形	d	>±11°, +13°, -16°	後側削出	38	N 19 W 37	64× 62× 28	円形	a	>±20°, <±37°
13	N 8 W 60	54× 50× 21	楕円形	b	>±14°, <±13°	-	39	N 18 W 37	97× 84× 23	円形	a	<±38°
14	N 8 W 29	96× 70× 44	楕円形	a	>P, <±13°	中間後廻	40	N 17 W 33	76× 76× 36	円形	c	中間削出
15	N 6 W 60	68× 58× 22	楕円形	b	<±18°	-	41	N 17 W 32	64× 58× 23	円形	c	-
16	N 8 W 41	133× 105× 19	楕円形	b	>±15°, <±11°, +13°	中間後廻	42	N 16 W 32	68× 51× 48	楕円形	d	>±13°
17	N 10 W 20	96× 66× 23	円形	a	>P	中間後廻 土壠	43	N 17 W 32	70× 58× 25	楕円形	d	<±42°
18	N 10 W 60	68× 50× 28	楕円形	c	-	後側削出	44	N 15 W 33	119× 76× 20	楕円形	a	>±45°
19	N 11 W 26	119× 56× 21	楕円形	b	-	中間後廻 1.±7× 2.直	45	N 16 W 34	139× 92× 18	円形	b	>±22°, <±44°
20	N 12 W 26	125× 100× 26	楕円形	b	-	後側削出	46	N 14 W 33	110× 88× 46	楕円形	c	後側削出
21	N 13 W 60	50× 48× 28	楕円形	c	-	中間中廻	47	N 16 W 31	142× 90× 46	楕円形	a	>P
22	N 15 W 24	69× 58× 16	楕円形	b	<±65°	-	48	N 15 W 32	70× 70× 17	円形	a	中間中廻
23	N 12 W 28	63× 53× 15	楕円形	b	-	中間後廻	49	N 14 W 31	59× 52× 17	円形	b	-
24	N 11 W 27	68× 66× 22	不規形	c	>±25°, <±23°	-	50	N 13 W 32	74× 64× 15	円形	b	中間後廻
25	N 12 W 26	69× 45× 16	楕丸形	f	<±26°	後側削出	51	N 14 W 32	56× 50× 32	円形	c	中間後廻
26	N 13 W 26	130× 128× 45	楕円形	a	>±27°, <±24°	中間後廻	52	N 11 W 32	128× 116× 24	円形	a	中間後廻
							53	N 9 W 37	64× 58× 12	円形	b	中間

No.	標識	大きさ (cm)	形状		物語	物語		細胞	細胞		切片	組織	組織、細胞
			正面	背面		>尾部	<頭部		正面	背面	>切片	<切片	
54 N S V72	头部、側面、腹側	56× 46× 12	円筒	b	後頭前葉	81 S 8 W72	52× 31	c	81 S 9 W72	54× 20	x	>100× <400	後頭
55 N T V74	96× 88× 34	頭部方形	c	後頭中葉	82 S 9 W72	110× 105× 54	x	82 S 6 W72	110× 105× 54	x	<100× 100	中頭後葉	
56 N T V76	92× 56× 34	側円形	d	後頭前葉	83 S 6 W72	110× 105× 54	x	83 S 6 W72	110× 105× 54	x	<100× 100	後頭前葉	
57 N 6 V76	85× 70× 34	側円形	d	中頭後葉	84 S 6 W70	100× 94× 60	x	84 S 6 W70	100× 94× 60	x	>100× <400	中頭後葉	
58 N S V72	95× 60× 33	側円形	b	後頭前葉	85 S 5 W72	102× 95× 36	x	85 S 5 W72	102× 95× 36	x	>100× 100	後頭前葉	
59 N S V71	85× 32	不規形	c	後頭前葉	86 S 5 W75	74× 58× 36	x	86 S 5 W75	74× 58× 36	x	>100× <400	後頭前葉	
60 N S V73	164× 96× 36	不規形	c	後頭前葉	87 S 5 W77	58× 43× 20	x	87 S 2 W75	76× 61× 27	x	>100× <400	後頭前葉	
61 N 15 V73	70× 23	...	a	後頭前葉	88 S 2 W75	76× 61× 27	x	88 S 2 W75	76× 61× 27	x	>100× <400	後頭前葉	
62 N 15 V75	56× 16× 40	側円形	e	中頭後葉	89 S 2 W77	74× 61× 14	x	89 S 2 W77	74× 61× 14	x	>100× <400	中頭後葉	
63 N 3 V76	46× 46× 56	(側円形)	c	後頭前葉	90 S 1 W75	44× 60× 19	x	90 S 1 W75	44× 60× 19	x	>P	中頭後葉	
64 N 3 V76	69× 60× 35	不規形	e	後頭前葉	91 N S 9 W70	79× 56× 11	x	91 N S 9 W70	79× 56× 11	x	>100× 100	後頭前葉	
65 N 3 V77	60× 58× 30	円筒	d	後頭前葉	92 S 1 W75	118× 95× 45	x	92 S 1 W75	118× 95× 45	x	>100× <400	後頭前葉	
66 N 2 V77	72× 78× 50	円筒	e	中頭後葉	93 S 2 W71	84× 80× 18	x	93 S 2 W71	84× 80× 18	x	>100× <400	中頭後葉	
67 N 2 V73	97× 65× 20	側円形	a	後頭前葉	94 S 3 W71	70× 68× 22	x	94 S 3 W71	70× 68× 22	x	>100× <400	後頭前葉	
68 N 1 V73	96× 72× 21	(側円形)	a	後頭前葉	95 N S 8 W72	104× 85× 12	x	95 N S 8 W72	104× 85× 12	x	>100× <400	後頭前葉	
69 N 1 V73	106× 22	(側円形)	a	後頭前葉	96 N 1 W71	67× 50× 30	x	96 N 1 W71	67× 50× 30	x	>100× <400	後頭前葉	
70 N 1 V74	76× 62× 17	(側円形)	a	中頭後葉	97 N 2 W73	64× 56× 9	x	97 N 2 W73	64× 56× 9	x	>100× <400	中頭後葉	
71 N 2 V75	88× 78× 23	側円形	a	後頭前葉	98 N 2 W75	132× 108× 16	x	98 N 2 W75	132× 108× 16	x	>100× <400	後頭前葉	
72 N S V73	136× 120× 25	側丸形	b	後頭前葉	99 N 3 W77	48× 48× 7	x	99 N 3 W77	48× 48× 7	x	>100× <400	後頭前葉	
73 S 1 V73	136× 118× 20	P15	b	後頭前葉	100 N 3 W75	71× (71)× 17	(71× 71× 17)	100 N 3 W75	71× (71)× 17	(71× 71× 17)	>100× <400	後頭前葉	
74 S 3 V73	82× 48× 53	側円形	c	後頭前葉	101 N 4 W75	57× 50× 67	x	101 N 4 W75	57× 50× 67	x	>P + ±100× <400	後頭前葉	
75 S 3 V73	106× 89× 51	側円形	c	後頭前葉	102 N 6 W75	78× 74× 10	x	102 N 6 W75	78× 74× 10	x	>100× <400	後頭前葉	
76 S 4 V74	68× 69× 36	円筒	c	...	103 N 4 W76	110× 95× 17	x	103 N 4 W76	110× 95× 17	x	>±100	...	
77 S 3 V78	180× 125× 15	不規形	b	後頭前葉	104 N 5 W78	106× 89× 24	x	104 N 5 W78	106× 89× 24	x	<±100	後頭前葉	
78 S 7 V76	72× 70× 33	P15	d	後頭前葉	105 N 7 W77	72× 70× 5	x	105 N 7 W77	72× 70× 5	x	>100× <400	後頭前葉	
79 S 8 V74	154× 120× 94	側円形	e	後頭前葉	106 N 9 W70	64× 60× 46	x	106 N 9 W70	64× 60× 46	x	>100× <400	後頭前葉	
80 S 7 V72	166× 122× 12	側円形	b	後頭前葉	107 N 10 W70	60× 61× 20	x	107 N 10 W70	60× 61× 20	x	>100× <400	後頭前葉	

No.	底物	大きさ (cm)	平面形	網目	切合さ		時計	逆時計	K ₃	表面	大きさ (cm)	表面×側面×裏面	平面形	網目	<切合さ		時計	逆時計	表面	
					切合さ	網目														
106	N12 W29	60×70×10	円筒形	a	>切合、<駆き出さる	中筋後面			155	N33 W27	56×82×10	円筒	c							
109	N16 W27	60×82×20	円筒形	c	>P+±10	中筋後面			156	N33 W28	60×82×42	円筒	c							
120	N11 W25	72×62×14	a		<±10	中筋後面			157	N33 W29	64×62×48	円筒	c							
121	N11 W25	100×84×21	楕円形	a		後筋側面			158	N32 W20	66×80×27	楕円形	a	>P						
122	N22 W21	80×74×21	楕円形	a	>P	中筋後面			159	N32 W20	68×60×31	円形	a	>P						
123	N22 W22	50×64×68	楕円形	c	<P	中筋後面?			160	N32 W21	50×40×55	円形	a	>P+±14						
124	N34 W23	84×69×27	楕円形	a		<±15	中筋後面		161	N32 W21	60×55×34	圓筒状	c	>P、<±16						
125	N25 W23	80×70×29	楕円形	d	<±14				162	N31 W20	78×64×29	椭圆形	d	<P						
126	N21 W24	56×72×29	楕円形	b		先筋側面			163	N31 W20	74×52×40	椭圆形	c	>P+±14						
127	N25 W25	66×64×29	楕円形	c		前筋側面			164	N30 W29	114×94×42	椭圆形	c	>P<P+±14						
128	N26 W26	76×58×34	楕円形	e		先筋側面			165	N29 W26	162×110×52	椭圆形	b	>P+±14						
129	N22 W24	50×62×27	楕円形	a		先筋側面			166	N28 W25	56×25×24	円形	c	>P+±14						
130	N29 W22	116×94×32	楕円形	a		中筋			167	N26 W27	82×62×28			>P、<±14	+16					
131	N32 W23	80×56×13	楕円形	a		先筋側面			168	N27 W29	123×102×36	椭圆形	a	>±15						
122	N32 W23	110×82×38	楕円形	b		先筋側面			169	N28 W20	66×66×9	円形	a	>±15						
123	N31 W22	134×108×34	楕円形	d		中筋後面			170	N28 W20	204×34×57	不整形	e	<±14	+16					
134	N43 W23	123×80×21	楕円形	b		>P、<±16			171	N26 W21	14	不整形	a	<P						
125	N33 W25	60×59×33	圓筒状	c	>±12、+26				172	N29 W21	94×84×70	圓筒状	a	>P						
126	N32 W25	58×50×37	楕円形	a	>P、±127、<±126				173	N30 W23	152×138×31	圓筒状	a							
127	N32 W25	68×60×48	楕円形	d	<P、±16				174	N26 W22	100×88×34	椭圆形	a	>P						
128	N36 W25	208×180×39	楕円形	a	>P、±128	中筋後面			175	N27 W22	98×76×32	椭圆形	a							
129	N36 W25	60×70×41	(楕円)	c	<±128	先筋側面			176	N25 W27	154×150×			<P+±16						
130	N39 W25	86×80×20	円筒	b					177	N24 W29	86×82×16	椭圆状	a	>P+±16						
131	N39 W25	74×74×26	円筒	c					178	N23 W29	76×66×30	円筒	c	>±16、+42						
132	N31 W27	142×140×28	円筒	a		近世			179	N26 W27	98×76×20	椭圆状	b							
133	N36 W27	116×23	b		<±138				180	N26 W27	72×60×5	椭圆状	b	>P						
134	N34 W27	52×48×33	円筒	c					181	N21 W27	70×40×11	椭圆状	b							

No.	標識	大きさ (cm)	外見	特徴	切合式		測定、検査	No.	種類	大きさ (cm)	測定、検査	平面形	輪郭	切合式		測定、検査
					>切合式、<切合式	6						輪郭	平面形	>切合式、<切合式	6	
162	N21. W28	74× 58× 40	円柱形	d				189	N24. W14	60× 52× 15	輪郭	六角形				
163	N33. W29	250× 99	不規則	c	>±164	葉状外見(速)75		190	N24. W13	50× 46× 62	輪門形	五				中間形
164	N32. W28	165× 47	d	<±163	葉状外見			191	N22. W13	38× 48× 38	輪門形	c				後輪形
165	N36. W19	64× 69× 12	円柱形	b		中間形		192	N22. W13	60× 56× 26	輪門形	c				後輪形
166	N31. W17	76× 58× 71	円柱形	e	後輪形	它5		193	N19. W12	108× 76× 73	不規形	e				後輪形
167	N20. W16	116× 70× 39	円柱形	d	>P	中間形	些5	194	N16. W14	62× 56× 20	円形	c				中間形
168	N31. W15	62× 48× 6	円柱形	a				195	N15. W15	52× 48× 16	圓形	b				後輪形
169	N32. W13	58× 48× 27	円柱形	c	後輪形			196	N16. W16	54× 76× 28	輪門形	b				前輪形
170	N30. W13	58× 30× 36	円柱形	c	後輪形	柱5		197	N11. W15	60× 58× 19	円形	a				前輪形
171	N31. W12	69× 48× 23	円柱形	d	>P+±173			198	N8. W13	66× 63× 70	円形	c				中間形
172	N11. W17	96× 54× 36	輪門形	a	>±173+174	中間形		199	N10. W17	34× 46× 45	輪門形	c				中間形
173	N31. W12	68× 56× 40	(輪門75)	e	>±174. <P+±171+172	後輪形		200	N9. W15	75× 66× 45	輪門形	c				中間形
174	N30. W12	109× 28		e	<±172+173			201	N8. W15	76× 74× 15	不規形	b				中間形
175	N31. W19	167× 39		e		後輪形		202	N9. W16	74× 63× 15	輪門形	a				中間形
176	N39. W18	86× 66× 31	輪門形	e		後輪形		203	N8. W13	54× 46× 18	円形	a				中間形
177	N22. W16	110× 92× 49	円形	e		中間形		204	N11. W16	298× 220× 28	不規形	a				後輪形
178	N23. W18	64× 62× 21	円柱形	a		前輪形		205	N7. W20	94× 76× 9	輪門形	a				±173+74
179	N22. W19	56× 48× 10	円柱形	b		前輪形		206	N7. W19	56× 48× 20	円形	c				後輪形
180	N22. W18	115× 102× 76	円柱形	e	>±181	後輪形		207	N7. W17	94× 82× 8	輪門形	a				後輪形
181	N24. W18	80× 80× 26	(柱)	e	<±180			208	N6. W17	126× 88× 54	d	<±187				後輪形
182	N24. W17	62× 50× 39	円柱形	c		後輪形		209	N9. W14	94× 66× 78	輪門形	d				後輪形
183	N25. W17	56× 50× 54	円柱形	f		中間形	柱5	210	N7. W14	120× 100× 18	七形	b				後輪形
184	N24. W16	110× 90× 86	円柱形	e	>±185. <±186	後輪形		211	N5. W12	56× 56× 76	輪門形	d				後輪形
185	N24. W16	66× 7	a		<±184			212	N3. W13	134× 118× 11	輪門形	b				後輪形
186	N24. W15	64× 56× 32	円柱形	c	>±184	後輪形		213	N3. W15	128× 96× 49	輪門形	d				後輪形
187	N23. W14	76× 72× 32	円柱形	e		後輪形		214	N3. W17	88× 92× 9	円形	a				後輪形
188	N23. W14	96× 72× 40	不規形	c		△輪門形		215	N2. W22	80× 76× 12	円形	b				

No.	種別	大きさ (cm)		形状		特徴、備考	No.	形状	大きさ (cm)		特徴	>初花、<開花されたる	時間	適地、習性
		最高	最低	基部	頂部				最高	最低				
216	S 4 W1	72× 50× 15	楕円形	a	楕円形	後期	243	N 10 W 6	150× 105× 35	楕円形	b	<2-24	後期	後期
217	S 3 W16	94× 59× 23	楕円形	b	楕円形	後期	244	N 11 W 7	102× 94× 28	楕円形	b	<2-24	後期	後期
218	S 2 W15	68× 60× 26	円形	c	楕円形	後期	245	N 13 W 10	124× 122× 31	楕円形	a	<2-24	後期	後期
219	N 7 W2	56× 56× 13	円形	d	後期	246	N 13 W 9	58× 56× 11	円形	b	>2-24	後期	後期	
220	N 2 W 2	76× 70× 40	円形	e	後期	247	N 13 W 8	100× 60× 56	圓形	c	白花	後期	後期	
221	N 2 E 2	65× 56× 35	楕円形	c	中間後期	248	N 14 W 9	96× 90× 33	円形	c	>P	中期後期	後期	
222	N 3 E 2	118× 70× 33	楕圓形	b	>P	後期	249	N 15 W 8	84× 84× 34	圓形	e	後期	後期	後期
223	N 4 E 2	68× 70× 50	楕圓形	a	後期	250	N 15 W 6	70× 72× 14	円形	a	—	中期後期	後期	
224	N 5 E 1	65× 66× 15	楕圓形	b	>±225+226	後期	251	N 16 W 6	120× 54× 56	圓形	e	—	中期後期	中期後期
225	N 4 E 1	92× 82× 29	円形	a	<±224	後期	252	N 14 W 7	67× 58× 61	圓形	d	>±225	中期後期	中期後期
226	N 5 E 12	(58)× 50× 25	(楕圓形)	c	<±224	後期	253	N 17 W 6	146× 113× 15	圓形	a	<±225	後期	後期
227	N 4 EW6	—	—	—	—	—	254	N 16 W 9	50× 46× 16	圓形	b	—	中期後期	後期
228	N 3 EW6	—	—	—	—	—	255	N 13 W 7	40× 56× 50	圓形	c	—	中期後期	中期後期
229	N 7 EW6	90× 66× 44	円形	d	後期	256	N 14 W 6	96× 70× 36	圓形	e	>P	中期後期	中期後期	
230	N 3 W 4	145× 120× 37	楕圓形	b	>±221+223+233	先期前期	257	N 15 W 5	76× 58× 78	圓形	f	—	中期後期	後期
231	N 8 W 2	116× 86× 58	椭円形	c	<±220	中期後期	258	N 14 W 5	76× 76× 36	圓形	c	>±226	後期	後期
232	N 5 W 5	94× 94× 32	d	>±223+224	後期	259	N 14 W 2	120× 94× 20	圓形	b	>±226	後期	後期	
233	N 5 W 1	122× 94× 44	円形	d	<±229+232	中期後期	260	N 14 W 1	94× 20	圓形	c	<±228+232	後期	後期
234	N 8 W 5	66× 60× 41	円形	d	後期	261	N 21 W 7	128× 105× 40	圓形	b	—	中期後期	後期	
235	N 10 W 1	108× 94× 18	円形	b	—	中間後期	262	N 24 W 10	56× 54× 34	圓形	d	後期	後期	後期
236	N 10 W 1	76× 72× 39	円形	c	後期	263	N 26 W 9	190× 146× 72	圓形	e	>±226	中期後期	中期後期	
237	N 12 W 3	154× 104× 28	扁平形	b	—	後期	264	N 26 W 7	205× 140× 62	不規則	b	<±223	中期後期	後期
238	N 11 W 4	86× 74× 39	円形	c	>±220	後期	265	N 27 W 6	128× 106× 39	圓形	b	—	後期	後期
239	N 11 W 5	76× 72× 30	楕圓形	d	>±220	後期	266	N 27 W 9	74× 70× 32	圓形	e	—	中期後期	中期後期
240	N 12 W 5	94× 60	楕圓形	e	<±225+229	後期	267	N 25 W 6	94× 64× 47	圓形	c	—	後期	後期
241	N 11 W 3	58× 72× 26	楕圓形	b	中間後期	268	N 25 W 3	108× 60× 49	圓形	e	—	後期	後期	
242	N 11 W 6	68× 58× 26	円形	c	>±223	中間後期	269	N 27 W 6	98× 88× 25	圓形	a	>±226	後期	後期

No.	標名	大きさ (cm) 英名	平面形	断面 > 差。< 等れ式 < 上等	時間	造形、調子	No.	表面	大きさ (cm) 英名	平面形	断面 > 差。< 等ら式 < 上等	時間	造形、調子
276	N27 W3	64× 56	円形	b		中間造形	297	N29 E2	64× 50× 5	楕円形	a		中間造形
271	N27 W5	90× 80	36	円形	d	中間造形	298	N28 E3	64× 50× 9	楕円形	b		中間造形
272	N29 W6	124× 104× 52	楕円形	c		中間造形	299	N28 E3	64× 50× 11	楕円形	a		中間造形
273	N29 W7	89× 64× 62	楕丸形	d		中間造形	300	N27 E3	154× 104× 11	楕丸形	a	< ± 0.98	中間造形
274	N29 W8	90× 68× 52	円形	e	> ± 0.75	中間造形	301	N28 E5	76× 60× 26	不規形	b		中間造形
275	N30 W8	68× 66× 38	(円形)	c	> ± 274 ± 26	中間造形	302	N27 E3	66× 14× 5	楕円形	a	± 0.25	中間造形
276	N31 W9	64× 50× 29	不規形	e	> ± 0.75	後期造形	303	N25 E1	110× 56× 33	楕円形	a	> ± 0.94	
277	N31 W8	68× 62× 26	楕丸形	c		中間造形	304	N24 E1	60× 54× 4	楕丸形	b	> ± 0.95, < ± 0.93	後期造形
278	N31 W7	66× 62× 19	楕円形	a	> P	後期造形	305	N23 E2	76× 70× 18	円形	a	< ± 0.04	後期造形
279	N31 W4	130× 120× 38	楕丸形	a	> P	中間造形	306	N22 W2	80× 76× 16	楕丸形	b		後期造形
280	N36 W5	68× 64× 37	円形	c	< P	初期造形	307	N22 E2	102× 56× 4	楕丸形	a		
281	N26 W5	90× 74× 31	不規形	c		中間造形	308	N11 E2	200× 134× 11	楕丸形	a		後期造形
282	N29 W3	72× 69× 34	楕丸形	d		後期造形	309	N16 E2	116× 104× 24	円形	a		後期造形
283	N30 W2	88× 76× 39	楕丸形	c		中間造形	310	N14 E3	68× 76× 14	楕丸形	b		中間造形
284	N26 W1	92× 76× 32	楕丸形	c	> ± 285 ± P	中間造形	311	K13 E3	100× 86× 32	楕丸形	a	< ± 0.32	後期
285	N36 W1	132× (220)× 18	(円形)	b	< ± 284	中間造形	312	K12 E3	94× 86× 30	楕丸形	a	> ± 0.31	後期
286	N28 W1	68× 56× 10	楕丸形	n		後期造形	313	S12 E4	84× 74× 22	楕丸形	b		後期造形
287	N28EW0	62× 44× 11	楕丸形	a	< P - ± 290	早期造形	314	S12 E4	120× 80× 40	楕丸形	c		後期造形
288	N29 E1	68× 64× 16	楕円形	a	> ± 289	後期造形	315	N16 E6	126× 94× 24	楕円形	a		中間造形
289	N29 E1	100× 88× 48	楕円形	d	< ± 288	中間造形	316	N11 E7	164× 100× 15	楕丸形	b		後期造形
290	N28W6	79× 56× 20	円形	c	> ± 291	後期造形	317	N10 E15	152× 84× 14	楕円形	b		
291	N27EW0	84× 75× 14	楕丸形	a	< P - ± 290		318	N9 E7	168× 94× 22	楕円形	b		後期造形
292	N25EW6	69× 45× 32	楕円形	c		中間造形	319	N5 E7	160× (160)× 30	楕丸形	a	> P	後期造形
293	N26 E1	78× 56× 44	楕円形	d		後期造形	320	N6 E6	86× 84× 15	楕丸形	b		
294	N25 E1	62× 60× 65	楕丸形	f		後期造形	321	N5 E6	82× 62× 24	楕丸形	a	> ± 0.22	
295	N27 E2	72× 62× 58	楕丸形	d		後期造形	322	N5 E6	70× (58)× 12	楕円形	a	< ± 0.31	後期造形
296	N28 E1	74× 68× 17	楕円形	b			323	N2 E9	98× 80× 16	楕丸形	a		

No.	種類	大きさ (cm)		形状	>5% <5% がれこ	特徴	速生、慢生	No.	種類	大きさ (cm)		平均重	特徴 ^{a)}	速生、慢生
		全高	葉幅×葉長							葉幅	葉長			
324	N 2	E 9	97× 78× 56	楕円形	e			351	N 22	E 15	102× 98× 28	楕円形	a	>5% <5% がれこ
325	N 1	E 12	74×(54)× 36	橢円形	c	<P		352	N 21	E 15	104×(64)×	(楕円形)		<5% がれこ
326	N 6	E 11	154× 96× 20	橢円形	b			353	S 22	E 12	72× 62× 25	975	c	>P
327	N 26	E 6	114× 88× 20	橢円形	b			354	S 21	E 13	97× 66× 22	楕円形	b	
328	N 22	E 6	132× 65× 32	橢円形	b			355	K 21	E 10	266× 140× 26	不整形	b	
329	N 22	E 5	64× 62× 6	楕円形	a			356	K 21	E 9	64× 52× 16	椭圆形	b	
330	N 25	E 6	116× 103× 12	楕円形	b			357	N 19	E 12	78× 76× 30	楕圆形	c	
331	N 26	E 8	130× 128× 34	不整形	e			358	N 19	E 13	72× 56× 50	椭圆形	e	
332	N 27	E 9	108× 98× 8	不整形	a			359	N 18	E 14	96× 66× 38	椭圆形	e	
333	N 26	E 10	54× 62× 17	橢円形	a			360	N 18	E 15	94× 73× 16	楕圆形	a	
334	N 28	E 12	60× 68× 39	楕円形	c			361	N 16	E 16	145× 89× 32	椭圆形	e	>P <5%
355	N 29	E 12	34× 44× 25	楕円形	a			362	N 15	E 17	66× 45× 45	椭圆形	c	<5%
326	S 1	E 13	74× 72× 18	楕円形	b			363	S 15	E 14	102× 60× 16	不整形	b	先端鋸歯
337	S 1	E 14	66× 66× 27	楕円形	c	>P		364	S 16	E 13	88× 76× 68	楕円形	d	中間速生
328	N 26	E 13	135× 110× 28	橢円形	a			365	N 15	E 22	78× 66× 38	椭圆形	e	中間速生
339	N 25	E 12	58× 55× 18	楕円形	a			366	N 15	E 12	94× 64× 50	椭圆形	d	中間速生
340	N 14	E 11	62× 60× 13	楕円形	a			367	N 17	E 13	74× 66× 36	椭圆形	e	中間速生
341	N 15	E 2	92× 60× 24	楕円形	b			368	N 17	E 11	94× 62× 36	椭圆形	e	中間速生
342	N 24	E 16	159× 135× 47	不整形	b			369	N 17	E 10	90× 76× 36	椭圆形	d	後期速生
343	N 24	E 15	74× 64× 22	楕円形	b			370	N 14	E 10	106× 100× 32	楕圆形	b	
344	N 23	E 16	78× 64× 28	橢円形	c	>±3%		371	N 13	E 10	176× 140×	不整形		
345	N 23	E 15	74× 35	不整形	b	<±3%		372	N 14	E 19	68× 64× 15	尺形	a	後期速生
346	N 24	E 14	69× 54× 47	楕円形	e			373	N 15	E 22	84× 50× 31	椭圆形	b	中間速生
347	N 23	E 11	58× 60× 26	橢円形	c			374	N 18	E 21	74× 70× 22	椭圆形	b	中間速生
348	N 23	E 14	54× 52× 30	円形	c			375	N 18	E 24	104× 89× 34	椭圆形	b	>±3%
349	N 22	E 14	162× 140× 48	橢円形	e	>±3%		376	N 18	E 24	90		<±3%	
350	N 21	E 15	58× 38× 52	橢円形	e	>±3%		377	N 3	E 17	62	1	<±1%	後期速生

No.	番号	大きさ (cm)	平面形	輪郭	形状	部位、留目	時期	No.	番号	大きさ (cm)	平面形	輪郭	No.	番号	大きさ (cm)	平面形	輪郭	時期	出土、備考
378	N 4	E 96	108×100×37	楕丸方形	c	>上386	中輪郭	405	N 26	E 26	87×86×56	円形	c	—	—	—	—	—	—
279	N 5	E 21	64×50×23	楕丸方形	d	—	中輪郭	406	N 22	E 30	66×62×68	円形	e	—	—	—	—	—	—
280	N 4	E 21	× 68×19	楕丸方形	b	<上378	中輪郭	407	N 19	E 29	72×68×73	楕丸方形	a	—	—	—	—	—	—
281	N 4	E 22	96×67×21	楕丸方形	b	>P・上382	中輪郭	408	N 18	E 29	76×70×46	楕丸方形	c	—	—	—	—	—	—
382	N 5	E 22	53×50×	楕丸方形	—	>上381	中輪郭	409	N 16	E 29	76×76×42	楕丸方形	c	—	—	—	—	—	—
383	N 5	E 20	65×66×70	円形	e	—	中輪郭	410	N 17	E 31	105×90×47	円形	c	—	—	—	—	—	—
284	N 5	E 20	70×	楕丸方形	—	>9件	中輪郭	411	N 16	E 32	112×72×28	楕丸方形	a	>上412	個別記載	—	—	—	—
385	N 23	E 18	86×70×19	楕円形	b	—	中輪郭	412	N 16	E 33	66×20	円形	c	<上413	—	—	—	—	—
386	N 24	E 18	102×70×14	楕円形	b	—	中輪郭	413	N 15	E 32	70×38×22	円形	d	—	—	—	—	—	—
347	N 27	E 19	90×48×10	円形	—	—	中輪郭	414	N 18	E 33	60×36×44	円形	e	—	—	—	—	—	—
288	N 26	E 22	66×58×27	円形	c	—	中輪郭	415	N 21	E 36	58×50×33	円形	c	—	—	—	—	—	—
388	N 25	E 21	48×45×14	円形	b	>P	—	中輪郭	416	N 20	E 48	68×68×	円形	—	—	—	—	—	—
390	N 24	E 22	50×48×15	楕方形	b	—	中輪郭	417	N 19	E 50	98×94×69	円形	d	>上418	洗面室上端・土器	—	—	—	—
291	N 28	E 22	74×62×41	楕丸方形	c	—	中輪郭	418	N 23	E 50	54	円形	e	<上417	—	—	—	—	—
382	N 19	E 23	52×54×12	楕丸方形	a	—	中輪郭	419	N 20	E 48	116×104×	円形	—	—	—	—	—	—	
383	N 19	E 22	146×104×29	楕丸方形	b	—	中輪郭	420	N 16	E 47	104	円形	<遺風	—	—	—	—	—	—
284	N 29	E 23	78×56×8	楕円形	a	—	中輪郭	421	N 16	E 46	74×48×17	円形	b	—	—	—	—	—	—
385	N 28	E 23	72×60×21	楕丸方形	b	—	中輪郭	422	N 21	E 68	105×96×11	円形	b	—	—	—	—	—	—
386	N 16	E 23	70×60×34	楕円形	e	—	中輪郭	423	N 18	E 73	118×102×17	圓門形	b	—	—	—	—	—	—
287	N 25	E 24	94×80×26	楕円形	b	—	中輪郭	424	N 20	E 74	103×90×53	円形	c	—	—	—	—	—	—
388	N 15	E 25	48×44×10	楕円形	a	—	中輪郭	425	N 18	E 79	70×60×16	円形	a	>P	—	—	—	—	—
289	N 24	E 25	(79)×60×34	楕円形	c	>上388,<上401	中輪郭	426	N 17	E 80	116×110×21	円形	b	—	—	—	—	—	—
300	N 25	E 25	64×78×21	円形	a	<上399	中輪郭	427	N 14	E 83	76×76×10	円形	a	—	—	—	—	—	—
401	N 23	E 25	76×70×39	円形	c	>上398	中輪郭	428	N 17	E 85	74×64×26	円形	d	—	—	—	—	—	—
402	N 23	E 24	56×52×14	円形	b	—	中輪郭	429	N 18	E 88	80×72×62	円形	c	—	—	—	—	—	—
403	N 26	E 25	64×60×36	円形	c	—	中輪郭	430	N 20	E 87	70×72×39	円形	c	—	—	—	—	—	—
404	N 25	E 26	74×74×27	楕丸方形	d	—	中輪郭	431	N 21	E 87	84×64×46	円形	c	—	—	—	—	—	—

No.	品種	大きさ (cm)		平均形		細胞		漿胞、微管		花柱 (cm)		花柱×胞子管		花柱		>切る<切らる		時間		部位、葉質	
		長軸	横断面	深さ	幅	不可	可	深さ	幅	長軸	幅	深さ	幅	長軸	幅	深さ	幅	長軸	幅	長軸	幅
432	N51 E86	56× 57× 17	円形	a						459	N52 W53	63× 60× 12	円形	a							
433	N53 E87	64× 64× 15	円形	b						460	N52 W53	64× 60× 10	円形	b							
434	N50 E91	70× 68× 64	円形	d						461	N52 W53	74× 68× 41	円形	d							
435	N54 E91	74× 66× 70	円形	c						462	N52 W53	80× 60× 4	不規則	a	>P + 465 < 468						
436	N61 E94	90× 76×	楕丸形							463	N52 W52	88× 58× 7	楕丸形	b							
437	N61 E95	70× 58×	楕丸形		>P					464	N52 W53	82× 44× 12	楕丸形	a	< 468 - 463 < 463						
438	N63 E96	116× 96× 30	楕円形	b						465	N52 W53	90× 66× 14	楕円形	b							
439	N61 E87	96× 84× 22	楕丸形	b						466	N52 W54	96× 66× 14	楕円形	b	> 468 < 465 < 467						
440	N59 E88	65× 58× 25	PHE	c						467	N52 W54	49× 12	楕円形	b	> 468 < 465 < 467						
441	N50 E87	79× 62× 27	楕円形	c						468	N52 W55	80× 78× 24	不規形	b							
442	N62 E95	70× 68× 11	円形	b						469	N52 W51	94× 72× 12	楕円形	a	< 466						
443	N61 E85	85× 77× 65	楕丸形	c						470	N52 W51	144× 64× 42	子葉形	b							
444	N68 E87	62× 54× 45	楕丸形	b						471	N52 W51	74× 52	楕丸形	e	< P + 474						
445	N68 E86	84× 72× 5	楕丸形	a						472	N52 W51	68× 40× 46	楕円形	d	< P + 477						
446	N67 E94	70× 64× 8	楕円形	b						473	N52 W50	100× 74× 31	楕円形	b							
447	S 9 W78	76× 70× 46	PHE	c	< ± 1					474	N52 W53	60× 44× 24	不規形	d	> 470 - 475 < P						
448	S 6 W79	160× 24× 54	不規形	c	< ± 450 - 931					475	N52 W51	55	不規形								
449	S 7 W78	77× 70× 74	円形	f						476	N50 W51	88× 64× 22	楕円形	e	< 478						
450	S 7 W79	140× 110× 42	楕円形	a	> ± 448					477	N50 W50	70× 45× 24	楕円形	c	> 472 < 473 < 471						
451	S 2 W37	114× 102× 37	円形	a						478	N52 W50	118× 72× 10	楕円形	b	> 470 + 902 < 477 + 480						
452	N25 W72	68× 48× 28	楕円形	e						479	N18 W59	34× 14		b	< ± 80 + 907						
453	N25 W73	110× 102× 10	楕円形	a						480	N19 W51	102× 100× 72	楕円形	c	> 478 - 479						
454	N24 W70	50× 41× 39	楕円形	c						481	N20 W53	140× 58× 24	楕円形	b	> 478						
455	N23 W78	43× 38× 11	円形	b	> ± 457					482	N22 W59	104× 98× 29	円形	b	> P + 478						
456	N22 W76	112× 92× 34	楕円形	記述						483	N22 W59										
457	N23 W75	75	< 118 - 455 - 466	b						484	N27 W51	100× 64× 35	楕丸形	a	< 478 + 902 < 477 + 480						
458	N24 W73	84× 54× 12	楕円形	b	> ± 448					485	N30 W52	258× 258× 25	楕円形	b							

No.	種類	大きさ (cm)	外観	特徴	細胞、組織、解剖	大きさ (cm)	大きさ (cm)	形態	細胞	結合、 >約3.5、<切られる	周囲	部位、性質
468	N21 W78	118× 84× 24	楕円形	a	>約3.5、 <切られる	614	510 W34	99× 77× 56	楕円形	d	>±3.5、<p	中筋膜
487	N24 W79	64× 50× 20	楕円形	a	<±3.5	515	511 W34	84× 78× 32	円形	d	>P、<±3.5	中筋膜
488	N19 W73	415× 258× 25	(椭丸形)	a	<P、±4.5	516	519 W34	100× 86× 22	楕円形	a	>P、<±3.5	中筋膜
489	N9 B 5	108× 124× 25	不規則	a	中筋膜	517	510 W33	100× 86× 22	楕円形	a	<P	中筋膜
490	N16 W78	284× 248× 197	円形	e	中筋膜	518	511 W32	60× 65× 18	円形	b	中筋膜、肥厚土筋	前筋膜
491	S 6 W69	220× 194× 40	楕円形	a	>±4.5	519	511 W32	108× 106× 22	円形	b	中筋膜	前筋膜
493	S 12 W41	106× × 7	a	薄肉の外見びつ	不明	520	513 W71	62× 62× 8	円形	b	>P	中筋膜
494	S 11 W40	162× 146× 60	不整筋	c	浅筋膜	521	514 W71	70× 52× 7	(楕円形)	b	>P、<P	中筋膜
495	S 11 W79	111× × 22	b	<±3.5	522	515 W32	74× 56× 17	楕円形	b	>P	中筋膜	
496	S 16 W38	130× 94× 18	不規則	a	>±4.5、<P	523	516 W30	74× 34× 34	楕円形	d	中筋膜	中筋膜
497	S 11 W78	195× 161× 33	楕円形	b	>P、<±3.5	524	516 W79	148× 84× 25	円形	d	>P、±4.5	筋膜(筋膜)
498	S 11 W32	65× 48× 5	筋状筋	a	中筋膜	525	516 W25	162× 65× 46	楕円形	a	>P、±3.5	中筋膜
499	S 11 W76	70× 60× 42	筋状筋	c	中筋膜	526	517 W27	84× 44	円形	d	<±3.5	中筋膜
500	S 12 W76	94× 62× 28	筋状筋	b	>P、±3.5	527	516 W29	68× 37	(円形)	c	<±3.5	中筋膜
501	S 13 W75	145× 139× 50	(椭丸形)	c	<P、±4.5	528	514 W29	128× 96× 33	楕円形	b	>±3.5	中筋膜
502	S 14 W76	156× 138× 56	筋内筋	d	>P、±3.5	529	515 W29	70× 60× 26	楕円形	a	>±3.5	中筋膜
503	S 15 W37	92	a	薄肉の外見びつ	不明	530	515 W27	46× 15	(楕円形)	a	<±3.5	中筋膜
504	S 15 W76	85× 80× 10	P筋	a	>P、<±3.5	531	513 W29	94× 54× 27	円形	b	>±3.5	中筋膜
505	S 17 W76	92× 9	a	薄肉の外見びつ	不明	532	513 W30	88× 38	—	b	<±3.5	中筋膜
506	S 17 W33	112× 72× 66	楕円形	e	中筋膜	533	511 W30	96× 80× 22	楕円形	a	中筋膜	中筋膜
507	S 18 W73	108× 78× 19	筋状筋	a	>P	534	510 W32	58× 56× 25	円形	c	—	—
508	S 13 W74	102× 83× 56	円形	c	>P、±3.5	535	510 W32	64× 62× 43	円形	c	後筋膜	後筋膜
509	S 14 W73	92× 11	b	<P、±3.5	536	519 W30	84× 70× 39	円形	d	—	中筋膜	
510	S 14 W74	82× 76× 10	円形	c	>±3.5	537	510 W70	70× 68× 18	円形	a	—	—
511	S 13 W73	62× 50× 40	(椭丸形)	c	中筋膜	538	511 W29	58× 80× 35	楕円形	c	>P	中筋膜
512	S 11 W75	84× 48	P筋	e	中筋膜	539	514 W28	70× 62×	楕円形	c	—	後筋膜
513	S 11 W74	78× 78× 43	(椭丸形)	e	中筋膜	540	514 W77	98× 70× 17	楕円形	b	>±3.5、±4.5	中筋膜

No.	標識	大きさ (cm)	平圖形	網目	網目、網目、網目	No.	網目	大きさ (cm)	平圖形	網目	網目、網目	合計 ^a	>切5、<切6	網目	網目、網目																																																																																																																																																																									
541	S 12 W29	94× 84× 39	網丸形	b	>切5、<切6	542	S 12 W27	100× 76× 46	網丸形	b	>±48	543	S 13 W27	106× 96× 19	網丸形	a	>±54、<±54	中網丸形	544	S 14 W26	69× 64× 19	(網丸形)	b	>±54.5、<±54.5	中網丸形	545	S 14 W27	82× 70× 67	網丸形	c	>P、<±54.5、±54.5	小網丸形	546	S 15 W27	103× 95× 20	網丸形	b	<±54.5	中網丸形	547	S 16 W27	125× 56× 19	網丸形	b	-	中網丸形	548	S 11 W28	56× 52× 42	円形	c	>P	中網丸形	549	S 10 W28	72× 66× 33	円形	c	>P	中網丸形	550	S 10 W26	234× 130× 30	網丸形	a	>P + ±51	後網丸形	551	S 9 W27	72× 68× 29	(網丸形)	c	<P + ±55.5	後網丸形	552	S 12 W26	82× 78× 5	網丸形	b	>±55.5	中網丸形	553	S 14 W24	144× 94× 26	網丸形	b	>±55.5、±56、±57	中網丸形	554	S 13 W26	100× 94× 29	(網丸形)	b	>±54.4、±56	中網丸形	555	S 12 W27	116× 100× 48	(網丸形)	d	<±55.5、±57.5	中網丸形	556	S 14 W25	134× 134× 54	網丸形	a	>±55.5、±56.5、±58.5	中網丸形	557	S 14 W24	100× 40	c	>±53.5、±54.5、±55	後網丸形	558	S 16 W25	144× 46	b	網丸形外+内丸形	中網丸形	559	S 11 W25	84× 76× 58	網丸形	c	>±55.5	中網丸形	560	S 11 W24	165× 110× 30	網丸形	b	>P、±56.5、<±55.5	前網丸形	561	S 8 W24	130× 58× 21	不規形	a	>±45.5	後網丸形	562	S 9 W24	70× 60× 15	円形	a	<±53.5	後網丸形	563	S 8 W23	64× 70× 18	円形	a	-	後網丸形	564	S 8 W22	96× 94× 20	円形	b	>±36.5	後網丸形	565	S 7 W23	73× 76× 15	(円形)	a	<±55.5	後網丸形	566	S 9 W22	54× 54× 29	円形	c	>P + ±57	圓石	567	S 9 W21	70× 56× 19	網丸形	b	>P、<±56.5	-
													>切5、<切6																																																																																																																																																																											
													>±54.5、<±54.5																																																																																																																																																																											
													>±55.5、<±55.5																																																																																																																																																																											
													>±56.5、<±56.5																																																																																																																																																																											
													>±57.5、<±57.5																																																																																																																																																																											
													>±58.5、<±58.5																																																																																																																																																																											
													>±59.5、<±59.5																																																																																																																																																																											
													>±60.5、<±60.5																																																																																																																																																																											

No.	底標	大きさ (cm)	表面形 状	範囲 切合 ^a >切合<不切合	時間	地質、地形	No.	底標 範囲 切合 ^a >切合<不切合	時間	地質、地形	No.	底標 範囲 切合 ^a >切合<不切合	
586 S 9 W19	66× 64× 19	円形	b	>切合	-	-	622	S 16 W14	60× 59× 30	円形	d	>切合<不切合	中間地帯
586 S 8 W20	63× 66× 23	楕円形	a	>±564	-	-	623	S 15 W14	80× 72× 36	F形	c	>±524	中間地帯
597 S 8 W13	108× 72× 36	不規形	b	<±566	後期形成	-	624	S 14 W15	68× 68× 36	楕円形	c	>P ₁ <±523	中間地帯
598 S 12 W10	70× 69× 30	円形	c	-	-	-	625	S 15 W14	72× 58× 26	楕円形	b	-	後期形成
599 S 10 W17	66× 65× 19	楕円形	a	-	-	-	626	S 13 W15	84× 64× 18	楕円形	a	-	後期形成
600 S 7 W19	58× 56× 10	円形	a	-	-	-	627	S 15 W13	112× 70× 33	楕円形	a	>±529 <±530	後期形成
601 S 14 W21	49× 48× 15	a	-	<±561	中間地帯	-	628	S 13 W14	64× 49× 22	楕円形	d	>±515	-
602 S 3 W 3	78× 68× 32	円形	d	-	後期中期 地盤上層	-	629	S 13 W14	84× 66× 26	(楕円形)	b	>±450 <±427	後期形成
603 N 8 W20	86× 98× 14	楕円形	b	-	中間地帯	-	630	S 13 W15	84× 19	-	<±521 <±526 & ±529	-	
604 N 14 W14	42× 38× 28	円形	d	-	中間地帯	-	631	S 16 W16	100× 100× 36	円形	b	-	後期形成
605 S 8 W15	64× 64× 20	円形	a	-	-	-	632	S 8 W16	120× 98× 11	楕円形	b	-	後期形成
606 S 10 W18	72× 75× 26	円形	c	>±567	中間地帯	-	633	S 7 W15	84× 64× 22	楕円形	d	-	-
607 S 10 W18	78× 72× 17	(楕円形) b	c	<±566	後期形成	-	634	S 6 W17	86× 59× 23	楕円形	b	-	-
608 S 9 W17	94× 76× 15	円形	a	-	-	-	635	S 6 W16	80× 74× 21	F形	a	-	中間地帯
609 S 11 W17	94× 96× 14	円形	b	>±611	-	-	636	S 5 W16	80× 68× 42	円形	c	-	-
610 S 12 W17	82× 74× 30	F形	d	>±568 <±611	中間地帯	-	637	S 5 W15	68× 49× 14	円形	a	-	-
611 S 12 W17	64× 21	c	-	<±609 & ±610	-	-	638	S 5 W15	114× 104× 41	楕円形	d	>±519	-
612 S 15 W17	69× 56× 24	楕円形	e	>±562	-	-	639	S 6 W14	54× 28	不整形	d	<±528	-
633 S 14 W17	80× 65× 25	円形	a	>±614	中間地帯	-	640	S 6 W13	74× 58× 26	楕円形	d	>±513 & ±548	-
614 S 14 W16	84× 89× 36	(楕円形) e	c	>±565 <±613	後期形成	-	641	S 7 W13	76× 63× 25	楕円形	a	<±513	-
615 S 13 W16	79× 67× 26	楕円形	d	<±561	後期形成	-	642	S 6 W14	60× 58× 23	円形	c	>±513	-
616 S 14 W16	68× 69× 26	不整形	c	<±565	-	-	643	S 7 W13	108× 84× 43	(円形)	c	>±511 & ±547	後期形成
617 S 16 W17	108× 62× 11	楕円形	a	>±618	中間地帯	-	644	S 7 W15	88× 70× 24	(楕円形)	a	<±513	-
618 S 16 W16	122× 116× 23	(円形)	b	>±619 & ±620 <±557	中間地帯	-	645	S 5 W13	79× 72× 30	(楕円形)	c	<±514	中間地帯
619 S 15 W17	25	-	-	>±529 <±5618	中間地帯	-	646	S 5 W14	86× 70× 25	楕円形	e	>±515 & ±547	後期形成
620 S 13 W16	169× 2× 3	-	a	>±513 <±513 & ±619	後期形成	-	647	S 6 W13	84× 58× 17	楕円形	b	<P ₁ & ±546	中間地帯
621 S 16 W15	56× 54× 24	P形	d	>±520	後期形成	-	648	S 6 W13	84× 64× 14	楕円形	b	<±546	-

No.	編號	大體形 (cm)	長軸×短軸×厚度	平面形	輪廓 →切口、<切口>6	輪廓 邊緣、傾斜	X ₀ 高度	輪廓 大小 (mm) 長軸×短軸×厚度	平均值	輪廓 →切口、<切口>6	輪廓 邊緣、傾斜	X ₀ 高度	輪廓 大小 (mm) 長軸×短軸×厚度	平均值	輪廓 →切口、<切口>6	輪廓 邊緣、傾斜
649	S 5 W12	58×54×18	18	圓形	b					676	S 11 W 8	162×124×30	(輪廓形)	b	<上部78	後輪廓形
650	S 6 W12	65×59×16	16	橢圓形	b	>±651				677	S 9 W 8	60×48×7	橢圓形	a	>±678	中輪廓形
651	S 6 W12	58×37	37	橢圓形	b	<±656				678	S 9 W 8	104×15		a	>±679, <-±75·07	
652	S 8 W13	144×58×26	26	圓形	c					679	S 8 W 7	116×82×40	圓形	d	<±707	前輪廓
653	S 8 W12	66×66×16	16	橢圓形	a					680	S 8 W 8	94×29	圓角方形	b		
654	S 11 W12	54×62×13	13	橢圓形	a	>±655, ±656, ±657, ±658				681	S 7 W 8	128×100×37	圓角方形	a		後輪廓形
655	S 11 W13	67×34	34	橢圓形	c	>±657, <-±654				682	S 5 W 9	160×72×19	橢圓形	b		中輪廓形
656	S 11 W12	130×102×26	26	橢圓形	a	<±654				683	S 4 W 8	120×118×11	圓形	a	>±685	中輪廓形
657	S 11 W14	50×26	26	橢圓形	c	<±654, ±655				684	S 6 W 9	108×94×24	圓角方形	a	>±685, ±686	
658	S 12 W13	124×116×23	23	橢圓形	a	>±659, <-±654				685	S 5 W 8	72×36	(輪廓形)	b	<±683, ±684	
659	S 12 W12	153×116×40	40	橢圓形	b	<±656				686	S 7 W 8	52×48×10	圓形	c	<±654	中輪廓形
660	S 12 W13	156×140×44	44	橢圓形	a	>±655				687	S 7 W 7	58×56×15	圓形	c	<±654	
661	S 11 W12	76×60×21	21	橢圓形	a					688	S 7 W 6	64×40×20	橢圓形	a		中輪廓
662	S 11 W11	61×56×14	14	橢圓形	a	>±653				689	S 6 W 6	74×69×16	橢圓形	b		中輪廓形
663	S 11 W11	60×54×15	15	橢圓形	a	<±652				690	S 4 W 6	126×102×40	圓角方形	a	>±661	凸輪廓
664	S 11 W10	64×56×25	25	橢圓形	c					691	S 5 W 6	108×152×12	橢圓形	a	<±660	
665	S 16 W10	76×72×31	31	橢圓形	d	>P+±653				692	S 5 W 5	106×64×30	橢圓形	b	>±654	中輪廓形
666	S 8 W11	106×85×38	38	橢圓形	b					693	S 5 W 4	66×64×25	橢圓形	a		
667	S 7 W10	148×105×26	26	橢圓形	a					694	S 6 W 5	72×56×34	(輪廓形)	d	>±665, <±662, ±666	後輪廓形
668	S 5 W13	68×58×26	26	橢圓形	d					695	S 6 W 4	66×48×26	輪廓形	c	<±664	
669	S 5 W11	62×60×8	8	圓形	a					696	S 6 W 5	118×70×18	圓形	b	>P+±651	中輪廓形
670	S 5 W10	62×69×22	22	橢圓形	a					697	S 4 W 5	62×46×26	輪廓形	c		後輪廓形
671	S 8 W10	162×82×16	16	橢圓形	a					698	S 4 W 4	84×71×36	橢圓形	a		中輪廓形
672	S 9 W 9	54×59×35	35	圓形	c					699	S 6 W 4	68×56×32	橢圓形	c		
673	S 10 W 9	86×59×33	33	橢圓形	c					700	S 7 W 5	96×76×16	橢圓形	a		
674	S 10 W 9	148×120×36	36	橢圓形	b	>±676, ±678, ±680				701	S 7 W 5	112×95×12	不規則	a	<±702	
675	S 10 W 7	72×62×27	27	橢圓形	c	>±673				702	S 8 W 4	82×70×17	橢圓形	a	>±701, <±703	

No.	土壤	大きさ (cm)		平均形 状	輪郭	切り口		% 厚さ	輪郭、側面	大きさ (cm)		輪郭	切り口		植物、微生物	
		長さ	幅			>切5、<切5、R5	>上70			730	S b	E 3	70× 50× 27	輪円形	c	
703 S 8 W 4	78× 70× 12	輪円形	a							731	S 4	E 3	87× 87× 9	円形	b	
704 S 9 W 4	80× 72× 23	円形	c	>P					732	S 7	E 2	112× 44× 13	輪円形	a	>±733	施肥地
705 S 10 W 5	88× 76× 15	円形	c	>±705					733	S 6	E 2	160× 116× 49	輪丸形	b	<±733	施肥地
706 S 10 W 4	100× 144× 42	輪円形	a	<+703					734	S 9 E W	W	74× 66× 19	不規形	a		
707 S 9 W 3	100× 86× 35	輪円形	c	>±865					735	S 11 E W	W	138× 106× 24	輪円形	a		中耕地質 地盤土壌
708 S 9 W 2	82× 76× 31	輪円形	d	>±709					736	S 11 E W	W	54× 56× 30	輪円形	d		中耕地質
709 S 8 W 2	50× 40		c	<±708					737	S 10 E W	W	100× 68× 24	輪円形	a	>±739 <P	中耕地質
710 S 8 W 2	68× 44× 30	円形	c						738	S 6 E W	W	116× 110× 33	輪丸形	a	>±739	中耕地質
711 S 8 W 3	72× 52× 26	輪丸形	d						739	S 10 F W	W	150× 80× 30	輪丸形	b	<±739	中耕地質
712 S 6 W 4	96× 84× 26	円形	b						740	S 11 E 2	W	96× 86× 24	円形	a	>±741	中耕地質 肥石
713 S 6 W 3	96× 76× 26	円形	d						741	S 10 E 2	W	114× 62× 43	輪丸形	d	>±742 <±742	中耕地質
714 S 5 W 3	72× 50× 26	輪円形	d						742	S 9 E 2	W	64× 60× 20	円形	a	>±743	中耕地質
715 S 5 W 2	54× 46× 24	輪円形	c						743	S 4	E 1	114× 72× 39	輪丸形	a		
716 S 4 E W 6	114× 60× 18	(輪円形)	a	<±717					744	S 10 E 1	W	82× 65× 35	(輪丸形)	d	>±745 <±741	中耕地質
717 S 4 W 1	84× 78× 22	輪丸形	b	>±716 <718					745	S 9 E 1	W	14× 38× 30	輪丸形	c	<±746	中耕地質
718 S 3 W 1	92× 66× 32	(輪円形)	e	<±717					746	S 10 E 1	W	82× 65× 35	輪丸形	d	>±747 <±745	中耕地質
719 S 3 E W 6	76× 64× 18	輪円形	a	<±719					747	S 11 E 4	W	82× 60× 32	輪丸形	b		中耕地質 上質
720 S 3 E W 6	56× 40× 16	輪円形	a	>±719					748	S 11 E 3	W	104× 100× 20	輪丸形	a	<±746	
721 S 4 E W 6	69× 58× 32	円形	c						749	S 9 E 3	W	76× 68× 39	輪丸形	c	<±740 <745	中耕地質
722 S 2 E 1	96× 80× 26	円形	a						750	S 9 E 4	W	68× 60× 24	輪丸形	c		施肥地質
723 S 3 E 1	54× 50×								751	S 9 E 4	W	78× 70× 11	輪丸形	b		中耕地質
724 S 3 E 1	100× 86× 14	輪丸形	b	>±725					752	S 9 E 5	W	70× 69× 10	輪丸形	a		
725 S 3 E 2	84× 60× 12	輪丸形	b	<±724					753	S 10 E 5	W	68× 65× 30	輪円形	b	>±754	
726 S 2 E 2	68× 64× 18	円形	b						754	S 11 E 5	W	78× 66× 13	輪丸形	b	>±753	
727 S 2 E 2	72× 68× 40	円形	c	>±728					755	S 9 E 6	W	84× 76× 20	輪円形	a	<±753	
728 S 2 E 2	62× 56× 12	(輪形)	b	<±727					756	S 10 E 6	W	86× 76× 10	輪円形	b		土壤問題

No.	番号	大きさ (cm) 長さ×幅×高さ	平面形	断面 >17倍、<40倍	形状、断面 >40倍、<80倍	表面形	大きさ (cm) 長さ×幅×高さ	平面形	表面 >80、<150倍	形状、断面 >150倍、<土170倍	表面 >土170倍、<土210倍
751	N 9 E 6	262×262×10	不規則	b			764	S 3 E 12			
756	S 9 E 6	82×56×13	横円形	a			765	S 7 E 13	66× 50× 28	横円形	b
759	S 7 E 4	80× 68× 20	横円形	b			766	S 4 E 13	78× 66× 30	横円形	c
760	S 6 E 3	94× 92× 10	(横円形)	a			767	S 3 E 14	100× 88× 48	横円形	d
761	S 5 E 4	166× 119× 8	横円形	a			768	S 4 E 14	110× 72× 49	横円形	d
762	S 3 E 4	86× 66× 8	横円形	b			769	N S 0 E 15	82× 78× 17	横円形	a
763	S 2 E 3	67× 62× 13	横円形	b			790	N 2 E 15	56× 48× 28	横円形	c
764	S 2 E 4	78× 66× 21	円形	a			791	N 2 E 17	66× 48× 31	横円形	d
765	N S 0 E 4	68× 62× 32	横円形	c			792	N 2 E 18	66× 60× 20	円形	a
766	N 1 E 2	102× 94× 10	円形	a			793	N S 0 E 18	56× 56× 36	円形	c
767	S 1 E 6	64× 87× 10	横円形	a			794	S 1 E 19	66× 72× 32	横円形	c
768	S 2 E 6	66× 56× 32	円形	c			795	N S 0 E 18	60× 36	円形	e
769	S 2 E 7	63× 56× 10	円形	a			796	N S 0 E 18	60× 36	円形	c
770	S 2 E 6	84× 65× 26	横円形	d	>17倍		797	S 1 E 20	70× 70× 43	円形	c
771	S 3 E 7	76× 68× 24	円形	b			798	S 2 E 20	76× 70× 44	横円形	c
772	S 4 E 6	168× 165× 19	円形	a	>±0.05、<47% ±0.05、<47%		799	N 1 E 21	172× 168× 36	円形	b
773	S 4 E 6	94× 74× 14	横円形	c			800	N 3 E 22	66× 66× 66	円形	f
774	S 3 E 6	83× 82× 22	円形	a			801	N 20 W 20	40× 74× 60	円形	d
775	S 4 E 5	60× 69× 57	円形	c			802	N 20 W 20	116× 110× 26	不整形	a
776	S 4 E 10	90× 74× 45	横円形	c			803	S 9 W 11	128× 90	不整形	b
777	N S 0 E 4	226× 170× 14	横円形	a	>17倍		804	S 4 E 6	66× 66× 31	円形	c
778	S 1 E 3	48× 44× 19	円形	c	>17倍		805	S 4 E 5	116× 90× 18	(直角三方)	a
779	N S 0 E 10	66× 46× 36	円形	a	>17倍、<±277%		806	S 6 E 9	56× 36	横円形	c
780	N 1 E 10	64× 60× 46	円形	a	>17倍、<±277%		807	S 6 E 11	212× 186× 16	横円形	b
781	N S 0 E 12	76× 74× 36	円形	c	>17倍、±27%		808	S 9 E 14	72× 68× 14	円形	a
782	S 1 E 12	96× 36	c	<17倍、±27%			809	S 10 E 14	86× 70× 16	横円形	a
783	S 3 E 12	98× 66× 26	円形	a	>17倍、±27%		810	S 8 E 15	110× 66× 40	横円形	d

No.	通量	大きさ (cm)	表面形	形状	形状、構造		No.	通量	大きさ (cm)	形状、構造		No.	形状、構造	
					>P	<P				>P	<P		>P	<P
811 S 5 E14	126×110×54	円形	c	>P	<P	中間位置	820 N 3 E26	M1	76×76×36	円形	a	中間位置	830 N 2 E27	76×76×22
812 S 6 E15	148×136×122	(楕円形)	e	<P	611+613	中間位置	820 N 3 E29	78×78×30	円形	b	中間位置	840 N 3 E30	78×78×30	
813 S 6 E16	178×140×24	円形	b	>P	中間位置	840 N 3 E31	74×74×20	円形	b	中間位置	841 N 6 E30	94×94×16		
814 S 8 E17	94×96×66	円形	c	<P	中間位置	842 N 6 E31	94×94×20	円形	b	中間位置	843 N 7 E30	70×65×32		
815 S 6 E18	92×14	円形	d	<15%	中間位置	844 N 8 E30	72×58×17	円形	c	中間位置	845 N 9 E30	64×54×32		
816 S 1 E21	108×96×36	円形	b	<P	中間位置	846 N 9 E30	73×64×32	円形	c	中間位置	847 N 8 E26	78×72×12		
817 S 4 E21	72×71×26	楕円形	c	>P	中間位置	848 N 9 E26	120×84×20	不規則形	a	中間位置	849 N 10 E27	92×64×15		
818 S 1 E23	98×44×36	楕円形	e	>P	中間位置	850 N 10 E27	92×64×32	楕円形	c	中間位置	851 N 9 E26	78×72×12		
819 S 1 E23	48×19	e	<P	<28%<-3.8%	中間位置	852 N 8 E26	120×84×20	不規則形	a	中間位置	853 N 10 E27	92×64×15		
820 NS 0 E22	—	66×34	c	<1.8%	中間位置	854 N 9 E26	160×94×12	不規則形	b	中間位置	855 N 10 E27	92×64×15		
821 S 2 E23	68×66×45	円形	d	<5.2%	中間位置	856 N 10 E27	92×64×15	不規則形	b	中間位置	857 N 11 E27	92×64×15		
822 S 3 E23	60×39	円形	a	<P+2.8%	中間位置	858 N 10 E27	92×64×15	不規則形	a	中間位置	859 N 11 E27	92×64×15		
823 S 2 E25	98×94×30	楕円形	a	<P	中間位置	860 N 10 E27	92×64×15	楕円形	b	中間位置	861 N 10 E29	214×114×12		
824 NS 0 E24	105×96×28	円形	b	<P	中間位置	862 N 10 E31	92×90×60	楕円形	d	中間位置	863 N 11 E31	94×60×14		
825 S 5 E13	70×60×17	円形	a	<P	中間位置	864 N 11 E36	92×60×14	不規則形	b	中間位置	865 N 12 E36	80×60×15		
826 NS 0 E25	68×62×16	円形	a	<P	中間位置	866 N 11 E36	92×60×15	不規則形	b	中間位置	867 N 12 E36	80×60×15		
827 N 3 E29	62×48×48	円形	c	<P	中間位置	868 N 12 E49	100×90×18	不規則形	a	中間位置	869 N 12 E48	88×76×22		
828 N 5 E23	73×66×27	円形	c	<P	中間位置	870 N 12 E36	96×76×26	円形	b	中間位置	871 N 12 E36	96×76×26		
829 N 3 E24	78×50×21	円形	a	<P	中間位置	872 N 12 E38	72×68×25	円形	c	中間位置	873 N 12 E39	78×74×26		
830 N 4 E24	68×65×43	円形	c	<P	中間位置	874 N 12 E39	78×74×26	円形	c	中間位置	875 N 12 E49	100×90×18		
831 N 2 E24	(60)×58×11	円形	a	<P	中間位置	876 N 12 E49	100×90×18	不規則形	a	中間位置	877 N 12 E48	88×76×22		
832 N 1 E21	79×75×68	円形	d	<P	中間位置	878 N 12 E50	78×50×23	円形	a	中間位置	879 N 12 E50	78×50×23		
833 N 1 E22	75×60×27	楕円形	c	<P	中間位置	880 N 12 E51	52×40×16	椭圆形	a	中間位置	881 N 12 E51	52×40×16		
834 N 2 E26	80×76×18	円形	b	<P	中間位置	882 N 12 E52	84×84×17	椭圆形	b	中間位置	883 N 12 E52	84×84×17		
835 N 2 E26	65×60×19	円形	b	<P	中間位置	884 N 12 E49	298×146×52	椭圆形	b	中間位置	885 N 12 E49	298×146×52		
836 N 2 E27	68×68×26	円形	d	<P	中間位置	886 N 12 E52	86×60×65	椭圆形	c	中間位置	887 N 12 E52	86×60×65		
837 N 3 E27	66×58×29	楕円形	c	<P	中間位置	888 N 12 E52	86×60×65	椭圆形	c	中間位置	889 N 12 E52	86×60×65		

No.	地番	大きさ (cm)	半透明	透明	>透明、<透明	半透明	半透明、透明	No.	地番	大きさ (cm)	半透明、透明	下限	範囲	>切る、<切らる	切る、範囲
668	N15 D54	140× 20× 25	透明	c	<±60			895	N 7	E 33	40				
669	N15 E54	20× 25× 40	透明	f	>±60			896	N 7	E 33	58× 52× 20	透明	c		
870	N37 E54	82× 76× 19	透明	a	>21枚			897	N 8	E 31	84× 82× 11	透明	a		
871	N36 W95	70× 62× 18	透明	c				898	N 8	E 34	113				
872	S 2 D11	110× 168× 21	透明	b	>17枚	半透明		899	N 9	E 35	371× 140× 94	(透明)	c		
873	S 25 W26	104× 56× 14	透明	a				900	N 8	E 21	89× 68× 90	透明	d		
874	S 16 W23	73× 56× 24	透明	a				901	N 3	E 22	74× 72× 45	透明	c		
875	S 14 W9	223× 22	a	>±50枚、<±60				902	N 2	E 23	66× 54× 50	透明	d		
876	S 16 W 9	322			<±675	透明外に飛び出る		903	N 32	E 59	100× 90× 20	透明	a		
877	S 12 W 8	79× 70× 22	H透明	a				904	N 33	E 58	80× 76× 32	透明	d		
878	S 13 W 8	89× 88× 39	透明	c				905	N 5 W 6	154× 144× 43	透明	a			
879	S 14 W 6	82× 17	a	>P	透明外に飛び出る			906	N 18 W 21	50× 47× 40	透明	a			
880	S 12 W 7	160× 94× 23	透明	b	>±25枚・±8枚・±8枚	透明外に飛び出る		907	N 18 W 20	48× 47× 23	透明	b	>±475		中間地質
881	S 12 W 6	—	41	c	<±60枚・±83枚			908	S 17 W 26	30× 28		c			
882	S 13 W 6	148× 88× 30	透明	a	>P	半透明		910	N 13 W 23	72× 48× 20	透明	b			中間地質
883	S 11 W 6	164× 122× 25	透明	a	>±53枚・<±86枚	半透明		911	S 12 W 21	32	(透明)				透明外に飛び出る
884	S 13 W 5	98× 97× 19	透明	b	>P			901	N 61	E 24	46× 44× 22	透明	c		
885	S 10 W 1	76× 62× 21	(透明)	a	<±80			1002	N 64	E 22	34× 35× 18	透明	c		
886	S 12 W 5	66× 69× 49	透明	c				1003	N 64	E 23	80× 75× 19	透明	b		
887	S 12 W 4	126× 68× 21	透明	a				1004	N 63	E 24	20× 30× 38	透明	c		
888	S 11 W 2	108× 66× 18	透明	a	<±68枚			1005	N 64	E 24	27× 16× 16	透明	a		
889	S 12 W 1	88× 80× 27	H透明	a	>P・±588枚			1006	N 66	E 8	20× 15× 9	透明	a		
890	S 11 W 1	106× 66× 38	透明	c				1007	N 66	E 8	31× 30× 36	透明	c		
891	S 14 W 6	78× 38	a	透明外に飛び出る				1008	N 97 R 7	67× 65× 27	透明	a			
892	S 4 W 2	65× 59× 9	透明	a	<P・±465枚・±94枚			1009	N 98 R 7	75× 75× 40	透明	c			
893	S 10 W 9	76× 19	b	<P・±465枚・±94枚				1010	N 97 R 7	53× 51× 41	透明	c			
894	K 6 H 22	100× 38	c	透明外に飛び出る											

第3節 配石群

調査区の中央部、第12号住居址と第17号住居址の中間に位置し、第12号住居址の隅をわずかに切っている。検出時には住居址としたが、掘り下げたところ、墓と思われる配石が3～5重に切り合っていることが判明した。このため他の土坑に伴なう配石とは区別し、配石群として扱った。

配石1 配石群の中央に位置する。配石2に切られ、配石3、配石4を切る。配石5との切り合いは不明である。主軸長2.7m、幅1.7mで、主軸方向はN 72° Eである。石英閃緑岩を長方形の石棺状にならべている。石に囲まれた部分は、およそ1.7×0.9mである。東側は石が2列にならんでいるが、この東側の列は、第12号住居址に関連する施設の可能性もある。覆土は褐色土で炭化物、焼土をわずかに含んでいた。掘り方の底は他の配石との切り合いのため、はっきりしないが、周りを囲む石の下端部のレベルと、ほぼ同じと考えたい。本址からは若干の土器片が出土しているが、明確なものはなく時期の決定は困難である。形態より縄文時代後期の墓と考えたい。

配石2 配石群の北側に位置する。南側で配石1をわずかに切る。南北1.6m、東西1.5mの円形で浅いすり鉢状の土坑を伴なう。上部の配石は中央に平らで大きな石を置き、回りに石を置いている。東側には石はみられない。使用されている石は、すべて石英閃緑岩である。配石1同様、時期を決定できる遺物はないが、形態より、縄文時代後期の墓と考えたい。なお本址周辺から焼けた鹿の骨が少量出土しているが、本址に伴なうものかは不明である。

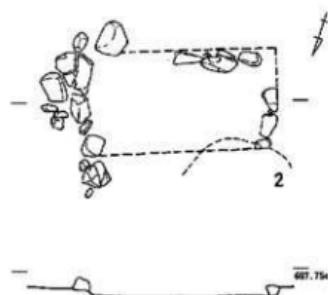
配石3 配石2の北に位置する。およそ径1mの範囲に数個石英閃緑岩の礫を集めており、下には土坑を作なう。上部を切られているため、本米の石の配置は不明である。配石1、2とはレベル差により区分した。時期は1、2同様の理由により決定困難である。

配石4 配石3に隣接し、配石1に上部を切られている。およそ2×1mの範囲に石英閃緑岩の礫を集めている。下層には小さな土坑が3つある。礫の周辺から被熱により軽石状になった土器が、まとまって出土している。文様より縄文時代後期前葉のものと思われるが、本址に伴なうものかは不明確である。またNo.2と同様に周辺から焼けた鹿の骨、角が出土している。時期の決定は困難である。本址周辺より出土した軽石状に変質した土器については、かつて木曾郡大桑村大明神遺跡^{註1}の報告書で被熱により変質した土器として報告したことがあるが、森義直氏の御教示によれば、沼等の湿地の底に、次堆積した鉄分、カルシウムを多量に含んだ粘土を胎土とした土器が、焼成時に成分の一部が酸化してとぶことにより表面積が増大し、埋没後に酸性の水に洗われることにより胎土中のカルシウムが溶脱し、軽石状になったものであるとのことである。

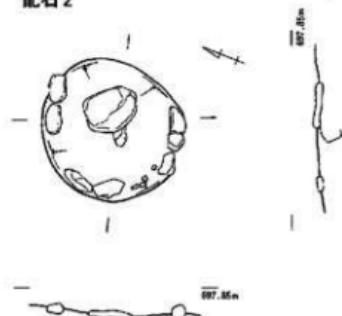
配石5 配石群の南西に位置する。約4mの長さに石をならべており、一部は石が抜かれて、その痕跡が残る。石は他の配石同様、石英閃緑岩である。時期を決定できる遺物は出土していない。

註1 指導 新谷和子 1988『大明神遺跡』大桑村行政委員会

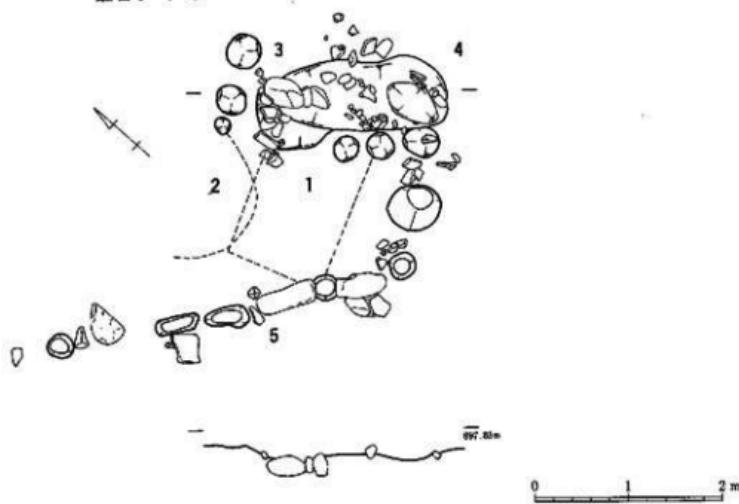
配石 1



配石 2

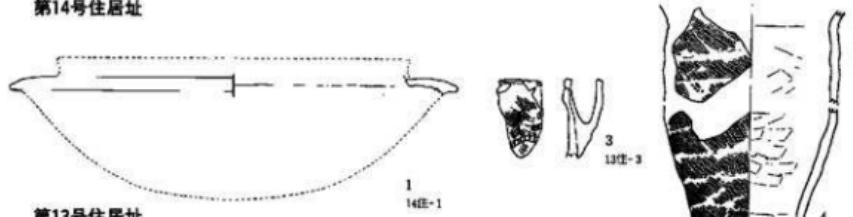


配石 3・4・5

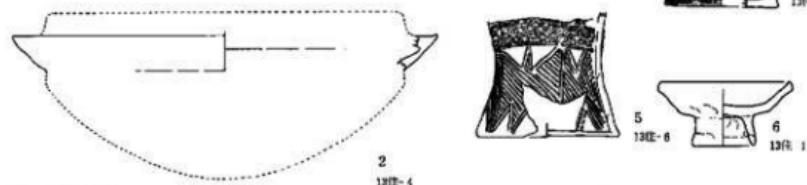


第52図 配石群

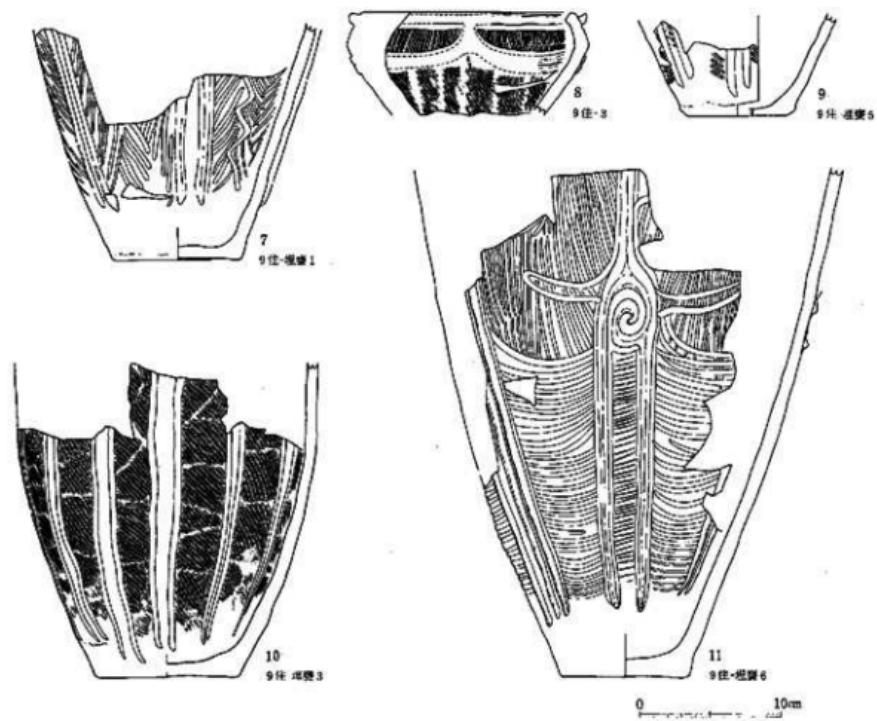
第14号住居址



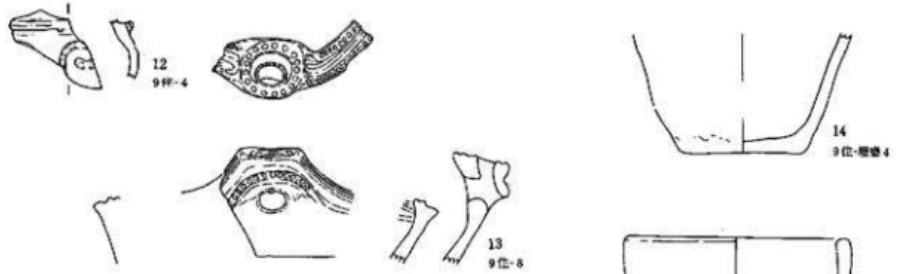
第13号住居址



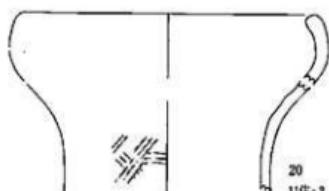
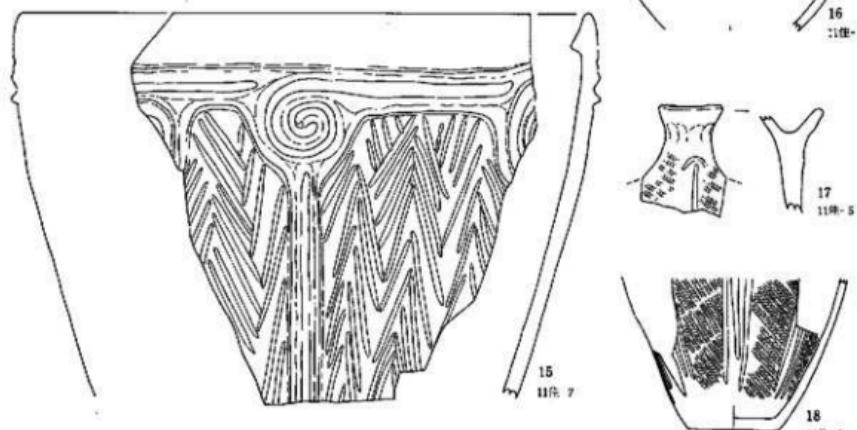
第9号住居址



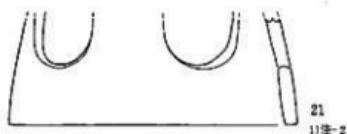
第53図 通構出土土器実測図 (1)



第11号住居址



第19号住居址



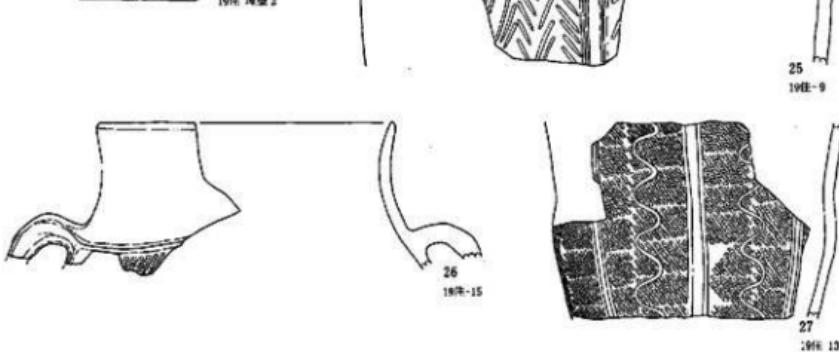
0 10cm

第54図 遺構出土土器実測図 (2)



23
19E-2

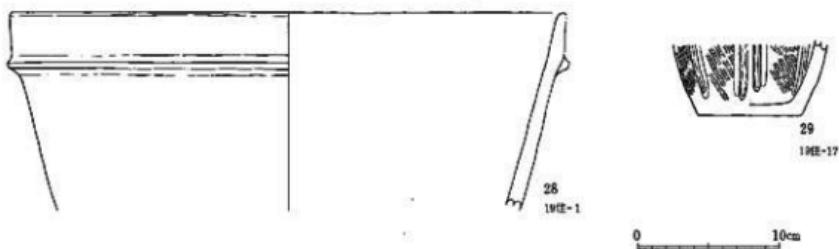
24
19E-5



25
19E-9

26
19E-15

27
19E-13

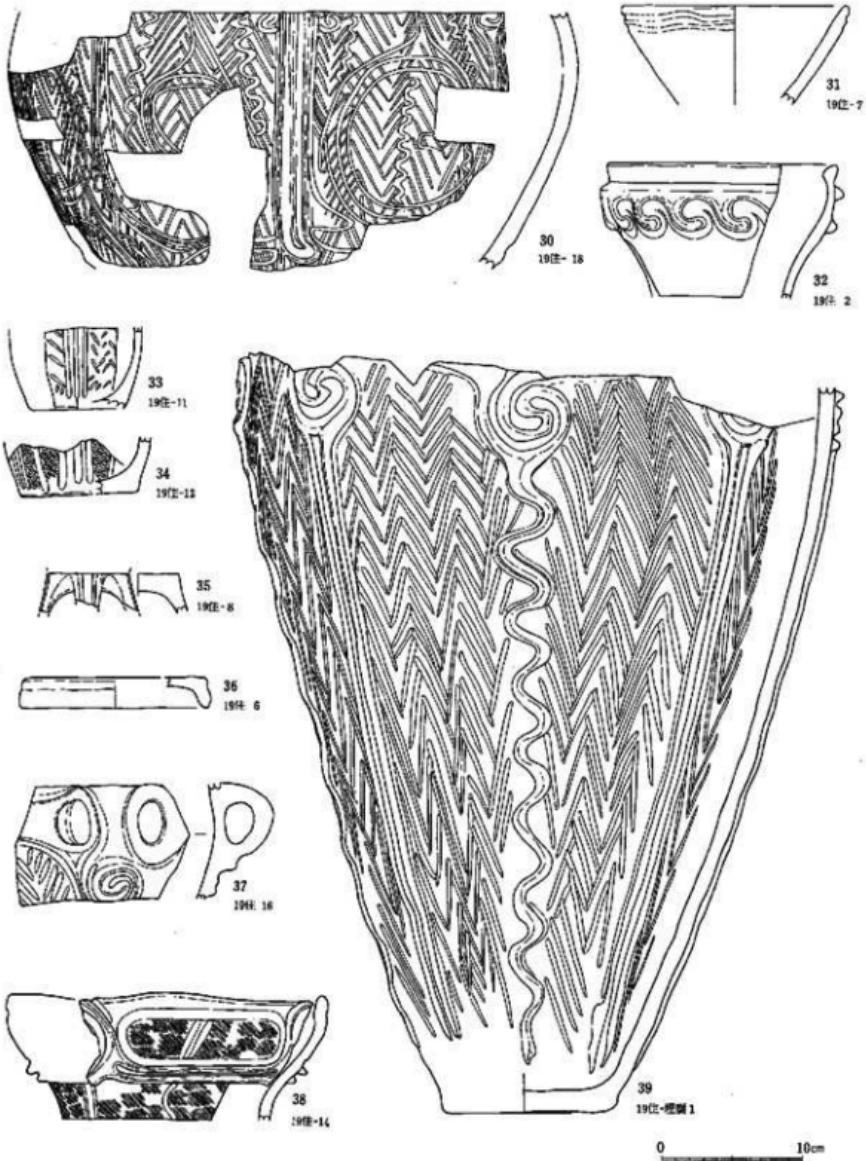


28
19E-1

29
19E-17

0 10cm

第55図 遺構出土土器実測図 (3)



第56図 造構出土土器実測図 (4)

第18号住居址



40
18住-5

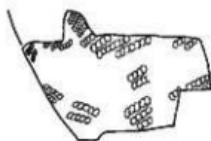
第25号住居址



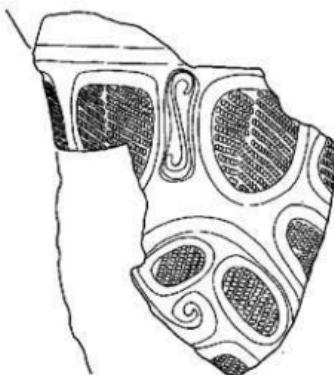
41
25住-1



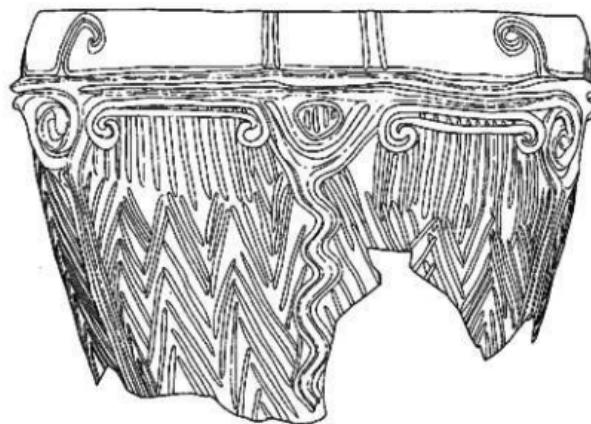
42
25住-5



43
25住-2



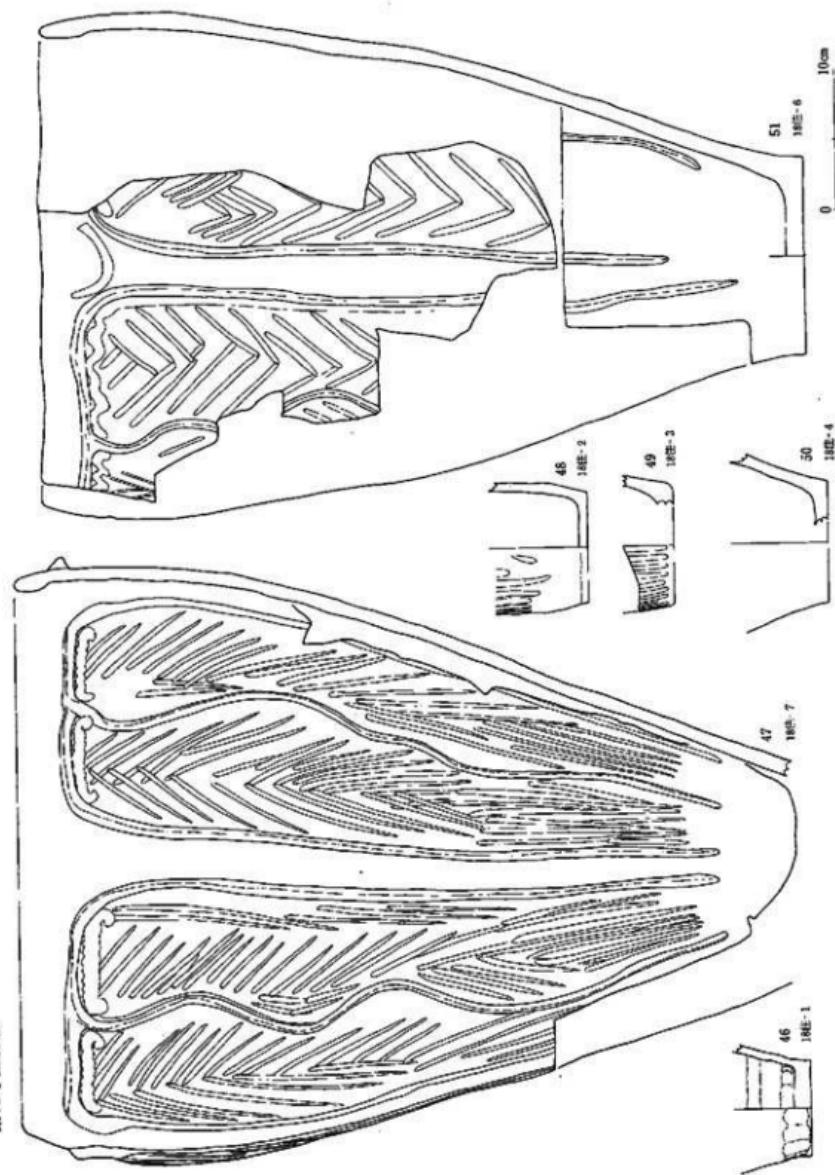
44
25住-3



45
25住

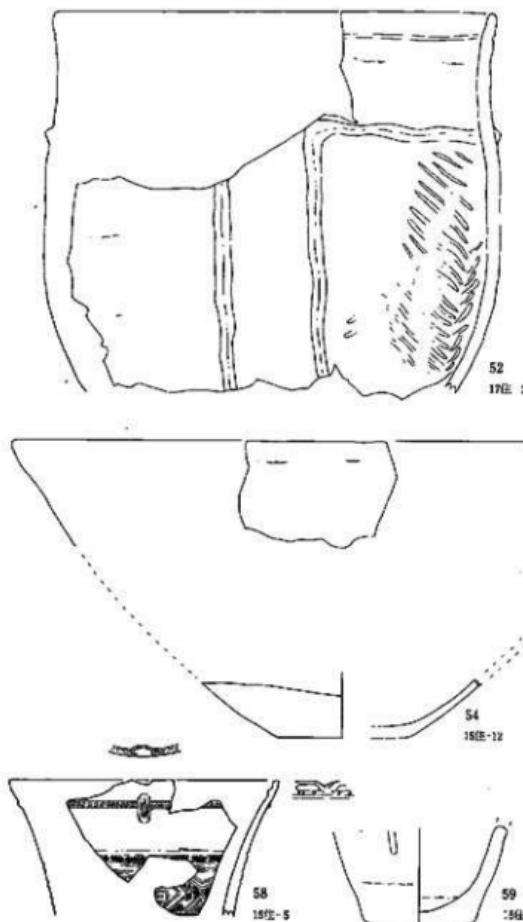
0 10cm

第57図 造構出土土器実測図 (5)

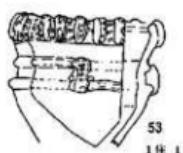


第56図 造構出土土器実測図 (6)

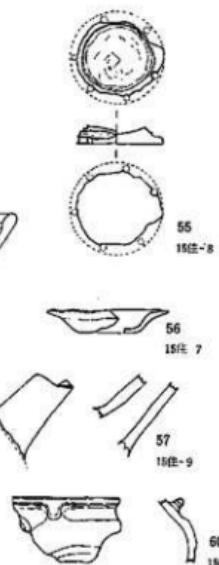
第17号住居址



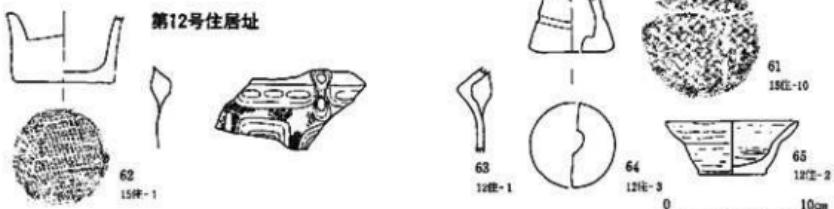
第1号住居址



第15号住居址

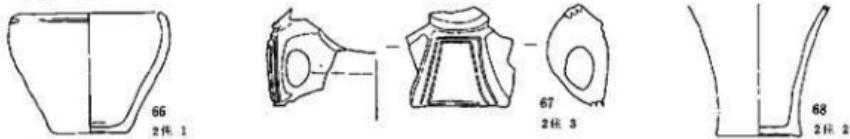


第12号住居址

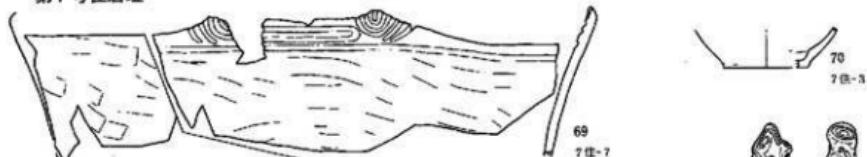


第59図 遺構出土土器実測図 (7)

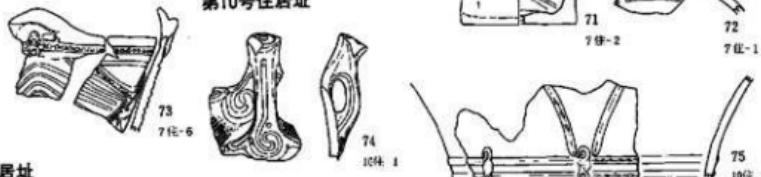
第2号住居址



第7号住居址



第10号住居址



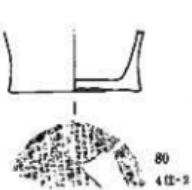
第4号住居址



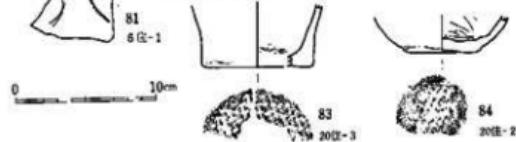
第23号住居址



第6号住居址

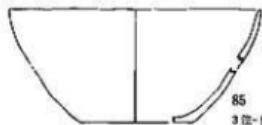


第20号住居址



第60図 遺構出土土器実測図 (8)

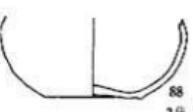
第3号住居址



第21号住居址



第22号住居址



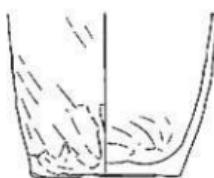
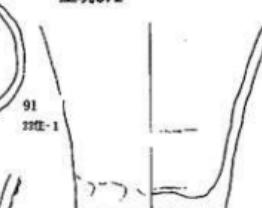
土坑94



土坑909



土坑372



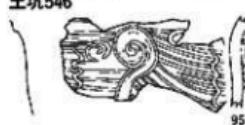
土坑493



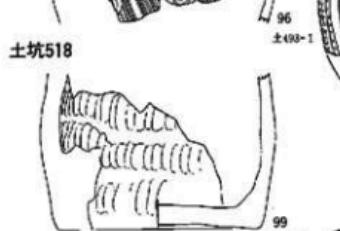
土坑602



土坑546



土坑518



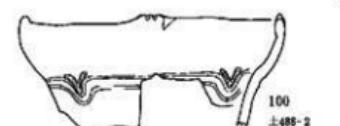
土坑488



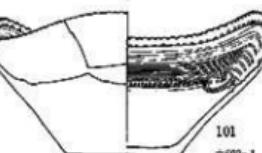
土坑28



土坑28-1



土坑488-2

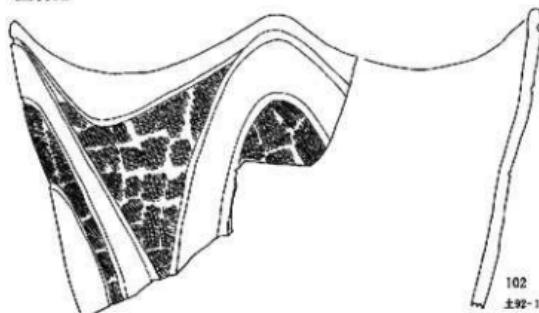


101
±488-1

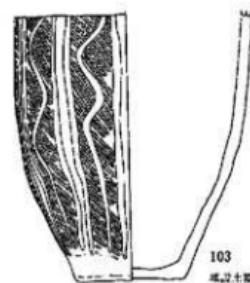
0 10cm

第61図 遺構出土土器実測図 (9)

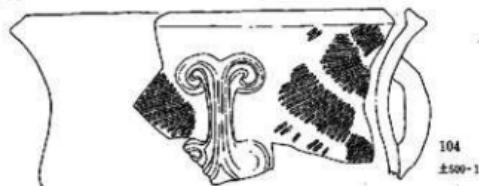
土坑92



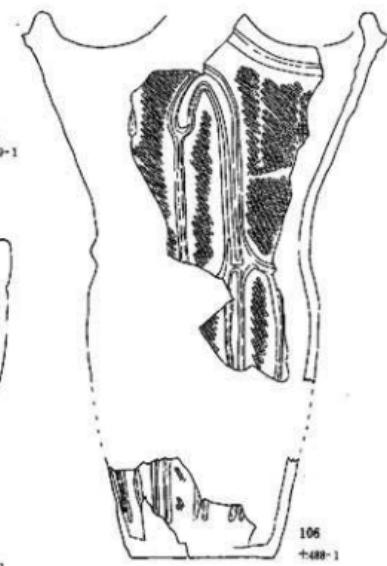
土坑803



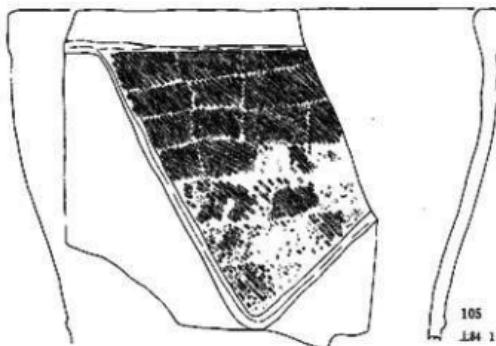
土坑509



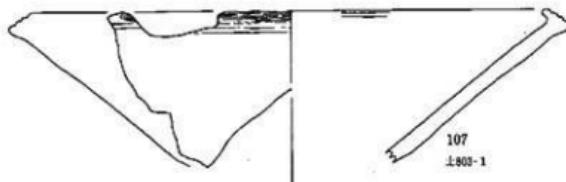
土坑488



土坑84



土坑803

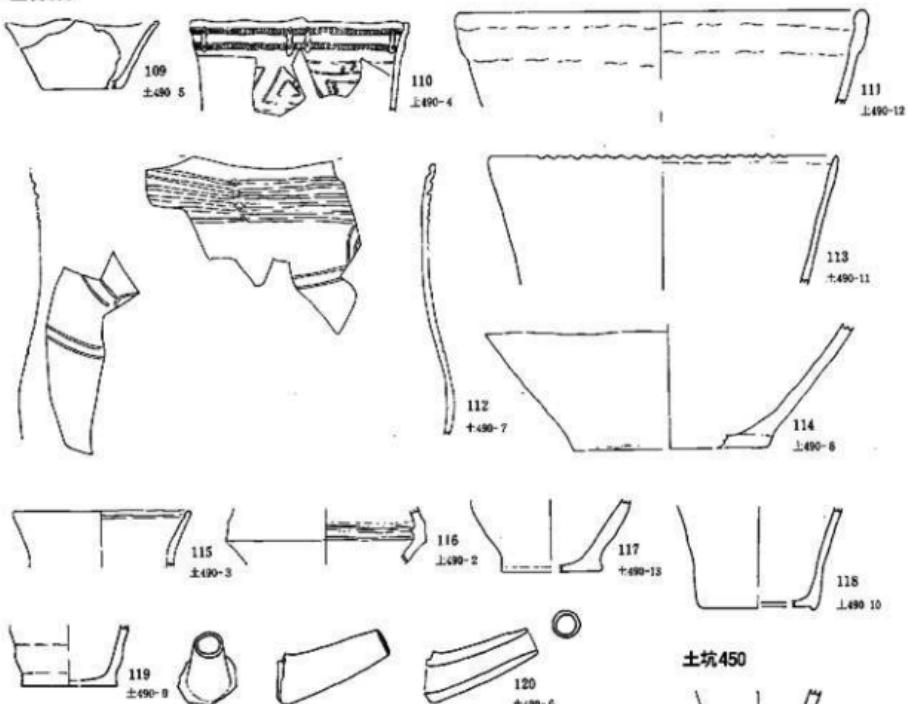


土坑501



第62圖 透構出土土器實測圖 (10)

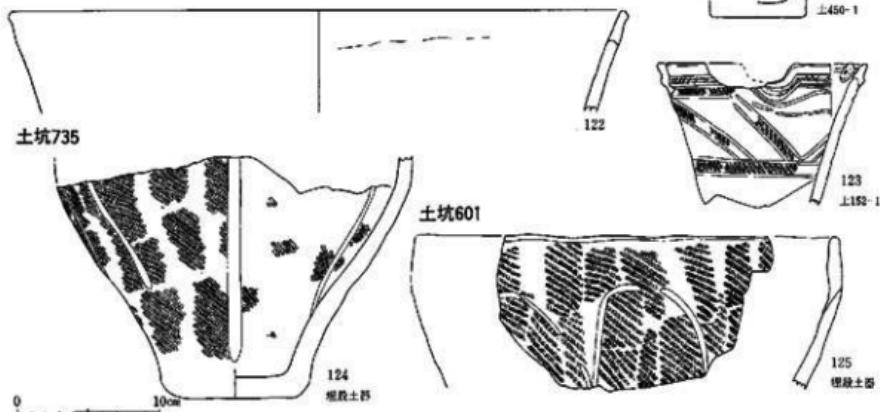
土坑490



土坑450



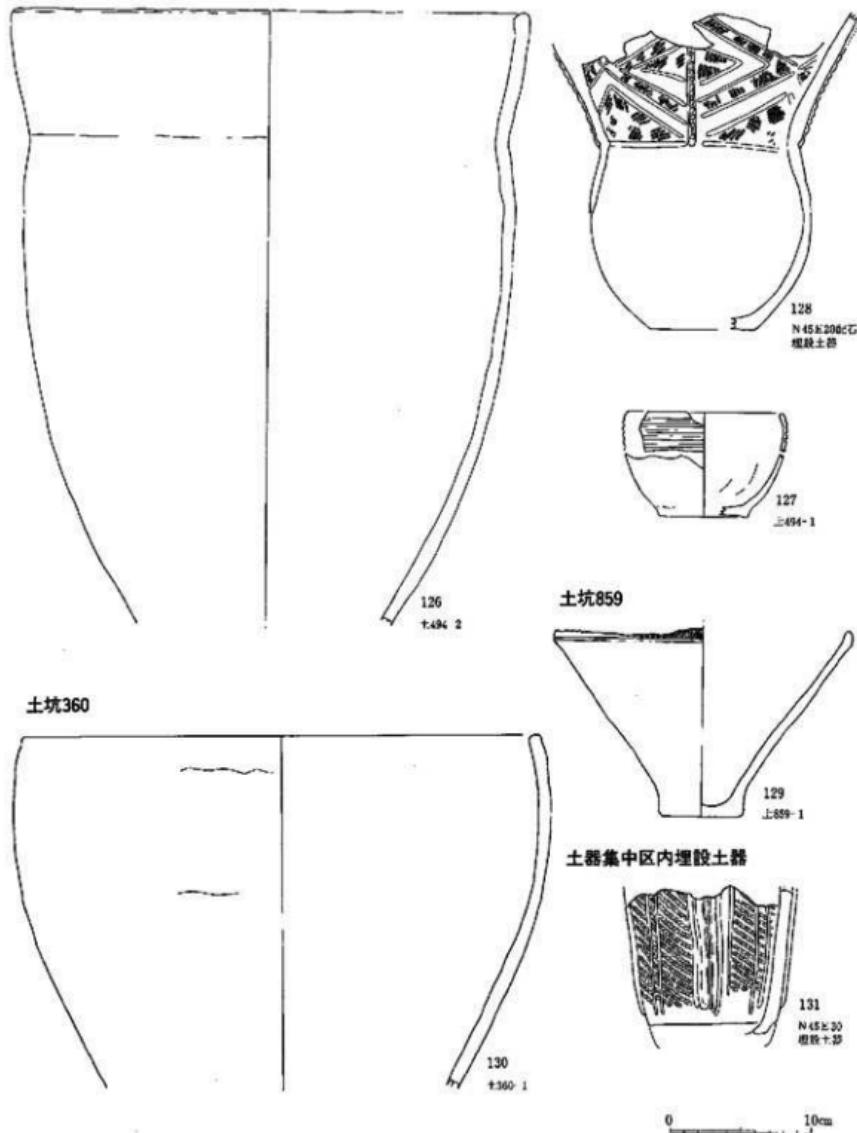
土坑152



第63図 造構出土土器実測図 (1)

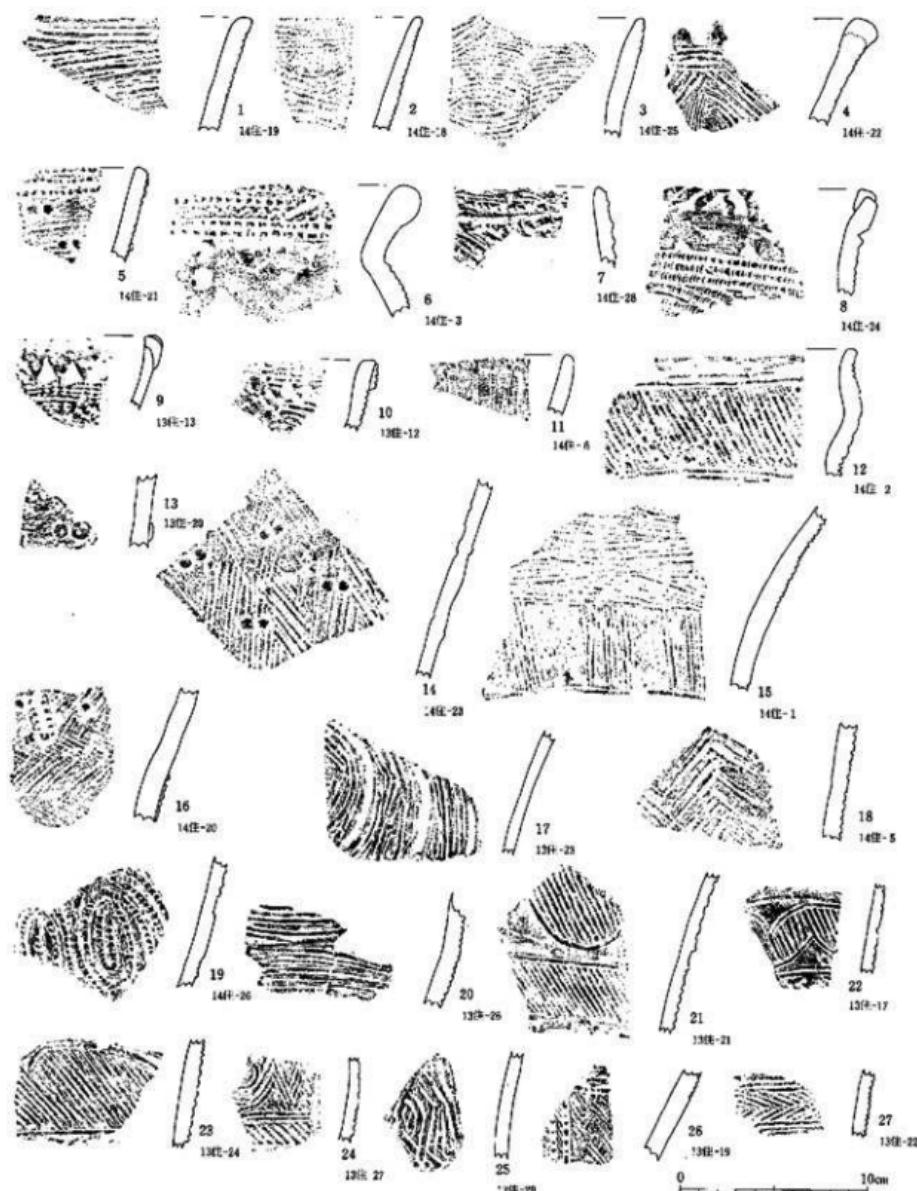
土坑494

土器集中区内配石

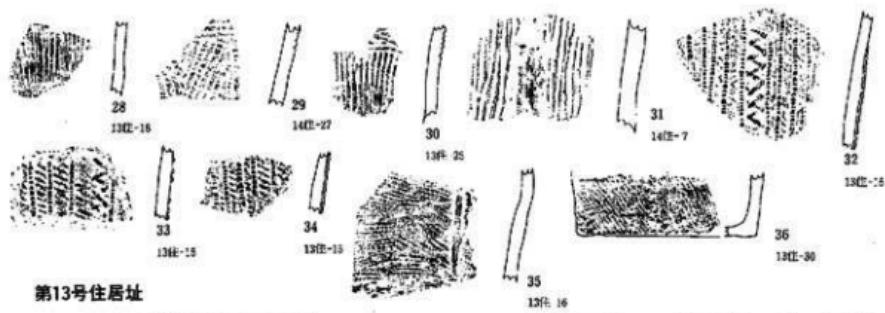


第64図 造構出土土器実測図 (12)

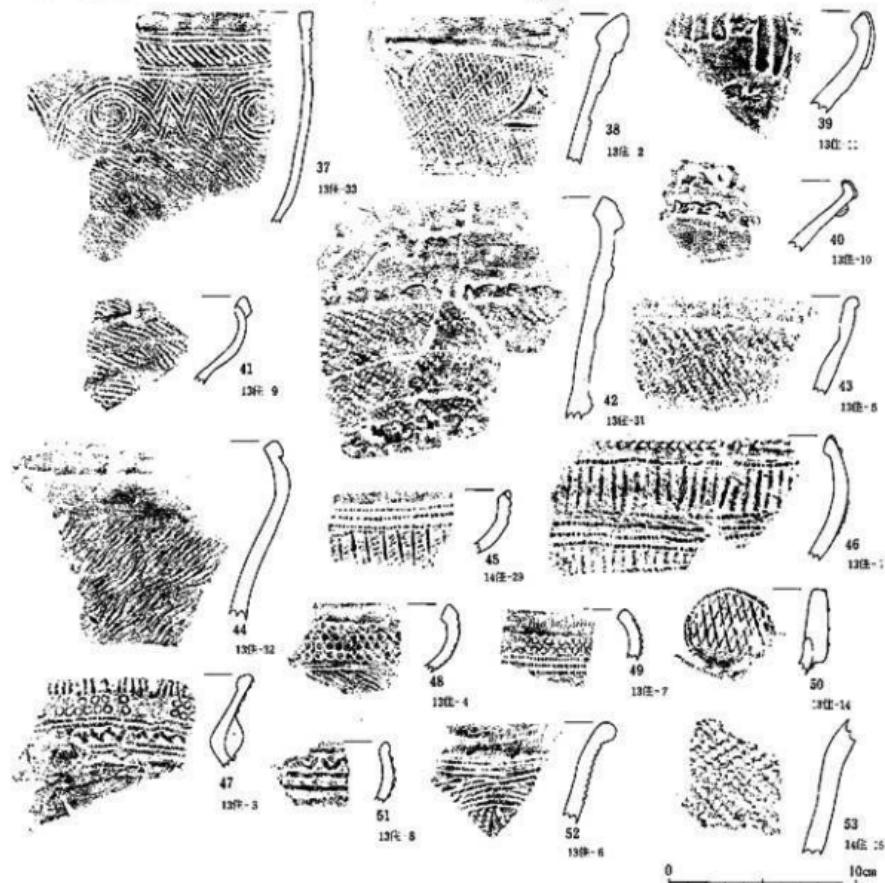
第14号住居址



第65図 遺構出土土器拓影 (1)

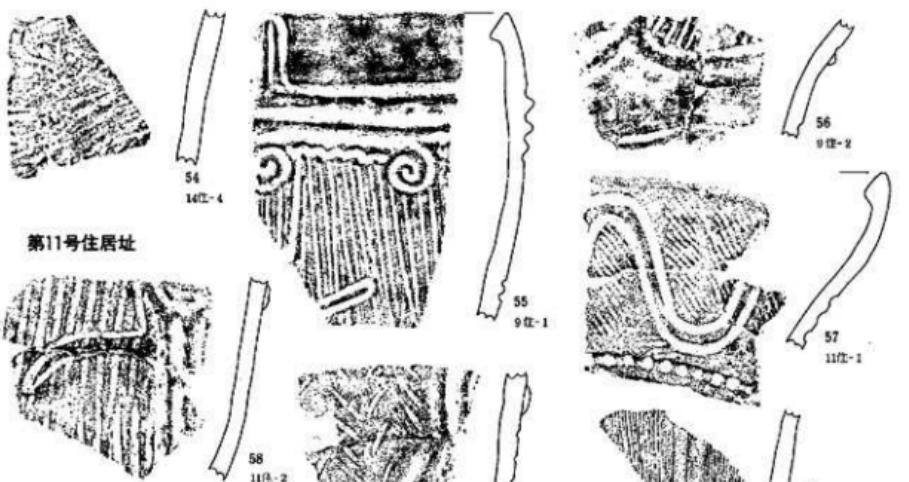


第13号住居址

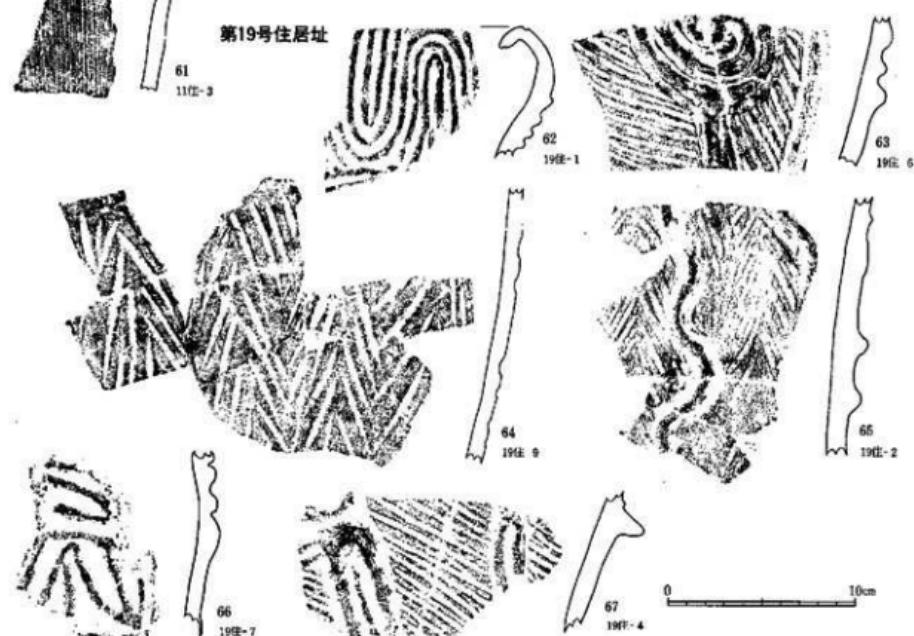


第66図 造構出土土器拓影 (2)

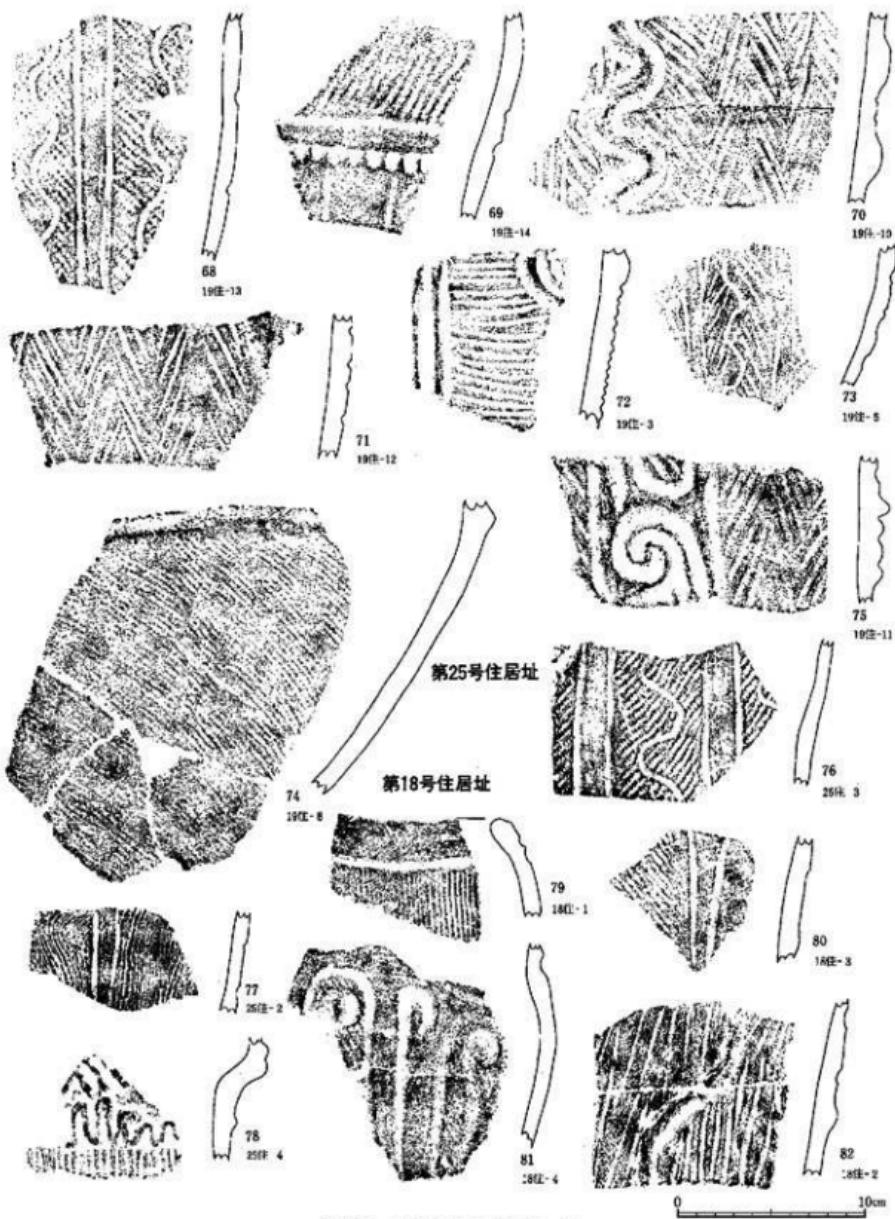
第9号住居址



第19号住居址

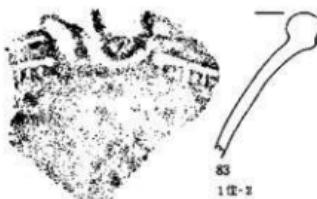


第67图 造構出土土器拓影 (3)

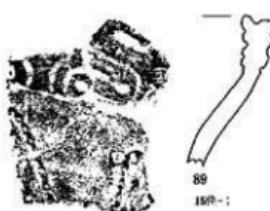


第68图 遗构出土土器拓影 (4)

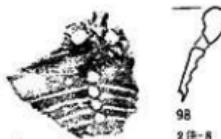
第1号住居址



第15号住居址



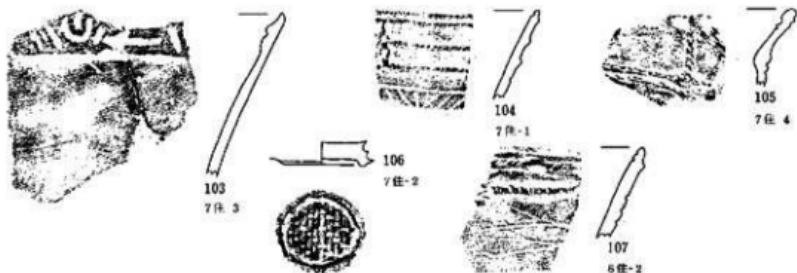
第2号住居址



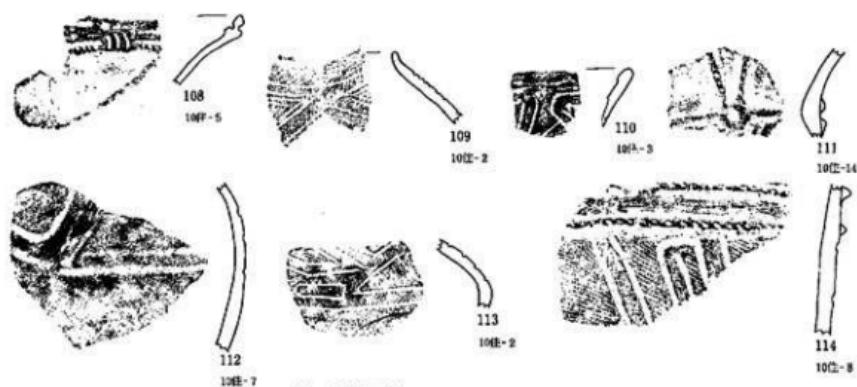
0 10cm

第69图 造构出土土器拓影 (5)

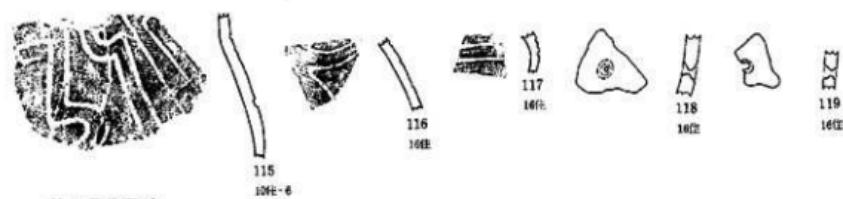
第7号住居址



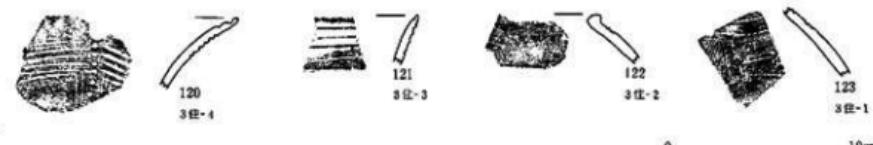
第10号住居址



第16号住居址



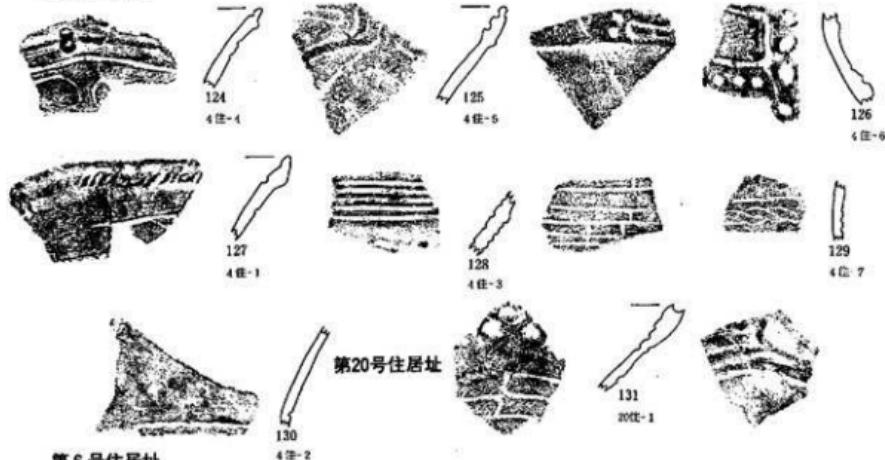
第3号住居址



0 10cm

第70図 遺構出土土器拓影 (6)

第4号住居址



第6号住居址



土坑488



土坑501



土坑803



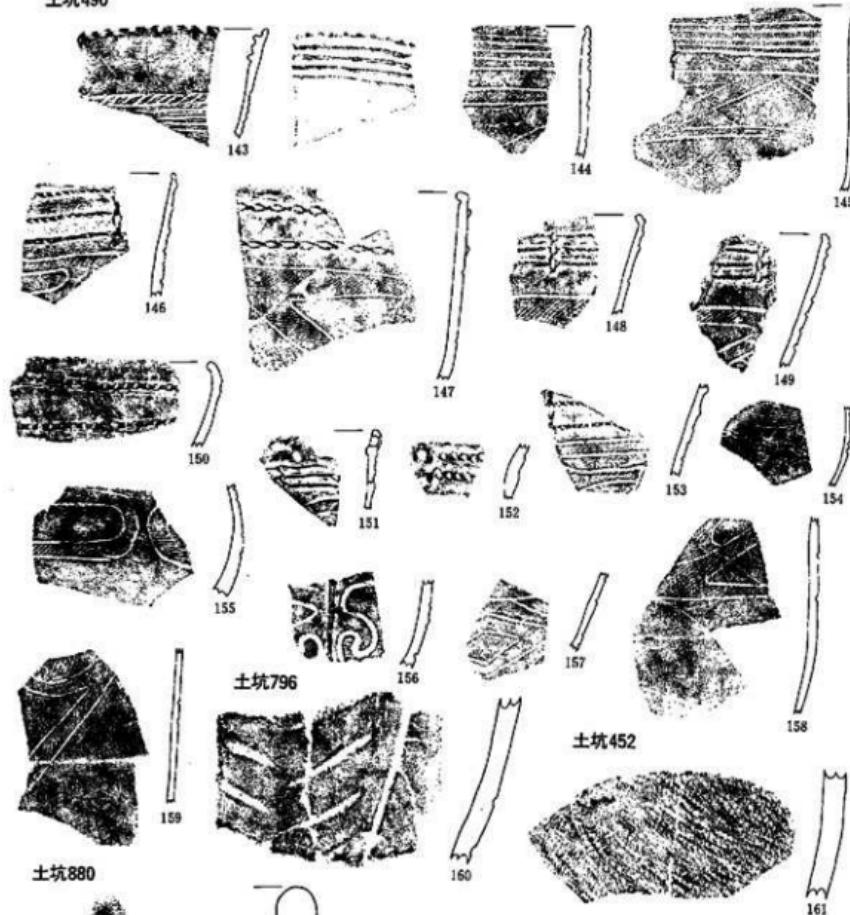
土坑735



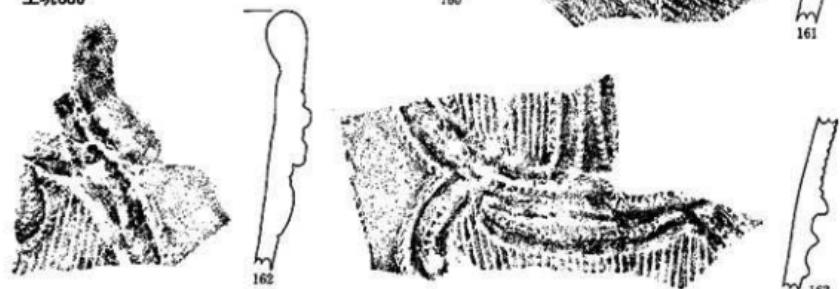
0 10cm

第71圖 遺構出土土器拓影 (7)

土坑490

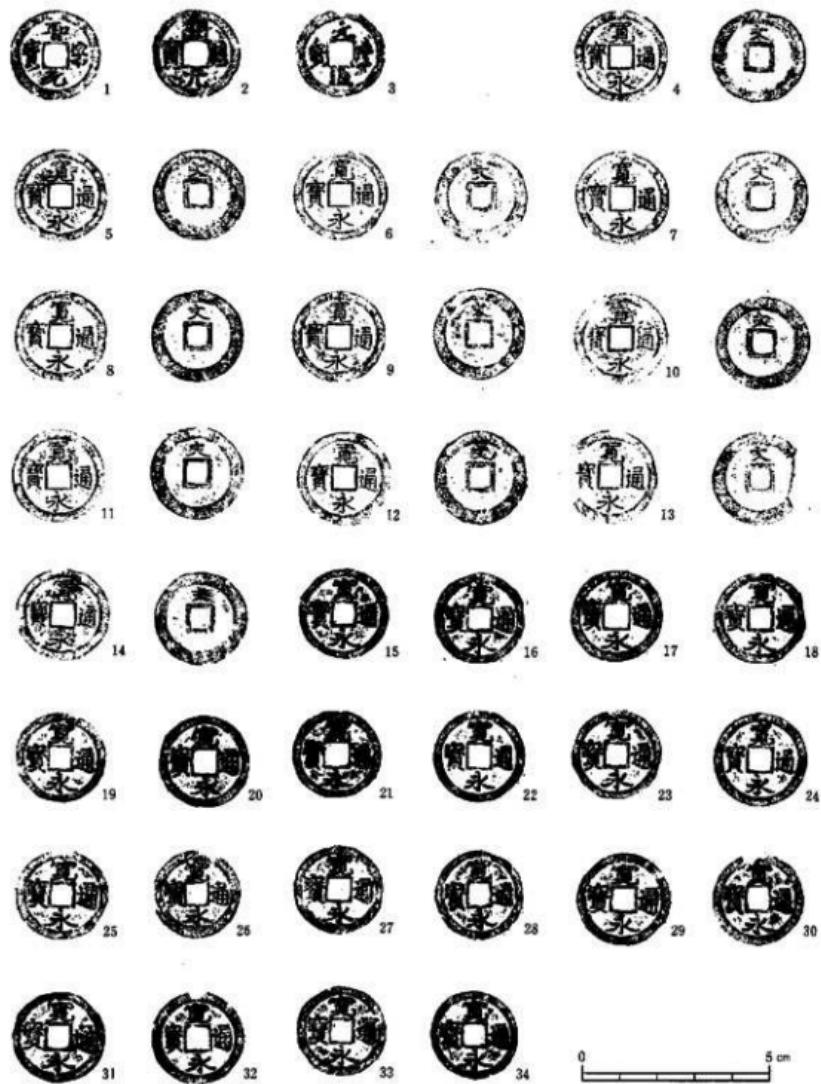


土坑880



第72図 透構出土土器拓影 (8)

0 10cm



第73圖 土坑145号出土錢拓影

第4節 土器集中区

1 概要 調査区北東部の北に向かって下る斜面に位置する。面積は約450m²である。試掘の段階より、非常に多くの土器が出土したため、表土除去後、遺構の検出を試みたが、検出できず、後述のようにグリットを設定して、掘り下げを行なった。その結果、縄文時代早期～後期の土器及び石器が、整理用テンパコ(容積34×54×20cm)100箱以上出土した。時期別にみると、早期後葉、早期末～前期初頭、前期中葉、後葉、前期末～中期初頭、中期中葉、中期後葉、後期初頭、後期前葉、後期中葉のものがあり、何度か途切れる時期があるが、早期から後期までの土器が連続している。出土量でみると中期中葉のものが最も多く、復元できたものも多い。これに次ぐのは早期末から前期初頭の土器であるが器形が復元できたものはない。なお土器の量が非常に多いので、明確な時期別の比率は出ていない。

土器集中区の土層は第74図に示した。地山の二次堆積ロームの上に黒色土及び褐色土が堆積している。堆積は自然のもので安定している。遺物の出土した層をみてみると、縄文時代早期～前期後葉の土器は、二次堆積ロームの上に約40cmの厚さで堆積している黒色土の直上から、その上の褐色土の下層にかけ、まとまって出土している。集中区全体でみると南側での出土量が多く、北側では、ほとんど出土していない。縄文時代前期末～後期中葉の土器は、前述の早期～中期後葉の包含層とは、少し間を置き、褐色土の中層から上層にかけてまとまって出土している。部分的に各時期の遺物の集中はあるが、出土レベルの差は、ほとんど認められない。時期別にみた分布の傾向をみると、中期中葉の土器は、集中区の中央部から北側にかけて多く出土し、南側では、ほとんどみられない。後期の土器は集中区の北東部より多く出土し、中央部及び南側では、ほとんどみられない。その他の時期の土器は、出土量も少なく、明確な分布の傾向を把握するには至らなかった。

2 調査の方法 土器集中区全体に、方位に合わせた2×2mのグリットを設定し掘り下げた。各グリットは、調査区全体の基準杭からの各グリットの北東隅までの距離(北へ何m、東へ何m)を、そのグリットの座標とし、N○E○と表示した。(以下の文中では全てこの表記による。)東西、南北に各2本の土層観察用ベルトを残して掘り下げ、最終的には全面を掘り下げた。ただし地山の二次堆積ロームの直上の黒色土層については、数ヶ所を二次堆積ロームの面まで掘り下げたが、遺物の包含が認められないため、全面の掘り下げは行なっていない。遺物の取り上げ及び記録は、掘り下げ時に覆土中に散在した遺物は、グリットごとにまとめて取り上げた。ある程度器形が残った状態で残っていることが判明したものは、そのまま残し、測量(写真測量と手書きを併用)、写真撮影後、グリットごとに通し番号をつけて取り上げている。この際、明確な基準を特に設けていないので、グリットごとで、かなりバラツキが生じている。また石器及び土製品については、調査時に識別できたものは、原則として出土位置を記録している。なお集中区内で掘り下げ中に検出された遺構は、住居址(第25号住居址)以外は、一括して、本項中で扱っている。

3 土器集中区の遺構（第76・77図）

(1) 埋設土器 N45E30に位置する。底を抜いた加曾利E系の深鉢の胴部下半が逆位で埋設されている（第64図131）。土器の脇には、石英閃綠岩があり、周辺より土偶（第143図24）が5つに割れて出土している。土偶と埋設土器は、ほぼ同時期のものであるが、共伴するものは不明である。土器の中からは、炭化物が、わずかに検出されている。

本址の時期は、埋設土器より、縄文時代中期後葉・曾利III式期と推定される。

(2) 炉址 N41E30に位置する。方形の石囲い炉で、規模は南北約70cm、東西約60cm、深さ約10cm、主軸はN-29°-Eである。炉石は全て石英閃綠岩で、被熱による風化が著しい。炉内の底にも石が敷かれている。炉内には、焼土、炭化物は認められない。

本址の時期は、形態より、縄文時代中期中葉以降と推定される。住居址等、何らかの遺構に伴なうものか、単独で存在したものかは不明である。

(3) 焼土 N49E50に位置する。第4号住居址と隣接している。40cmの大きな石英閃綠岩の礫の南北約70cm、東西約60cmの範囲に焼土がみられる。焼土は非常に良く焼けており、厚さは、中心部で約3cmある。周辺からは本址に伴なうと推定される注口土器の破片が出土しているが、復元、図示することは、できなかった。

本址の時期は、この注口土器より、縄文時代後期前葉と推定される。

(4) 配石 N45E20に位置する。南北約150cm、東西約70cmの範囲に数枚の鉄平石を敷き、そのやや北寄りに土器を正位で埋設している。鉄平石は平坦に敷かれており、土器の上部と、ほぼ同レベルにある。土器（第64図128）は深鉢で、山上時には屈曲部以下が、そのまま遺存し、屈曲部から口縁の破片は、焼土、炭化物が少量検出された。同期の土器が屈曲部より下に文様帯をもつものに対し、屈曲部より上に文様帯をもつ類例の少ないものである。

本址の時期は、埋設土器より、縄文時代後期前葉、堀之内II式期と推定される。敷石生居の残骸の可能性もあるが、本址周辺の表土中には、敷石の残骸の鉄平石は存在せず決め手に欠ける。

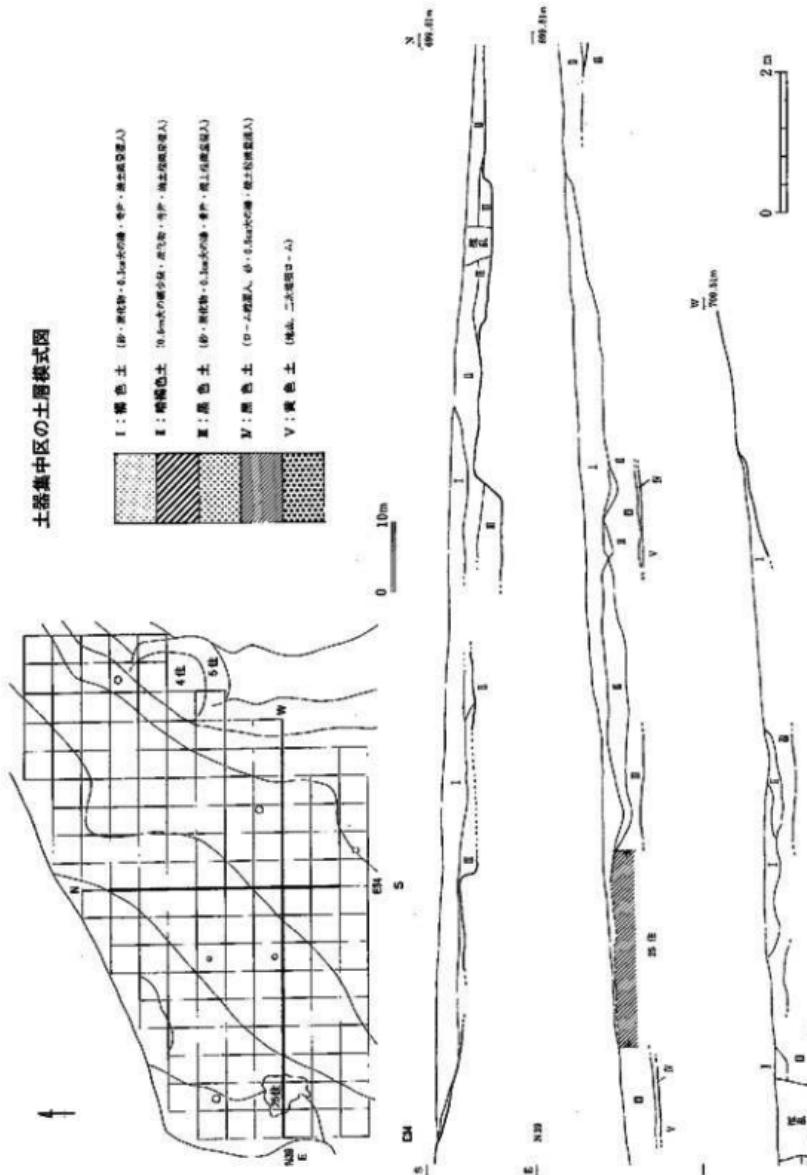
(5) 土坑 N41E40に位置する。縄文時代後期中葉の深鉢（第110図216）が伏せた状態で出土し、その下層の2次堆積ロームに土坑が掘り込まれていた。南北65cm、東西60cmの不整円形で、深さは約5cmである。底の北側に、直径約5cm、深さ約5cmの小さなピットが5つある。

本址と浅鉢が共伴するのかは不明であり、本址の時期は決定できない。

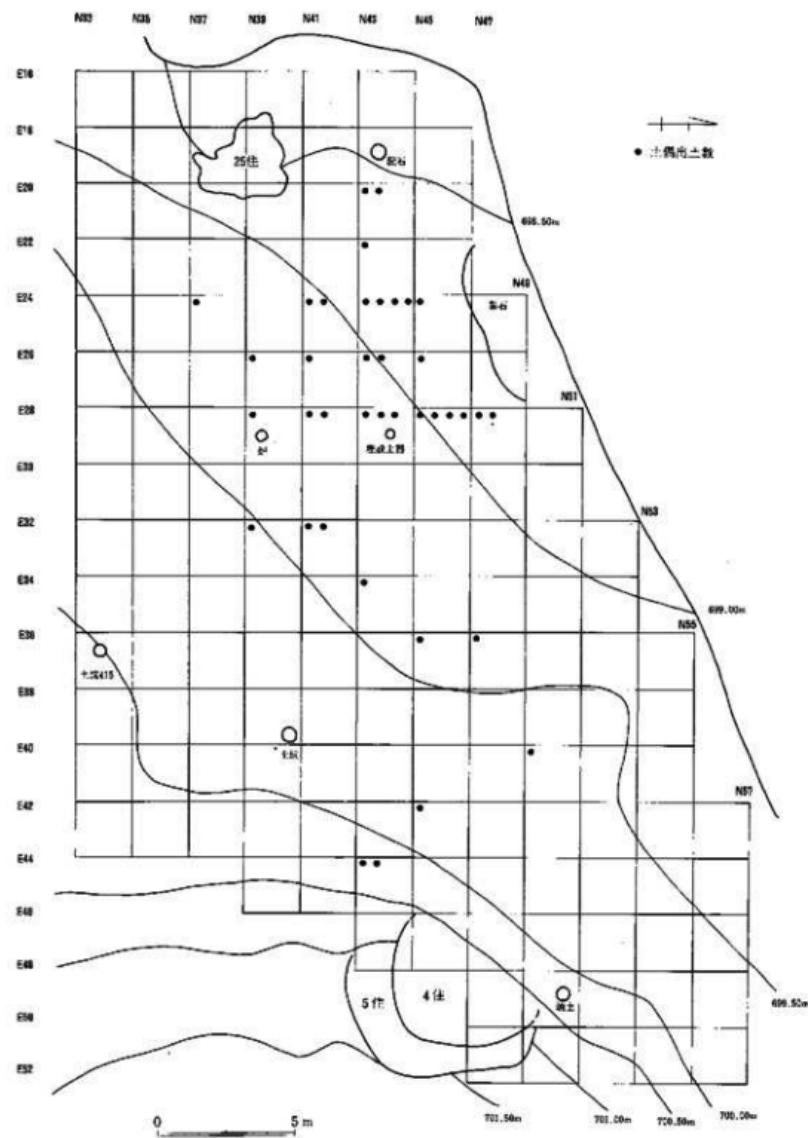
(6) 集石 N49E28、N49E26、N47E24に位置する。北側は調査区外に延びる。東西6m、南北は調査部分で約1.2mの範囲に、人頭～拳大の石英閃綠岩を、数百個集めている。II区の南側には集石が認められないことより、北側は、I区、II区間の道路の下で終っており、南北は2～2.5m程度の規模と推定される。集石は多層で、最も厚い部分は、約60cmある。多量の土器が混在して出土したが、地表下に水がついており、土器の表面には鉄分が多く付着し、遺存状態は良くない。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期後葉と推定される。

土器集中区の土層模式図

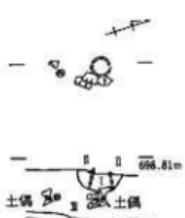


第74図 土器集中区土層図



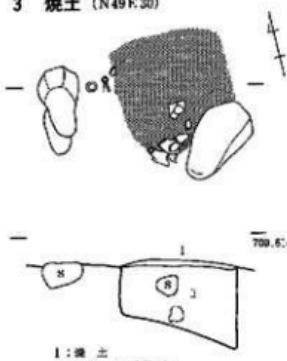
第75図 土器集中区内遺構分布図

1 埋設土器 (N45E30)



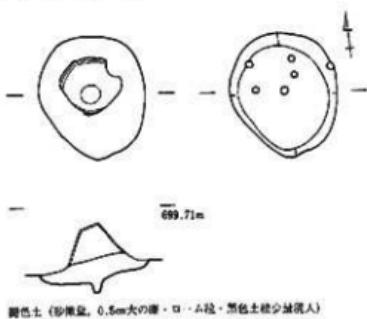
I : 黒色土 (炭化物・砂微量混入)
II : 褐色土 (0.5cm大の砂・炭化物微量混入)
III : 褐色土 (砂・ローム粒微量混入)
IV : 黄色土 (砂微量混入)

3 烧土 (N49E30)



I : 黒 土
II : 黑色土 (小破壊)

5 土坑 (N45E40)



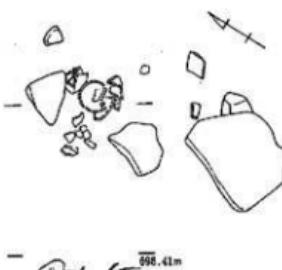
褐色土 (砂微量、0.5mm大の砂・ローム粒・黑色土粒少量混入)

2 炉址 (N41E30)



褐色土 (炭化物・板状多量混入)

4 配石 (N45E20)

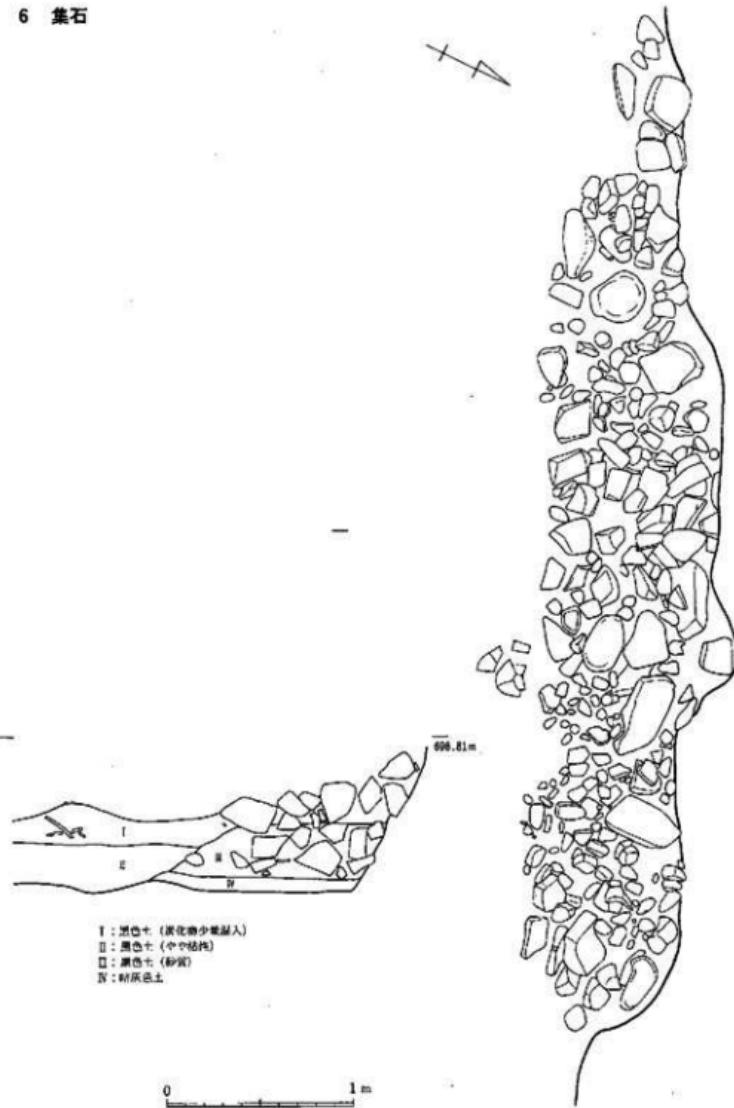


I : 黒色土 (炭化物・白色粒・板状多量混入)
II : 黄色土 (砂・0.5cm大の砂多量混入)



第76図 土器集中区内遺構図 (1)

6 集石



第77圖 土器集中區內造構圖 (2)

4 土器集中区出土の土器

第1群 繩文時代早期の土器（第112図1～第121図281・第138図587）

早期の土器は、前半の山形押型文土器（第138図587）の他はすべて早期末に位置する土器である。第138図587は口縁部の破片である。細久保式土器と推定される。

早期末の土器群の量は非常に多量であるが、層位的には縄文時代中期中葉以降のものと区分できたのみである。またここに提示したものは破片での資料が多く、同一個体のものが、別々になってしまったものがある。この土器群は、在地ないしは、関東系の織維を含む土器の第1類と東海系（関西系を含む）の第2類（第120図213～第121図281・第122図284）の2つに大まかに分けられる。そして第2類の土器群は織維を含むものと、含まないものの二種類がある。

第1類の土器は、ほとんどが在地系のものと思われ、関東系とはっきりするものは少量である。器形はすべて深鉢で、底部へ口縁部に向かって開くものが主である。口縁部は、平口縁と凹形位と思われる波状口縁になるものの二種類がある。口縁端部は尖がりぎみになるものと角や丸でそのままの2種類に大まかに分けられる。口縁部下（底部まで含む）は、段のつくもの、縫帶が貼付されるもの、何もされずにそのまま続くものの3種類がある。底部は、ほとんど207～212のように尖底ないしは丸底になるものと思われる。

1～32・34～113・207～209・211は縄文施文の土器で、縄文のみのものと、縫帶を貼付したり、この縫帶上や口縁部に棒状工具ないしは、竹管によるきざみや押圧、絡条体を加えたものも見られる。113～157は撚糸文、158は縄文と撚糸文、159・160・162・164は縫痕の残る無文、163は細かい条痕文、161は格子目状の沈線の施された土器である。33・115～117・157・165～196は絡条体压痕文の施された土器で、地文に縄文・撚糸文・糸痕文が施されたもの、無文のものがある。これらの絡条体はほとんど、横方向に施されるものが多く、絡条体压痕文土器の中でも新しい傾向の土器である。253は口縁部下に縫帶をもつ土器で、関東地方の神之木台式もしくは、下吉井式土器に類すると思われる。

第2類の土器は、202・225は入海II式、213～217・220・221・223・224・226は石山式、218・227～249・252は天神山式、219は塙壓式の土器である。250・254はへらないしは柳歯状工具により口縁部に斜行沈線が施された土器、その他は条痕、無文の土器で石山～塙壓式のそれぞれの段階にあるものであろう。

この早期末の土器群は、第1類の縄文施文の土器は、長野県東部の所謂「中道式土器」に類するものである。そしてこの一群中には新旧関係はあるものの第2類の入海II～塙壓式の存在を考えるならば、これらの土器は、花積下層式併行といわれているものの、その初瀬は、早期末にあるものと考えられる。

第2群 縄文時代前期前半の土器（第78図1・2、第121図283～第122図287）

神ノ木式土器の特徴を良く残した有尾式土器である。第78図1は台状の上げ底風の底部をもち、

口縁部に4単位と思われる2個の山状の突起をもつ。沈線と連続する刺突文で区画文を施した無縫維の土器である。285、286は縫維土器で、連続する刺突文が施されている。

第3群 縄文時代前期末の土器（第53図1～6、第65図1～第67図54、第121図278～第123図340）

諸磯C式期の新段階～十三番提式期（八ヶ岳西南麓（井戸尻）編年日向II～籠畠I式期、諏訪湖周辺編年晴ヶ峰式期）の土器群である。沈線（竹管文等）を主体とするもの、縄文地のものに大まかに分けられ、浮線文の施されたものも多く見られる。第13、14号住居址の重複関係と、その出土遺物から見て、第14号住居址の諸磯C式期新段階～十三番提式期古段階（日向II式期）と第13号住居址の十二番提式期（籠畠I式期・晴ヶ峰式期）に分けられると思われる。289～304・306・329は前者に、305・307～328・330～338は後者に属するものと思われる。第78図2は前者頃に位置すると思われる有孔土器である。

第4群 縄文時代前期末～中期前半の関西系土器（第71図139・140、第124図349～350・352）

前期末～中期前半の土器群にまじり、いくつかの関西（東海）系の土器が出土している。349・350は大歳山式に属するもの（①）、352は船元II式に属するもの（②）、第71図139、140は船元III式に属するもの（③）と思われる。いずれも焼成は固く、良好な土器で灰色系の色調を呈する。ただ関西方面の土器形式があてはまるものの、直輸入という感じでなく、どちらかといえば飛騨、東海地方でワンランクおいた上器と思われる。この他にも図示しなかったものの北白川下層III式の土器が出土している。本遺跡出土の上器群にあてはめて共伴関係を考えるならば、北白川下層III式は、第14号住居址段階、①は前期末第13号住居址段階、②は中期初頭丸兵衛根II式段階、③は藤内I式段階にあてはまるであろうと考えられる。

第5群 中期初頭の土器

縄文時代中期の土器は慣用に従って、初頭・中葉・後葉の3段階に区分した。初頭からいきなり中葉となるが時間的には連続している。研究の進む中で初頭の内容が豊富になり、時間幅もある程度把握されてきているため、「初頭」という表現については検討を要するところであろう。

本時期に比定される上器は比較的少量で、図示したものは拓影第124図352～360である。ほとんどが後半に位置づけられるもので、縄文を多く使っている。装飾は縫縫と沈線によってなされている。

第6群 中期中葉の土器

この時期の土器は、本遺跡において最も多く出土しており、その大半は上器集中区から出土している。その主体となるのは勝坂式土器であり、およそ、そのすべての時期のものが見つかっている。しかし、一口に勝坂式土器が主体といっても、そこには若干の地域的な変異を内包してのものである。その他の系統の土器としては、平山第三類A土器、斜行沈縫文土器、焼町土器が少量認められ、わずかに上川田式土器の浅鉢などの北陸系土器が存在する。

第1類 勝坂式土器 深鉢形・筒形の器形を大きく（A）横割り区画の土器、無文、縄文のみの土器など、（B）縦割り区画の土器に分類し、さらに時期をI～VI期に分けた。

I期 第78図3・4、拓影第124図361・362・364・366・第126図388

隆線による区画文の形成が始まり、その隆線に沿って、あるいは単独で角押文が施される。量的には中期初頭に比べ増加していく。系統別の比率では、第3類斜行沈線文土器と拮抗している。また、細別段階では中期初頭の最終末から中期中葉I期前半の土器はほとんど認められない。

4の胴部区画文の耳部には、ひねった隆線のわきに円文を貼付している。この装饰手法は斜行沈線文系統に現れるのが早く、勝坂系統ではII期になって採用されるのが一般的である。組成における比率だけでなく、このあたりにも斜行沈線文系統の影響が反映しているといえよう。また3は角押文がかなり乱雑となっており、型式的にはI期であるが、使用の時期はII期まで下がる可能性をもっている。

I～II期 第78図5・第79図6～11

装饰性の薄い土器には、指頭圧痕のみの上器や簡単な突起がつく土器5、7、9、無文あるいは簡単な突起が付くのみで、器面を丁寧になでた土器6、8、繩文を全面に施し、口縁部に貼付文や把手のつく土器10、11が認められる。10には角押文がみられI期である。その他の土器は、胴部下半から底部への移行部分が若干湾曲するものが多く、I期の新しい段階からII期に比定されよう。指頭圧痕を装饰として使用する方法は中期初頭の最終段階で関東地方から伝播し、I期には中部高地にも定着する。これに対し、器面をなでたり、繩文を地文とする手法は伝統的な技法であろう。

II期 第79図12・第80図13～18、拓影第124図363・365・367・368、第125図369～371・374、第126図387ほか

勝坂式上器における横割り区画の重疊というスタイルが確立する時期である。I期に激減していた口縁部の半円形+三角形区画文が復活する。沈線系装饰では、角押文のほかにベン先状や丸棒状の形状が増加し、その手法は押し引きから突き刺しへの変化を歩む途上にある。

上器の全重量はさほど増加していないが、組成における比率では勝坂式土器系統が多数を占めるようになる。一つの理由としては、斜行沈線文土器が勝坂式土器に対して独自性を失い廃れていくためである。なお、斜行沈線文土器とおなじ分水嶺以北の土器としては焼町土器の系統が台頭していくが量的には少數にすぎない。

12は、胴部に綻削り区画文への萌芽と考えられる半截竹管による偽B字文やU字文が認められる。II期の中でも古い段階のものであろう。これに対して、14～17は横円形区画文が底部近くにまで安定した形で存在し、三角押文なども突き刺しに近くなるなど新しい様相を示している。18は八形文が施され新しい要素も認められるが、隆線の使い方は古い様相をとどめている。

III期 第80図19、第81図20～27、第82図28～33、第83図34～39・拓影第125図373・375・379～382、第127図408、第128図426～431、第129図432～437ほか

本遺跡においては、深鉢における器形や装饰のパターンが増加する時期である。また、出土量も飛躍的に増加する。

隆線による区画文が引き続き流行する。区画文内や隆線脇には、キャタピラ文や爪形文に波状沈線が加わったものが主体を占めるようになる。また、集合沈線を使う例も多くなる。以上を基本的な装飾手法とし、いくつかの典型的な類型を生んでいる。

II期に見られた口縁部文様帶の半梢円形+三角形区画文の系譜を引く土器19では、区画内に押し引き文がみられず、充填手法も集合沈線に変わっている。22~25は、口縁部を無文として頸部に一条の梢円形区画文帶を持つもので、この時期に増加する。これらの例は頸部に縄文を施しているが、22のように口縁部に縄文を持つ例も存在する。24は沈線文に、斜行沈線文土器の影響を残している。

梢円形区画文の重置する例には、28・29があり、28の緩やかな波状口縁の継位の集合沈線を施す例は、この時期、松本平の多くの遺跡で必ず見つかる特徴的な土器である。若干新しい段階には、隆線のほとんどを刻むようになる(41)。

縦割り区画文土器が多くなるこの時期には、半截竹管による平行沈線を使って横位の区画文をつくったり(31・32)、蒋線の区画に併用する例(33・34)もみられる。35・36は本来縦割り区画文にはいるべき土器であるが、藻線による単位文を描いたのち、パネル文などを施文するのをやめて手を抜いたものと考えられる。

縄文の使用はII期に比べ再び増加していく。縄文を地文として、すり消し手法で文様を描く土器がみられる(37・拓影第128図427、第129図432ほか)。また、いわゆるゾウリ虫文と呼ばれる棒状貼付文を施した土器38・436・437も存在する。

IV期 第83~87図41~56、拓影第126図389ほか

土器の出土量は引き続き多い。平出第三類A系統の土器が勝坂式土器との融合をはじめ、その独自性がしだいにわかりづらくなってくる。焼町土器は少量ではあるが確実に存在している。

区画文をはじめとする隆線装飾が発達し、前時期に比べ隆線上を刻む傾向が強くなる。また、隆線以外の器面を埋める沈線系の装飾もバラエティーが豊富になる。

II期からつづいてきた口縁部の半梢円形+三角形区画文が、尖起や把手類と連動して崩れはじめてくる(42~44)。梢円形区画文は健在である(43・45・46・55)。区画を埋める手法としては、ペン先状工具によるくさび文が根づよく復活しているほか、交互刺突による連続「コ」字文も増加する傾向にある。口縁部に無文帯を有し、頸部に区画文を持つ土器は姿を消す。同様の器形における装飾は47~50に見られるように、頸部以下に幅の広い文様帶を設定し、抽象文や、縦割り区画文を取り入れたりするようになる。この時期には、平出第三類A系統の独自性が薄れるのに対応して、勝坂式土器の装飾の構成をとりながら平出第三類A土器の特徴を取り入れた例が増加はじめる。51・52は、多くの要素は平出第三類A土器とは異なっているが、口縁部文様帶の4分割と、頸部から湾曲せず口縁部で直線的に立ち上がる器形はその影響下にあるといえよう。53・54も直接的には勝坂式土器の系統にのらない土器である。

V期 第87図~90図57~75・78・拓影第125図378・394ほか

降線による装飾では、新たに増加していく柳形文を除きほとんどの区画文が崩れ、蛇行する隆線文へと変化していく。検討が不十分のため、今回提示した資料の中にある新旧を消化しきれておらず、新しい段階の土器とVI期との境が不明瞭になってしまった点、ご容赦願いたい。

57～60は、口縁部区画文が崩れてしまった状況をよく示している。57は隆線に厚みがあり、42にみられた突起下の区画をかろうじて残している。58はさらに崩れており、新しい段階の土器である。

62～64、66・67は、平出第三類△の系譜にある4単位の直立する山形口縁を有し、柳形文などをもつ土器群である。この前後の時期から増加し、勝坂式土器の中で主体的な位置を占めるようになる。V期に入れてあるが、それぞれの六船は若干前後する可能性を持っている。71はV期に入れるすれば非常に新しい段階のものである。

65・69は同一系譜にある土器である。隆線状のきざみが取れ、沈線形の装飾もラフになってきている69が新しい。70はこれまでにない系譜の土器であり、VI期の76・77につづいていくものであろう。73・74は調下半部を欠損しているが、そろばん玉状の屈折底を持つ土器と思われる。

VI期 第90図76・77、第91図80～82ほか

本遺跡では、柳形文の残存形態以外の区画文が姿を消す。勝坂式土器の基本的な構成の方法である横位に区画文を重量していくスタイルが崩壊し、狭い区画や文様帶を取り外して運動する文様が主流になってくる。

76・77は、刻みを持つ2条一組の隆線が、口縁部と胴部で各々横方向に展開している。口縁部と胴部を分割するラインが明確に示されていないため、固定的な分带の印象が薄れ、流動感がある。隆線以外の部分に装飾が施されていないのも特徴的である。中信地方特有の土器であろう。80は柳形文の系譜を引く土器である。81・82同様、口縁部文様帶が、区画よりも横方向への連続性を主眼にしてきている。

次に第1類とした勝坂式土器の中でBとした一群をみていくことにする。これらは、いわゆる嵌込み状のパネル文をもつ一群を括した。文様の割り付けが、通常土器の上から下までにおいて、「横削」区画の土器の一群とを区別した。口縁部文様帶が横削区画土器の文様、胴部文様帶が縦割区画土器の文様というように同一個体に両者が共存するケースも多く、それらは適宜分類した。以下、パネル文の中に施文される文様要素によりa～dとその他のeに項目を分けて配述をすすめる。

a. パネル文内に刻み目を施す一群 第92図90

図示されたのは90の1点である。底部から胴部にかけての破片で、胴部上半・口縁部ではなく、全体の構成は不明である。平行沈線を上から下へ引き、それを基本としてパネル状の方形区画を構成する。文様帶区画の基本となる平行沈線に爪形状の刻み目を施している。パネル文状の区画は例えば93のように四角を形つくらず「H」(くずれB字文)のようにして四角形を完結した形にはしていない。くずれB字文を棒状工具によって描き、区画状にしてできた空白部の沈線ぎわに爪形状刻

み日文を施す。ほかに図示されない破片資料が数点ある。

b. 縄文を施文する一群 第92図89・第93図92・93、拓影第127図414・第128図416

区画内に縄文を施す一群を一括する。89は、区画文を配置する前に付けられる隆帯（以下「基本隆帯」と呼ぶ）ではなく、平行沈線によって描き出される。くびれた脚部上半に半梢円区画をひき、その下に三角形区画を合わせて菱形区画をつくっている。92は基本隆帯を「」状に器面を2単位に配し、区画部の割り付け基本としている。パネル状区画は不整形で、またB字状に内側に沈線を入れてアクセントを付けている部分がある。90のくずれB字文と似ているが、区画線は引き放しではなく、見た目で一筆書きできるように区画が閉じている。90でみた区画内の周辺に爪形状の刻みを入れる区画がある。このほかパネル文区画内に文様要素に温泉マーク文「△△」がある。93は刻み日のある基本隆帯を口縁部から底部近くに至るまで、上から下へ直線的に貼り付け、1単位の割り付けとしている。口唇部には「肩章文」を表現する。パネル区画文は長方形あるいは台形を縱に並べている。

c. 斜位沈線を充填する一群 第92図91

斜位沈線のみを充填する一群で91の1点が図示される。割り付けのもととなる基本隆帯を上から蛇行させて垂下する。充填文様は斜位沈線のみの1種類で、鋭く切るようにして沈線を斜めに入れている。

d. 温泉マーク文を施す一群 第93図94・95・98拓影第128図415

94の基本隆帯は92の配し方と同一である。パネル状の区画内のほとんどを温泉マーク文によって占められるが、一部の区画内では交互に三角状に削除することで「」状（連続大形「コ」の字）の文様を描出しているところもある。98は全形を知れないことから基本隆帯の形状は不明であるが、J字文を基調としている。キャリバー状になる口縁部文様帶は縦位の沈線と連続大形「コ」の字風の文様によって施文される。胴部文様帶の区画内は温泉マーク文を基本として、空間には竹管状工具による円文、ヘラ状工具か棒状工具によって三叉文を深めに刻んでいる。98の基本隆帯は、M字とそれを逆にしたW字を上下に合わせた形状をひとつ割り付け単位とし、またひとつにはJ字に垂下する基本隆帯を割り付けの単位とする。区画内に温泉マーク文を入れるが、一部は省略している。棒状工具による沈線によって三叉文を描く区画もある。

e. その他…第93図96・97、第94図99～102、第95図103～106、第96図110ほか

このほかのものをここに一括しておく。縦位沈線文を多用し、横位沈線、連続大形「コ」の字文などをもつ100・103、c・dにまとめた斜位沈線と温泉マーク文の両者を施文する97・99・102・103、一部に交互刺突文をもつ101・109・110、短めの沈線で埋める96・110、横位の沈線を主体とする105・106などがある。

以上を簡単にまとめておく。aとした刻み日文を有する土器は中期中葉第II期に対比される。用いられた爪形状の刻み日文は、三角状に器内を削り取る刻み日文や短めの刻み日文よりは新しい要素であ

り、II期の中では新しい土器といえる。このほかII期として捉えられるのは、拓影第114図59と96が図示できているのみである。bの縄文を区画内に有す一群は、II期とIII期に多いが、今回の出土遺物はいずれもIII期に属するものである。c群は単純な形状の区画を配置し、斜位沈線文1種類によって充填させる構成でIII期に属する。b群の縄文の条を斜位沈線文に置き換えた形とも言える。このほかd群やe群にみられる連續大形「コ」の字文(94・98・103)や円文(98)は、本来横割区画文土器に施文される文様要素で、縦割区画文土器ではIII期に多くみられる要素である。交互刺突文(101・109・110)も横割区画文の文様要素であり、IV期・V期にみられる。V期の109・110は、基本溝帯によって縦割区画の割り付けをみることができるが、既にパネル状の区画ではなく、棒状工具による施文がほとんどで、半截竹管状工具による半降起線文は認められない。

第2類 平出第三類A土器ほか 平出第三類A土器に属する土器及びその系譜を強く引いている土器をAとし、平出第三類A土器や勝坂式土器の規範を逸脱しているものの、半截竹管を使った平行沈線による波状文を施している土器をBとした。

A 第96図111～116、拓影第130図452～457

勝坂式土器の変遷とは必ずしも符合しないが、時期の分類はなるべく第1類に合わせて記述していくこととする。I期と思われるものには、池文に縄文が施された111があげられる。平縁の口縁部に4単位の棒状突起が付くタイプである。頸部以下には縦位の集合沈線が密に、しかも単純に施されている。

II期あるいはその前後の例としては、口縁部が欠損しているため断定はできないが112があげられよう。頭部と胴部の境界に連續状隆線がみられる。頭部の継位沈線、胴部上半の横円形沈線、胴部下半の垂下する沈線は平出第三類Aの典型的なタイプである。

II～III期の例としては、第96図113・114、拓影第130図452・455があげられる。胴部の逆U字文の幅が広くなり、文様帶の境界に連續状隆線が多用されるようになる。しだいに施文方法が荒くなる傾向がうかがえる。写真図版30AはIV(III)期の例である。口縁部文様帶が幅広になり、頸部以下の沈線装飾が姿を消していく。勝坂式土器との融合から生まれる横形文土器に近づいているといえよう。また、400は同時期の伊那地方に多くみられる、平出第三類Aの系譜をひくものである。横形文土器については、第1類に入れて説明をおこなった。

B 第96図117

折り返し口縁に、平行沈線がみられる。第2類に入れたものの平出第三類A土器とはかなりかけ離れた土器である。

第3類 斜行沈線文土器 第97図118・120～122、第98図123 分水嶺以北に分布の主体を持ち、斜行する沈線文を多用する土器を代表とする一群である。今回出土した例はI期の新しい段階からII期の古い段階にともなうものである。

斜行沈線文土器は、本米横位の横円形区画文の上下縫が、勝坂式土器の半分程度と細長い場合が

多い(121)。ところが、Ⅰ期の新しい段階になると、勝坂式土器の影響をまとめて受け、横円形区画文の上下幅が勝坂式土器に近い形をとるようになる(120・122)。

区画文以外の特徴的な隆線装飾としては、胴部下半の逆U字状を尾する懸垂文(119・122)。区画文耳部に付くひねり状隆線+円形貼付文(123)。後に焼町土器につながる眼鏡状や環状の結節部をもつ蛇行隆線などがある(123)。

沈線系の装飾としては、斜行する集合沈線が最も特徴的である。これ以外には122に見られる波状沈線と垂下する沈線の組み合わせ、波状沈線と刺突文の組み合わせなど。あるいは、隆線脇にいつたん沈線を施した後に、その中を連続刺突していく手法がみられる(118)。

第4類 曲隆線文土器 以前、塩尻市焼町遺跡第1号住居出土の土器から、独特な文様構成・手法をもつ個体に注目して抽出され、「焼町土器」と略称されたことに始まる一群の土器を一括する(拙稿:野村 1984)。またその拙稿の中(P160・註28)で、「後田原遺跡IV類土器」として内容を改めてまとめ直して注目した一群の土器も本遺跡で出土しており、ここでは「曲隆線文土器」の項目に括ってまとめて報告する。なお、以下「後田原遺跡IV類土器」とは、その小論で列挙した3遺跡例を代表とする類型の土器群を指し、岡谷市後田原遺跡報告時本来の「後田原遺跡IV類」とは一部内容を異にする。

第99図125、第98図126は、4ヶ所を凹状にした波状口縁部を有す土器で、口縁部文様帯と胴部文様帯に分離される。2点とも縄文を地文としている。125は口縁部や頸部の隆帯に沿ってやや幅広の押引き沈線文を1条ないし2条併走させ、粘土紐による環状貼付文から波状沈線を施文する。胴部は隆帯が垂下し、環状貼付文などをもって再び垂下すると思われるが、環状となる円形文様は欠損してみることはできない。波状沈線とそれから垂下する沈線が認められる。126は上口2つの文様帯に曲隆線が貼付され、それに沿って2本の沈線が引かれる。うち1本を押引き沈線文とする部分も多い。不整形な区画内には三叉文が器面を割り取るように施されている。130は口縁部が欠損するが、これらと同様に波状口縁部をもつ一群と思われる。曲隆線に沿って沈線文が施され、押引き手法は認められない。また地文に縄文をもたないのが特徴である。

第98図127、第99図128・129は細い口縁部文様帯と体部文様帯からなり、127・128は平縁、129は平縁に環状突起が4ヶ所に付加された形となる。128は地文に縄文を施すが、地文様を垣間見ることのできる区画は少なく、隆帯に沿って幅の狭いヘラ状工具か棒状工具で2条ないし3本の沈線文や三叉文・玉抱き三叉文をいれて充填している。口縁部文様帯は幅が狭い。127も128と同様に口縁部文様帯が狭く似た構成をもつが、地文に縄文を施文せず、沈線文が発達する。129は隆帯に沿って沈線を入れ、玉抱き三叉文から派生した円文がみられる。円形の区画内には列点文がみられ、縄文は施文されない。胴部文様帯の下部は無文帯となる。

第100図133~135は体部文様帯からなり、口縁部に4ヶ所の突起が付く。135は129の口縁部文様帯を省略したような構成をもち、沈線文や円文・列点文などによって充填され、環状突起をもつこと

や副部下半を無文帶とすることも同じである。133・134は口縁部破片で、全体の文様構成は不明であるが、隆帯に沿って施文される沈線文のみによって文様が充填されてしまうため、135と比べて文様施文に対して駆使される技法が少ない。

第99図132は、隆帯を波状に貼付することによって三角形を表現する区画が、上からJ字形に下がる形態である。胎土は精選され、色調も他より橙色であることから、搬入された土器であろう。

以上より、125・126は後田原遺跡IV類土器に対比され、133は拙稿による焼町土器1類に、133・134は3段の文様帶は形成されないが、文様要素より2類に各々分類される。127～129は、文様変遷から128→127→129が想像される。127は焼町土器1類に分類されてもよいと思われる。また後田原遺跡IV類土器と焼町土器との関係について、拙稿では共通要素を指摘しながら、相違する要素も加味して別の系統と想定した。また山口逸弘氏は、後田原遺跡IV類土器を群馬県新治村新巻遺跡出土資料を指標として「新巻類型」と呼んでいるが、氏も「新巻類型」と「焼町類型」については別の系統と考えている(山口 1989)。しかし、128の資料が後田原遺跡IV類=新巻類型からの変化と考えられれば、別系統の土器からの影響を考慮しつつ、焼町土器-焼町類型が後田原遺跡IV類=新巻類型から派生した形態と考えることも可能である。但し、もとより本遺跡の資料は層位的な裏付けに欠けることから、実証的な資料の検索が必要である。なお、125・126は勝坂II式期に、129・135はIV式期に、133・134はV式期に併行する。

参考文献

- 野村一夫 1984 「塩尻市焼町遺跡第1号住居出土土器：その特徴の位置付け」『中澤高地の名古字』Ⅲ
山口逸弘 1989 「群馬県新治村における绳文時代中湖面での土器基盤」『群馬県考古学研究会報告書』8集

第5類 深鉢以外の器形 中期中葉の土器には、深鉢以外の器形として浅鉢形土器、有孔鉢付き土器、カップ形土器などが存在する。

浅鉢形土器は、その大半が勝坂式土器系統に属する第100図136～138・第101図139～145・第102図146・拙稿第130図444～448。幅の狭い口縁部の外面に押し引き文の見られるものが古く、時期が新しくなるに従って口縁部文様帶が広くなり、文様も豊富になってくる。

勝坂式土器以外の系統としては、第103図147の上山田式土器が存在する。器厚が薄く硬質にできているほか、口縁部の肩曲が極端になっている。

有孔鉢付き土器は、先形に近い凸型品第103図151のはか数点が出土している(第103図148～150、拙稿第130図450)。また、台の付くカップ形土器(第103図153)は、勝坂式土器の第IV～V期に比定される。

第7群 中期後葉の土器

第1類 体部に櫛形文をもつ一群 第104図155・158～160

中期中葉第VI期にみられる櫛形文を有す一群から変化したものの一括した。口縁部文様帶は隆線文及び沈線文が併用される。

155は櫛形文区画内を横の沈線文で埋め、一角に渦巻文が配置される。通常勝坂式土器にはみられない文様構成である。口縁部文様帶は隆線文を配し、押引き文などで施文される。口縁部文様帶と櫛形文区画帶の間は、沈線を縦に引き、粘土紐2本を捻った螺旋状の突起が貼付されるのみで、基本的には無文帶とする。159は隆線によって文様がつくられるのみで、口縁は残存部から波状になると思われる。器面は横方向のなでがおこなわれる。160は櫛形文内を横と縦の沈線文で埋め、櫛形文同志を沈線で結ぶ。

第2類 沈線文を多用する一群 第104図156・157・第106図168～175・第107図177～179・181・183・184・186・187・第108図188・191～194・拓影第132図468～477・479～483・第133図486～第134図506・第135図510・511・514～518・524・第136図529・530

沈線文で器面を埋めていく一群を一括した。通常隆帶や隆線文が併用され、その中を充填していく一群である。この条線文からなる破片や、櫛描波状文の資料も一括して報告する。

57は曾利I式期に属す資料で、口縁部文様帶に粘土紐による4単位の突起がつくられ、その間に隆帶によって縦に貼り付けている。突起は勝坂式土器にみられた蛇状突起から発生したもので、胴体にあたる隆帶が垂下する。胴部文様帶や隆帶によって割り付けられ、沈線文が縦と横に整然と施文される。胴部下半は無文である。本例の胴部文様帶は、1類とした155の土器の無文帶が広がって縦の沈線文などによって施文された形態で、櫛形文は既に消失している。156の胴部文様帶と同様なものが172・174・187で平行隆帶文の空白部には爪形文や列点文によって丁寧に埋められる。157はくびれた頸部に縦の短い粘土紐が崎巒に並べられている。残存部から口縁部文様帶には沈線文による重弧文をみることができる。重弧文をもつ一群としては168～174などがあり、このうち171・拓影471は隆帶貼付によって表現され、ほかは沈線文である。重弧文をもつ土器はほとんどが曾利I式期からII式期に併行する。口縁部文様帶に隆帶が発達したものとしては拓影476があり、葉脈のような文様となっている。また粘土紐を貼付することによって口縁部に突起をつくるものとして181などがある。

175は隆帶を縦長の輪のようにして胴部に貼付し、その上端のくびれた頸部に隆帶を一周するように貼り付けている。口縁部分の破片はないが、無文帶になるようである。割り付けられた胴部は一定の幅で横に沈線文を入れ、最後に縦に沈線を長く引く。深鉢形土器の把手資料には176～180・183がある。178は大形の把手を向かい合わせに2個、小突起を2個もつ。177は先の尖った工具で丁寧に刺突を行なって施文されている。これらはおよそ曾利II式併行期として捉えられよう。

193・拓影514・515・518は隆帶をほとんど用いず、沈線が主体となる土器である。逆U字状などの区画の中を逆V状の沈線が施文される。口縁部が波状となるものと、平縁になるものがある。これらはいずれも曾利V式期として把握される。

このほか、拓影510は条線によって器面に施文される。拓影524はさらにそれを難にしたようなもので、縁が明瞭ではなく、器面調整のためにつけられた感が強い。511は櫛描波状文を縦に描く

個体で、上から下へ途中で止めることなく長く引いている。181は曾利式期の中頃の資料で、223は末期の土器であろう。拓影529は曾利式の古手の番炉型土器、拓影530・第109図199～201は釣手土器である。

第3類 繩文を多用する一群 第104図162・第105図163～165・第108図189・190・192・194・第111図217、221・223・拓影第133図468・第134図507～509・第135図519～523

繩文地文もしくは充填する土器を一括した。163～165は曾利式土器（梨久保B式土器・唐草文系土器）にみられる粘土紙を転用した一群である。164・165などは地文の繩文を沈線文に置き換えれば175など2類に分けた土器と近似し、加曾利E式土器系統の189・192・194・拓影507とは異なる。154も加曾利E式土器とは趣を異とし、頸部付近の環状突起の間には三角状に尖らせた隆帯に沈線を入れている。台付鉢であろう。192は無節の繩文によって施文され、沈線区画により無文部と施文部が交互に設けられている。193と同時期くらいに比定されよう。189・194は無文部がなく全面に繩文が施される。189の日字文は4単位あるが、蛇行沈線文は1ヶ所にのみ施文している。192よりは古い時期として捉えられる。190は隆帯U字に貼付するもので、U字隆帯の内側は無文となる蓋である。223の残存部の上端はやや直線的に上がるようであり、浅鉢と思われる。拓影485は全面繩文施文で、沈線により文様が創造される。中期後葉の中では古手に位置付けられよう。195は人形の器台、197・198は台付土器の脚部である。

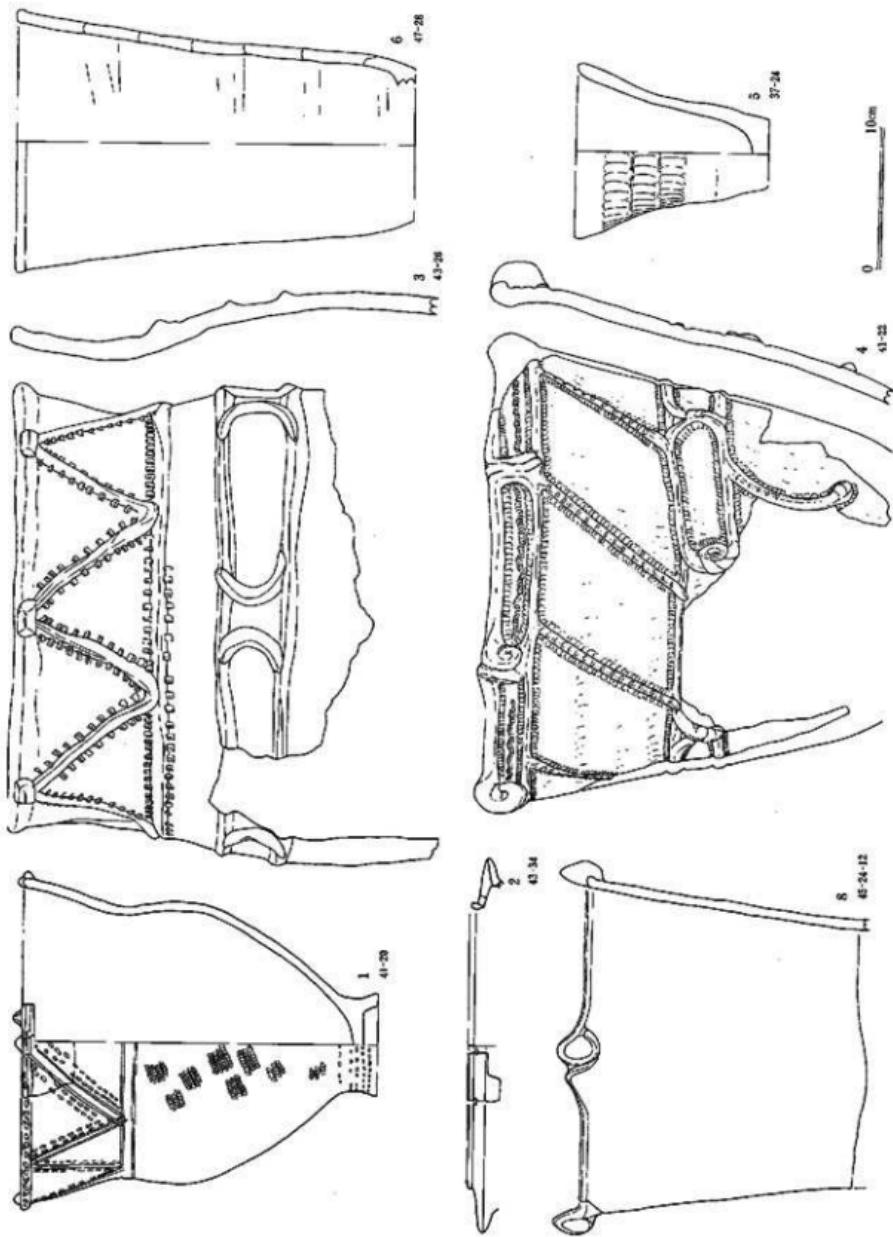
以上の遺構外資料からは、中期後葉の土器は勝坂式土器から連続して曾利I式・II式期の資料が存在していることが知れる。住居址が営まれていた曾利III式～V式期の土器が少ないと対照的である。また繩文が施文される土器は全体量からは少ない。

第8群 中期末葉から後期中葉の土器

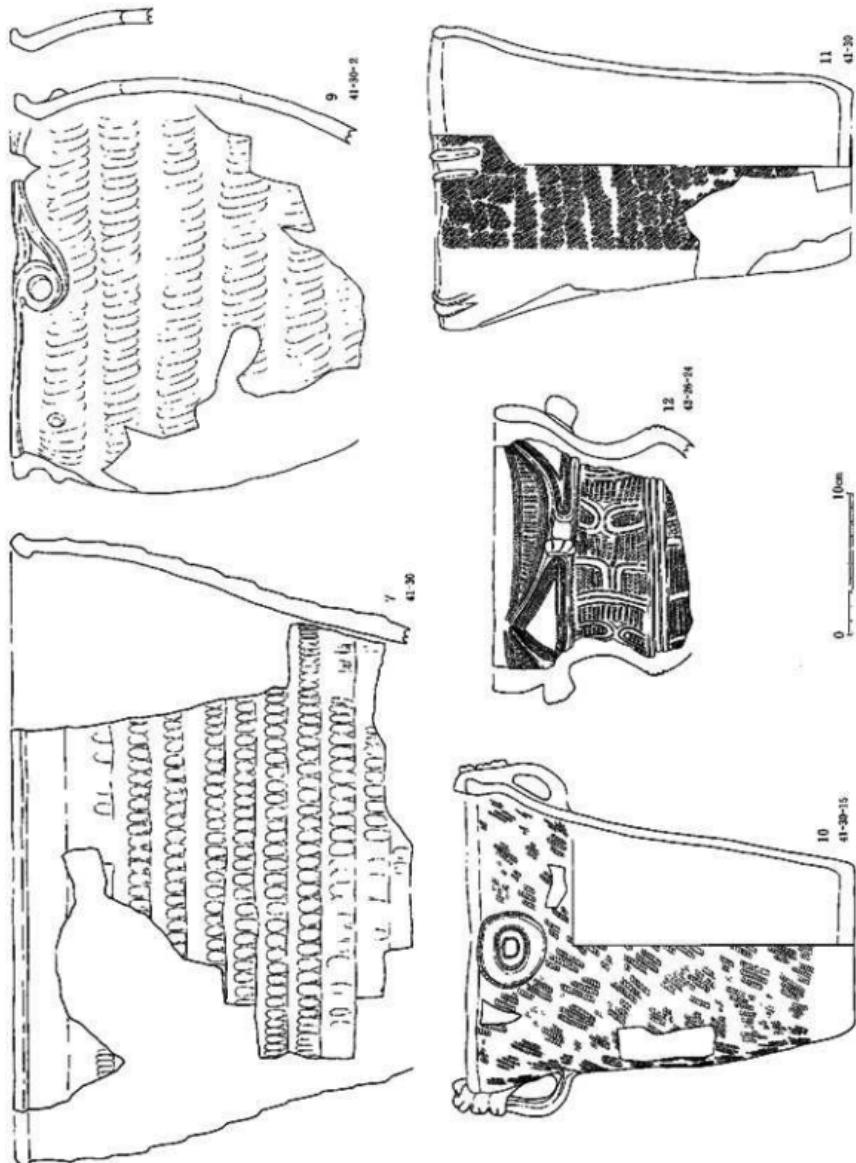
中期終末から後期中葉の土器を一括した。全体の量は少ない。第109図204～第110図210は中期末～後期初頭に位置付けられる。第109図202・203拓影第136図533～第137図550・554は後期初頭の称名寺式土器である。拓影第138図569～573は称名寺式もしくは堀之内式に属すると思われる。第110図211～213・215、拓影第137図551・553・555・557～第138図567・573は堀之内式土器である。213は表面を漆と思われる赤と黒の顔料で塗装している。第110図214・216・拓影第138図574・575・578～581・585は加曾利B式土器である。拓影第138図582～584は後期に属すると思われる在地以外の土器を一括した。

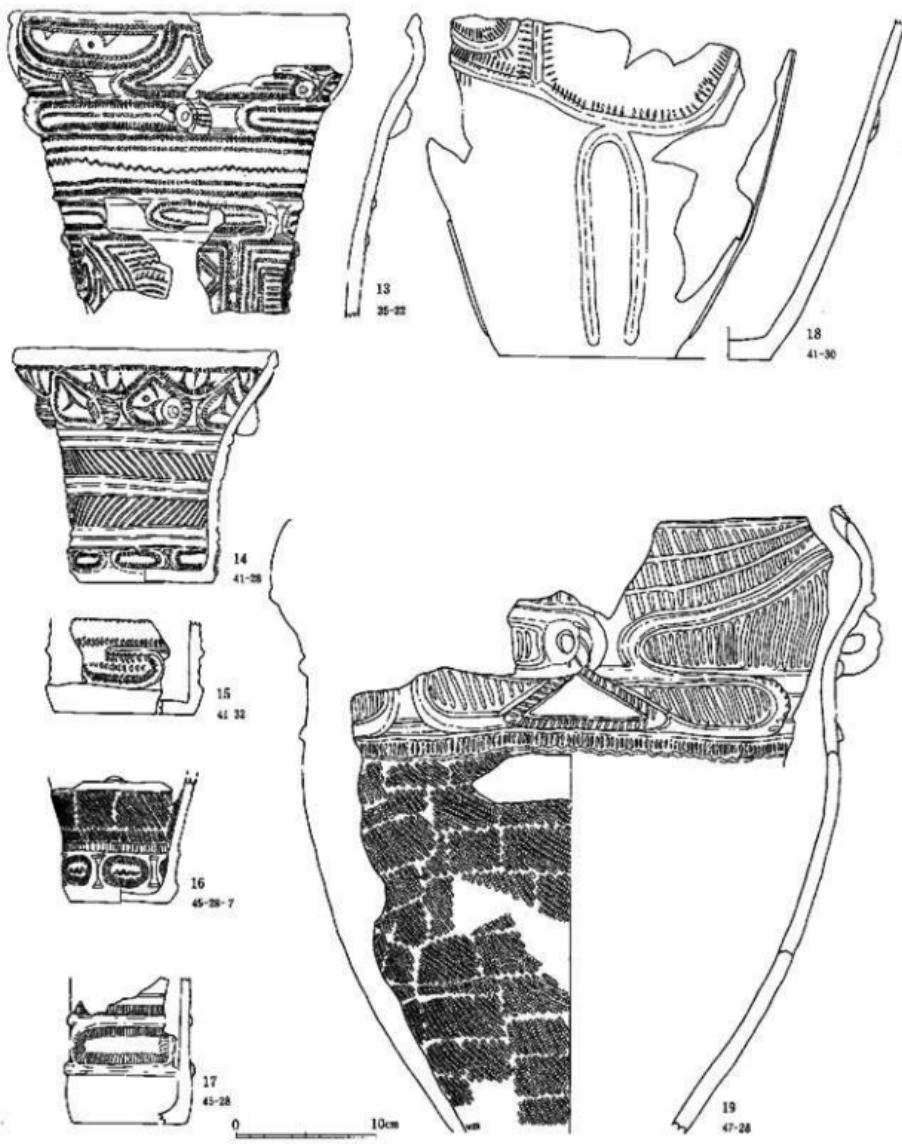
補遺 写真実測等の都合により図版作成、原稿執筆後に図化できたものである。第111図218・219は第6群第1類Bに属する。218がIII期、219がII～III期に属する。

第78圖 土器集中区出土土器実測図 (1)

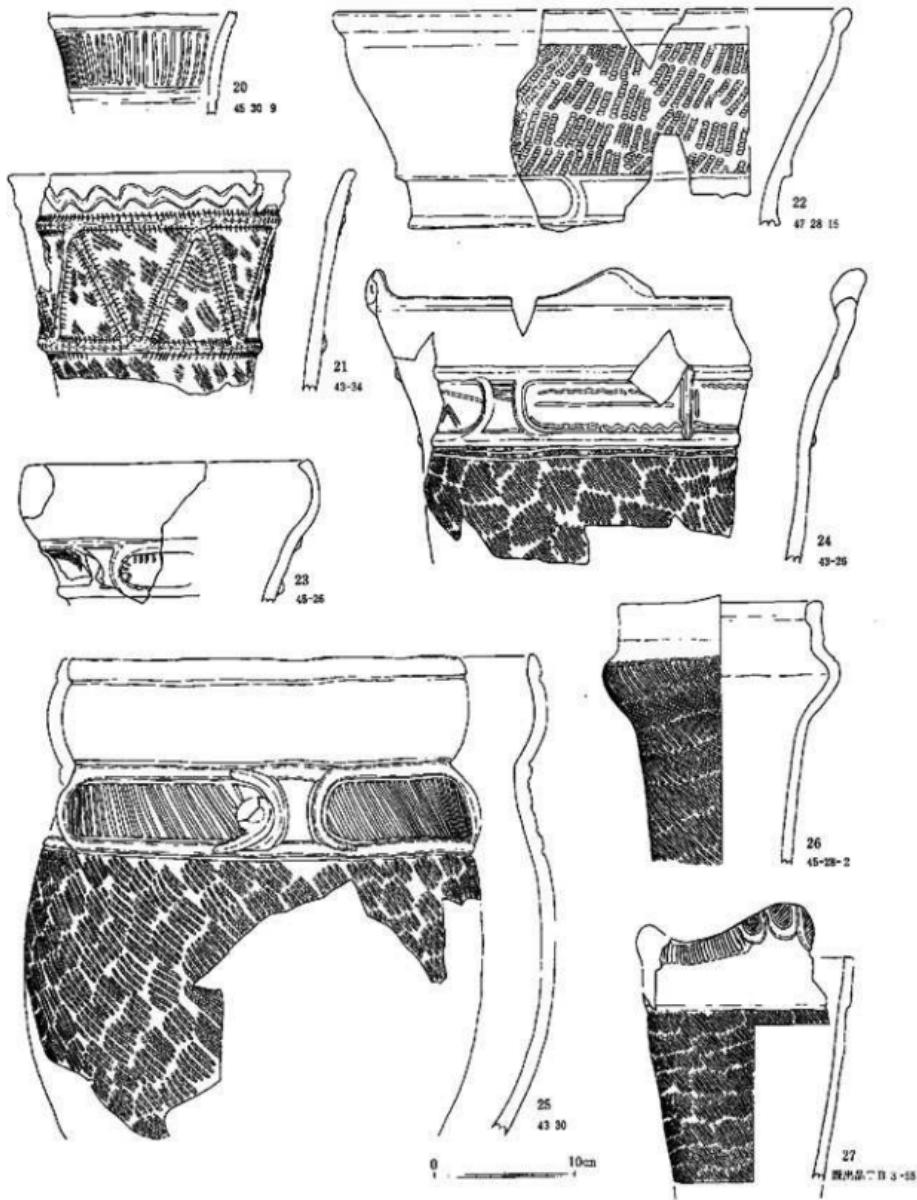


第79図 土器集中区出土土器実測図 (2)

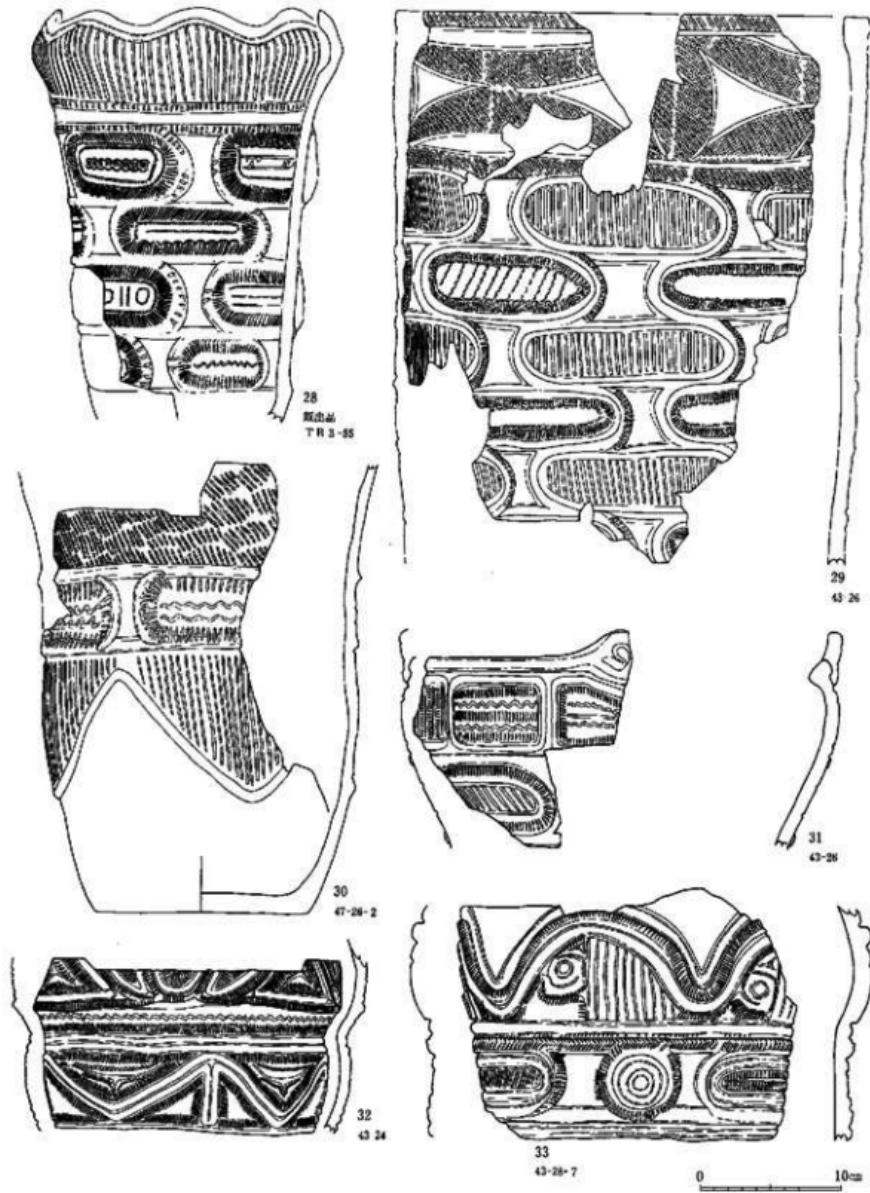




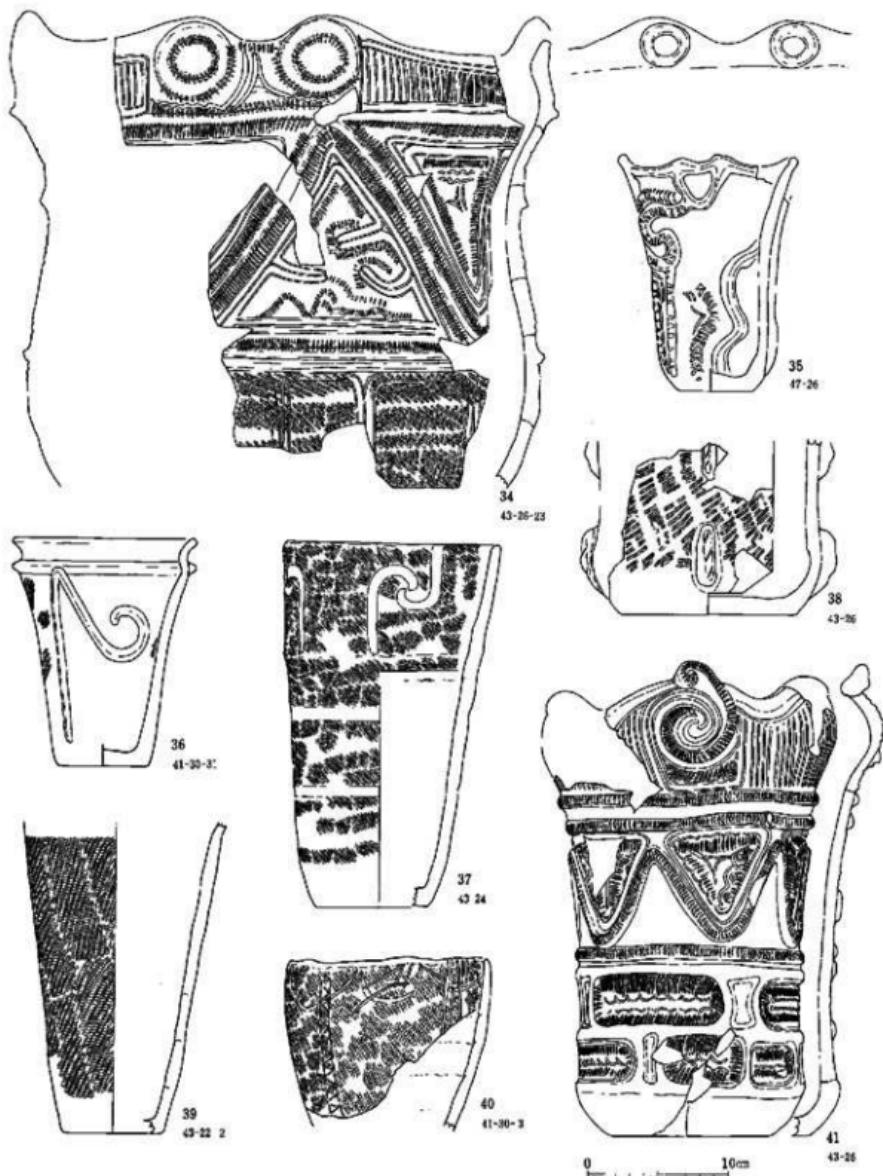
第80圖 土器集中区出土土器実測図 (3)



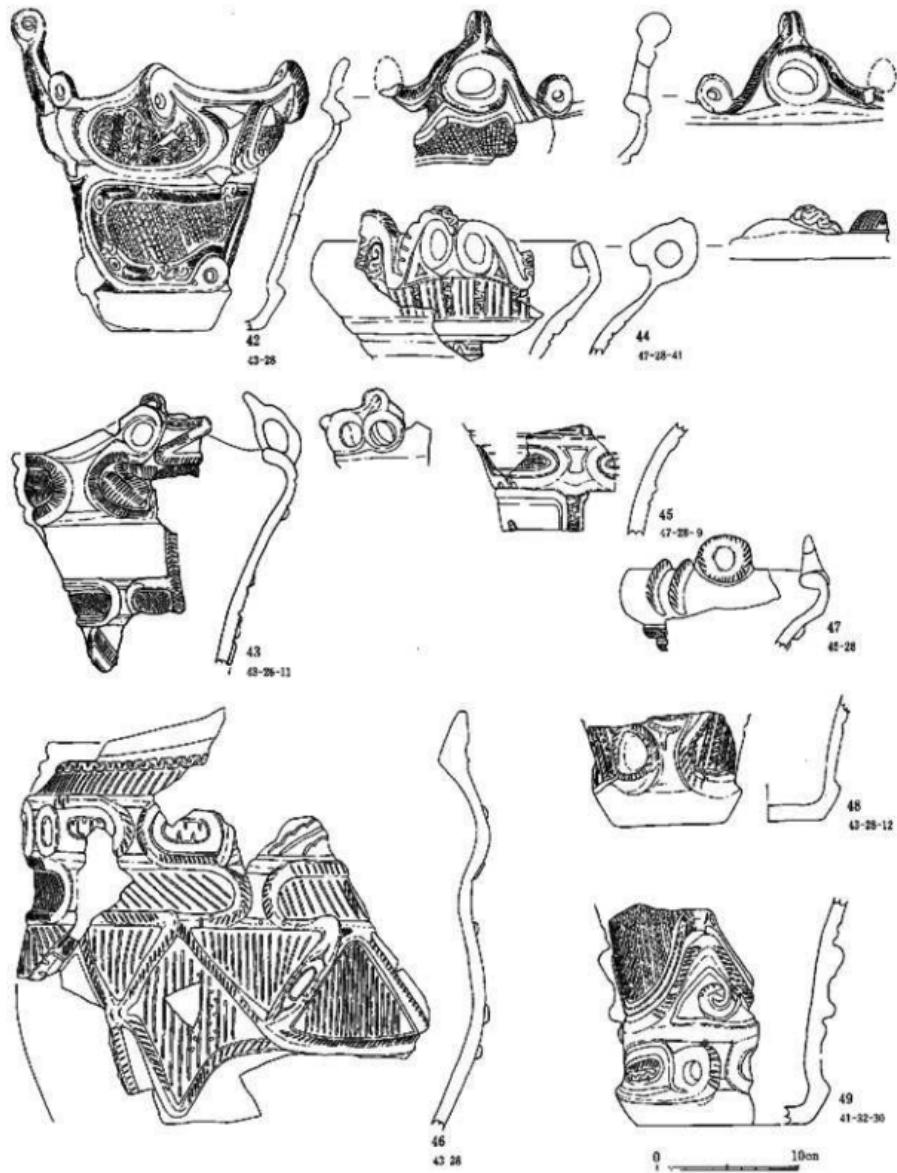
第81図 土器集中区出土土器実測図 (4)



第82図 土器集中区出土土器実測図 (5)

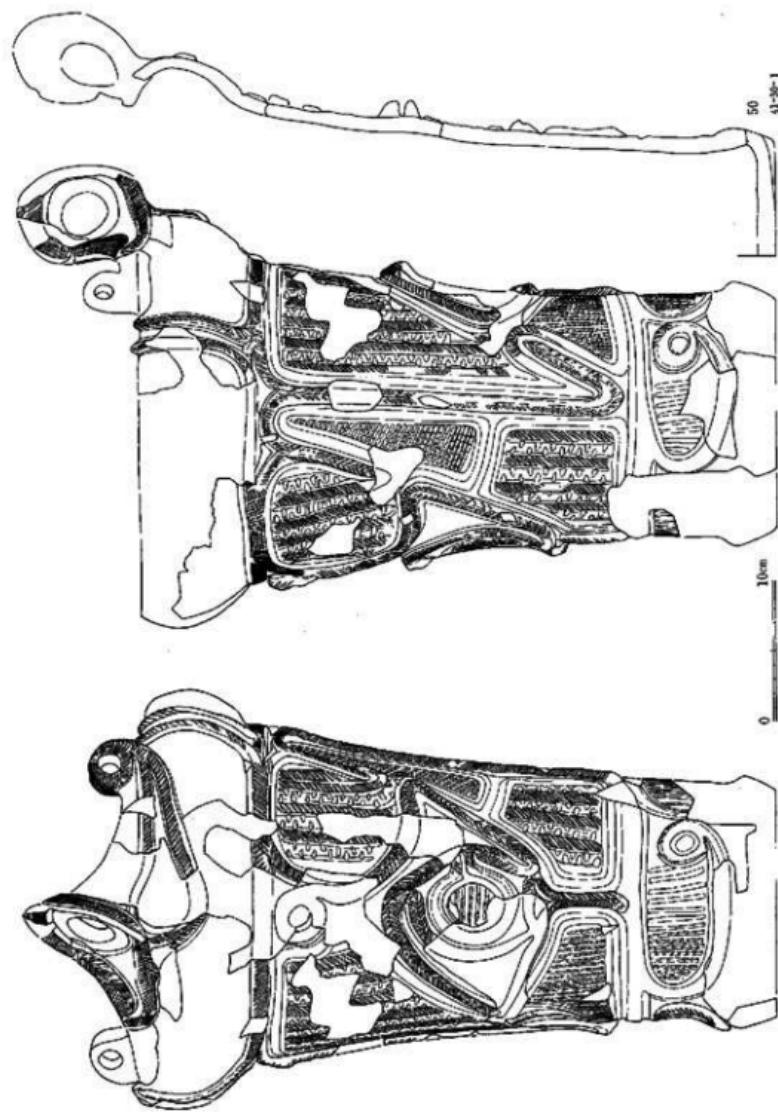


第83図 土器集中区出土土器実測図 (6)

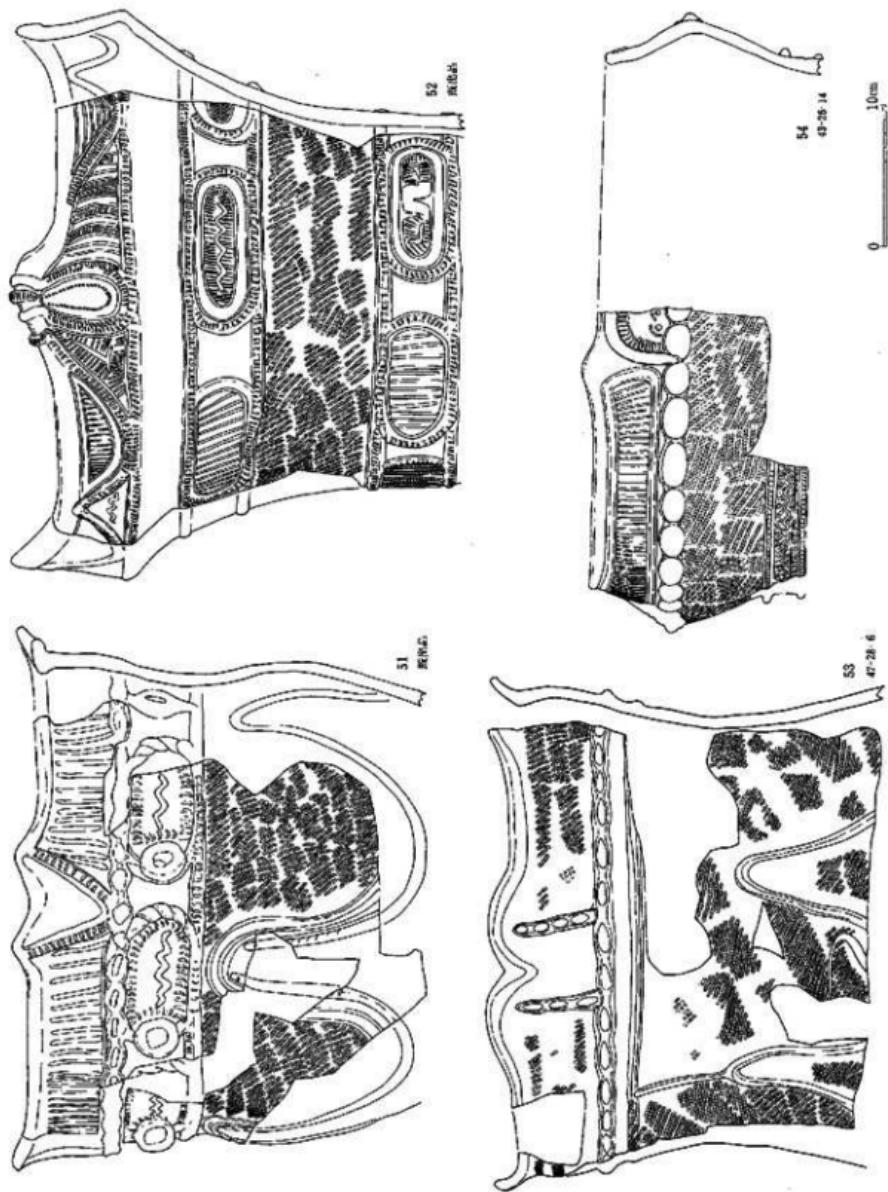


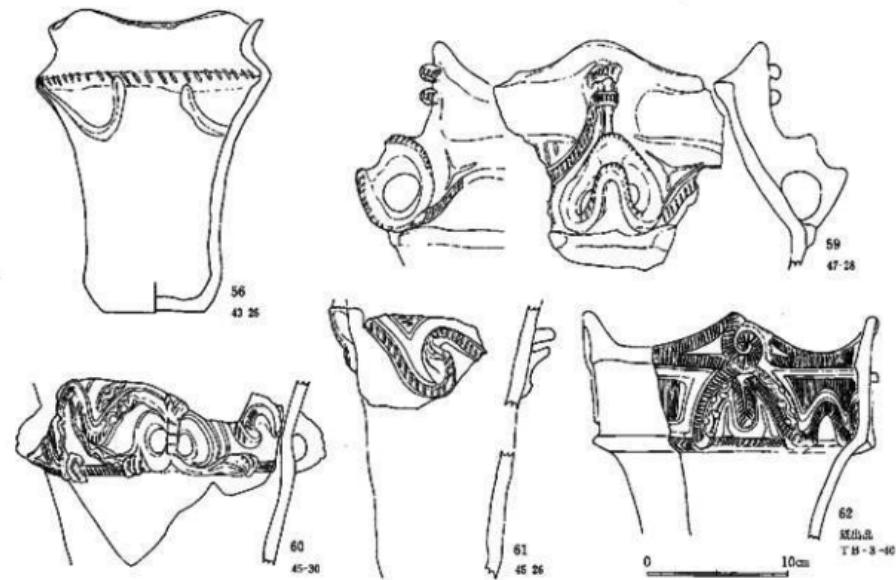
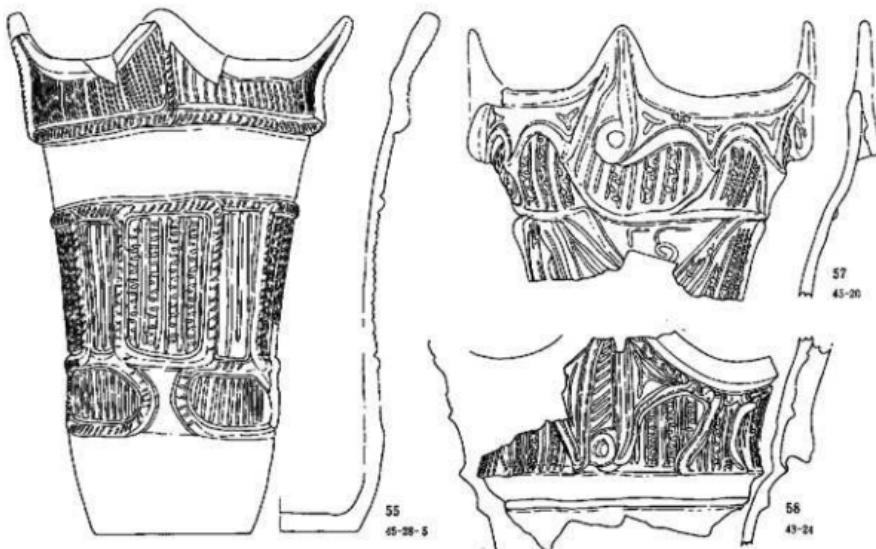
第84圖 土器集中区出土土器実測図 (7)

第35图 土器集中区出土土器素描图 (8)

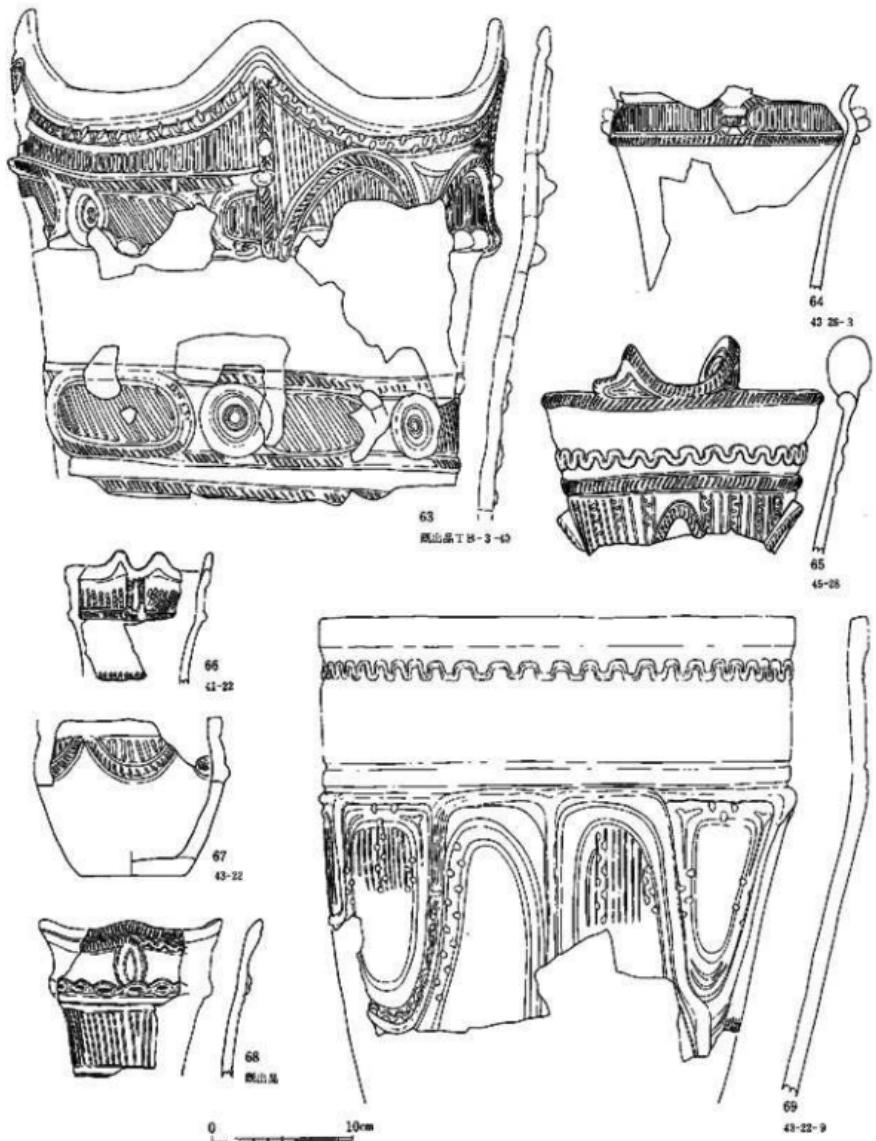


第86図 土器集中区出土土器実測図 (9)

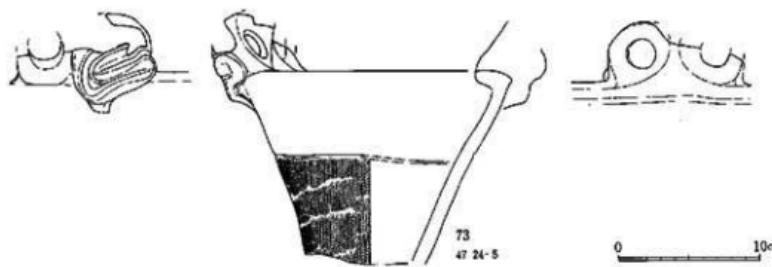
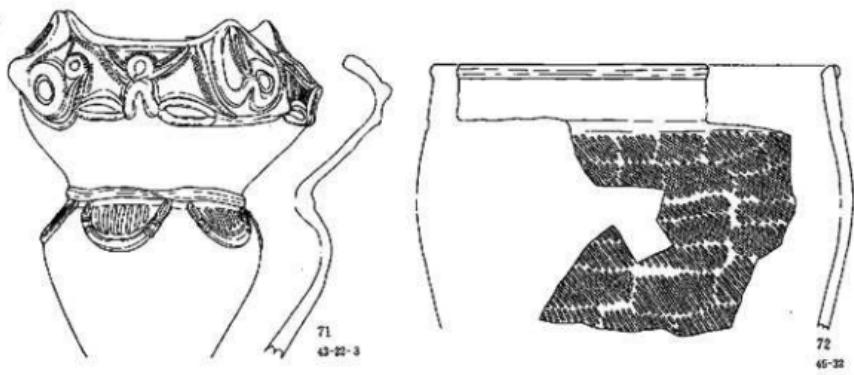
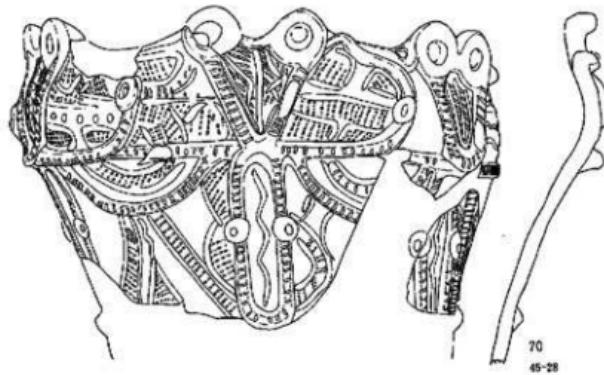




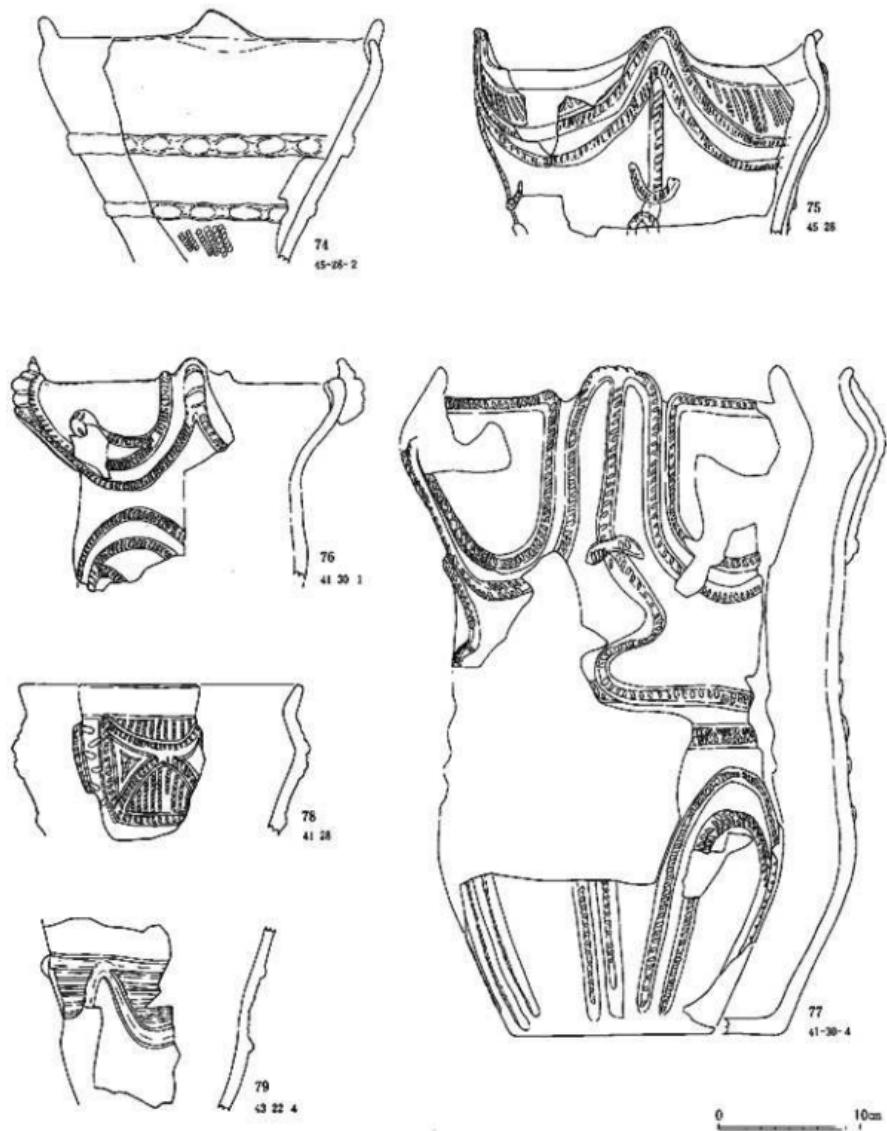
第87圖 土器集中區出土土器實測圖 (1)



第88图 土器集中区出土土器实测图 (1)

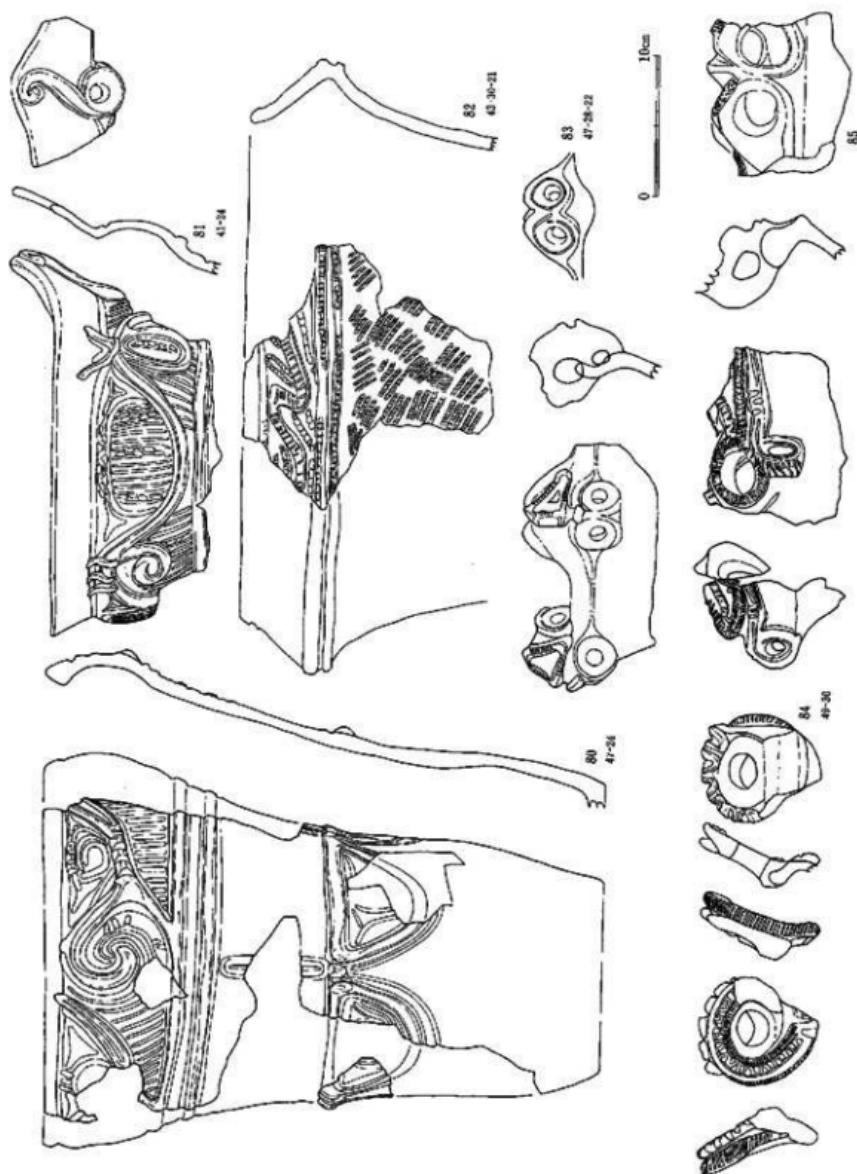


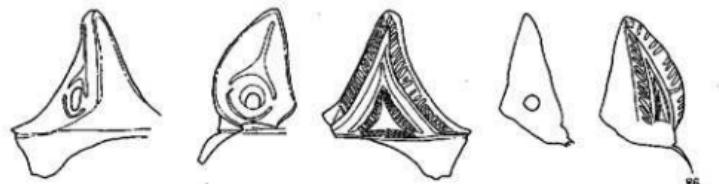
第89図 土器集中区出土土器実測図 (12)



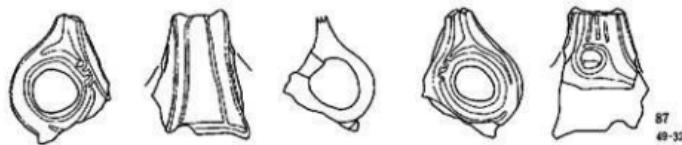
第90図 土器集中区出土土器実測図 (1)

第91図 土器集中区出土土器実測図 (14)

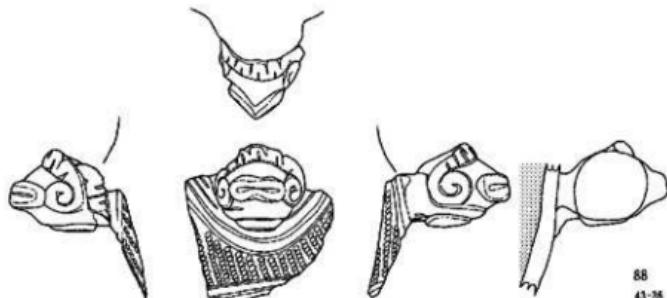




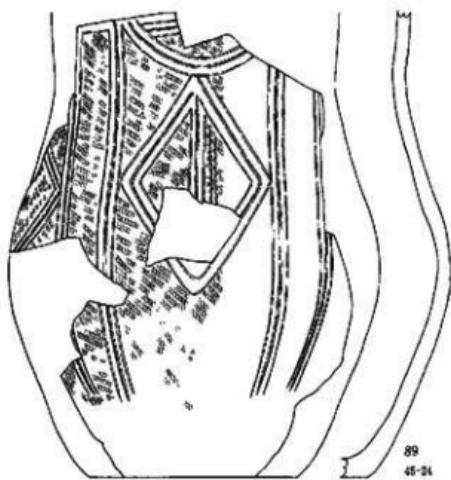
86
45-54



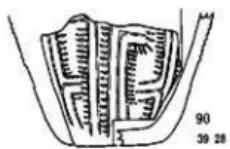
87
49-32



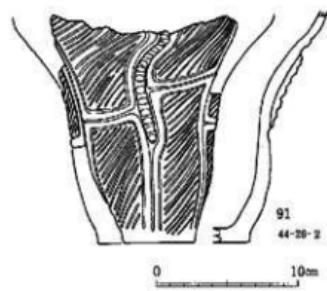
88
43-35



89
45-24



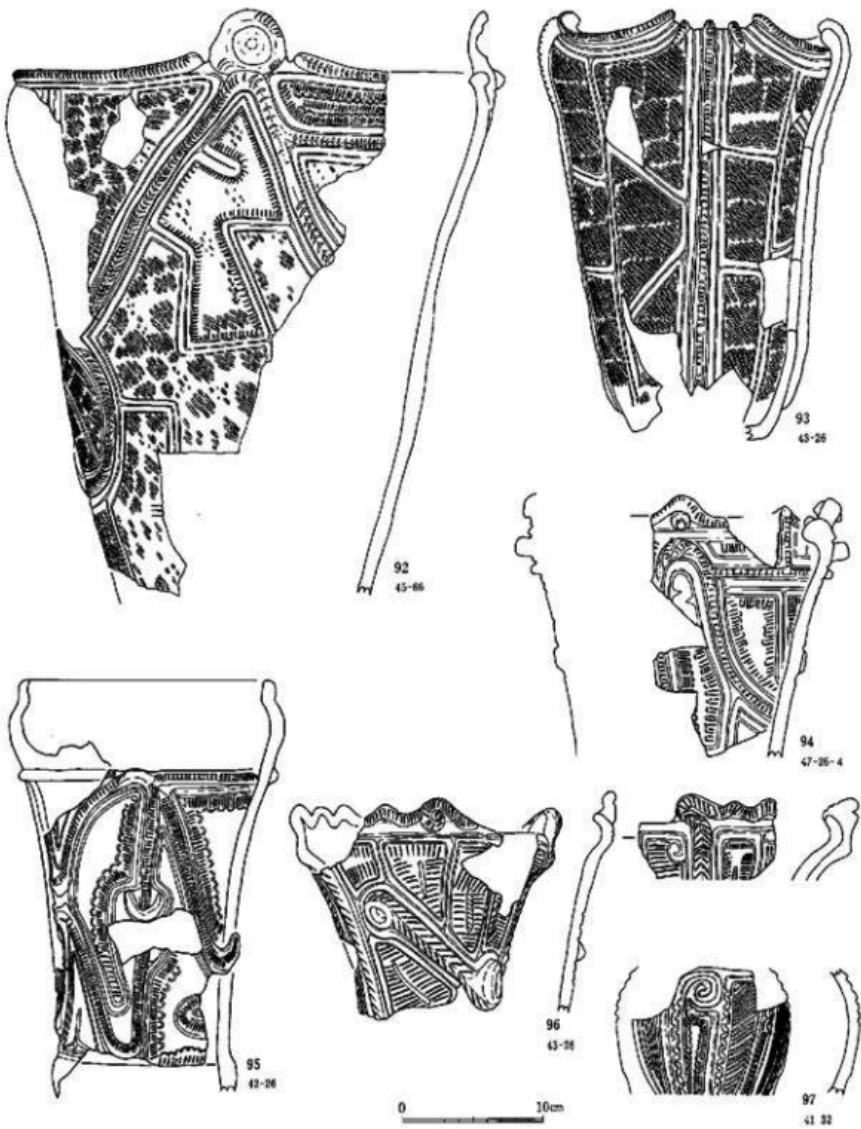
90
39-28



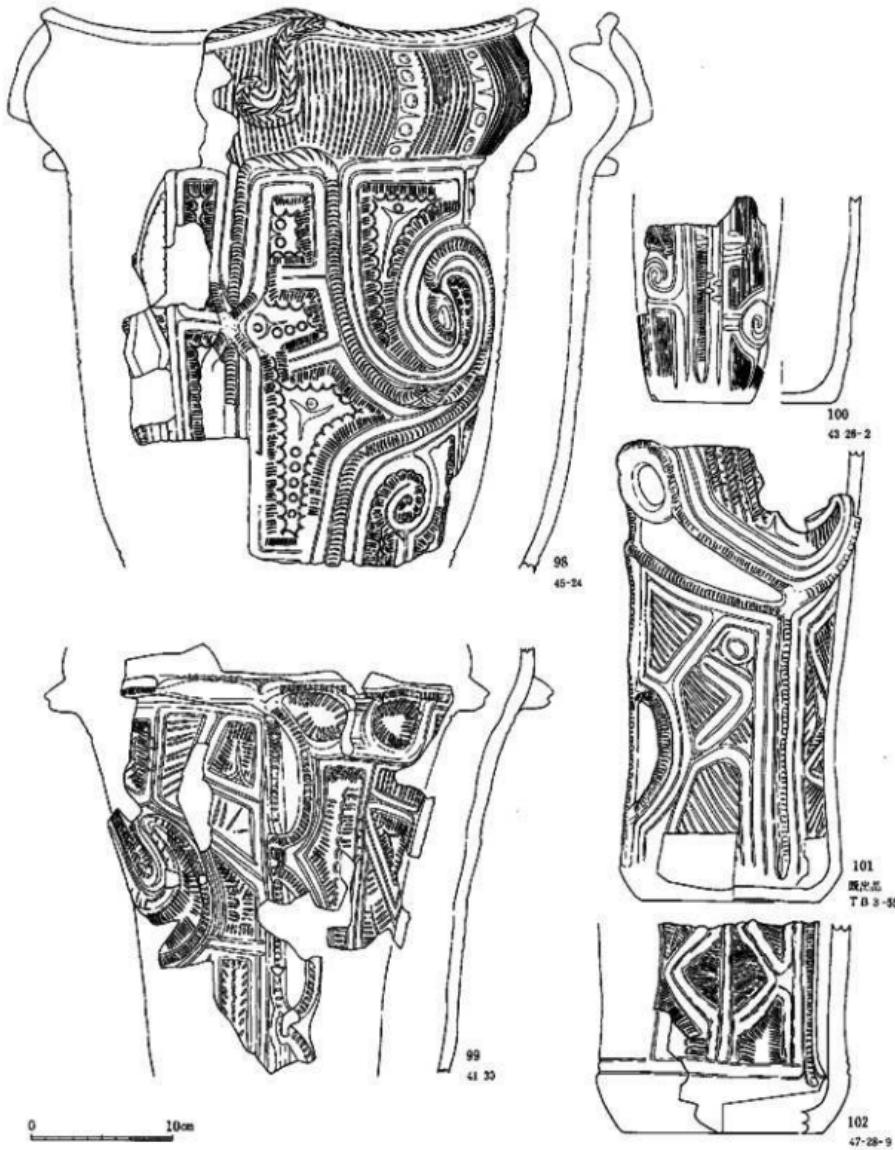
91
44-28-2

0 10cm

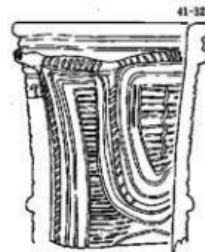
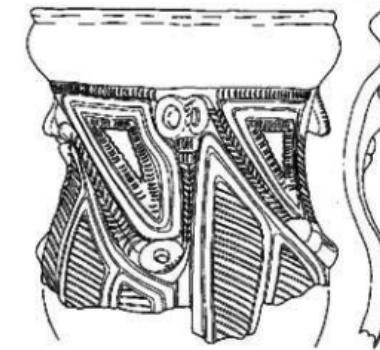
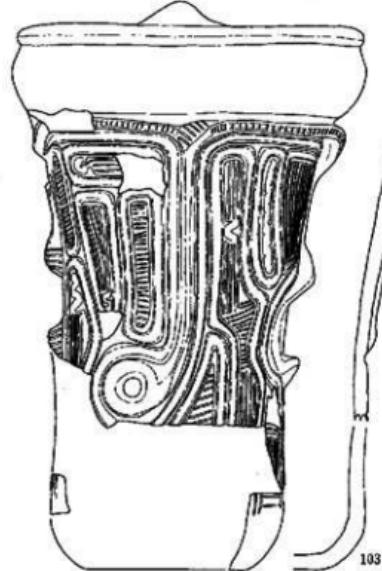
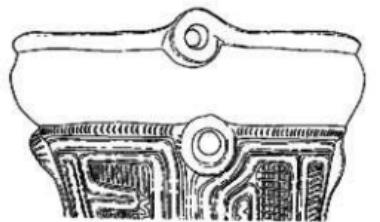
第92圖 土器集中区出土土器実測図 (15)



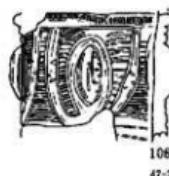
第93図 土器集中区出土土器実測図 (16)



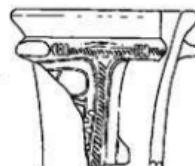
第94図 土器集中区出土土器実測図 (17)



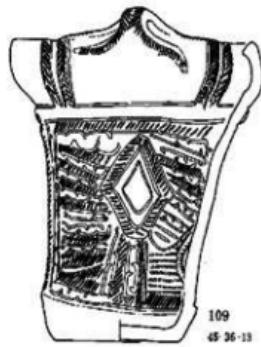
104
41-32



106
47-33



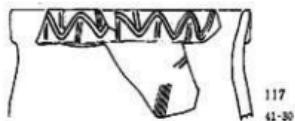
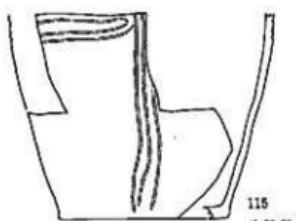
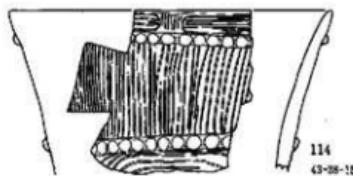
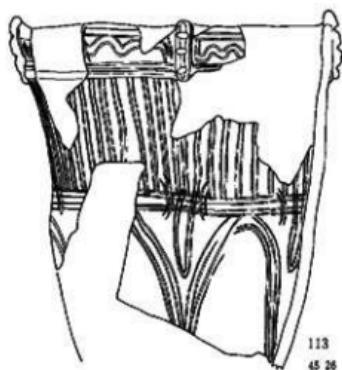
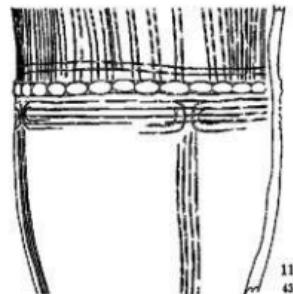
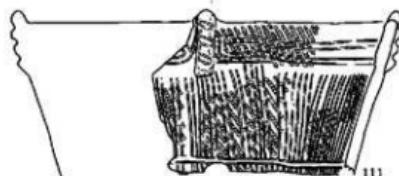
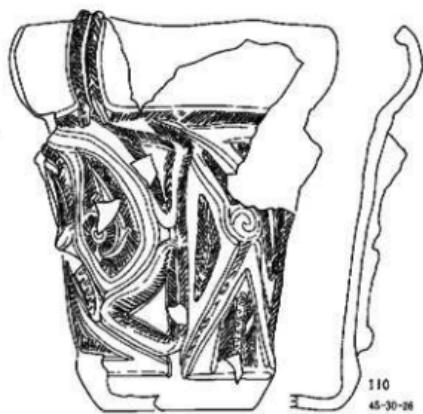
107
41-36



109
45-36-13

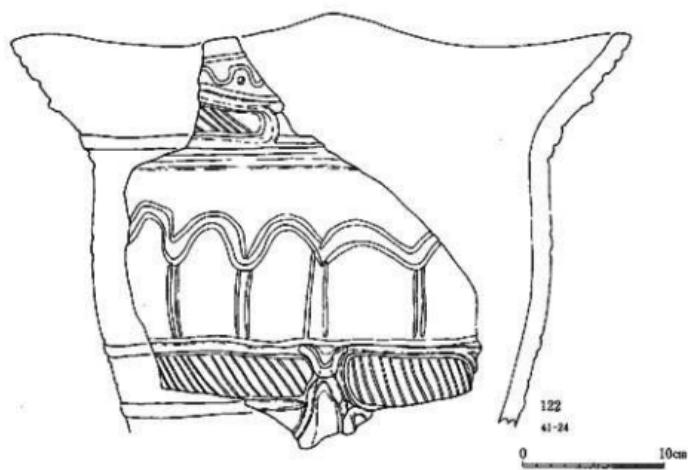
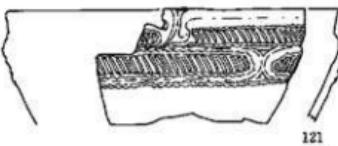
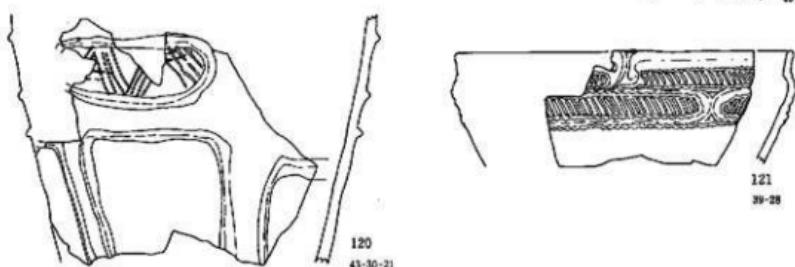
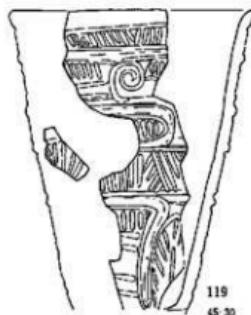
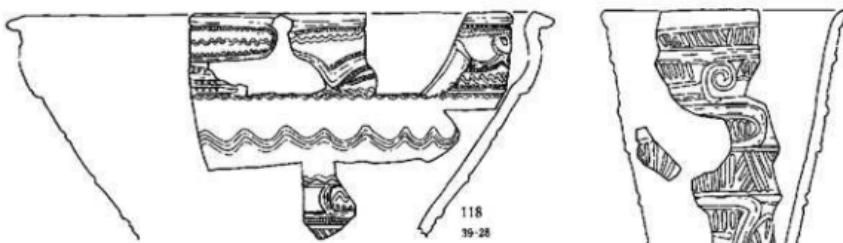
0 10cm

第95図 土器集中区出土土器実測図 (18)



0 10cm

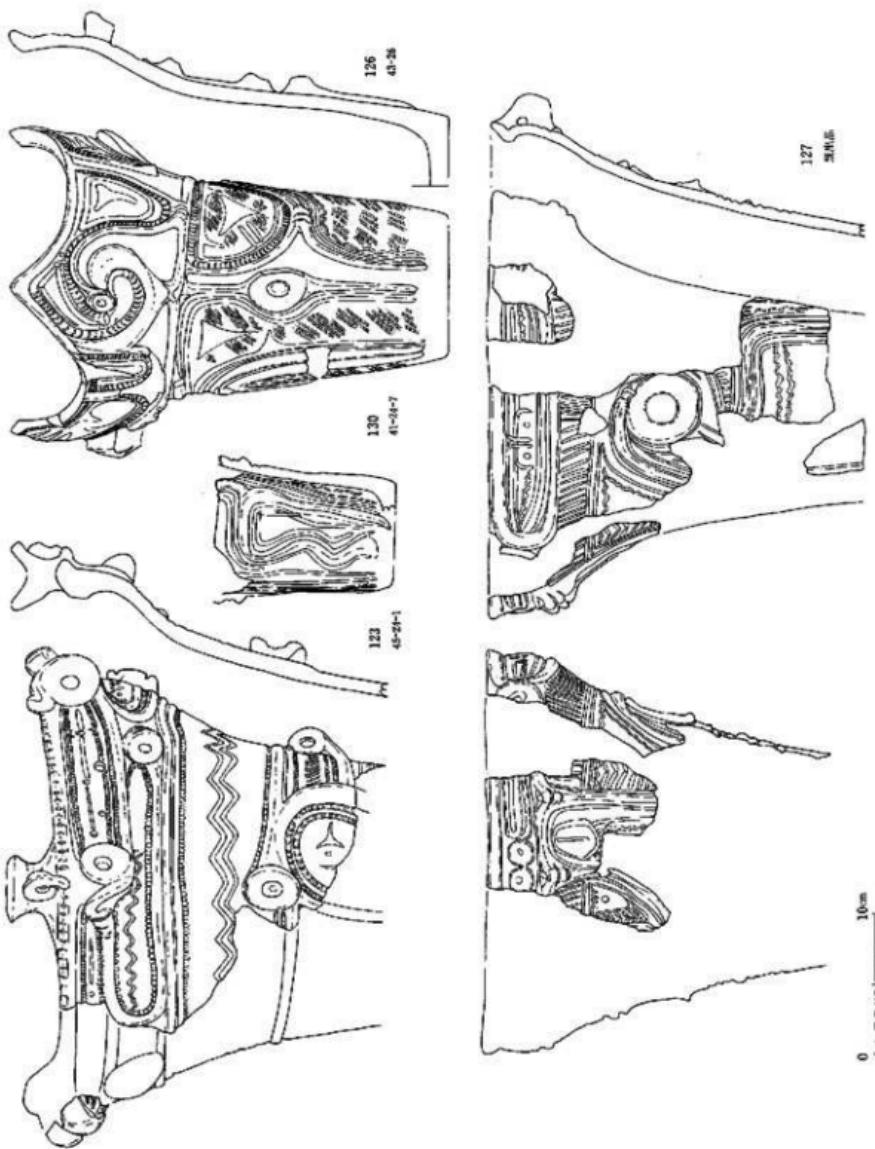
第96図 土器集中区出土土器実測図 09



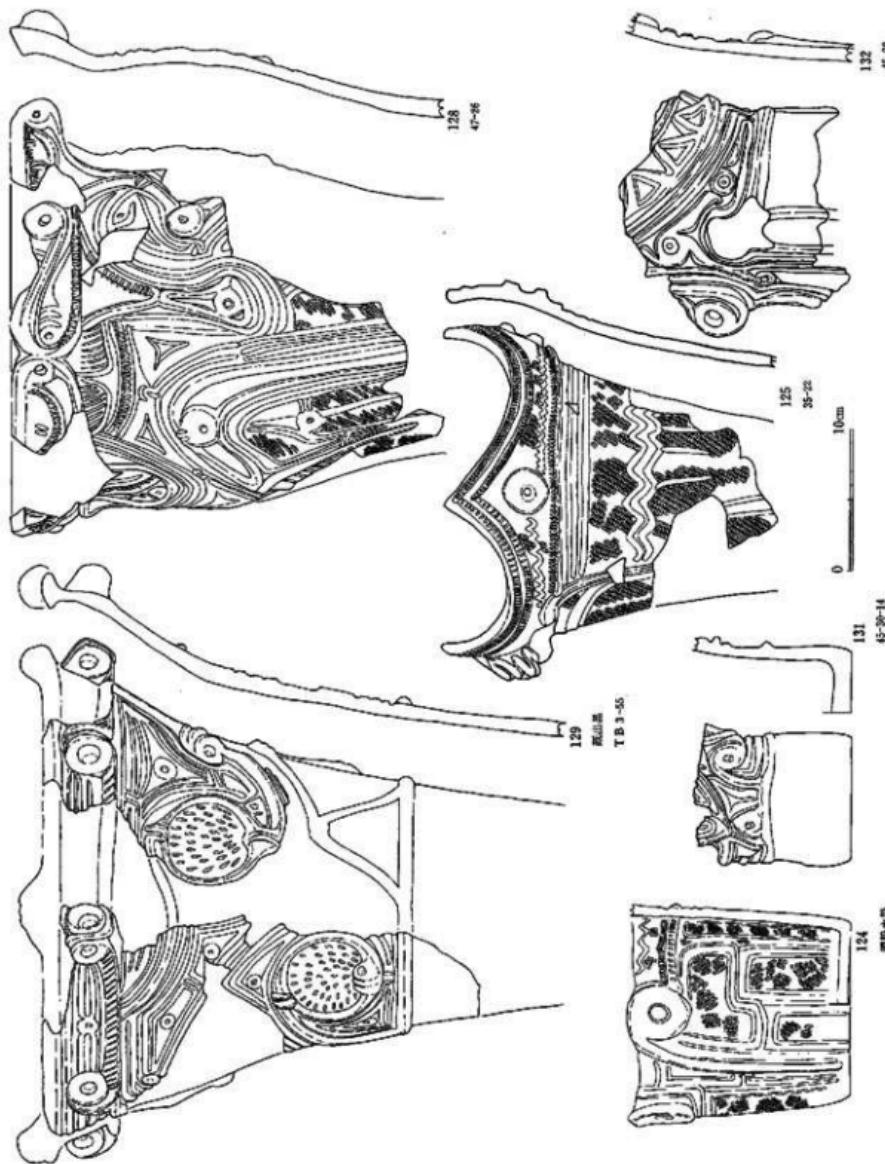
0 — 10cm

第97図 土器集中区出土土器実測図 (20)

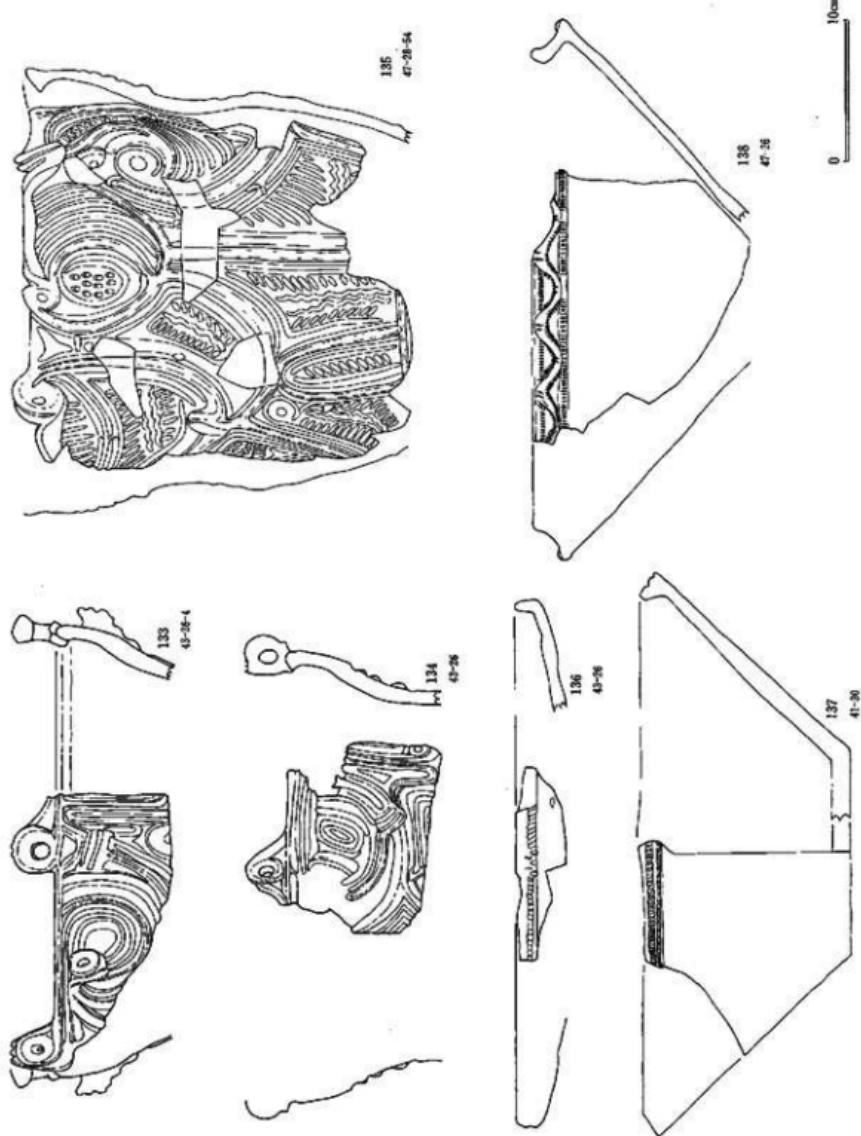
第98图 土器集中区出土土器实测图 (2)



第99圖 土器集中區出土土器素測圖 22

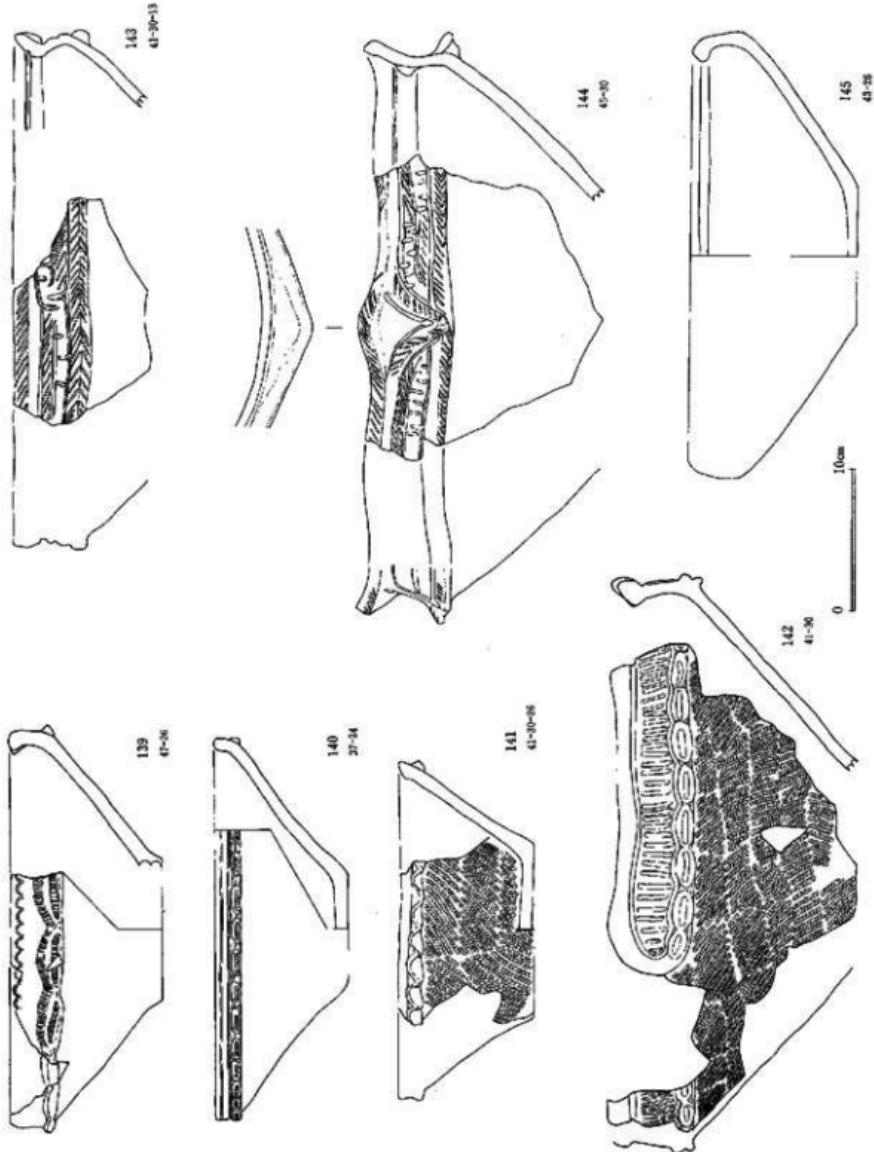


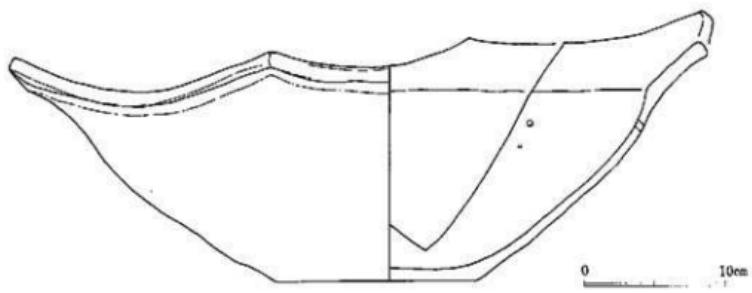
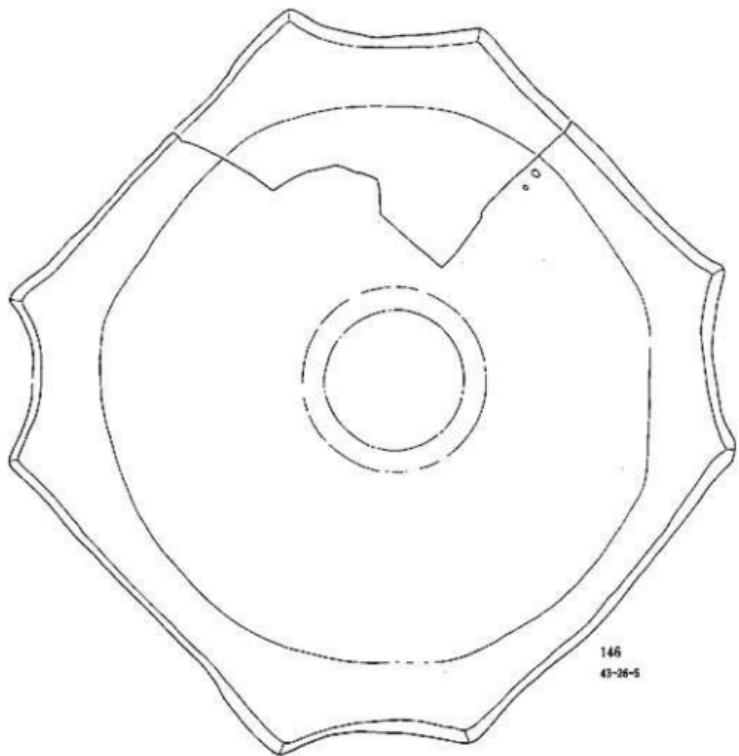
第100圖 土器集中區出土土器實測圖 (2)



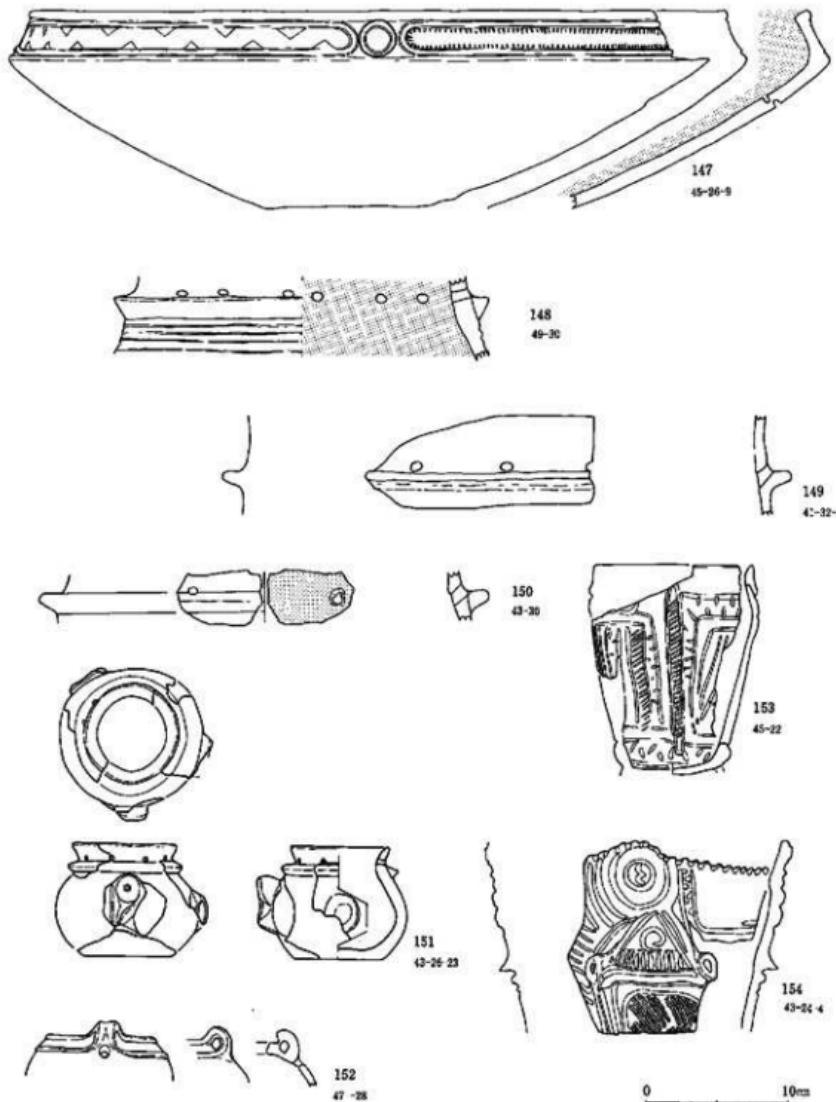
第101図 土器集中区出土土器実測図

[24]

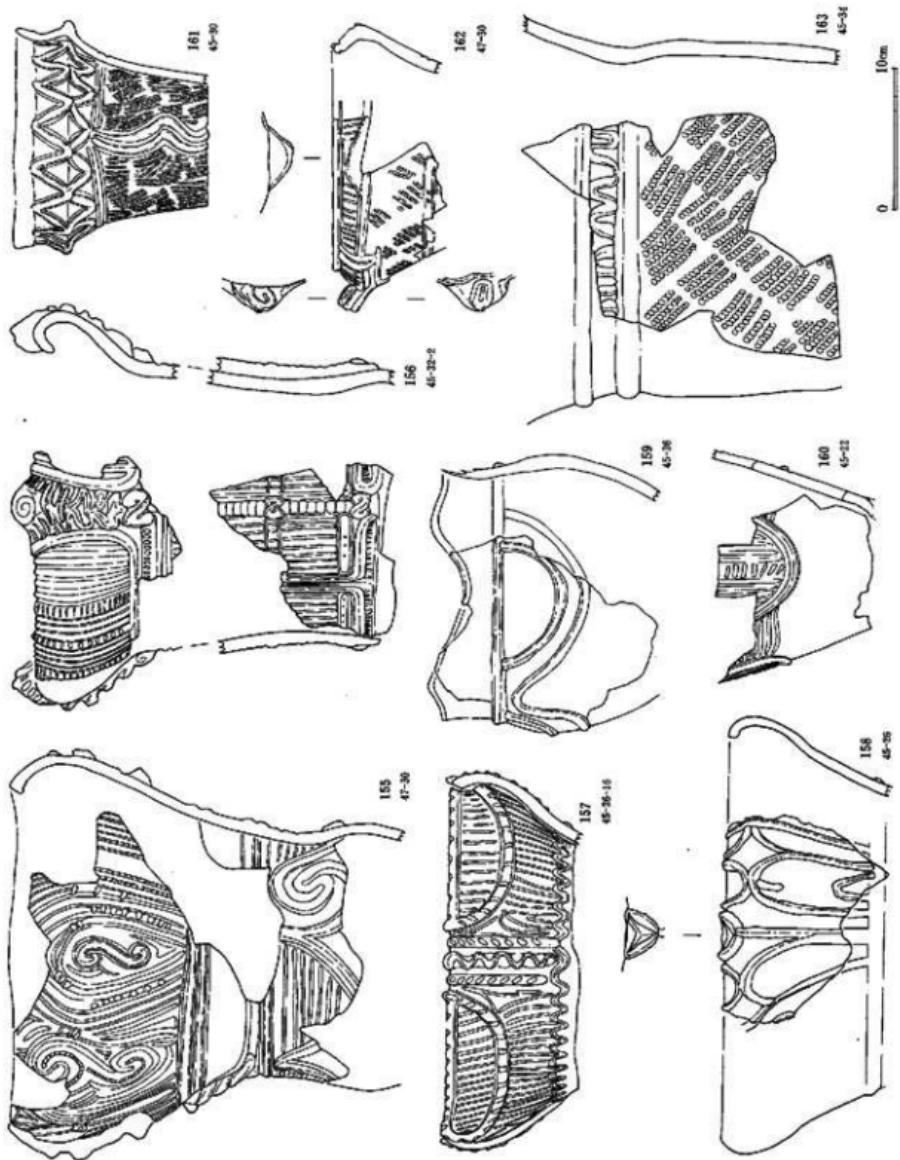


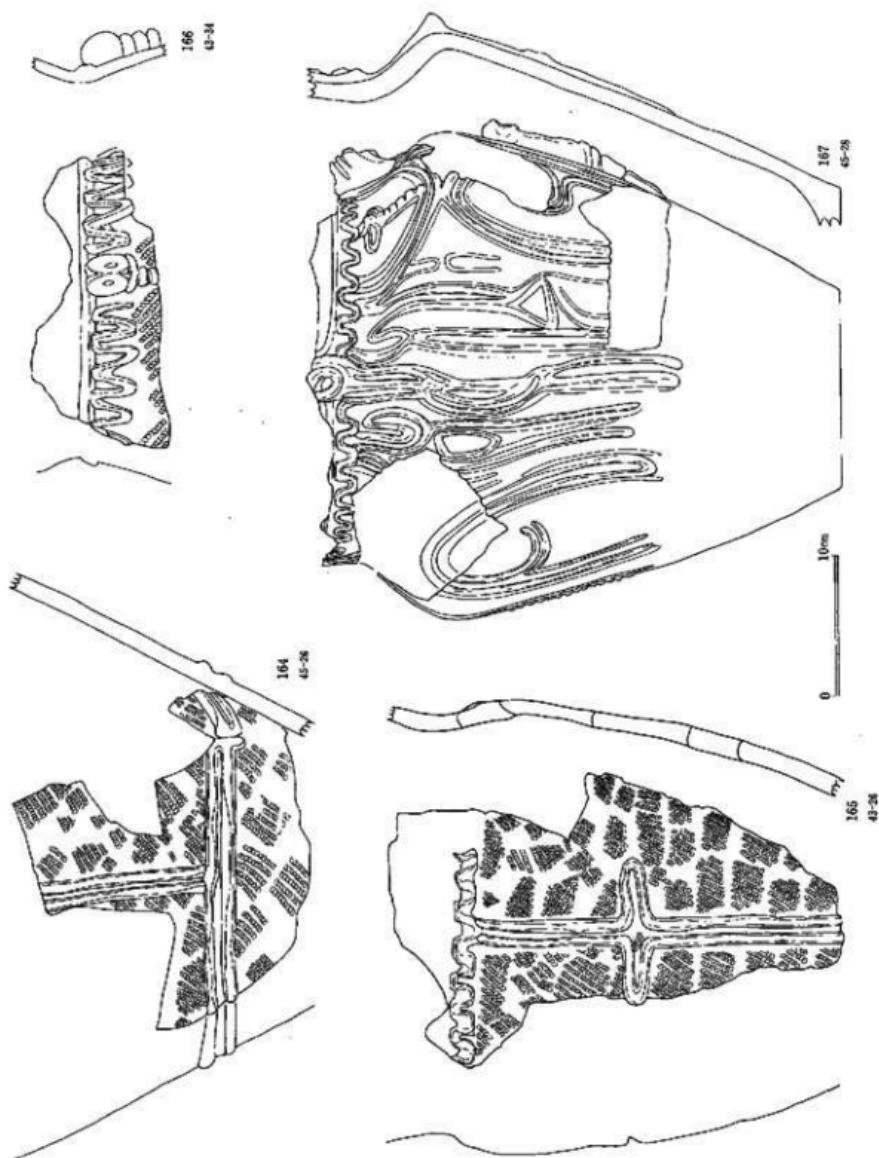


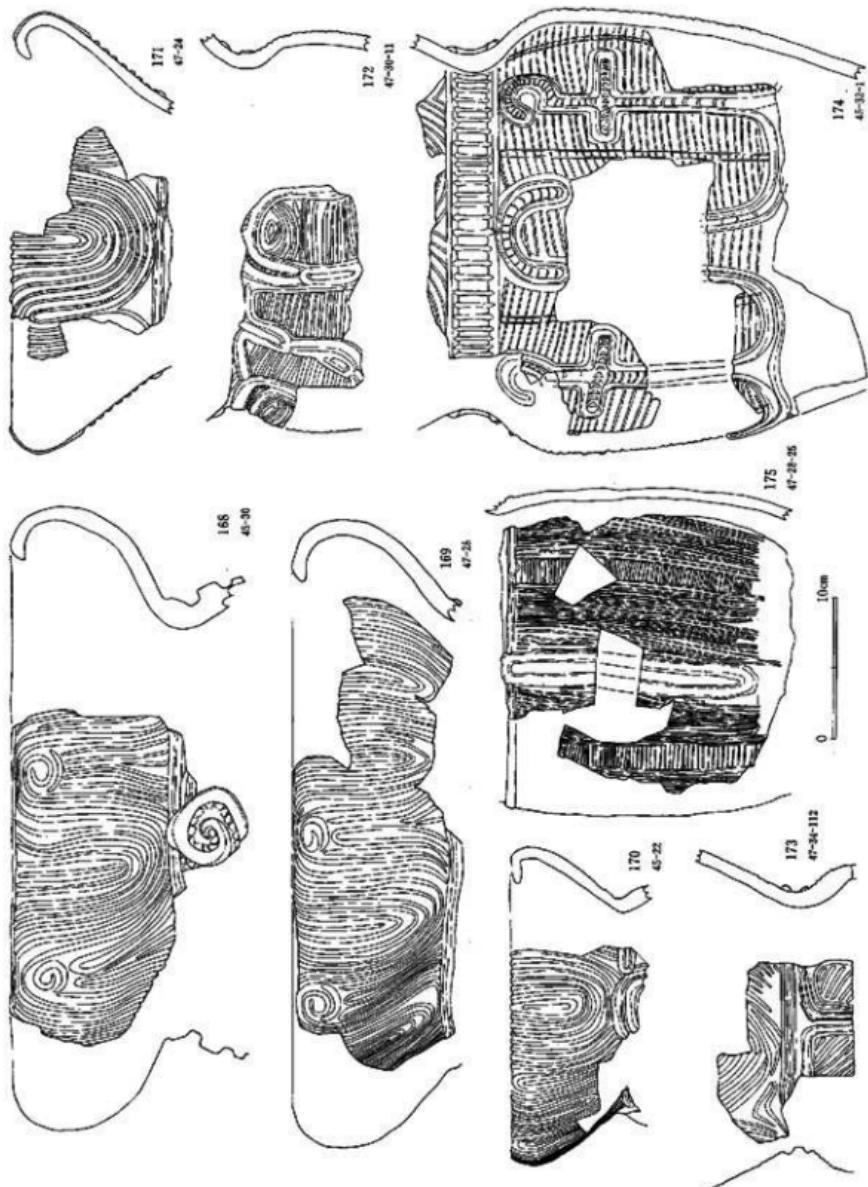
第102図 土器集中区出土土器実測図 ②5

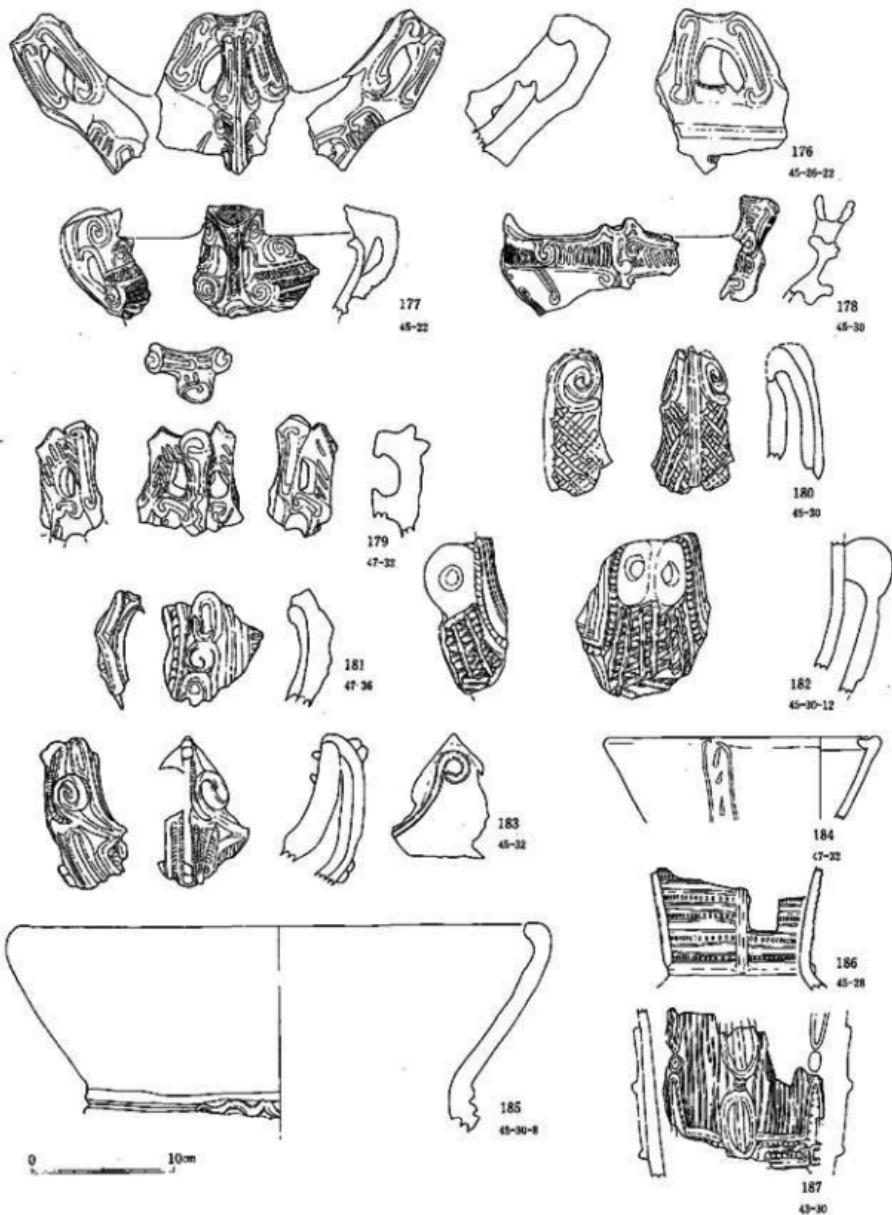


第103図 土器集中区出土土器実測図 (25)



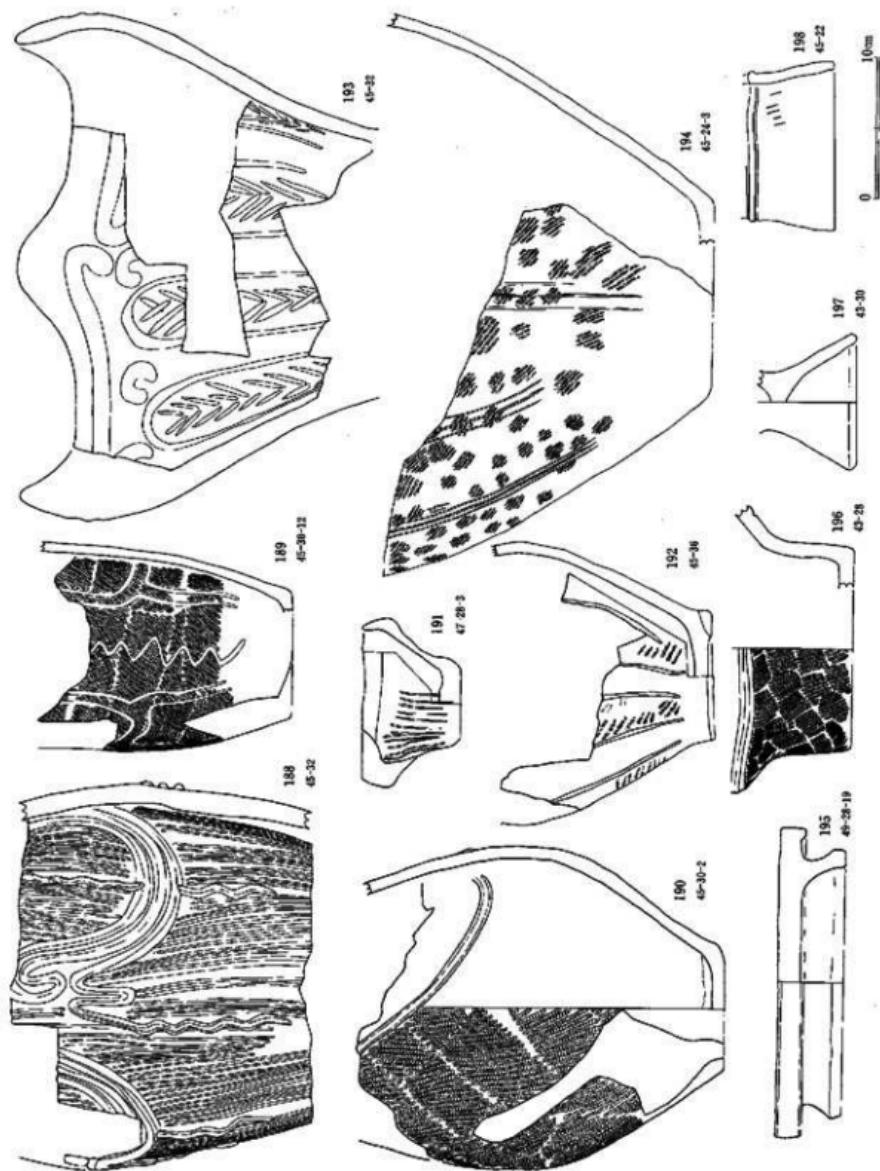




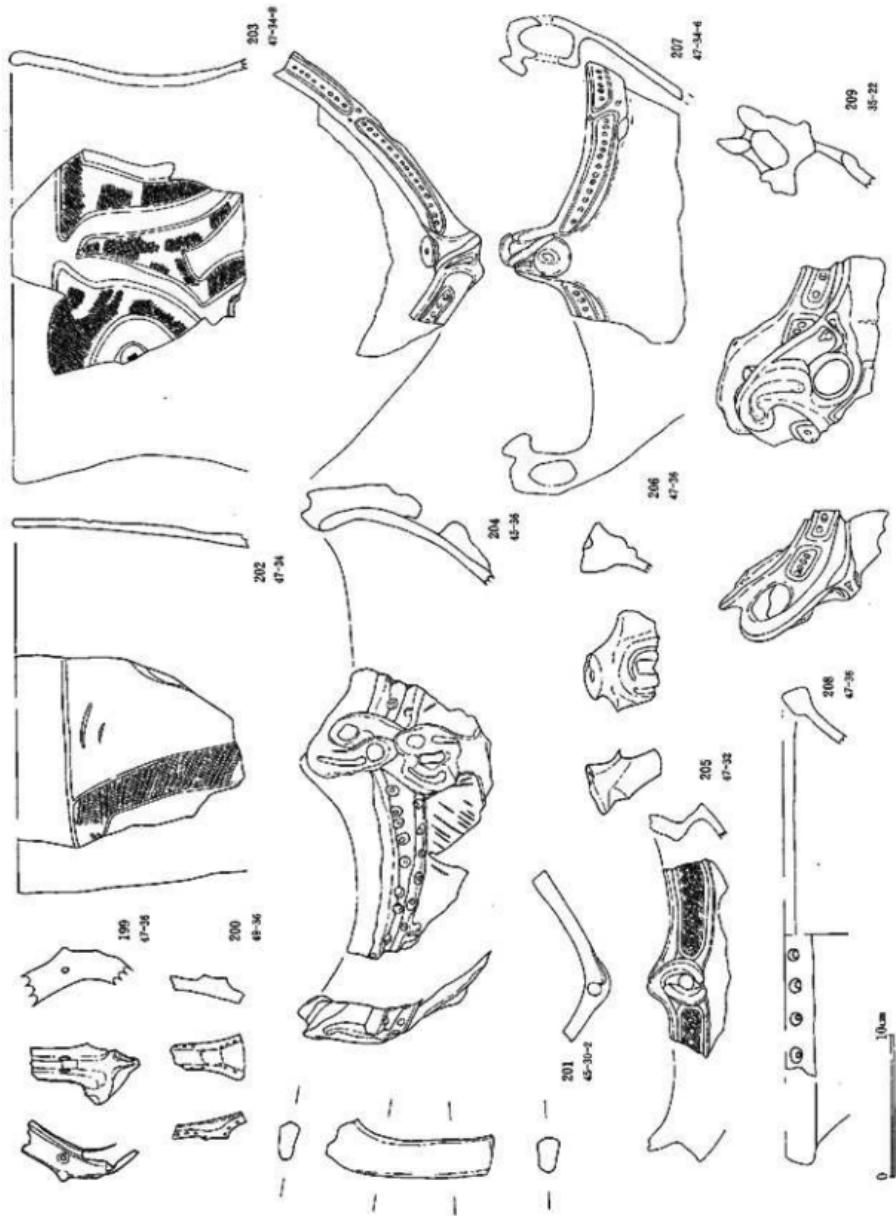


第107圖 土器集中區出土土器實測圖 30

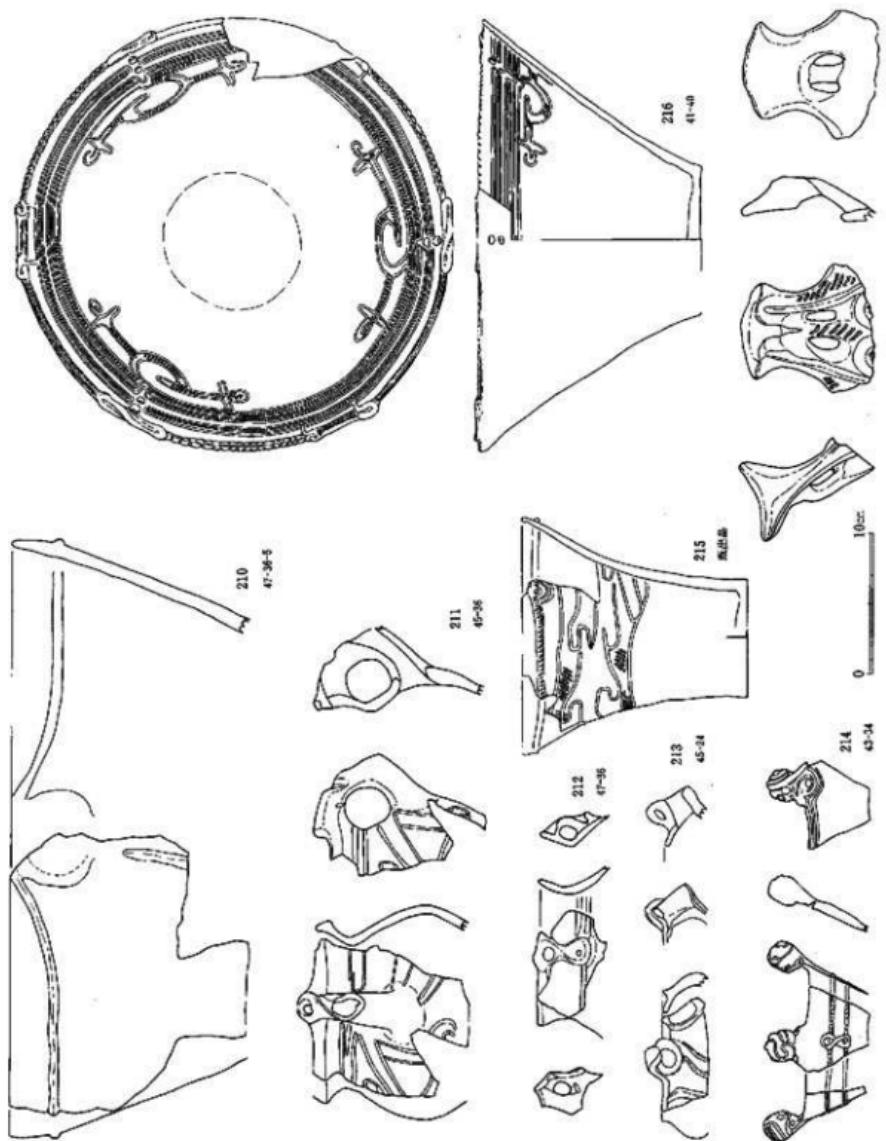
第108圖 土器集中區出土土器實測圖 (1)



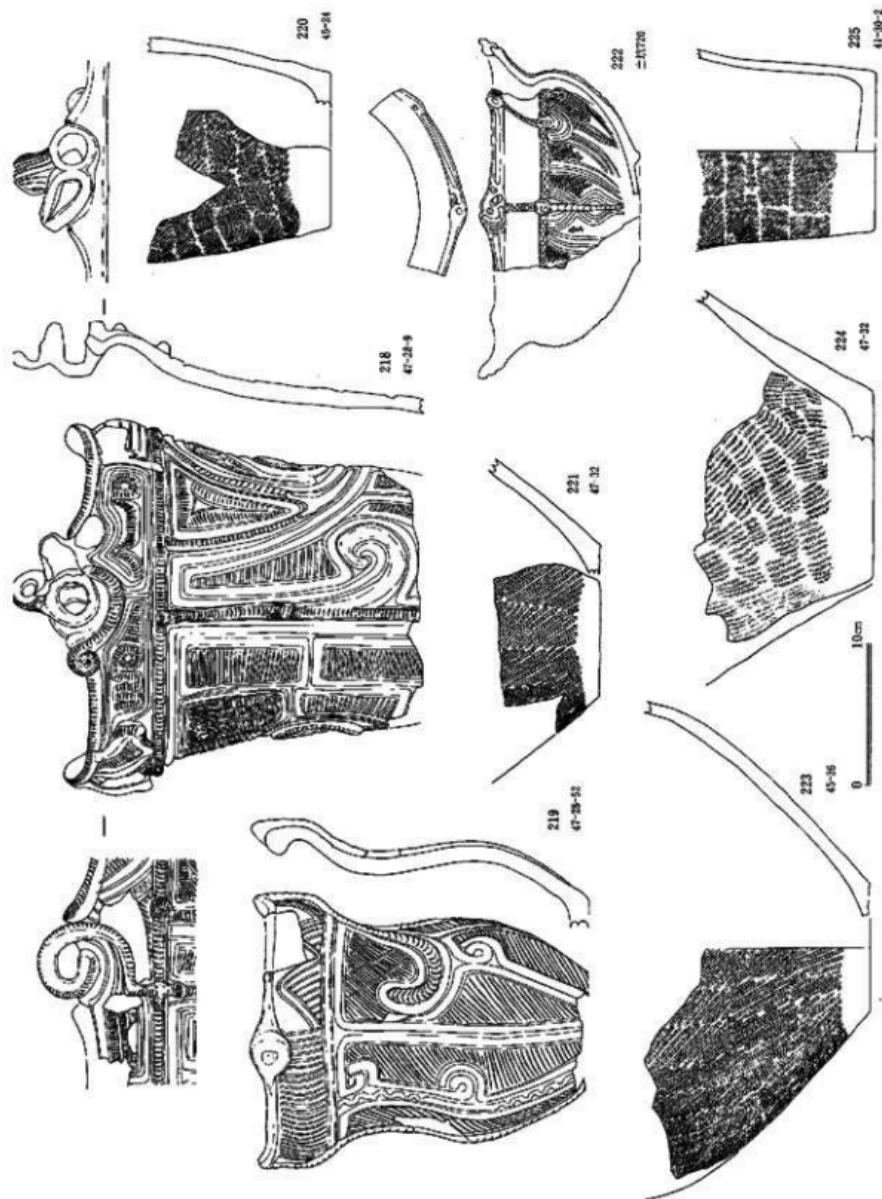
第109图 土器集中区出土土器实测图 32

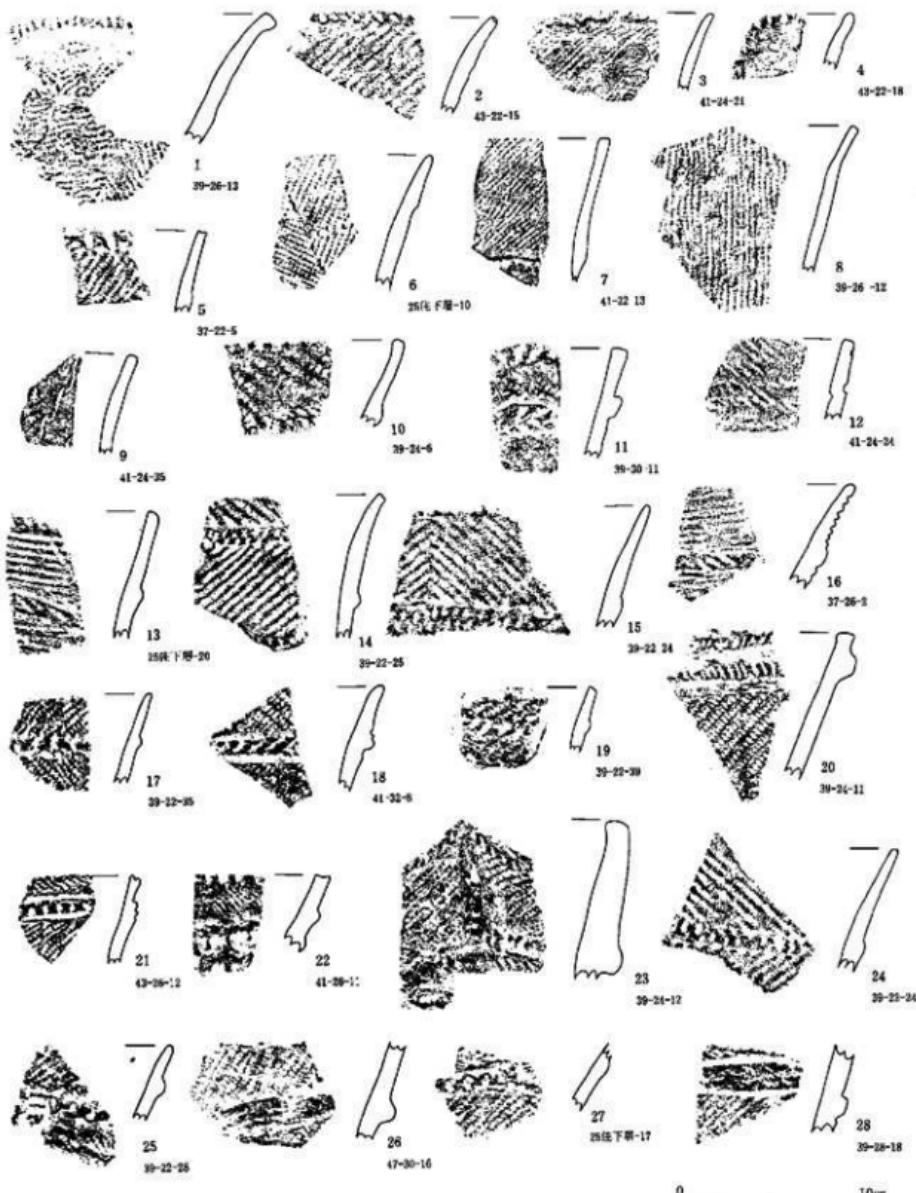


第110圖 土器集中出土器物圖 33

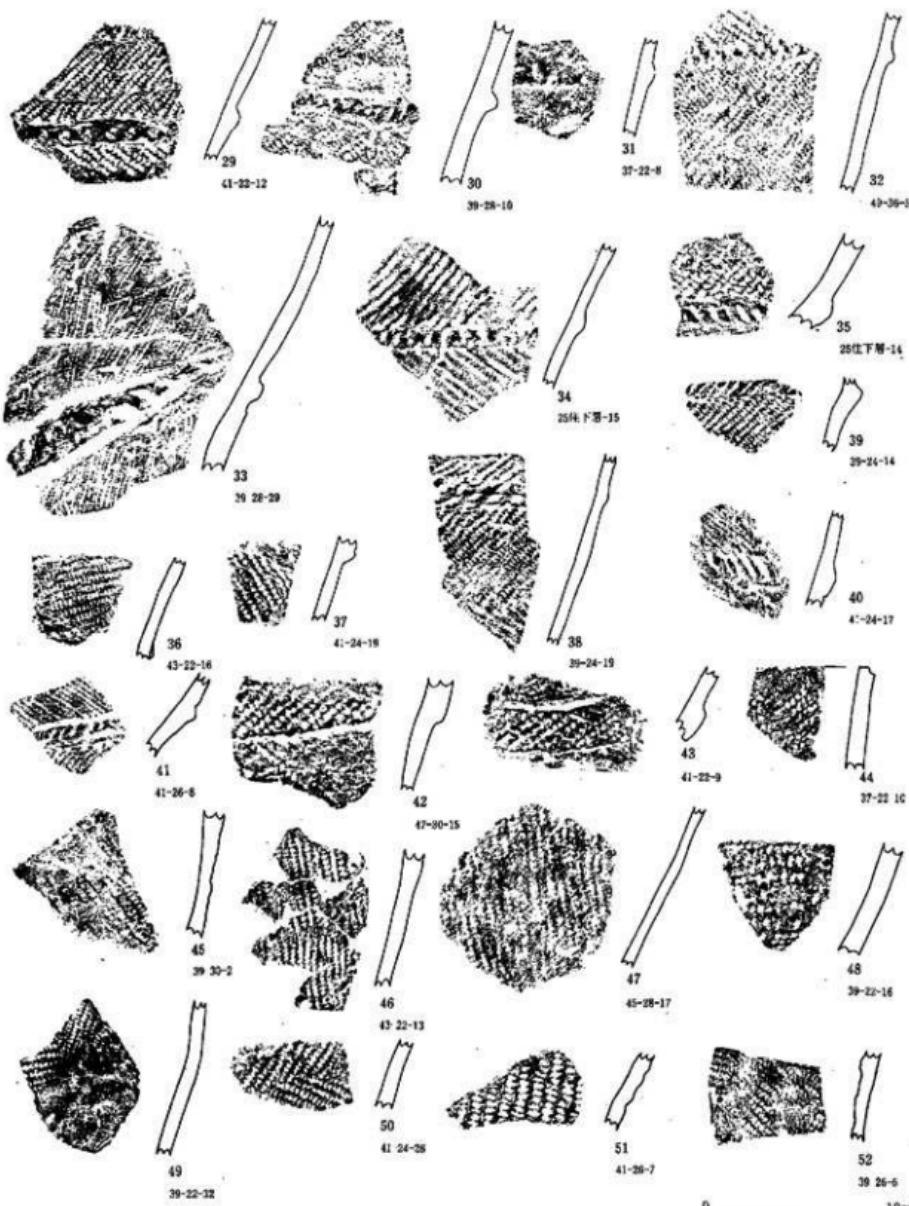


第111圖 土器集中区出土土器実測図 34

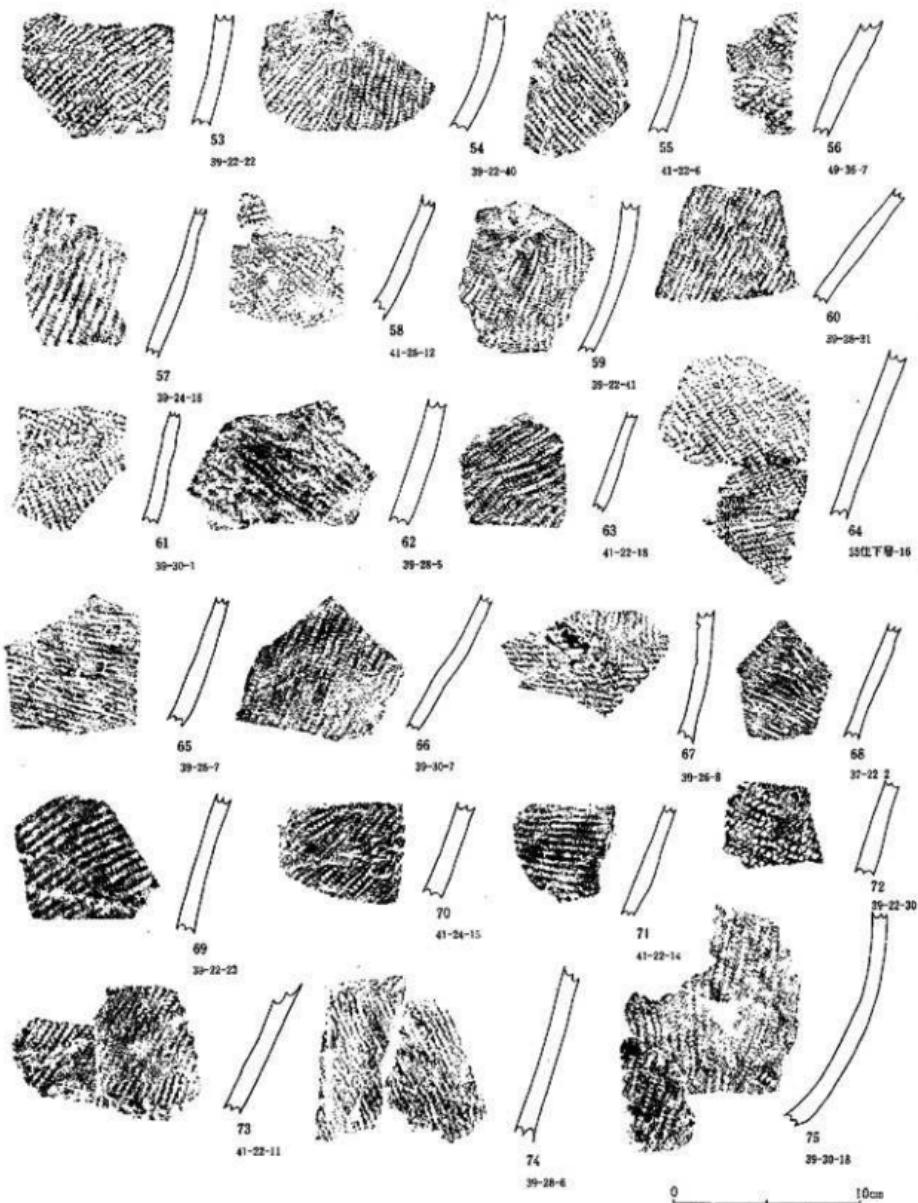




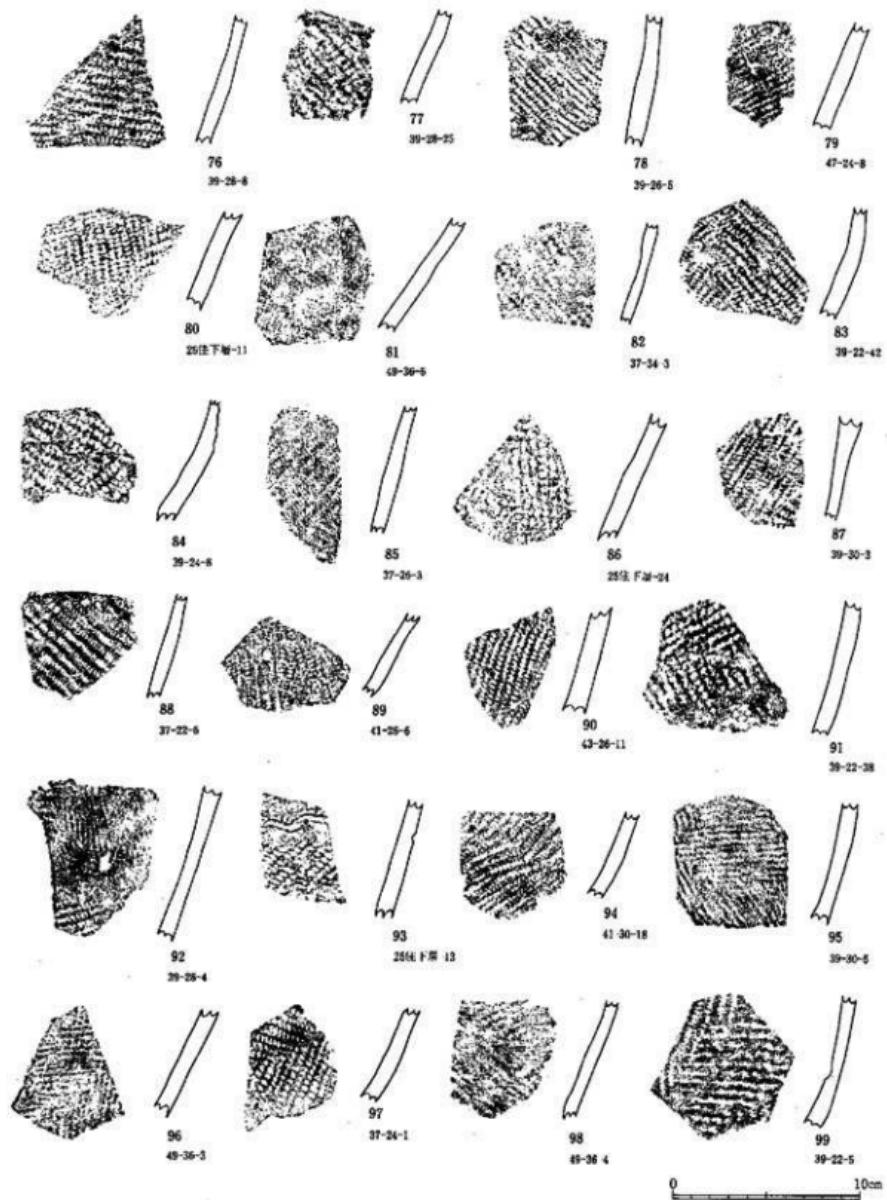
第112図 土器集中区出土土器拓影 (1)



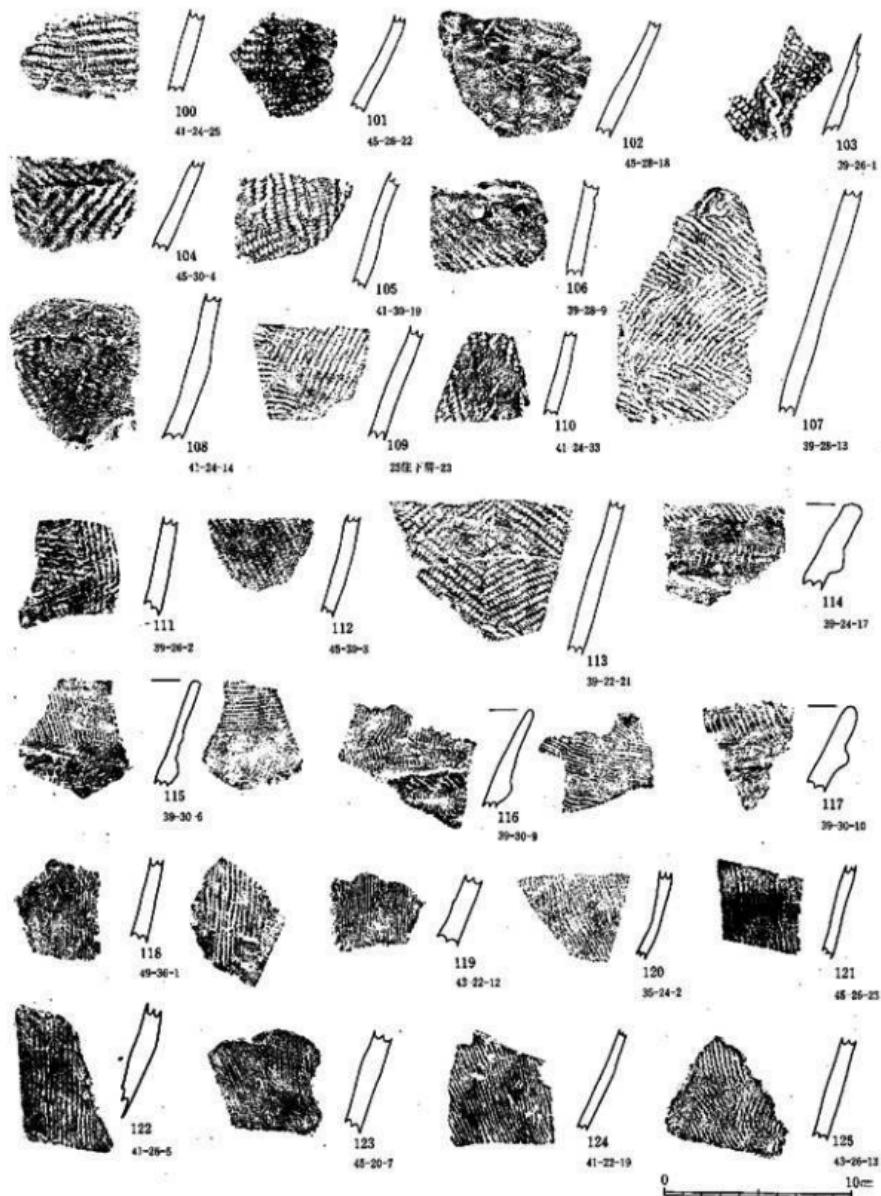
第113図 土器集中区出土土器拓影 (2)



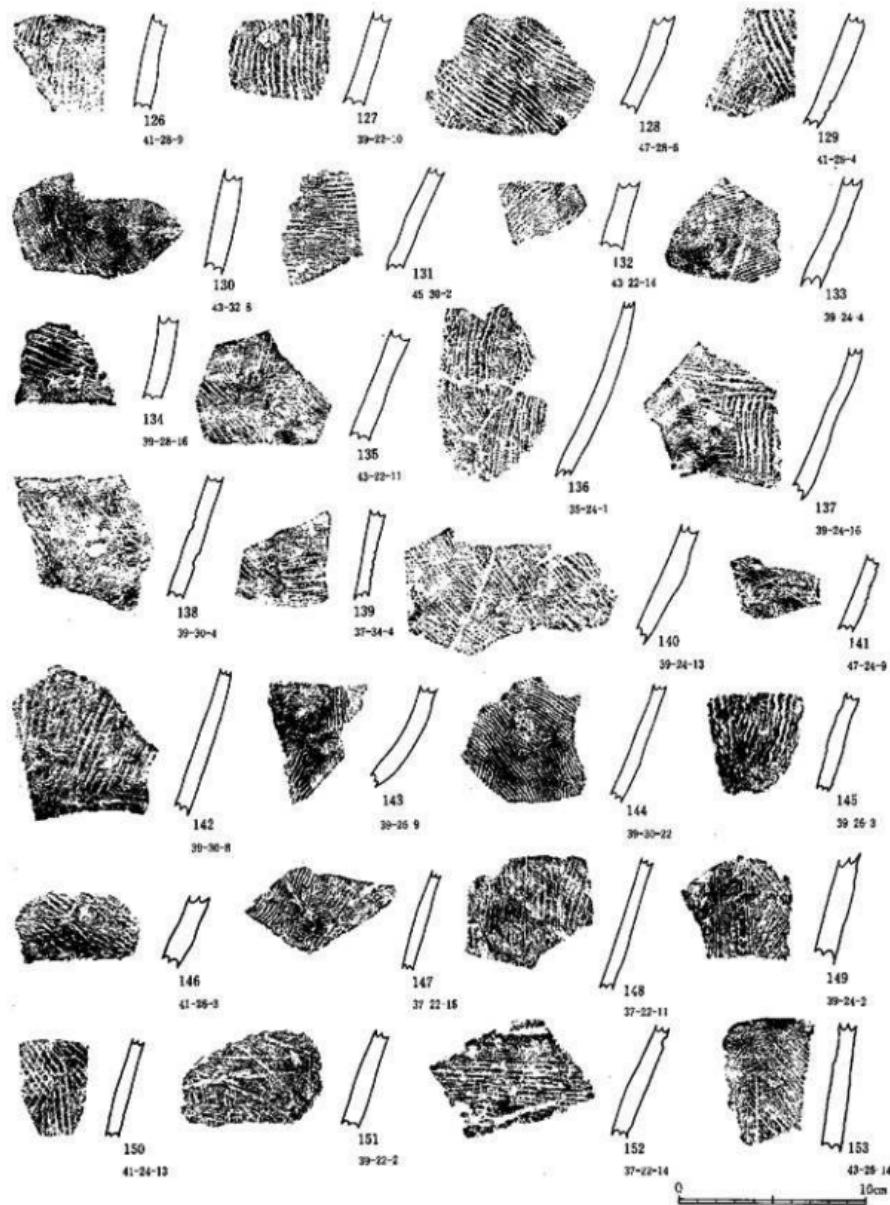
第114図 土器集中区出土土器拓影 (3)



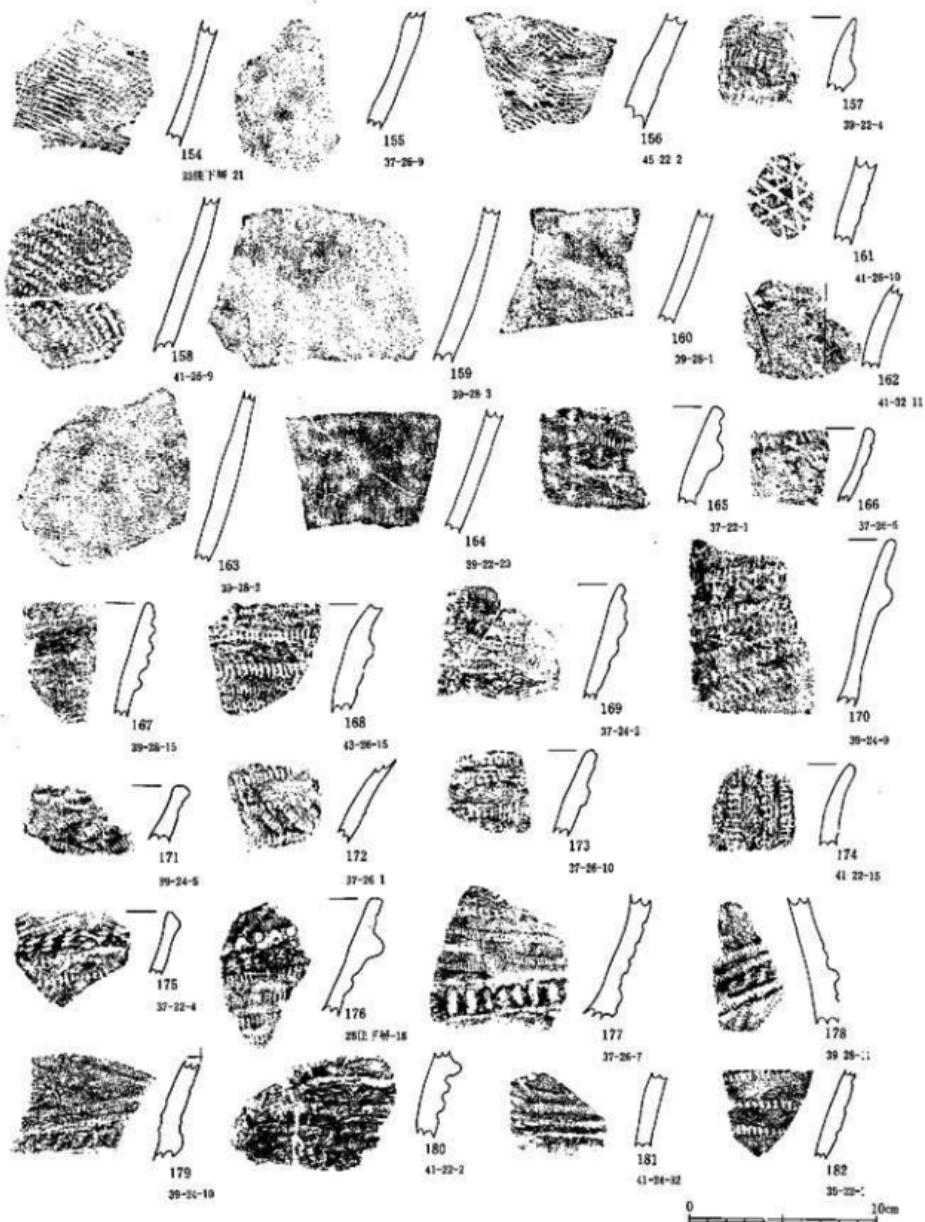
第115図 土器集中区出土土器拓影 (4)



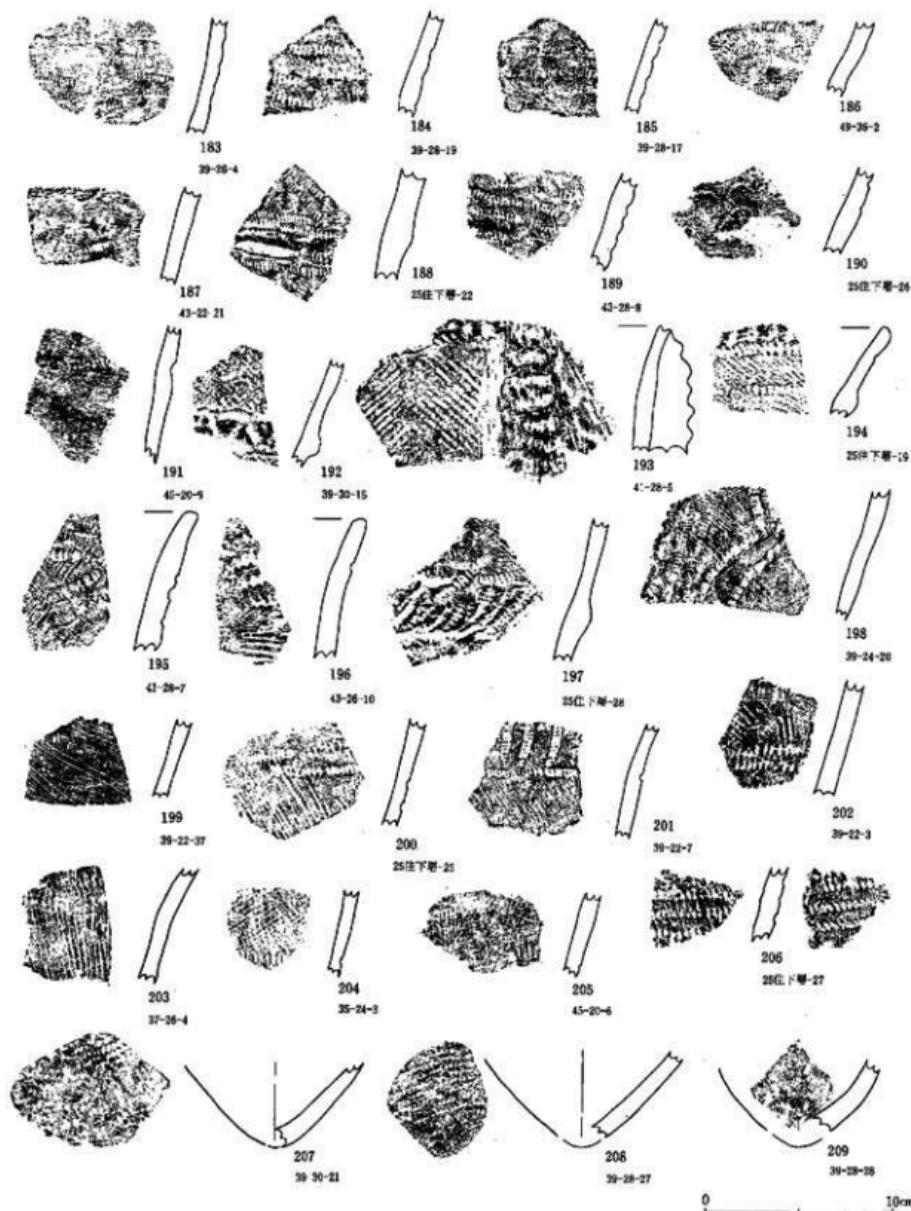
第116圖 土器集中區出土土器拓影 (5)



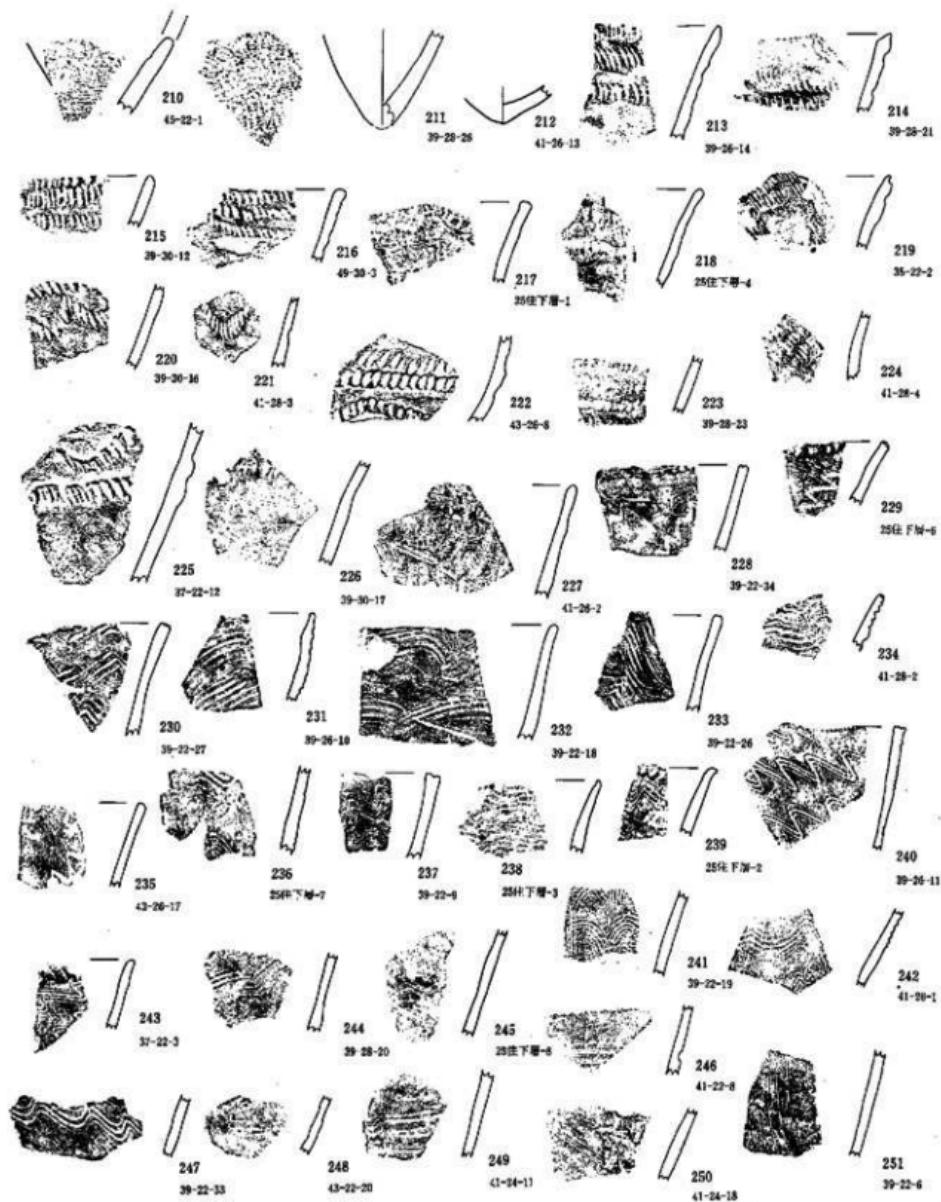
第117図 土器集中区出土土器拓影 (6)



第118圖 土器集中區出土土器拓影 (7)

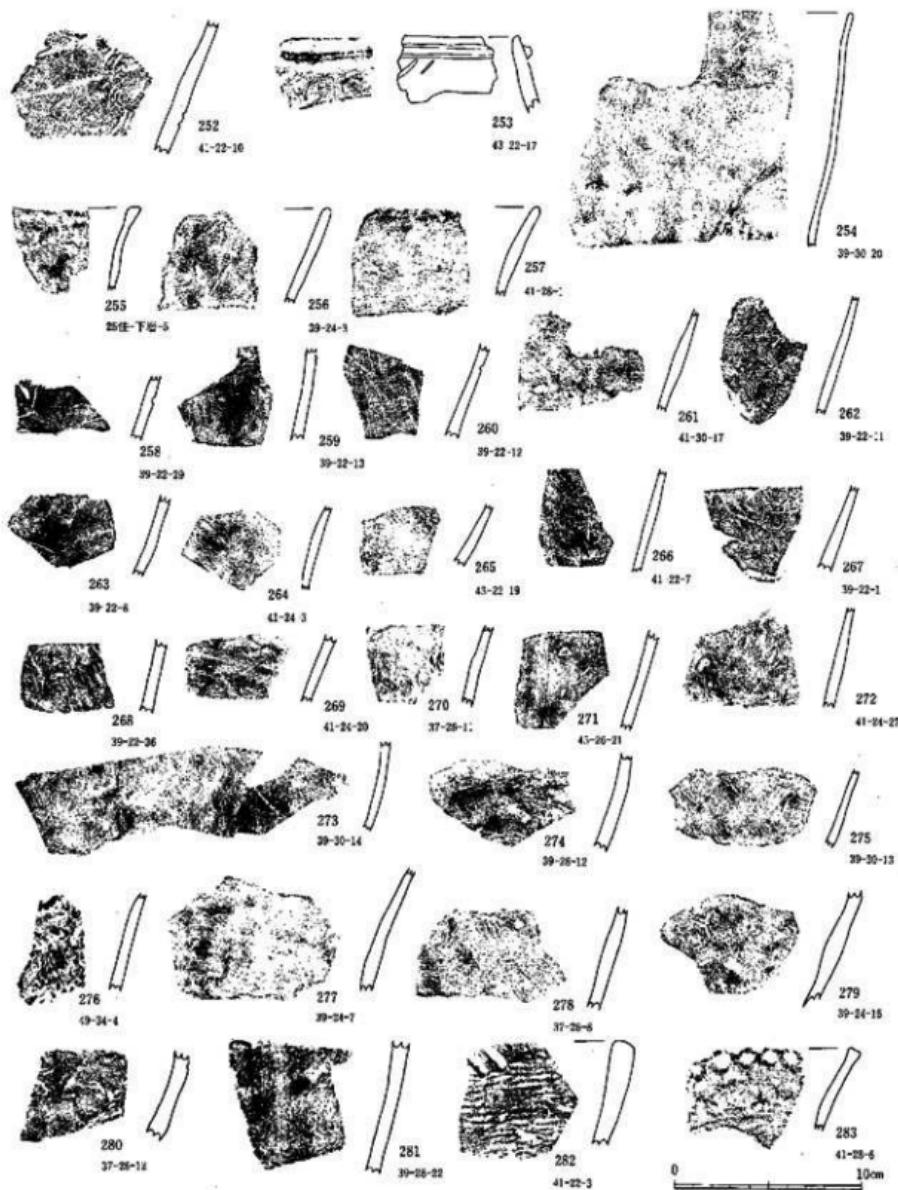


第119図 土器集中区出土土器拓影 (8)

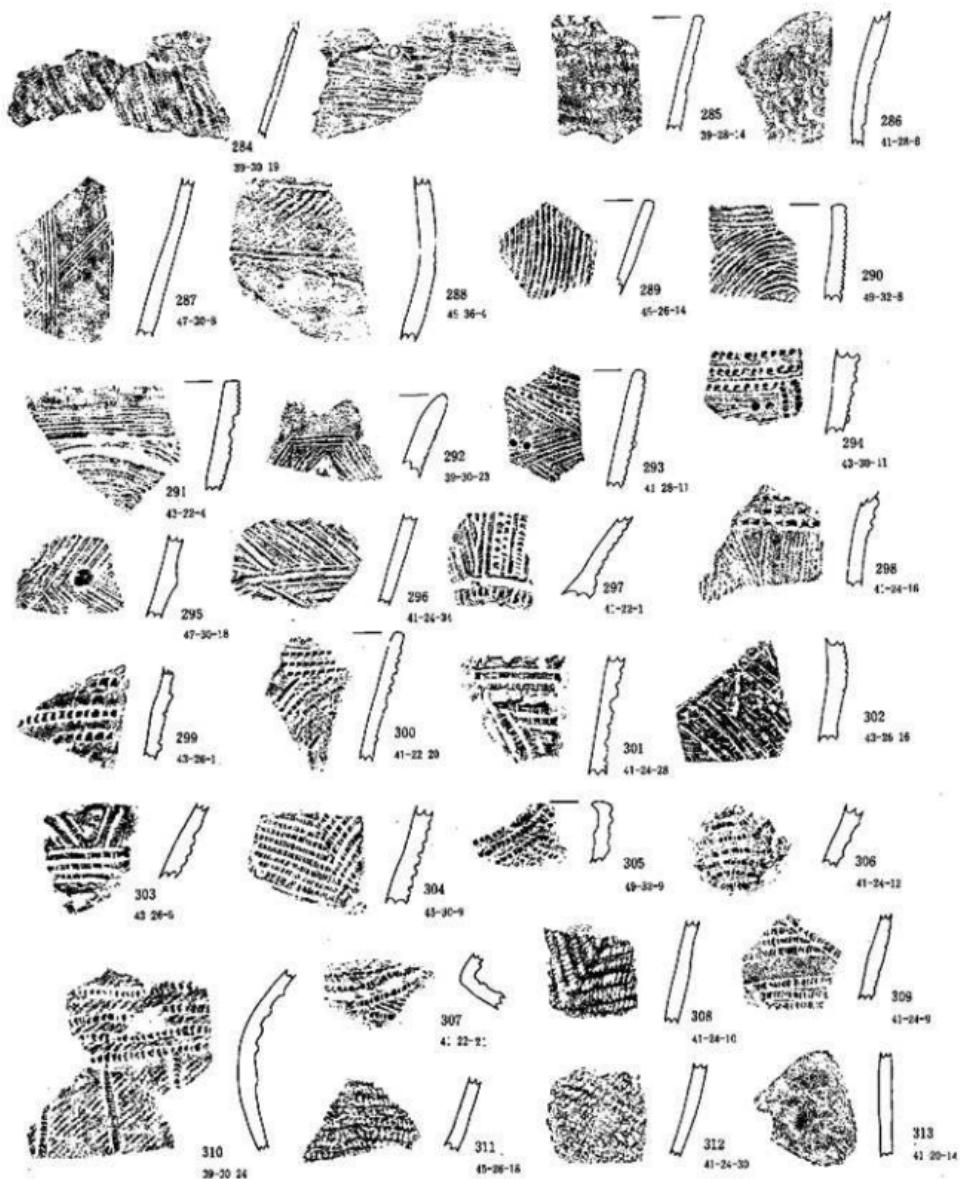


0 1 10cm

第120図 土器集中区出土土器拓影 (9)

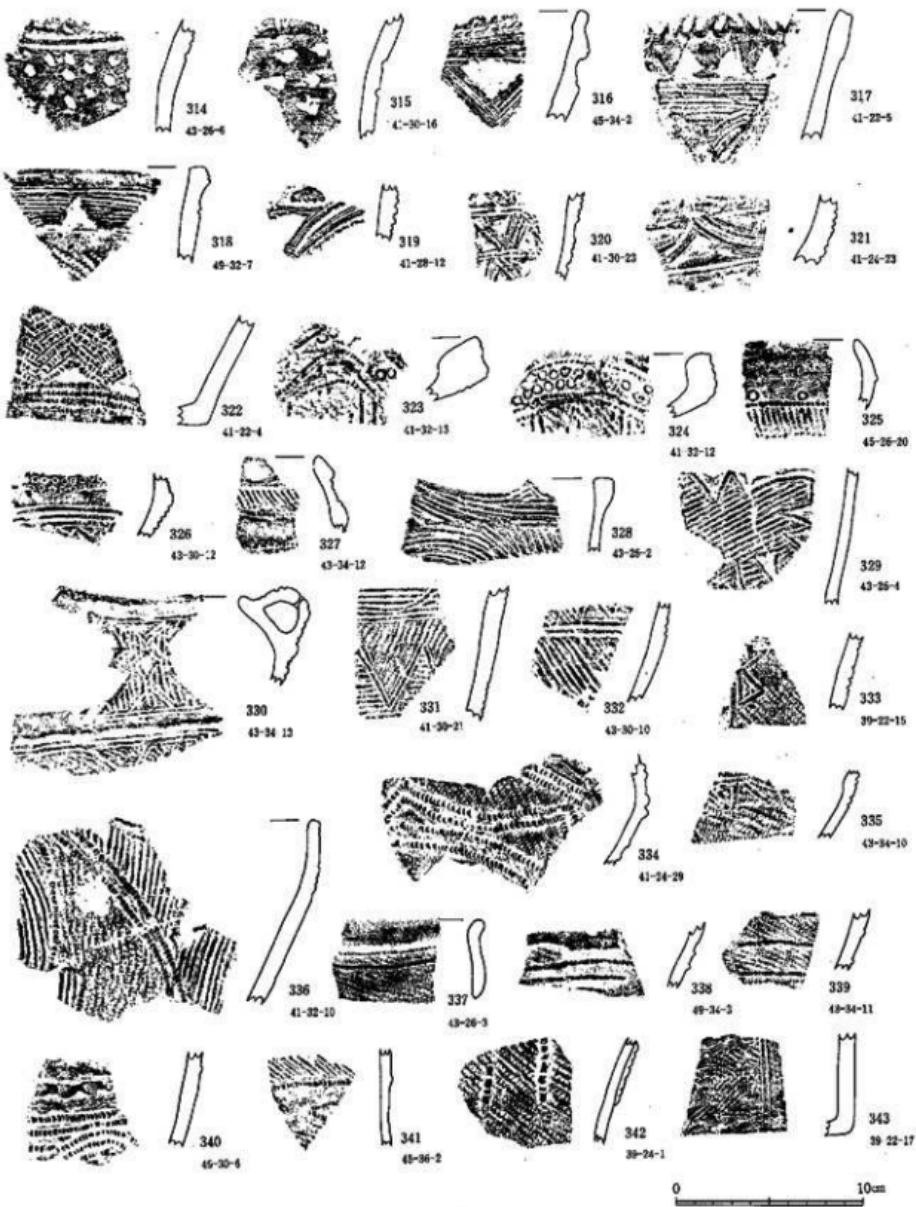


第121図 土器集中区出土土器拓影 (10)

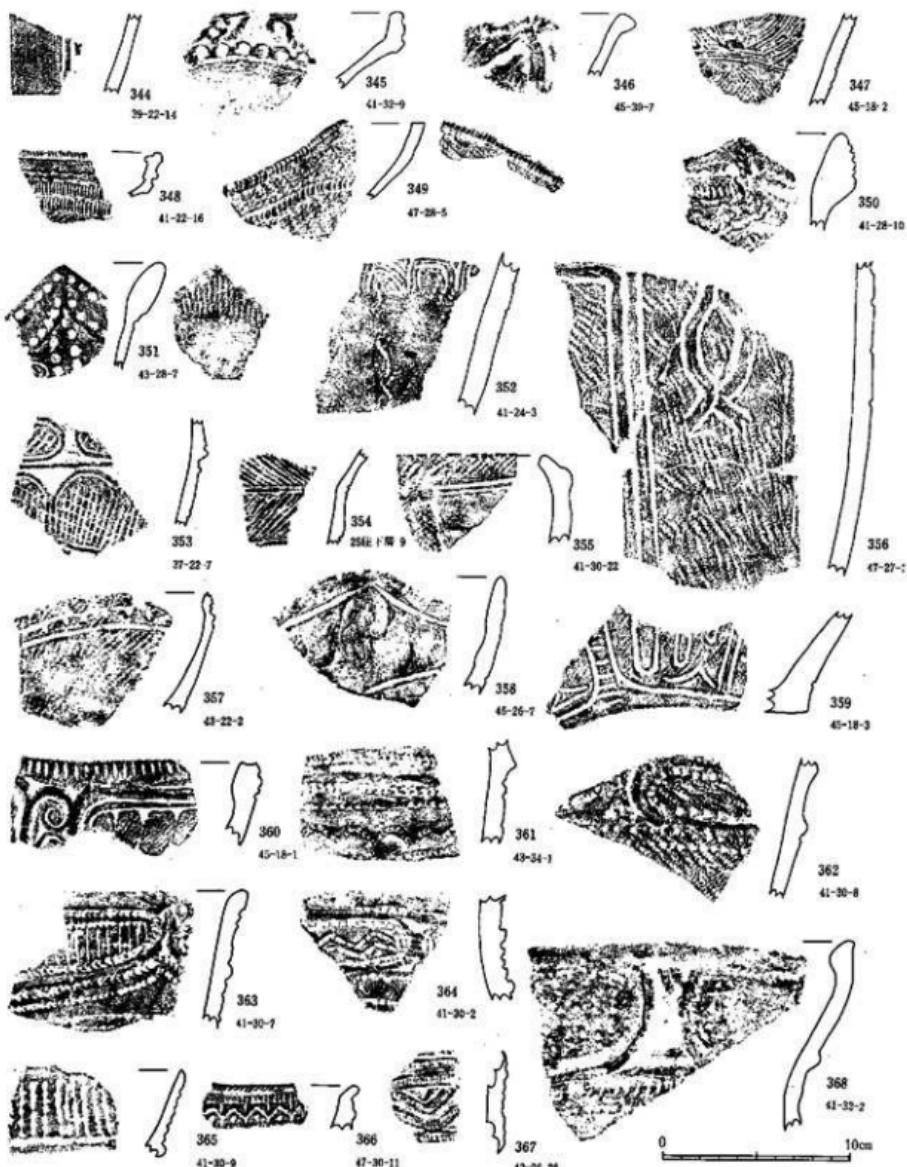


第122図 土器集中区出土土器拓影 (1)

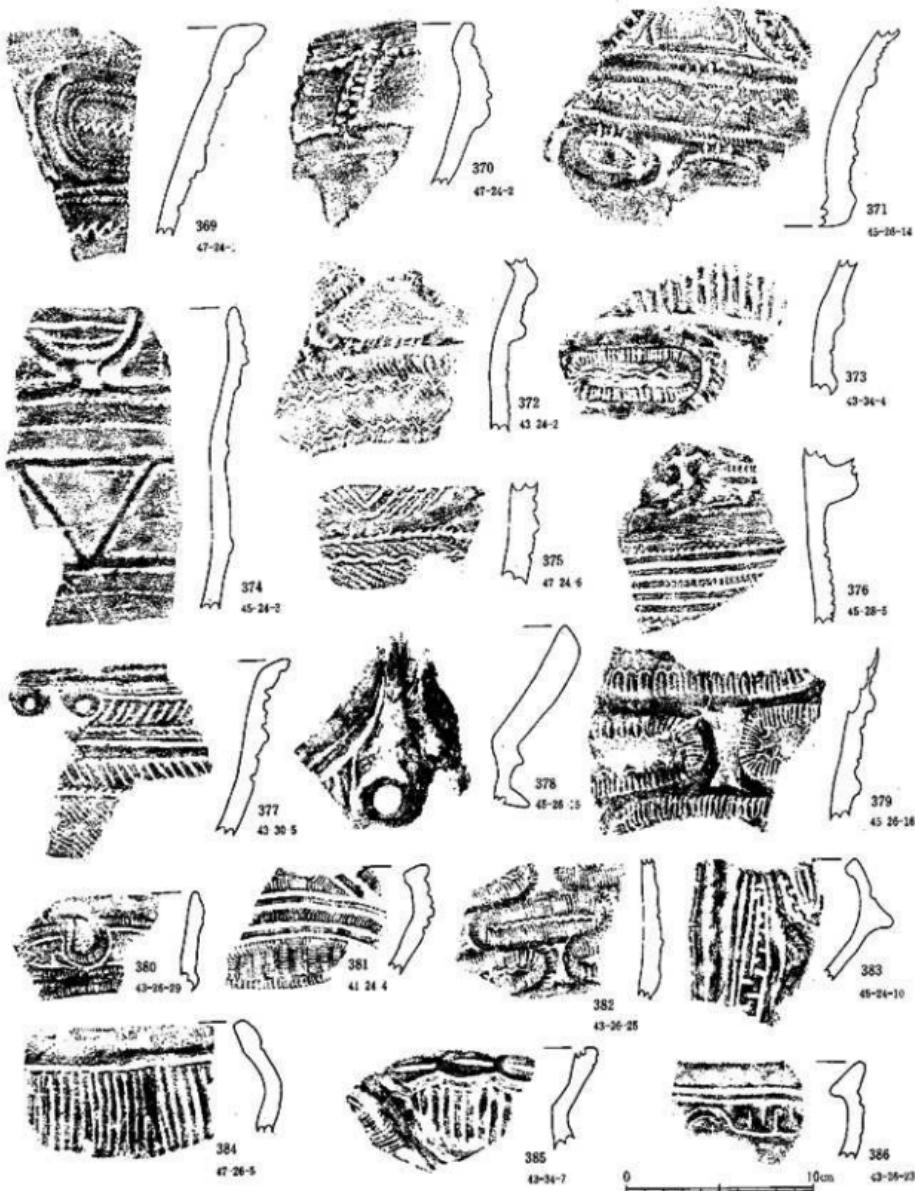
0 10cm



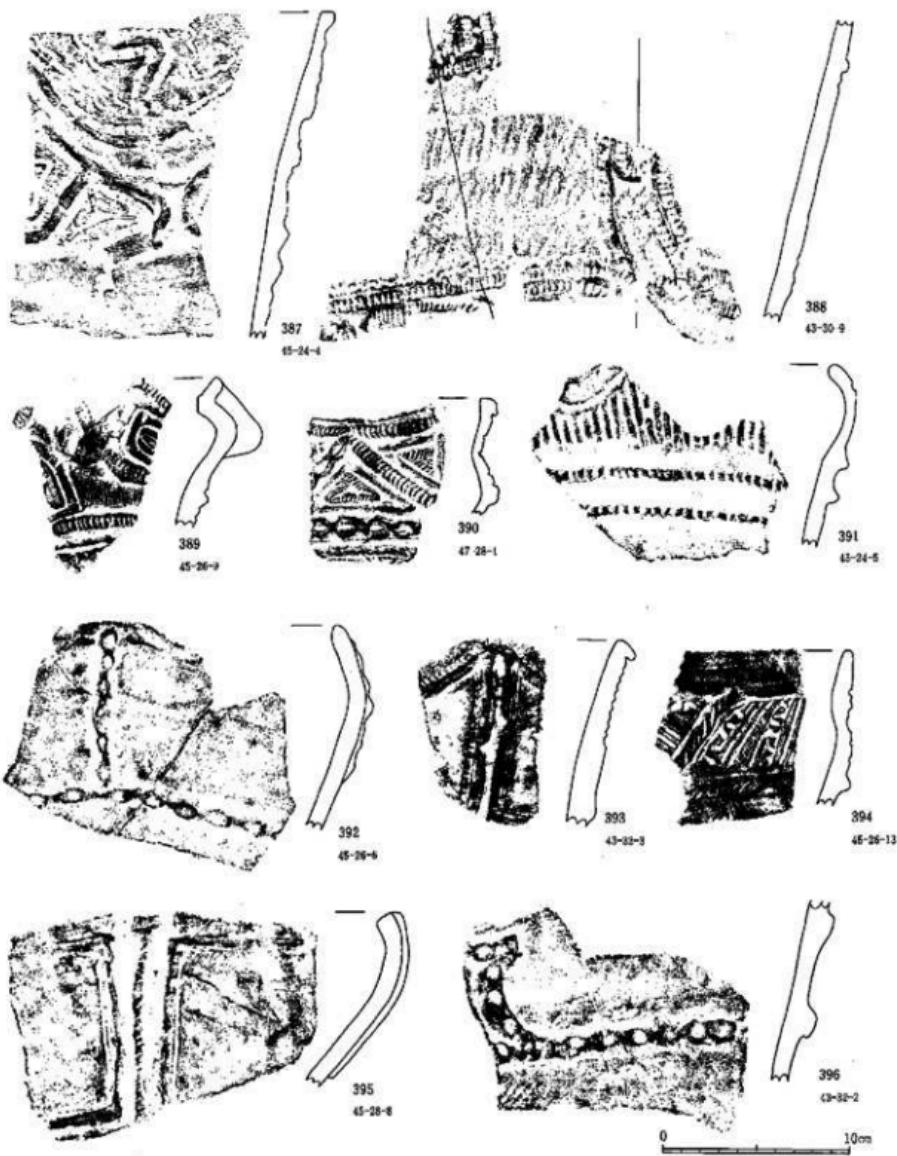
第123図 土器集中区出土土器拓影 (12)



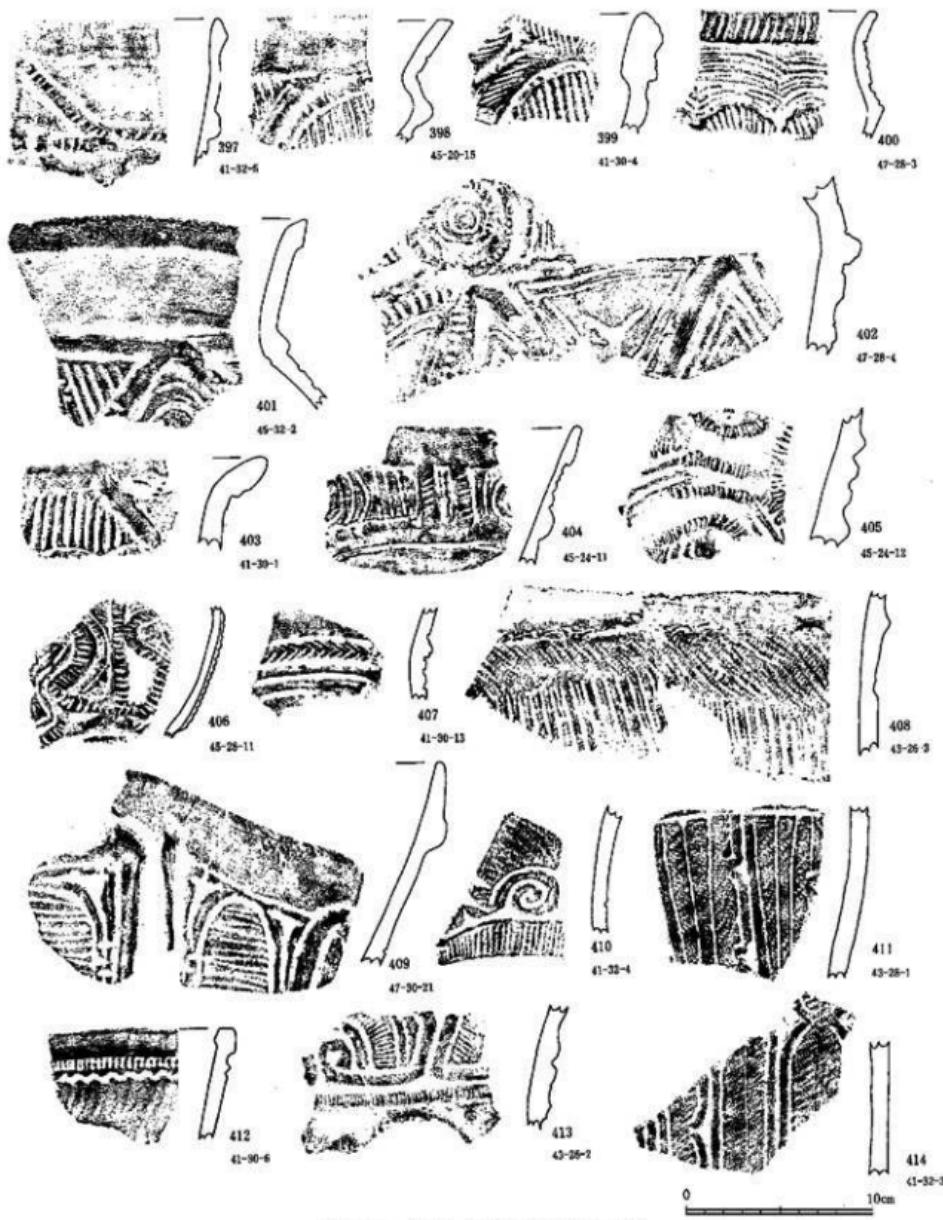
第124図 土器集中区出土土器拓影 (1)



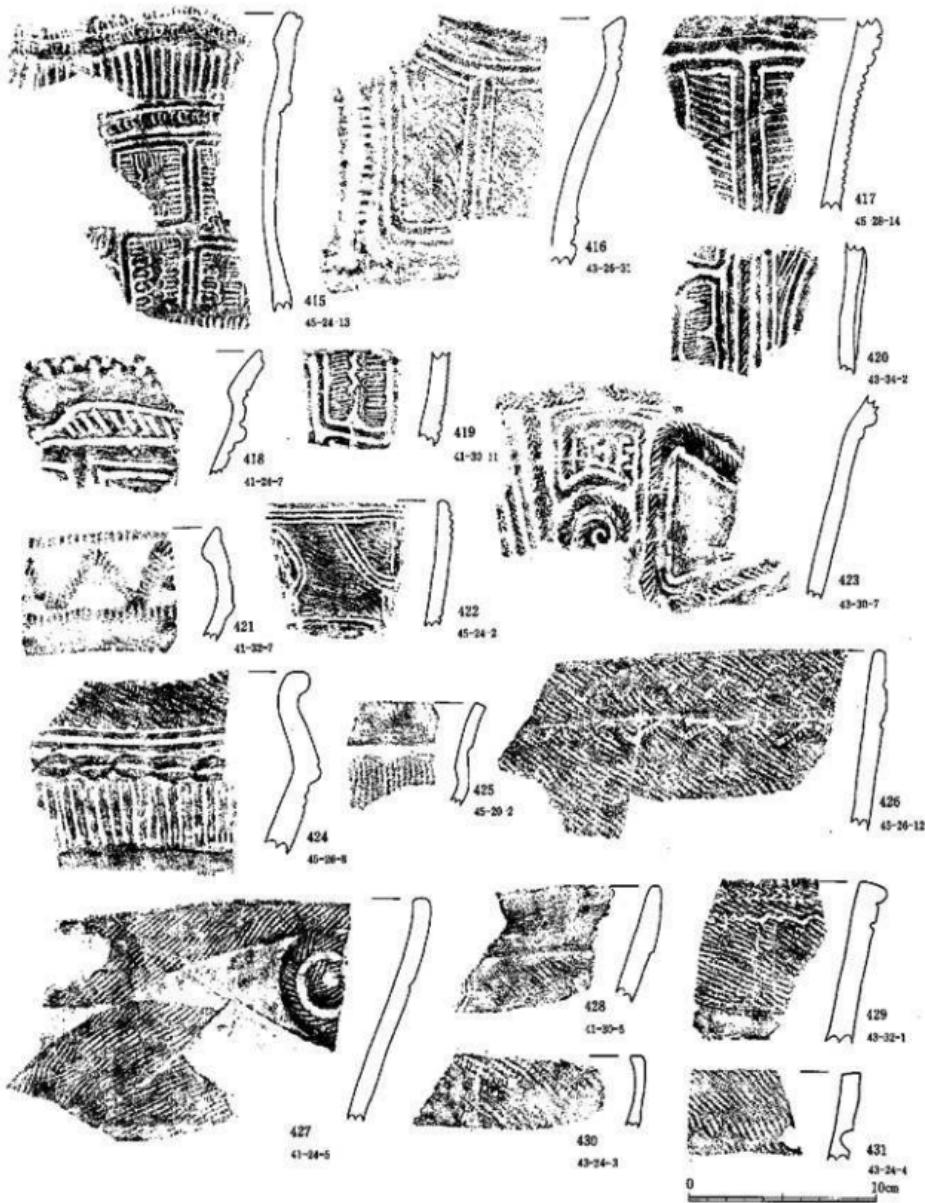
第125図 土器集中区出土土器拓影 14



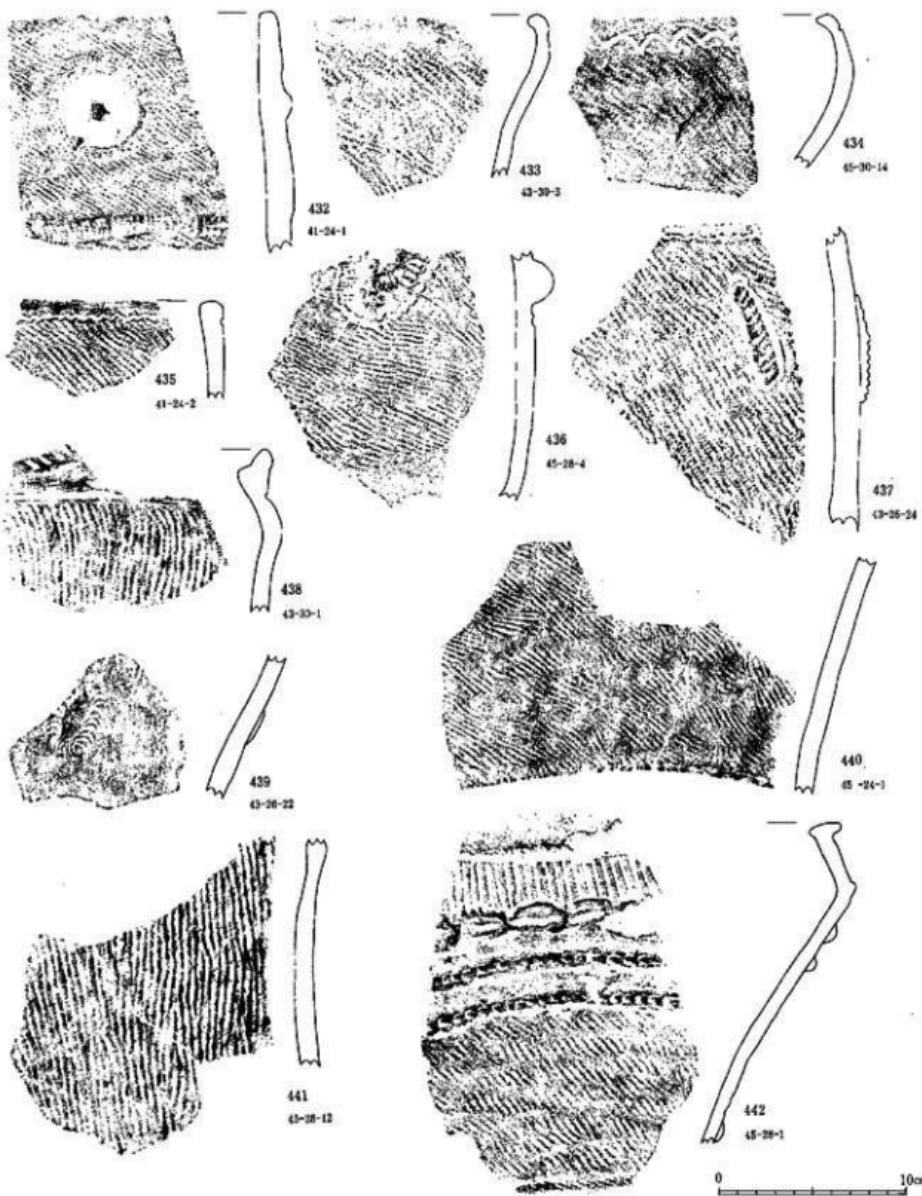
第126図 土器集中区出土土器拓影 (15)



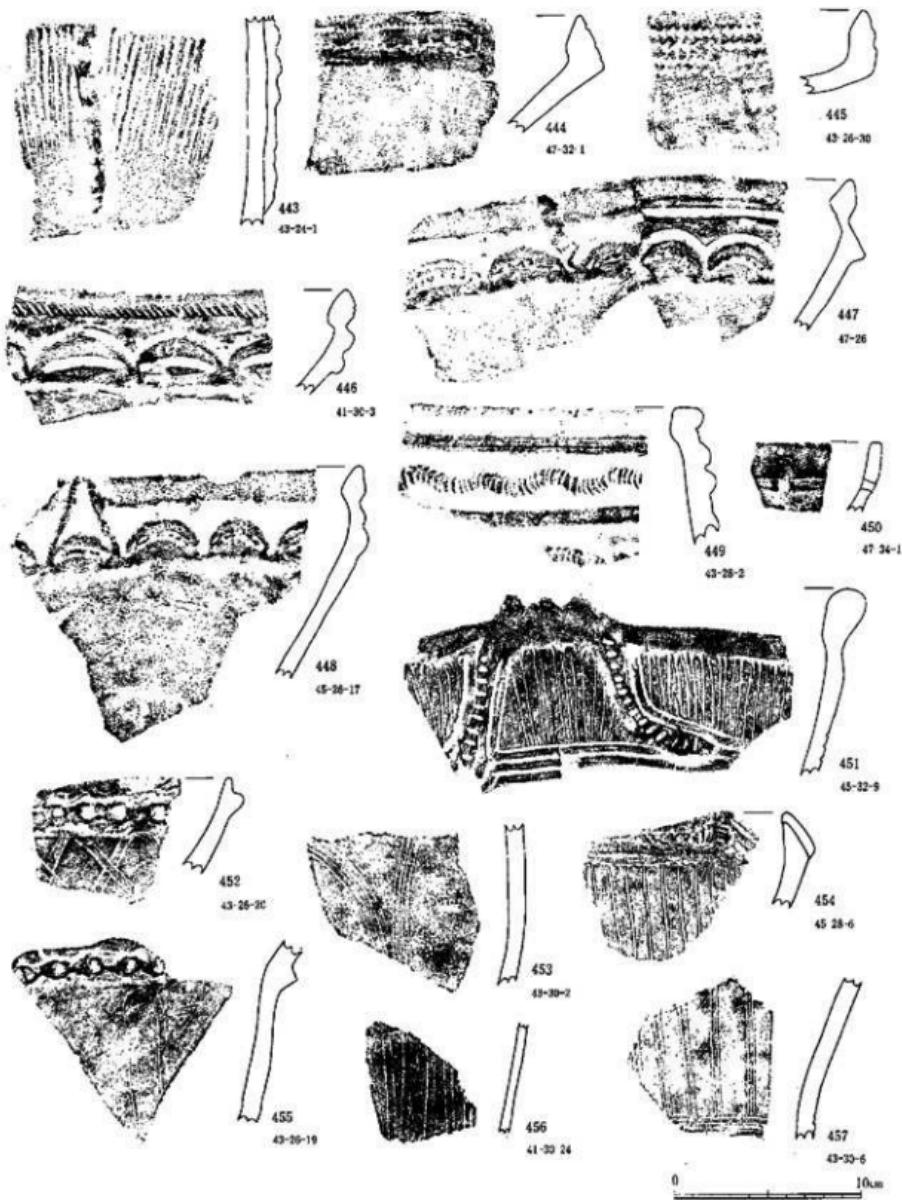
第127図 土器集中区出土土器拓影 (16)



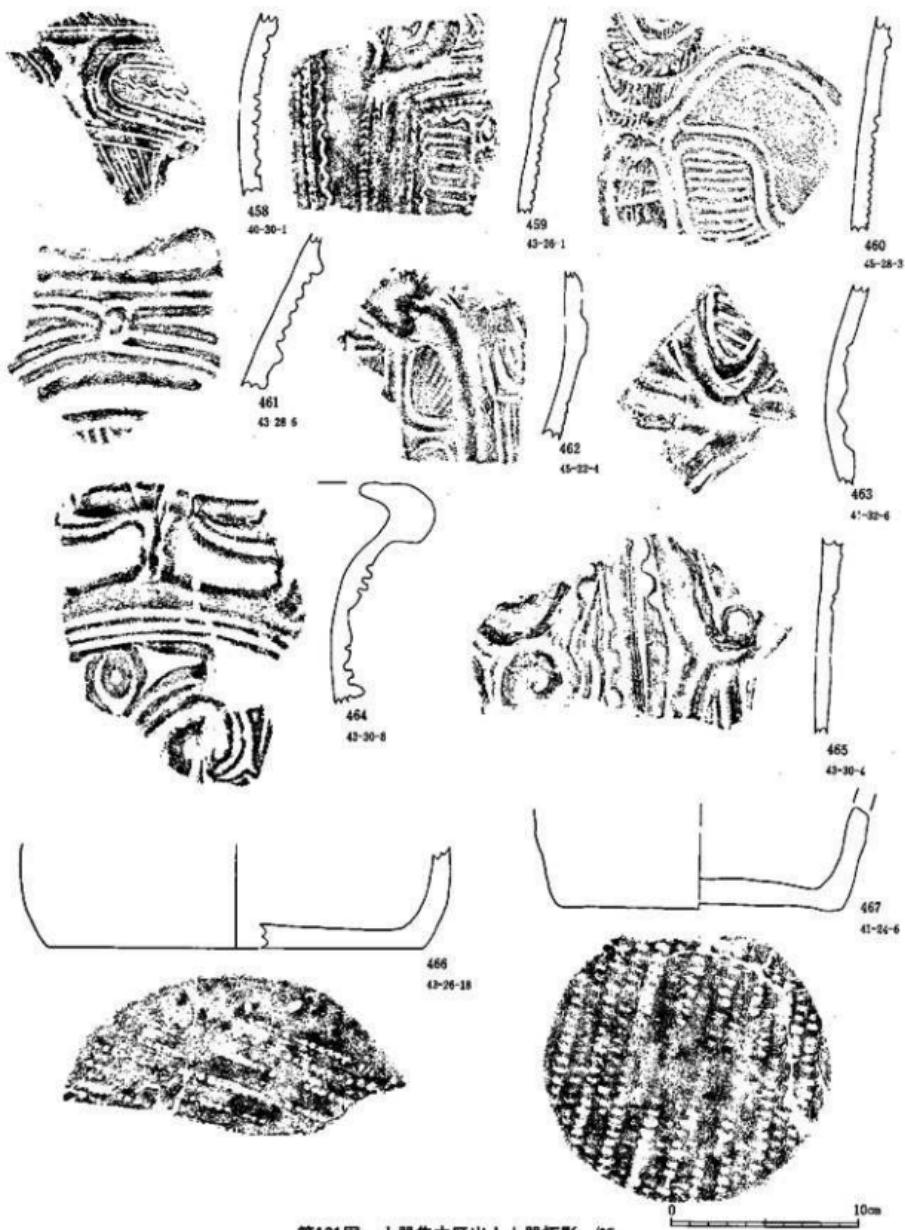
第128図 土器集中区出土土器拓影 (17)



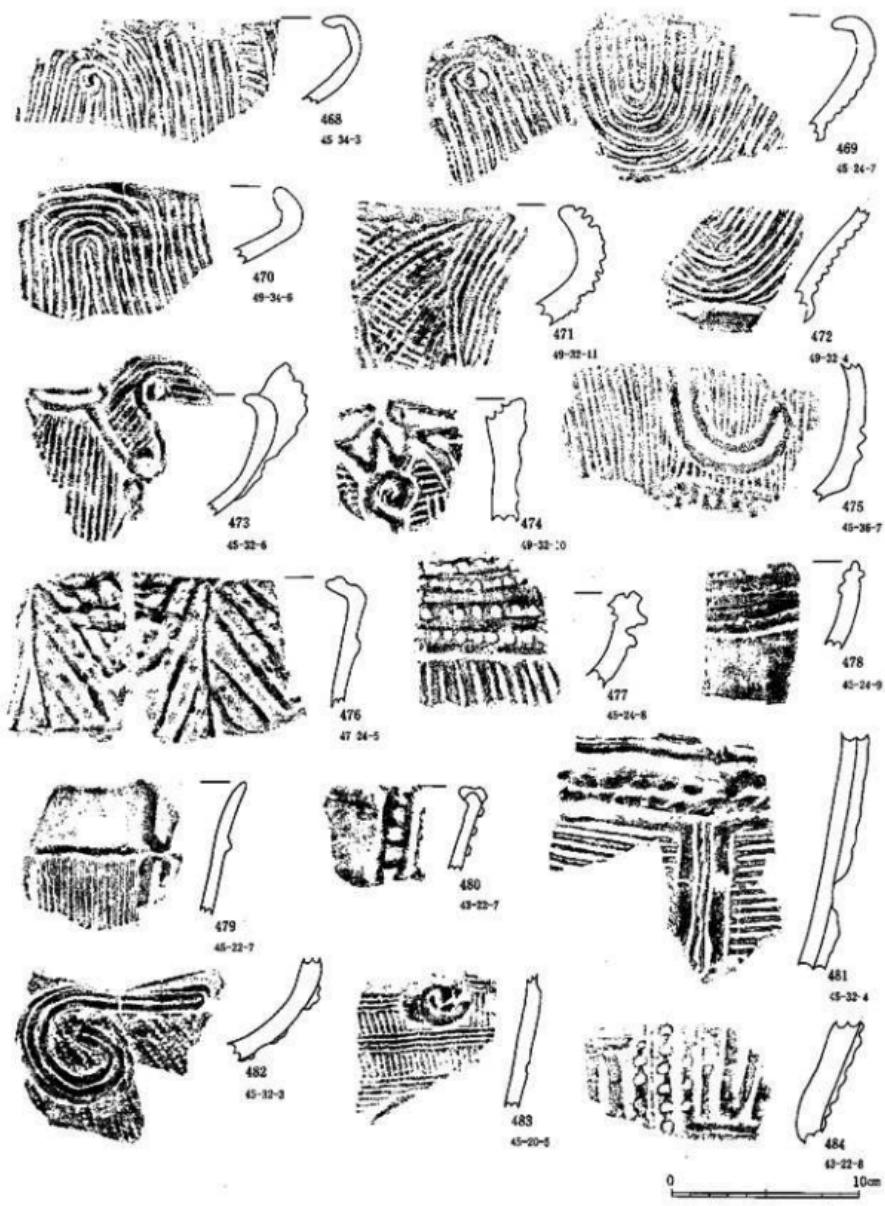
第129図 土器集中区出土土器拓影 (18)



第130図 土器集中区出土土器拓影 (19)



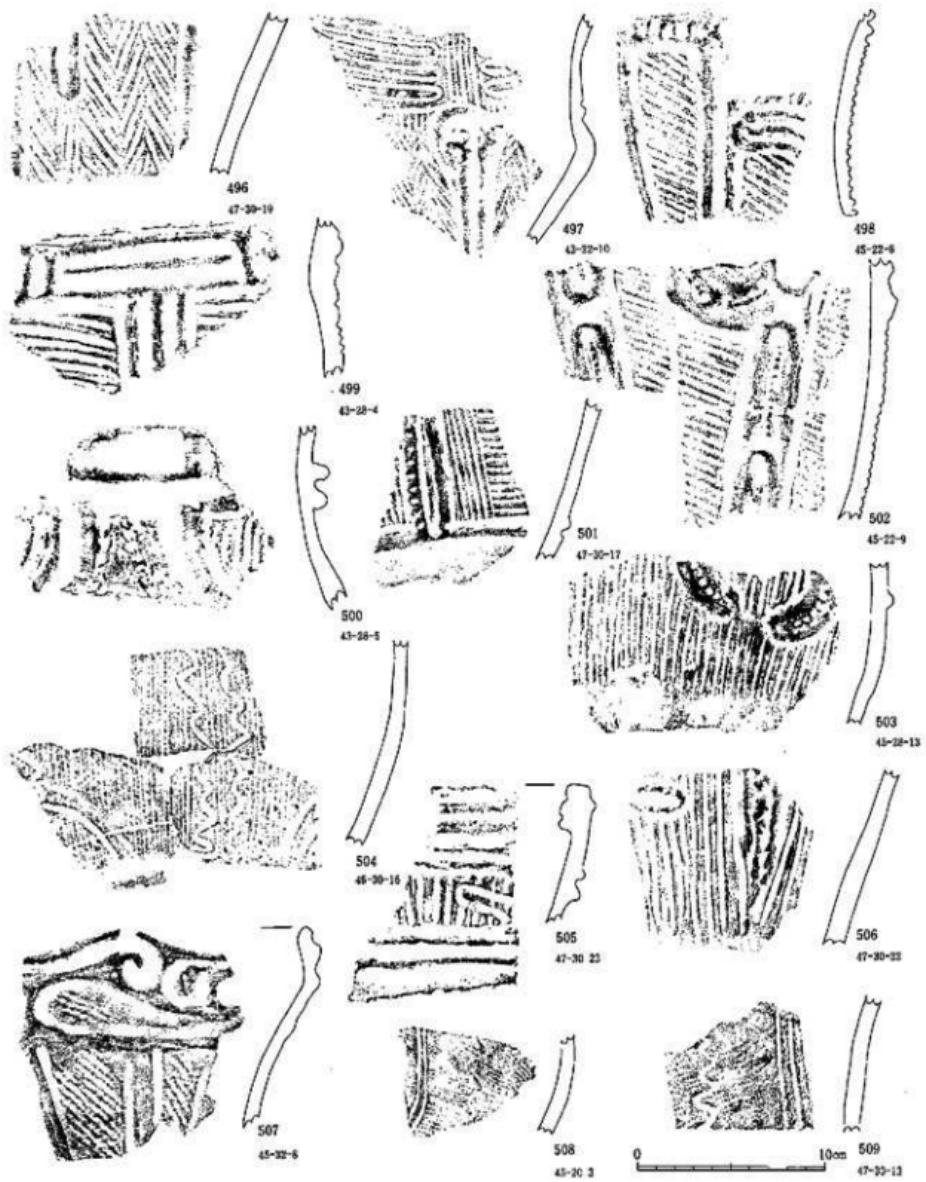
第131図 土器集中区出土土器拓影 (20)



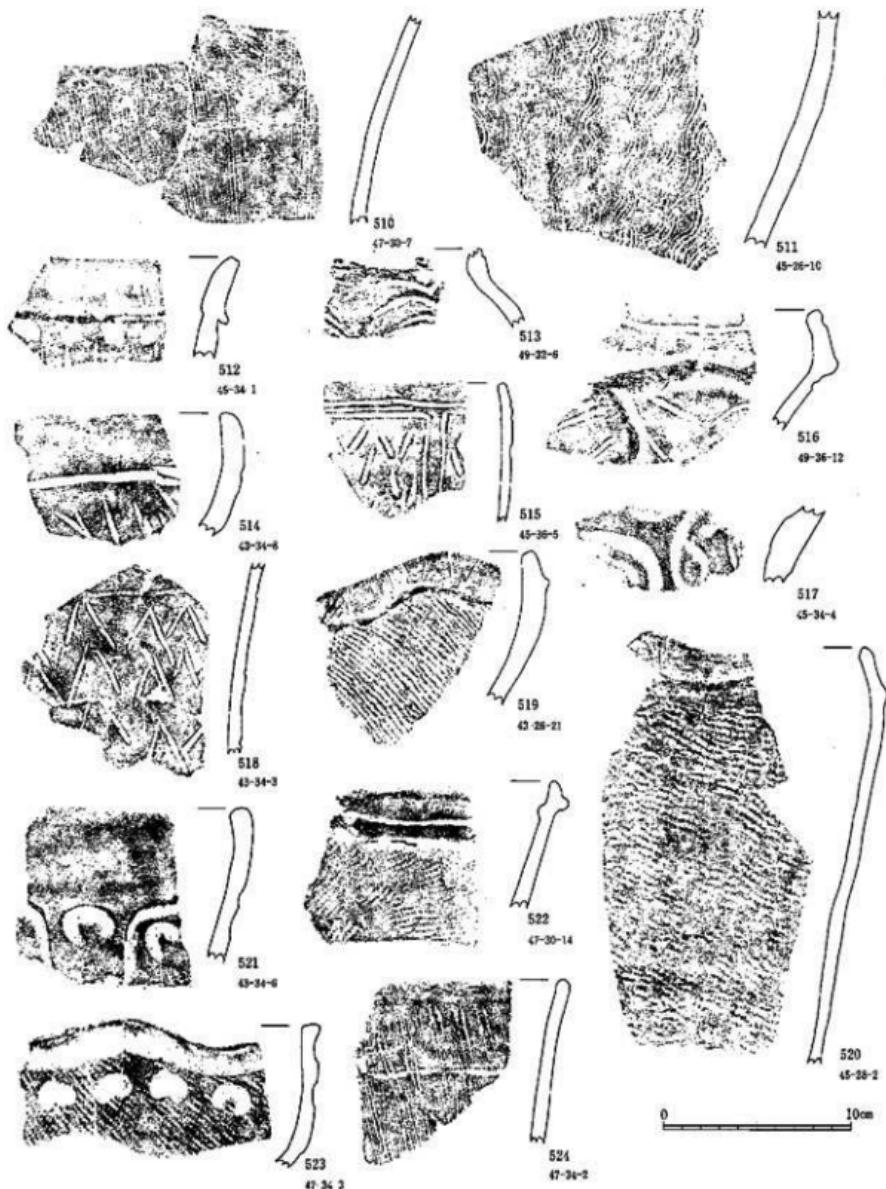
第132圖 土器集中區出土土器拓影 (2)



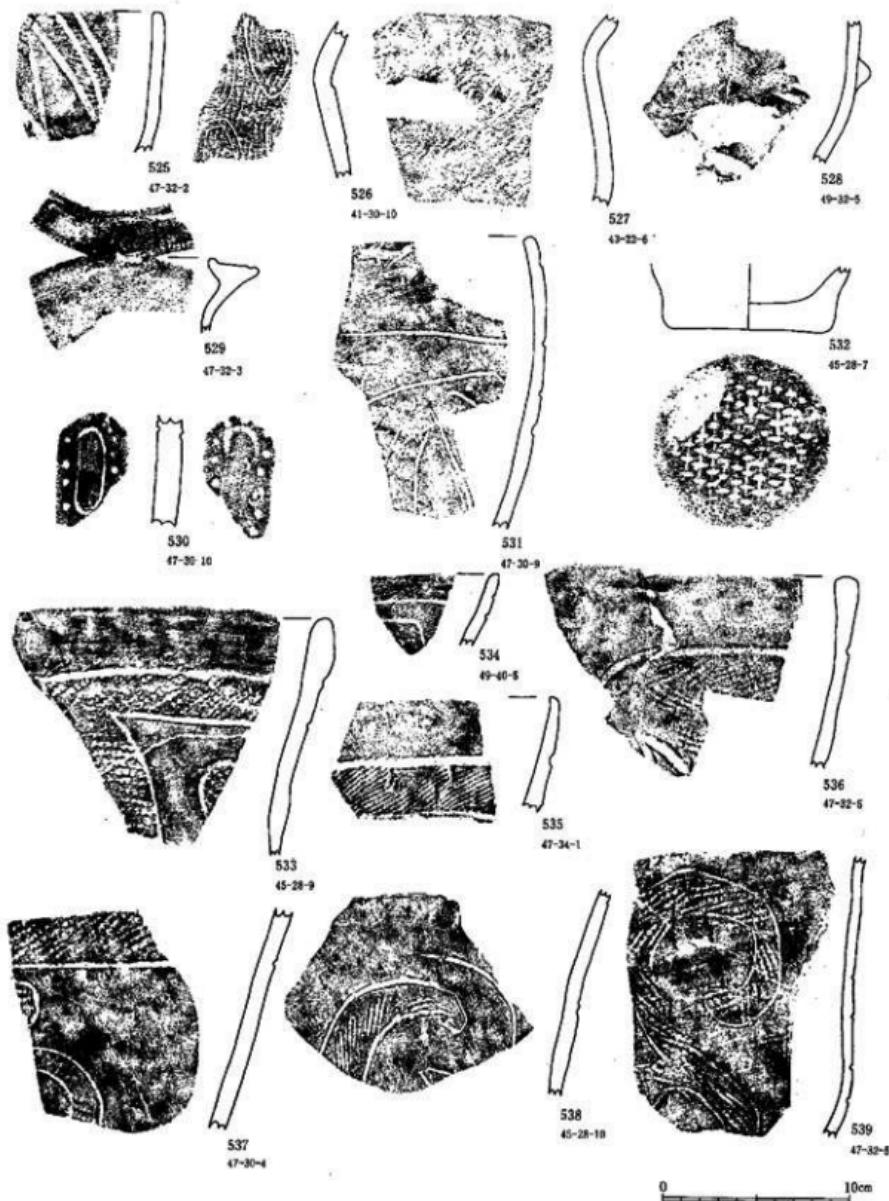
第133図 土器集中区出土土器拓影 (2)



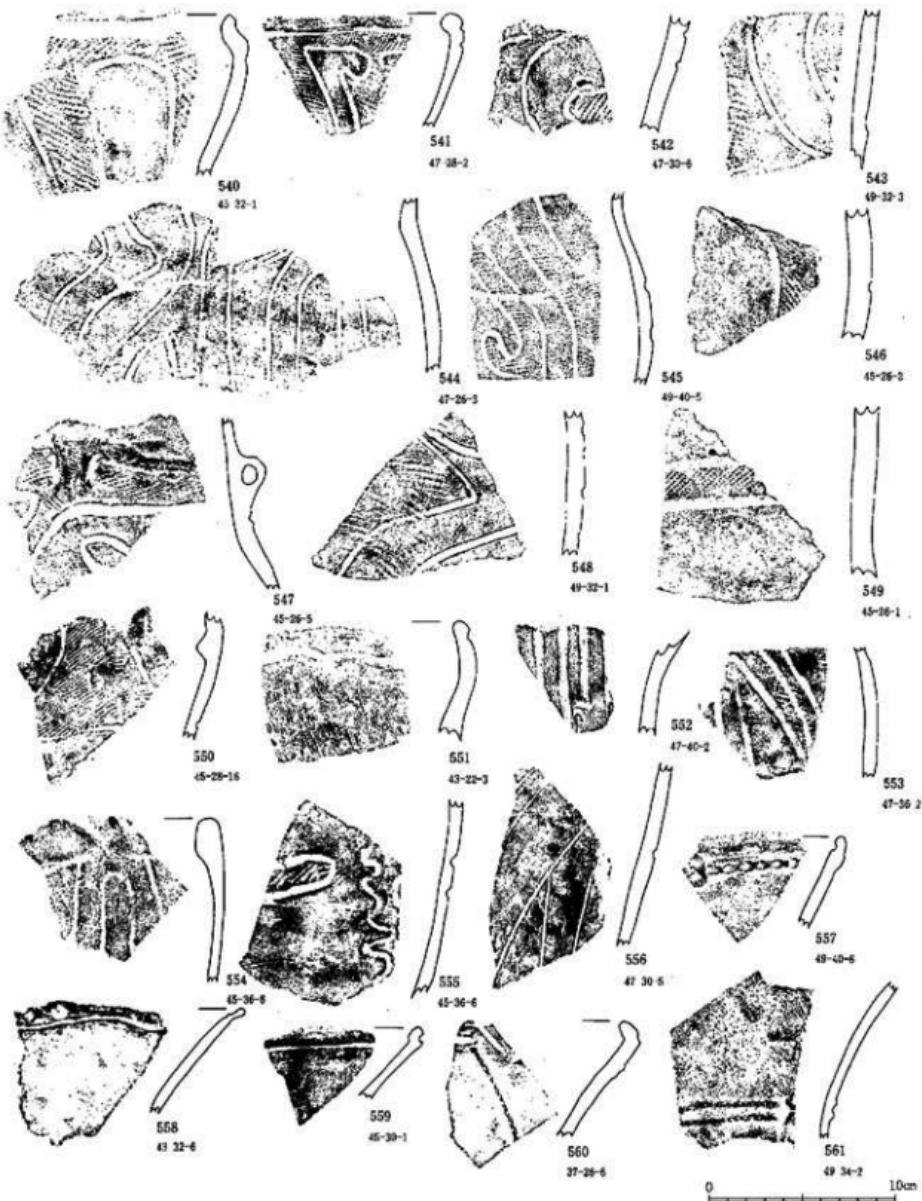
第134図 土器集中区出土土器拓影 (2)



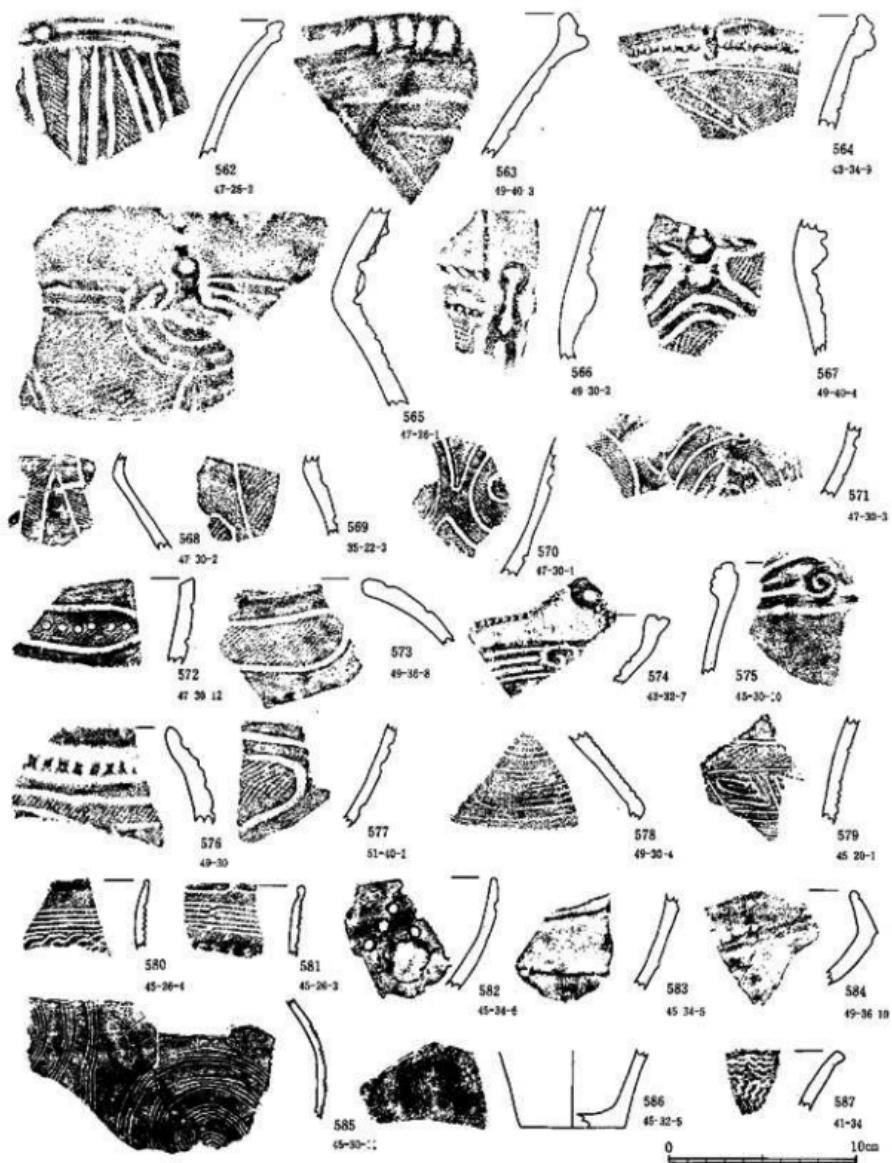
第135図 土器集中区出土土器拓影 (24)



第136図 土器集中区出土土器拓影 (25)



第137図 土器集中区出土土器拓影 (26)



第138図 土器集中区出土土器拓影 (27)

第5節 土偶・土製品等

坪ノ内遺跡からは土偶をはじめとして多種多量の土製品が出土している。整理にあたっては完形品または全形のうかがえるものを中心にして図化した。また、すべての土製品について出土地点・寸法・文様等を一覧表で登載してデータの提示に努めた。記述は土偶とその他の土製品にわけて行っている。なお、土製品のうちミニチュア土器については別項で記述している。文中の遺物を説明する数字は図番号である。図版の縮尺は1/2で、大形品の24が1/3である。

1. 土偶（第139～145図） 総計66点が出土している。整理にあたっては全形のうかがえるもののほか、頭（顎）部・胸部を中心に38点を図化している。小破片の土偶については割愛したものも多い。記述は図示したものを中心に、全体的な概要を記すに留めている。

出土した土偶のうち全形のうかがえるものは1点のみである。23は両腕を水平に張り出す無脚の土偶である。胸部は胸に正中線、左側面は竹管による刺突文、右側面は渦巻文・丁字文などが沈線で表現されている。背面は下端に内湾する菱形状の施文があり、腰を含む尻の表現と考えられる。また、底面には沈線で充填した三角形文がある。このほかに7と20は頭部を破損しているほかは残りのいい土偶である。7は両手を斜め上に高く挙げている、いわゆるパンザイ土偶である。他の土偶に比べて腰の最大幅がへそよりも上部にある。へそと側面には渦巻文が施されている。20は頭部を破損している有脚の土偶である。頭・両脚の破損面には芯棒痕があり、分割塊を連結して製作されたものである。腕は水平に張り出し、両腕から背中かけて水平に刺突文が施されている。腹面は乳房間からへそにかけて正中線が伸び、下腹部には対称弧刻文が施されている。両側面には、丁字文と弧線文がある。なお、この土偶はN45E26とN47E26間で接合したものである。このほかは、頭・腕・胸・脚部の破片が大半である。このほかに頭・腕部を残す胸部が少数ある。以下では、これらを部位別に記述する。

1) 頭部 顎の表現方法によって3種類とその他のものに分類できる。

I類（13・14・19・34） 両目の下（顎）に2本一組の沈線文（ダブルハの字文）がある。目の上には湾曲するV字形の隆帯があり、隆帯の上側には1～2本の沈線が施されている。目・鼻・口は沈線・刺突で表現されている。13・19については後頭部に穿孔が施されている。なお、19は隆帯上に、沈線で刻目が施されている。

II類（11・23） ダブルハの字文をもつが、目の上にはI類のような隆帯ではなく、沈線で2本の連絡弧線が表現されている。

III類（8・36） 目の上には幅広のV字形を呈する隆帯があり、その下には隆帯に沿った沈線が鼻の両側まで伸びている。目は沈線内の両端に円形の刺突文で表現されている。さらに、沈線内の最下部にも刺突が施されているが、その下側には鼻孔が別に作り出されている。口は円形の刺突文で

表現される。8は板状の頭部をもち、後頭部やや下寄りから横方向につきだす首をもつものである。なお、33は顔の表現方法は異なるが8と同様につきだす首を有している。

このほかに、様々な表情をもった土偶が出土している。これらは基本的には目を沈線、鼻・口を刻突で表現され、目の上には連結弧線が隆帶または沈線で表現されていることが共通している。なお、31は目・鼻・首などを同一施具とみられる工具で押引きされている特殊なものである。

2) 脣部 表現方法によって2種類とその他のものに分類することができる。

I類 (2・9・15・16・23・38) 乳房間からへその間にかけて沈線で正中線が表現されている。7点が出土し、6点を図示している。これらはおおむね文様が簡素であるが、16には背面に左腕上から右腕下へ、たすき状の2本の沈線文がある。

II類 (17・21・24・28・37) へその周囲を巻またはJ字形に取り囲む正中線 (J字文と仮称) が表現されている。さらに、左右の体側に沿った沈線が湾曲しながらJ字形にへその下で向かいあっている(28)。また、背面は2本の沈線が、下側で横にふくらみながら湾曲するU字文が施されている。側面には、へそと同じ高さのところに渦巻文が施され、その上側には沈線による縦長の区画文が配されている。また、頭・脚部の接合は必ず芯棒が使用されているもの。側面の渦巻文については、大形品の24が隆帶で表現されているほかは沈線で表現されている。37は、へその周囲をめぐるJ字文はあるが、側面の渦巻文は退化した様相を呈している。

上記のほかにも様々な脣部が出土しているが、類似化できるものはない。

3) 腕部 7と26を除いて、すべてまっすぐに伸びるものである。文様は周囲に沿って沈線がめぐるものが多い。先端には渦巻文をもつもの、ないものがある。7は先述のパンザイ土偶である。26はひじから先が下側へ折れ曲がる土偶である。脣部は乳房の間から腰にかけて沈線による三角文が施され、その下には複合鋸歯文が配されている。また、背側には渦巻文が沈線で表現されている。

4) 脚部 有文・無文や長脚・短脚などバラエティーに富んでいる。脚部の文様は、縦方向の数条の沈線で表現しているものが多い。長さについては短いものが多く、1のような長脚の土偶はむしろ少ないようである。なお4は下半が中空になっている筒状の土製品で、表面にボタン状貼付文や鋸歯文を配している。土偶の脚部として扱ったが、土製品かもしれない。

赤色顔料を塗装しているものは5・19がある。これらは沈線の内部や目のくぼみの中にわずかな痕跡として観察できたものである。おそらくは赤色塗装の土偶はもっと多かっただろうと考えている。

製作痕については、破損面に分割塊の表面 (図中では横方向の細線で表現)・分割塊にかぶせた化粧粘土の面 (縦方向の細線で表現) を残すものや芯棒痕が観察されるものがある。特に芯棒痕をもつ土偶は図示していないものも含めて18点が出土している。

2. ミニチュア土器 (第146~148図)

坪ノ内遺跡出土のミニチュア土器は総計51点を数える。それぞれの出土地点、形態、寸法、胎土

の特徴、成形・調整、紋様、時期について一覧表に掲載し、うち45点については実測図を掲載した。ここでは各ミニチュア土器の形態や成形・調整、紋様等にみられる特徴について述べ、最後に出土状態についてふれていくことにする。

(1) 形態について

51点のミニチュア土器を形態別に分類してみると、鉢形25・深鉢形9・浅鉢形4・台付き鉢形4・壺形6・釣手付き壺形・注口付き深鉢形・注口付き壺形各1となる。21・41は口辺部を一周する孔を穿ってある。壺形にした23は注口が付くかもしれない。鉢形とした3・4・5・18・20・22・31・34・38と、深鉢形とした2・35・36については残存部位からの推定であるため若干の異動はありうる。また、9や41は梅形、42～44は椀形ともいえる。いずれにせよ、形態ごとの比率は、一般の土器と大差ないものと思われ、後期前葉以降に比率を増すいわゆる粗成土器の「ミニチュア」は見られない。また、各形態のなかを個別に見ていくと、例えば25・26・33のような台付き鉢や8～11・16のように、ミニチュア土器独特の形態もあり、一般土器の形態をほぼ模した「ミニチュア」ばかりではない。こうした時、当然ながらミニチュア土器という用語の矛盾にぶつかる。ただ、小形土器という用語も、数度の統計処理を行ない客観的な数値を並べてみても、やはり用語の壁はあり、手づくね土器に至っては、後でも述べるとおり問題が多い。できれば土器形土製品とでもしたいところだが、ここで安易な術語の使用による混乱は避け、問題を含みながらもミニチュア土器と呼称する。形態別に出土場所をみると、壺形6個中5個が遺構に関わって出土しているほか、釣手や注口をもつ特殊な形態はすべて住居址に関わって出土している。またこれらは、完形品ないし完形に近く、破損度は低い。反対に土器集中区では、先に椀形とでも呼称しうるとした42～44の一群がまとまっている。こうしたあり方は、本遺跡にみられる特徴ではあるが、一般的には形態別に出土場所が片寄るとは思えない。

(2) 成形・調整・紋様等について

成形法のなかで、手づくねによっているものは7例に過ぎない。したがってミニチュア土器全体をもって手づくね土器と呼称することはできない。浅鉢形の40は、粘土塊から捺り出しているため器厚が厚く外面に指痕痕をもつ。33も内外面に指痕痕をもつが、鉢部と台部は別に作って接合している可能性がある。42～44は17同様手づくねが成形しやすい。他の多くは輪積みによって成形されている。特に6・9・23は内面に輪積み痕を明瞭に留めており、5・7・11・24・45は外外面に輪積みを消す指痕痕が目立つ。調整は専らナデによってなされるが、14・15・20・22・30は主として外面にミガキがみられ丁寧な仕上りを見せている。紋様がつけられているものは7例ある。1・29・32が当該期に通有の意匠を施し、9・41は胴部全面に繩を転がしている。23にもわずかに沈線で描出された渦紋があり、30の底部付近にも沈線が見える。成形から施紋までの土器製作にかかる一連の過程も、一般的の土器とほとんど変わることではなく、形態別に製作方法を使い分けている様子もうかがえない。また、本資料中には赤色顔料やアスファルトの付着例もなかった。

(3) 出土状態について

住居址内ピット埋納 住居址内のピットに埋納された状態で出土したミニチュア土器は2点ある。いずれも後期前葉の柄鏡形(敷石)住居址である。なかでも11の完形品は、10号住のほぼ中央P25(第29図)から出土し、埋土中位ながら磨製石斧や研磨砾、磨製石斧製作と思われる蛇紋岩の原石とともに共伴している。埋土内には多量の炭土および炭化物が混在し、本址内の他のピットとは明らかに様相が異なる。上面に敷石(住居床面)を施していることから、住居の使用時には通常機能していないことが明らかため、本例の典型として扱った。他に2号住張り出し部との接点に位置するP12から出土しているミニチュア土器も、ピットの性格から判断して埋納されていたものとして扱った。典型例の11の場合、板状砾を蓋に利用し、中には小骨片が認められていた。明らかに特殊な品物の収納を意図している。こうした僅かな例からミニチュア土器の性格が限定できるものではないが、ピットの性格と相まって、住居あるいは住居内の成員に絡んだ一定の儀礼行為があったことは推察できる。

住居址床面 住居址床面から出土したミニチュア土器は4点ある。出土位置は明らかに床面であるが、これらが住居使用時のものであると判断できる材料はない。14が出土した15住は楕円形プランの窓穴で埋土内から床上面にかけて砾をもつ。また、15が出土した16住や19の19生も同じく砾をもち、これらは埋土内集石ととらえられる。したがってむしろ住居内への流れ込みの結果である可能性が高い。ただ、4点とも完形ないしほほ完形品ではある。ところで住居床面出土の事例の場合、それが明らかに住居使用時のものか否かを、出土状態の観察や他の床面出土遺物や埋土出土遺物との関係を通じてつかむ方法を検討しなければならないことを痛感した。ミニチュア土器の機能・用途については一般に定説を見るまでには至っていない。仮にこれを、宗教的な遺物ととらえたとして、住居内に宗教行為を取り込んで行なっていたか否かは当時の社会状況を歴史的に把握する上で重要な視点となろう。

住居址埋土中 住居址出土のミニチュア土器のうち埋土中から出土したものが18例と圧倒的に多い。なかには、8のように炉内から出土したものや、13のように柱穴から出土したものもあるが、出土状態などを通じて、調査所見では埋土内出土遺物と同じ扱いをしている。住居の埋土中の状態については、集石の存在や多量な土器片の出土あるいは土偶や焼骨の出土など、「物送り」の儀礼との関連から注目されている。7住の9・10は、住居検出面の多量の集石間で確認した焼土上から2個対になって出土した。いずれも完形ないしそれに近く、使用後の状態を比較的よく留めているといえよう。本址埋土中にはシカの骨を含む焼骨片が混在しており、住居址廃棄後の儀礼行為を暗示させる。ほかはいずれも3分の2以上を欠く破損品で、その点では多くの土器や土製品のあり方と共通している。

土坑埋土中 土坑出土のミニチュア土器は、埋土中と検出面とを含めて8点ある。21が出土した土坑29は、長径およそ140cmの正円に近い楕円形で深さおよそ50cm、埋土は1層である。いっぽう28

が出土した土坑814は、径およそ90cmの正円で深さ50cm、埋土は单層である。両者ともに中期後葉に属し、土坑の状態から判断して、墓坑としての機能を想定してもよからう。しかも、両者が完形品であり土坑底面近くから出土している点を加えてみれば、こうした場合のミニチュア土器の用途は一応副葬品と想定しても差し支えあるまい。ただし、900基余りの土坑のなかには、相当数の墓坑が存在したはずで、そのなかで、ミニチュア土器を供した墓が2基しか認められないのは逆に異常である。時期的な特徴や性差・年令差に関わる事象か、被葬者もしくは彼を取り巻く集団内部の規範の現われによるものか、いずれにせよ複雑な集団関係を表現しているものと思われる。場合によっては、一般に理解するところの副葬品とは別の機能を考えなければならない。他の6点については出土状態等の記録に不充分な点もあり言及できないが、いずれも破損資料である。

土器集中区 土器集中区出土のミニチュア土器は16点ある。唯一完形品の40や略完形の29・30・32について、特殊な出土状態はつかめなかった。全体的に見ても、集中区内のあり方に分布の片寄りなり集中といった傾向は見当たらず、散漫に出土している。いっぽう土偶の場合は、分布の片寄りこそみられないものの、N47~43-E29~31に11個体分の破片が出土するなど、一部に分布の集中がある。住居址埋土内出土のミニチュア土器について想定した儀礼行為に近い形をここに当てはめたとき、本遺跡の土器集中区出土ミニチュア土器は、他の破損遺物同様捨てられる側にあり、捨てる（送る）側に立つ儀礼行為には関与していないかもしれない。

(4) まとめ

坪ノ内遺跡出土のミニチュア土器で時期が比較的はっきりわかるものは34例ある。このうち1例が中期中葉、6例が中期後葉に比定できる他は後期前葉～中葉であり、この時期の資料が圧倒的に多いことがわかる。

形態別の比率や製作法には一般的の土器との違いがあまりなかったが、たんに一般土器の「ミニチュア」としてとらえられるものばかりではなく、明らかにミニチュア土器としての個性をもつものがあることも指摘した。また、出土状態では完形品ないしそれに近い資料の遺跡内でのあり方を中心みて、ミニチュア土器が何らかの儀礼行為に供することで、複雑な集団関係の紐帯を取り結ぶ役割をもつものである可能性を考えてみた。

縄文時代のミニチュア土器については形態的な特徴から、古くは袖珍土器と呼称され、最近でも小形土器と呼ばれるなど注目を集めてきた。また、成形法についても手づくね土器の呼称が表わすとおり先学が着目している。さらに、赤色顔料やアスファルトの付着といった事例や民族例についても個別に研究されている。ただ、今のところこうした事例を集めすればするほど、ミニチュア土器の用途は広がるばかりで、一定の結論には達していない。しかむしろこうした個別研究は今後とも押し進めるべきで、例えば本稿で触れた出土状態についての検討等は調査法の工夫とともにまだまだ不充分であり、ほかにも上器内面の化学的分析など課題とすべき内容が多い。いっぽうでこれからは、早期から晩期までほぼ全国に分布する本資料を、体系的に位置付ける作業を合せて

行なう必要がある。残念ながらこの方面的研究は、土偶や土版など他の土製品や石製品に比べて、必ずしも進展しているとは言えないのが現状と思われるからである。

3. 土製品（第149・150図）

ミニチュア土器を除く土製品は総計68点が出土し、28点を図化・掲載している。39は上器片を利用した漁網錐である。土器の口縁を長側辺にし、3辺を研磨して長方形に整形され、相対する短側辺に擦切で紐かけがつくり出された切目錐である。土器片錐は他に1点が出土している。40～42は耳飾である。40は推定直径5.9cmの大形品で、片側の平端部が沈線と刺突で施文されている。41は直径5.5cm前後の完形品である。両面とも直径2mm弱の円形刺突文を2列単位で、周縁に沿って円形に巡らせた中をさらに十字形に区画している。42は直径1.66cmの無文・小形品である。耳飾は他に破片1点が出土している。43は匙形土製品である。上端は破損しているが、把手部に沈線文と上方に穿孔が施されている。このほかに把手部分が3往から出土している。44は男根形土製品で、沈線で亀頭部が表現されている。下半部は破損しているが、3本の沈線文がある。このほかに、N 45 E 20から男根形土製品の可能性のあるものが出土している。45は平面が橢円形を呈する中空の土製品である。文様は幅広の沈線で、頭部から螺旋状に沈線が施されている。土鈴と考えられるものである。46は土版で両面に文様がある。片面は沈線で渦巻文などが表現されている。他面は、表面の剥落により文様は不明である。47は2穴を有する土製品である。中央の上下端に刺突文が配され、左右端と刺突間を沈線で施文されている。孔があることから装身具の可能性が考えられる。48は不明土製品である。両面にわたって管状工具による刺突文が等間隔で施されている。このほかに種類の特定できない土製品の小破片が数点出土しているが割愛した。

土製円盤は50点が出土している。このうち施文・刺痕のある18点を図化している。素材の土器から考えられる時期では中・後期のものがほとんどで、なかでも後期のものが多い。なお、早期の土器片を素材にしたもののが1点出土している。素材の土器片は脇部・底部を利用したものが多いが、口縁部を利用したものも2点(61)ある。土製円盤の製作については上器片の周囲を打ち欠いただけのもの(10点)と、その後に刺離面を研磨しているもの(40点)がある。なお、49は中央部に両面穿孔の穴があけられている。

上記のほか、被焼した粘土塊が12点出土している。図化・一覧表への登載は行っていない。大きさは指頭大～拳大まで多様である。形状も丸いもの、棒状のものなどがあり、一部には指頭圧痕が明瞭に残るものもみられる。第3号住居址のP₁から最も多くまとまって出土している。このほかに第16号住居址から1点、土器集中区から4点が出土している。この遺物の性格等は不明である。類例の増加を待ち検討したい。

参考文献

山梨県教育委員会 1986『駒込堂』。 同 1987『秋庭堂』。

第2表 土偶一覧表

No.	出土地点	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	芯棒直	主な様	技法・備考	時期
1	I-2住 P10	片脚	(6.40)	(3.03)	(5.88)	67.59			沈縫・彌文	後期前葉
2	# 線	片脚	(1.71)	(2.62)	(1.35)	(6.10)			沈縫	中期?
3	# 下瀬-床	片脚	(3.36)	(2.46)	(2.69)	20.99			#	後期?
4	3住	片脚	(2.88)	(3.08)	(1.28)	10.04			?	後期中葉
5	#	#	(5.05)	(4.40)	(1.13)	21.85			沈縫	#
6	2	胸	(5.10)	(4.93)	(1.74)	69.38	正中線	#	#	
7	#	片脚	(5.55)	(2.99)	(1.82)	23.90	彌縫円	#	#	
8	6住	#	(4.11)	(3.02)	(1.40)	17.36			#	
9	#	片脚	(4.05)	(2.36)	(2.70)	21.15	1		沈縫	#
10	7住 P16	片脚	(2.65)	(1.65)	(1.23)	(4.65)		十字文	沈縫	後期前葉
11	3 10住 條	片脚	(3.84)	(3.36)	(5.60)	41.90			#・彌文?	#
12	12住	胸	(3.28)	(2.91)	(1.69)	24.00				#
13	4 # No.1	片脚?	(5.12)	(2.59)	(2.58)	24.80		彌縫文	沈縫・氣突・貼付	#
14	5 13住	片脚	(2.32)	(3.92)	(1.59)	17.40			沈縫・赤塗	#
15	#	胸	(4.88)	(4.95)	(3.00)	29.70		へそ	貼付	#
16	6 18住 P 8	片脚	(7.71)	(4.47)	(3.95)	97.00	1	U字文	彌縫・沈縫	中期後葉
17	#	片脚	(3.96)	(3.56)	(2.28)	18.90	1		沈縫	#
18	19住	片脚?	(2.21)	(3.77)	(1.71)	9.80			土製品?	#
19	7 # Na14	胸・脚	(3.52)	9.81	4.40	221.00	1	漢書文・U字文	彌縫・沈縫	#
20	#	頭	(4.46)	(5.66)	(4.18)	75.75				#
21	8 24住 No.1	#	(3.75)	(4.35)	(2.57)	19.75			彌縫・氣突	後期前葉
22	9 土 17	胸	(7.08)	(6.37)	(2.54)	46.85	正中線	沈縫	二期後葉	
23	土 47-	片脚	(2.51)	(3.16)	(1.46)	11.90			穿孔	?
24	I-528	#	(2.72)	(3.24)	(0.97)	7.75			沈縫	?
25	土 746	#	(2.03)	(3.90)	(1.79)	16.90			#	後期
26	N37E26	片脚	(2.89)	(2.85)	(3.40)	22.40			#	?
27	N41E20	乳房	(2.35)	(2.52)	(2.20)	(8.40)				?
28	10 N41E28	頭	(4.34)	4.95	3.06	51.55		漢書文	彌縫・氣突・押引	中期中葉?
29	11 N41E26N616	頭	(3.51)	(3.22)	(1.44)	4.30		彌-ダブル・ハの字文	沈縫・氣突	後期?
30	12 N43E26N61	片脚・頭	(4.10)	(3.74)	(2.13)	19.80	1	胸・穿孔	沈縫	#
31	13 # No.3	頭	(7.37)	(6.75)	(4.80)	82.80	1	後頭-安E.4	彌-ダブル・ハの字文	沈縫
32	14 N43E30	頭・胸	(6.16)	(4.66)	(2.97)	56.04			沈縫・氣突	後期
33	15 # No.2	片脚・胸	(5.95)	(6.03)	(2.17)	68.80	1	正中線	沈縫	#
34	16 N43E34	胸	(6.40)	(12.00)	(2.71)	89.65		#	#	#
	N41E34									

No	図 No	出土地点	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	芯椎痕	主な 様式	技法・備考	時期
35	17	N45E22Nc.2	脛	(5.66)	(6.65)	(3.42)	(40.87)	4	J字文・溝巻文	沈縫	?
36	18	# No.3	片脚	(5.16)	(5.95)	(2.88)	(32.65)		溝巻文	#	中期
37	19	# No.1	頭	(7.56)	(5.47)	(4.35)	(98.05)	1	ダブル・ハの字文 頭部穿孔2	陰彫・沈縫・赤鐵	#
38	20	N45E26 N47E26	脛・新・脛	(8.83)	6.52	4.16	60.69	4	直・正中縫・刈形茎刺文 直・J字文	沈縫・刺突	中期後葉?
39	21	N45E26	脛	(6.57)	(6.88)	(3.70)	(327.01)	3	J字文・溝巻文	沈縫	中期後葉
40	22	N45E28	片脚	(3.99)	(3.49)	(1.60)	(22.95)		溝巻文	沈縫	#
41	23	N45E28Nc.9 N45E26	脛・脛・新	10.54	7.95	(3.95)	(95.53)		直・ダブル・ハの字文 直・正中縫・刈形茎刺文 竹管頭・直・三角刃	沈縫・刺突	中期後葉
42	24	N45E30	脛・脚	(18.45)	(4.29)	(4.51)	(541.16)	4	溝巻文	陰彫・沈縫	#
43	#	片脚	(3.42)	(3.42)	(1.93)	(1.92)		溝巻文	沈縫	#	
44		N45E36	片脚・目	(5.39)	(4.05)	(2.81)	(60.03)	2		沈縫	#
45	25	# No.2 #	脚	(5.27)	(4.90)	(4.68)	(92.96)				後期
46	26	N45E46	片脚・脛	(8.80)	(8.70)	(3.45)	(161.96)		直・頭蓋文 青 溝巻文	沈縫	#
47	27	N41E30	頭	(4.42)	(3.71)	(2.50)	(21.95)	1		沈縫	中期後葉
48	28	N47E28	脛	(10.29)	(9.25)	(4.75)	(370)	4	J字文・溝巻文	沈縫・刺突	#
49		N47E30	片脚・目	(4.84)	(6.37)	(2.00)	(43.30)	2	正中縫	沈縫・押引	中期
50	#	頭	(3.92)	(2.86)	(2.70)	(25.30)			沈縫・刺突	#	
51	#	脚	(5.16)	(3.11)	(2.20)	(32.80)			沈縫	後期	
52	29	#	片脚・脛	(3.52)	(3.07)	(2.53)	(39.45)			沈縫・刺突	#
53	30	#	頭	(4.14)	(4.21)	(3.20)	(43.20)		頭部穿孔側に空孔	陰彫・刺突	中期
54		N47E34Nc.15	片脚	(3.70)	(4.23)	(4.15)	(40.50)			沈縫	#
55	31	N47E38	頭 :	(3.40)	(3.75)	(3.54)	(29.58)	1	頭部穿孔3	押引	中期後葉
56	32	N47E42	脚?	(3.22)	(2.08)	(2.14)	(13.70)	1			?
57	33	N49E28	頭	(4.74)	(4.65)	(3.85)	(39.72)			陰彫・刺突	陰彫
58	34	N49E30	#	(7.06)	(6.39)	(4.97)	(168.05)	1	ダブル・ハの字文	# #	中期後葉
59		N49E32	片脚	(2.06)	(5.06)	(1.96)	(18.33)			沈縫	#
60		N49E36	片脚	(4.39)	(2.11)	(1.60)	(24.00)	1		#	?
61	35	N51E30	頭	(4.21)	(3.92)	(2.64)	(30.26)	1	頭部穿孔3	陰彫・沈縫	中期後葉
62		N51E42	片脚	(3.61)	(3.24)	(4.20)	(30.02)			沈縫	中期
63	36	検	頭	(5.08)	(6.50)	(3.03)	(58.35)		青孔突起	沈縫・刺突	後期
64	37	坐脚	脛	(4.49)	(3.84)	(2.47)	(43.45)		J字文	沈縫	#
65	38	検	脛・脚	(6.53)	(5.99)	(3.20)	(93.08)		直・正中縫・刈形茎刺文 青 J字文	#	#
66		N41E28	頭	(3.23)	(4.05)	(1.93)	(19.00)			刺突・押引	中期

第3表 ミニチュア土器一覧表

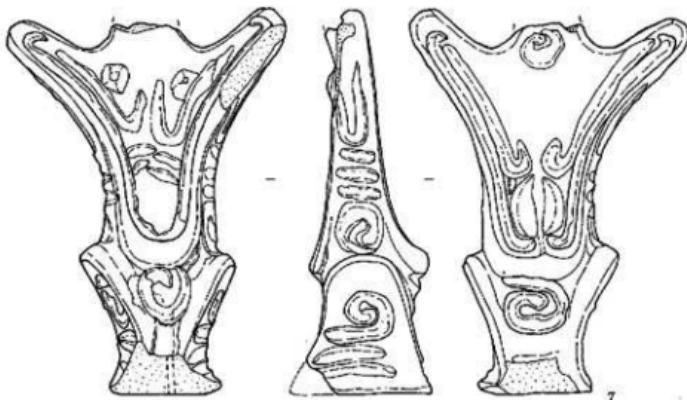
No.	図 No.	出土地点	形 式	寸 法		胎 土	成形・調整	紋 様	時 期	
				口径(cm)	底径(cm)					
1	1	上野中央区北部山田	深鉢形	—	33	—	石英・赤褐色細～微粒砂質	輪郭、内底ナガ模	中期初期	
2	2	1往 東側土中	(鉢形)	—	35	—	灰白色微粒砂質	内外面ナガ模	後期後半	
3	3	2往 東下層	(鉢形)	—	30	—	黑色微粒砂質	輪郭	II	
4	4	II (24内)	台形鉢形	—	36	—	灰白色粗粒砂質	手づくね?	II	
5	5	II 2往内	(鉢形)	—	36	—	灰白色粗粒砂質	輪郭	II	
6	6	3往	(鉢形)	—	35	—	灰白・赤褐色～微粒砂質	輪郭、内底直線切削面	後期後代	
7	7	4往 東側土中	(鉢形)	—	40	—	灰白・赤褐色～微粒砂質	輪郭、内底直線切削面	II	
8	8	5往 東上中	口円付鉢形	29	28	46	—	—	後期後代	
9	9	4往 II	鉢形	52	36	34	—	—	後期後代	
10	10	II (印内)	立形	39	—	—	石英細～微粒混	内同様状ナガ模	II	
11	11	II 西上牛	(鉢形)	—	42	—	灰白色微粒砂質	輪郭歴代	II	
12	12	2往 西土上西	深鉢形	36	45	51	灰白色糸～圓粒砂質	輪郭、内底直線切削面	後期後代	
13	13	II II	立形	21	58	53	灰白色糸～微粒砂質	内外面ナガ模	沈縫	
14	14	10往 P25内 No.6	鉢形	56	50	52	灰白色粗粒砂多量混	輪郭、内底直線切削面	II	
15	15	2往 西上中	深鉢形	—	40	—	灰白色糸～圓粒砂質	—	沈縫	
16	16	3往 P21内	浅鉢形	67	—	31	石英・赤褐色・多孔性・粗粒状	外周直線切削	II	
17	17	II 西東 Bell	柱口付直筒	31	35	49	石英・赤褐色直筒	輪郭、外周ミガキ	II	
18	18	II 西上中	浅鉢形	78	36	18	石英・灰白・赤褐色～微粒砂質	—	II	
19	19	15往 N5	鉢形	72	30	46	石英・灰白・赤褐色～微粒砂質	—	II	
20	20	II 西上中	直形	—	30	—	灰白・青色糸～圓粒砂質	内面延長直線切削	II	
21	21	18往 西側東側	約手付直筒	31	—	34	灰白・赤褐色～微粒砂質	手づくね?	中期後期	
22	22	19往 西上中	(鉢形)	—	—	—	灰白色粗粒砂多量混	—	II	
23	23	II 西直筒	II	—	—	—	灰白・青白・赤褐色～微粒砂質	外周・内底直線切削	II	
24	24	20往 P5内	(鉢形)	—	40	—	青白微粒砂質	外周ミガキ	II	
25	25	21往 西上中	II	—	22	—	灰白・灰白細粒砂質	—	後期後代	
26	26	22往 西上中	II	53	—	—	灰白色微粒砂質	内外面直線切削	中期後期	
27	27	II 土28	有孔直筒	24	—	42	灰白・赤褐色細粒砂多量混	内外面ナガ模	口部有孔	中期中期
28	28	II 230 横山面	(鉢形)	—	24	—	灰白色・青白糸～微粒砂質	—	—	後期後代
29	29	II 490	直形	30	—	—	灰白・灰白・赤褐色細粒砂質	輪郭、内底直線切削	口上部沈縫既成	II
30	30	II 204	鉢形	25	22	16	灰白色粗粒砂質	外周粗粒砂質	—	II
31	31	II 309 西上中	台形鉢形	—	35	—	石英・灰白細粒砂多量混	台付部延長調整直	—	II
32	32	II 503	II	—	34	—	赤褐色細粒砂質	台付部延長ニア	小網	II
33	33	II 490	深鉢形	40	—	—	灰白色微粒砂質	輪郭、内外面ナガ	後期後代	II
34	34	II 814	鉢形	30	40	20	石英粗粒砂質	—	—	中期後期
35	35	II 湯原中央区N37E24北側斜面	深鉢形	—	43	—	石英・灰白細粒砂質	輪郭、内面ナガ	高脚部直線切削内	II
36	36	II N43E20N6.1	直形	44	—	—	灰白・灰白色粗粒砂質	II 、外周ミガキ	北部付近比較	—
37	37	II N47E32N10	(鉢形)	—	34	—	石英・赤褐色細粒砂質	—	—	—
38	38	II N43E36	II	57	—	35	灰白色粗粒砂質	輪郭	輪帶曲線故	—
39	39	II N45E18N1南面	台形鉢形	34	26	45	灰白・赤褐色細粒砂質	手づくね?、内底直線切削	—	—
40	40	II N45E20	(鉢形)	—	42	—	豊舟・灰白粗粒砂質	内外面ナガ	—	—
41	41	II N45E22	(深鉢形)	—	32	—	灰白色粗粒砂質	—	—	—
42	42	II N45E28南東	(鉢形)	—	36	—	灰白色糸～微粒多量混	内外面ナガ	—	—
43	43	II N47E32南西	鉢形	—	15	—	—	—	—	—

No.	図 No.	山上地点	形 態	寸 法			土 質	成形・調整	状 態	時 期
				口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)				
44	38	一ノ原集中区 N47E32	(鉢形)	-	4.6	-	灰白色粘～颗粒砂质	内外面ナゲ底		
45	39	" N47E34	浅钵形	-	2.1	-	灰白色粘～颗粒砂质			
46	40	" N47E40	"	3.9	1.9	1.0	"	手づくね、外側削痕		
47	41	" N47E25	有孔深钵形	4.4	-	-	灰白色粘～颗粒砂质		上部縦孔孔径1.5	
48	42	" N45E36	鉢形	4.9	(3.7)	-	灰白色粘～颗粒砂质	手づくね?		
49	43	" N45E34	"	5.9	1.5	-	灰白色颗粒砂质	"		
50	44	" N51E36	"	3.8	(3.6)	-	"	"		
51	45	I 区 掘出物	"	-	2.2	-	"	輪郭、外側削痕		

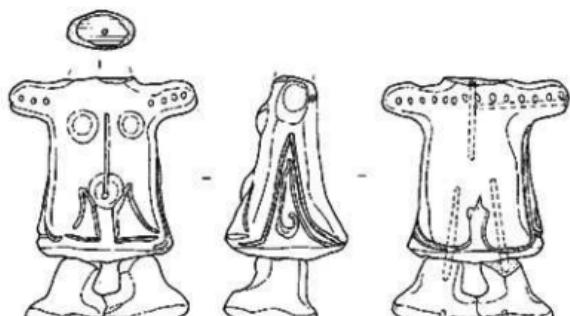
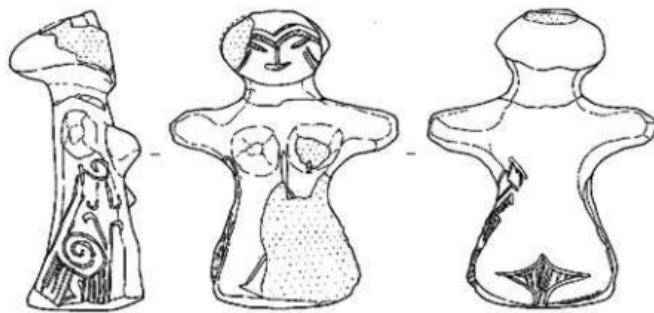
第4表 土製品一覧表

No.	圖 No.	種類	出土地点	大き (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損状況	主 な 特 徴	技法・備考	時 期
1	39	土器片盤	N49 E30	6.45	3.24	1.02	27.85	完形			中期?
2		三脚	10件 P23	0.13	0.45	1.47	7.50	1/2欠			後期前葉
3	40	"	18件	2.33	0.65	1.18	7.65	3/4欠			沈線・網突
4	41	"	N47 E34	5.52	5.48	1.54	54.85	完形	円・十字文	網突	後期武藏
5	42	"	N49 E30	1.66	1.52	0.35	0.48	下端欠			後期?
6		匙形土製品	3件 P28	4.79	0.36	11.15	0.36	1/2欠			後期牛英
7	43	"	4件	10.87	0.48	0.43	0.75	把手端欠			後期
8	44	男根形土製品	N43 E20N6.8	9.16	0.84	0.76	0.85	下端欠			沈線?
9	45	土盤(?)	19件 N651	1.76	0.59	0.46	0.58	1/2欠	らせん文	"	中期後葉
10	46	二版	N47 E28	9.35	0.99	1.96	6.08	1/3欠	満毫文	"	後期
11		不明	18件	0.18	0.09	0.09	0.09	完形	同心円文	"	中期後葉
12	"		18件 P 1	0.68	0.49	2.48	41.95	内側欠		绳文	"
13	"		土坑 417	0.96	0.19	0.38	0.65	横片			?
14	"		土坑 656	0.38	0.59	0.10	23.30	1/4欠			沈線・芯練痕
15	47	"	N43 E20	0.22	0.16	0.08	0.09	1/2欠			沈線・網突・穿孔
16		男根形土製品?	N45 E20N6.1	0.55	0.93	0.33	0.40	1/2欠			沈線
17	48	不明	N45 E38	0.78	0.16	0.58	0.99	兩側欠		制模(當次工具)	後期
18	49	土製瓦盤	1件 床	3.17	3.26	0.62	8.02	完形		穿孔・研磨	後期
19	"		2件	3.25	3.26	0.65	6.98	完形			沈線・研磨
20	50	"	2件	0.56	3.25	0.48	8.20	1/3欠	研磨		後期
21	51	"	2件	4.10	4.17	0.53	8.46	完形	研磨		後期
22	"		10件	3.20	2.96	0.97	8.07	完形		研磨	後期
23	"		10件	2.99	3.02	0.92	9.85	完形		研磨	後期
24	52	"	11件	3.90	4.16	0.97	22.80	完形		沈線	中期後葉
25	"		19件	0.68	2.90	0.36	0.43	1/2欠	绳文		後期
26	53	"	18件	3.00	3.50	0.85	11.08	完形			中期前～中期
27	"		18件	3.88	1.90	0.88	7.50	1/3欠		沈線・研磨	中期後葉

No.	No.	種類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	東北 (%)	表面状況	主な文様	技法・備考	時期
28		土製凹盤	18住	4.06	2.60	0.71	10.26	1/2欠	繩文	研磨	後期
29			18住	3.89	0.38	0.70	0.75	1/2欠		沈縫・研磨	後期
30	54	H	19住 N6.5	4.30	4.05	0.95	19.17	完形	繩文	研磨	中期前～中葉
31		H	土 109	2.68	2.41	0.77	5.83	完形		研磨	後期
32		H	土 163	2.69	3.62	0.74	0.69	1/2欠		研磨	後期
33		H	土 163	2.59	3.76	0.65	0.16	1/2欠		研磨	後期
34		H	土 163	3.44	2.32	0.64	8.26	1/3欠		研磨	後期
35	55	H	土 208	3.38	3.22	0.55	7.37	完形	磨削繩文		後期
36		H	土 234	3.14	3.44	0.73	8.19	1/4欠		研磨	後期
37		H	土 256	2.90	0.82	1.00	7.33	1/4欠		研磨	後期
38		H	土 353	2.63	2.31	0.70	5.08	完形		研磨	後期
39		H	土 497	2.12	2.07	0.83	4.17	完形		沈縫・研磨	後期
40		H	土 756	3.04	3.22	0.87	10.45	完形		研磨	中期後葉
41	56	H	N39 E36	3.95	3.95	1.10	21.17	完形		沈縫	中期後葉
42		H	N41 E28	3.15	3.17	0.83	9.89	完形	繩文	沈縫・研磨	中期後葉
43	57	H	N43 E30	4.55	4.25	0.86	22.61	完形		压痕・研磨	早期
44		H	N43 E32	4.06	4.02	0.71	15.22	完形		研磨	中期後葉
45	58	H	N43 E36	2.54	2.36	0.61	4.48	完形		沈縫・研磨	後期
46		H	N45 E34	2.19	2.06	0.65	4.14	完形		研磨	後期
47		H	N45 E36	3.91	3.32	0.67	7.27	完形		研磨	後期
48		H	N45 E36	2.74	3.40	1.06	11.47	完形		研磨・口縫部	中期後葉
49	59	H	N45 E38	3.85	0.38	1.05	9.59	完形		沈縫・研磨	中期後葉
50	60	H	N47 E24	3.20	3.17	0.65	9.80	完形	繩文	沈縫	後期
51		H	N47 E26	3.74	3.45	0.99	15.32	1/3欠		沈縫・研磨	中期前～中葉
52		H	N47 E32	3.40	3.11	0.82	10.84	完形		研磨	後期
53		H	N47 E34	2.20	3.39	0.85	0.19	1/2欠		沈縫	後期
54	61	H	N47 E34	3.04	0.16	1.10	0.09	完形	竹管文	研磨・口縫部	中期前～中葉
55		H	N47 E38	3.36	3.72	0.99	16.21	完形		研磨	中期前～中葉
56	62	H	N49 E28	3.21	2.98	0.75	9.06	完形	繩文	沈縫・研磨	後期
57		H	N49 E38	2.94	2.77	0.70	7.23	完形	繩文		中期後葉
58	63	H	N49 E40	4.17	0.45	0.99	0.69	1/3欠		沈縫・研磨	？
59		H	N51 E34	3.28	3.26	0.99	12.17	完形		研磨	後期
60	64	H	N51 E36	4.65	3.90	1.05	27.39	完形	繩文		中期後葉
61		H	檢	4.15	4.41	1.14	24.11	完形		研磨	中期後葉
62	65	H	檢	3.06	3.30	0.66	8.36	完形	繩文	沈縫・研磨	後期
63		H	檢	3.66	0.36	0.88	0.08	1/3欠		沈縫・研磨	後期
64	66	H	檢	4.80	4.14	1.02	19.99	完形	竹管文・繩文	研磨	中期前～中葉
65		H	檢	2.50	2.42	0.86	5.28	完形		研磨	後期
66		H	檢	2.05	2.14	1.11	5.75	完形		研磨	後期
67		H	檢	0.99	2.76	1.00	0.49	1/2欠		研磨	後期
68		土製片鍬	N47E34集石部	2.94	3.01	1.01	13.13	#			？



7



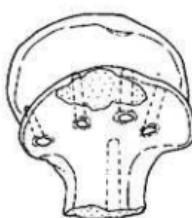
23

20 0 10cm

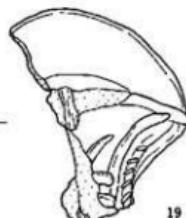
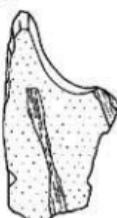
第139図 土偶(1)



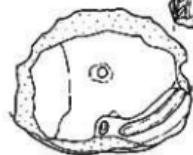
14



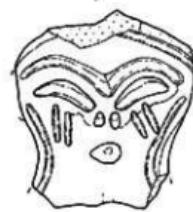
13



19



34



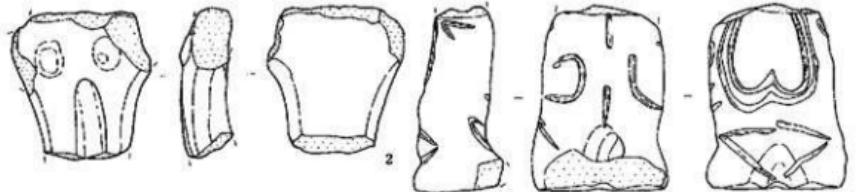
34

0 10cm

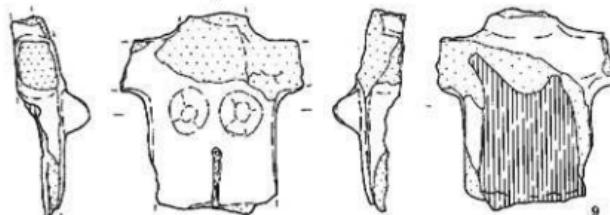
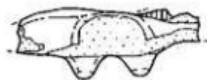
第140図 土偶(2)



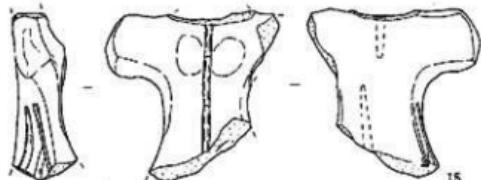
第141図 土偶(3)



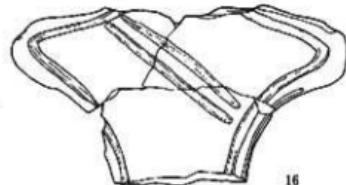
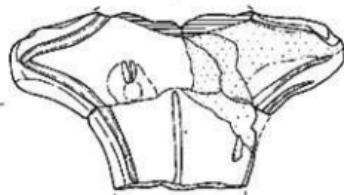
38



39



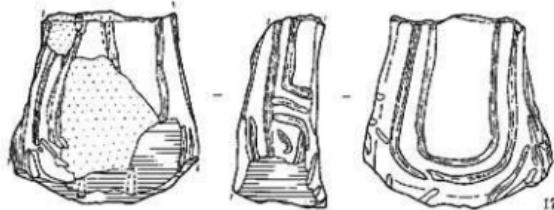
15



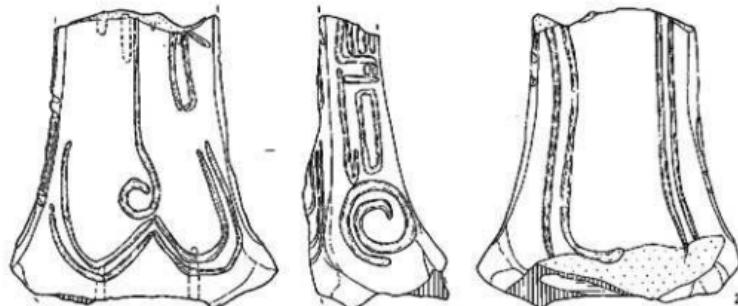
16

0 10cm

第142図 土偶(4)

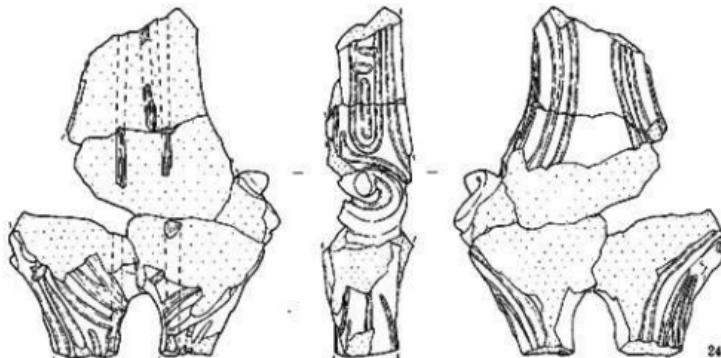


17



28

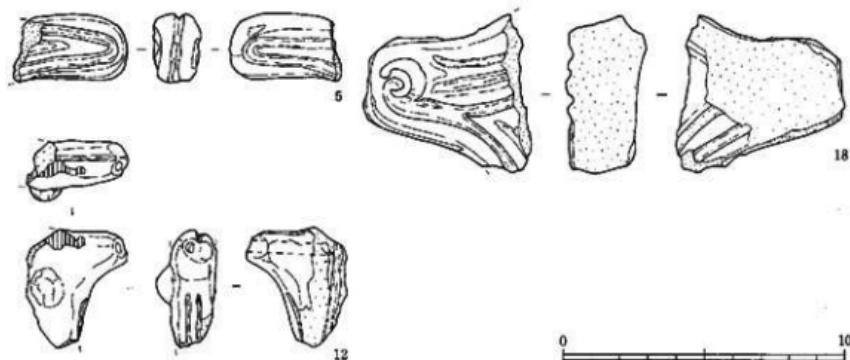
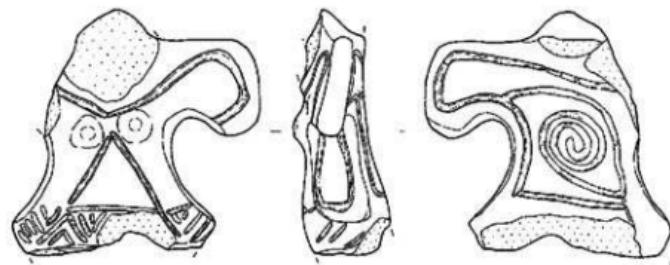
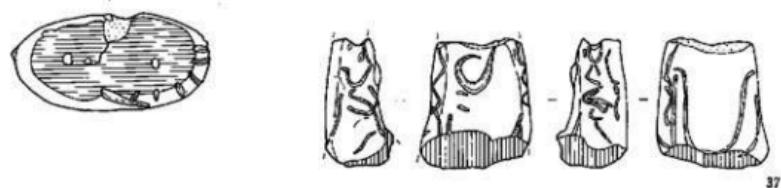
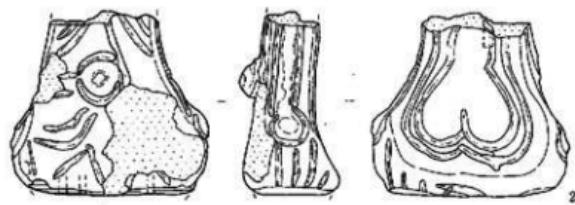
0 10cm



24

0 10cm

第143図 土偶 (5)

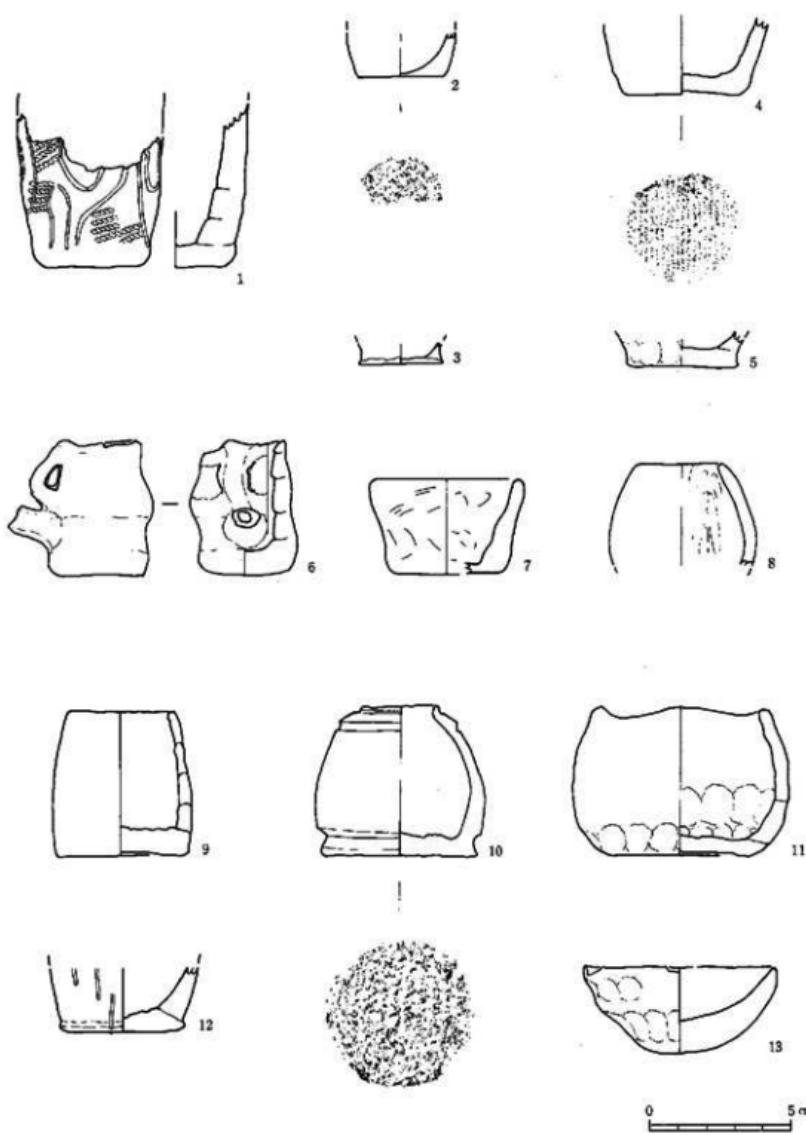


0 10cm

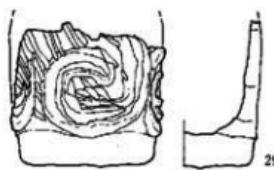
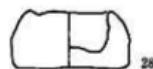
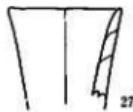
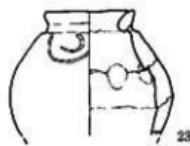
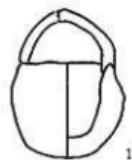
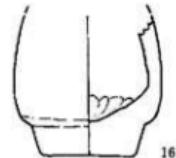
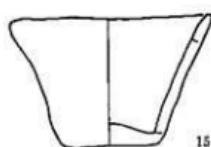
第144図 土偶 (6)



第145図 土偶 (7)

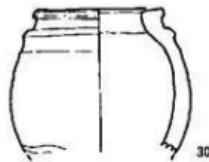


第146図 ミニチュア土器 (1)

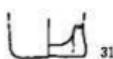


0 5 cm

第147図 ミニチュア土器 (2)



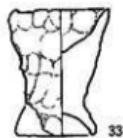
30



31



32



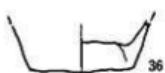
33



34



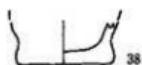
35



36



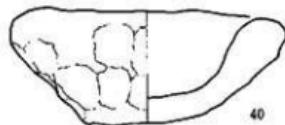
37



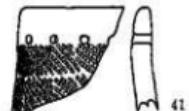
38



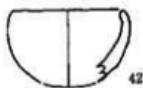
39



40



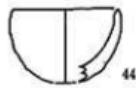
41



42



43



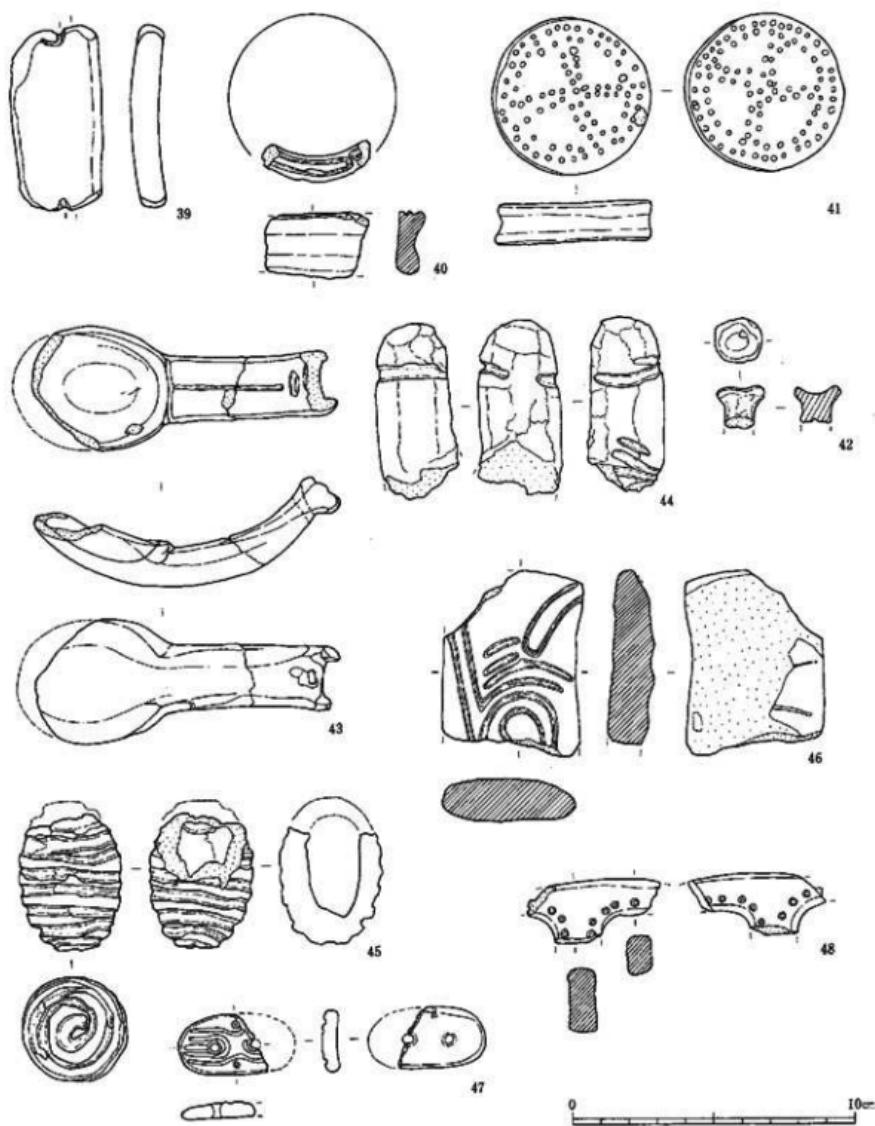
44



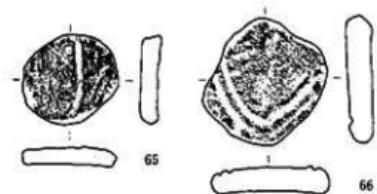
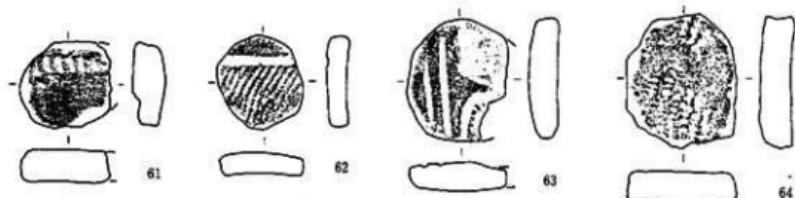
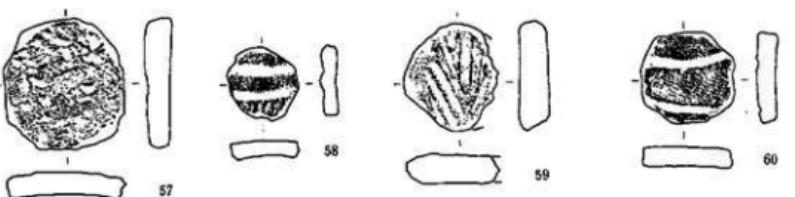
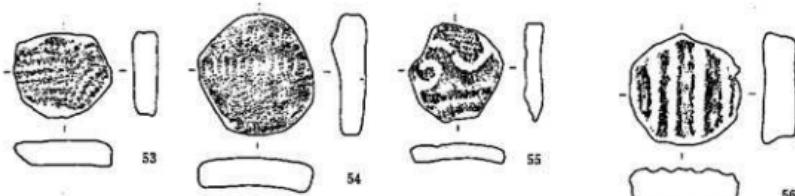
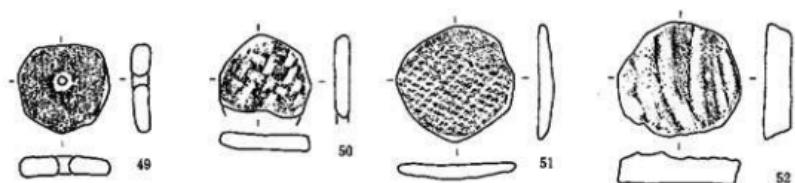
45

0 5 cm

第148図 ミニチュア土器 (3)



第149図 土製品 (1)



0 10cm

第150図 土製品 (2)

第6節 石器・石製品

1. 石器（第151～167図）

今回の発掘調査で出土した石器群のうち定形的な石器と原石・石核は以下のとおりである。

①石槍	1点	⑨石錐	10点 (0.8%)
②石鎌	246点 (20.2%)	⑩凹・敲・磨石	376点 (30.8%)
③石錐	44点 (3.6%)	⑪石皿	8点 (0.7%)
④ビエス・エスキーゴ	89点 (7.3%)	⑫砥石	49点 (4.0%)
⑤石匙	21点 (1.8%)	⑬研磨砾	24点 (2.0%)
⑥スクレイパー	31点 (2.5%)	⑭不明石器	1点
⑦打製石斧	212点 (17.4%)	⑮原石・石核	31点 (2.5%)
⑧磨製石斧	78点 (6.4%)	総計	1221点 (100.0%)

このほかに2次加工のある剝片、使用痕のある剝片、剝片、碎片等が大量に出土している。坪内遺跡の石器群を理解するためには、これらを含めた総合的な分析が必要である。しかし、限られた整理期間と紙数の中では定形的な石器しか扱うことができなかつた。そこで、できるだけ多くの石器に関するデータを提示することを目標に整理作業は以下の方針で行った。

- すべての定形的な石器について出土地点・寸法・重量・石質・破損状況等を一覧表に登載する。
- 実測は完形または全形をうかがえるもの、特殊なものを中心に行った。
- 石器の種類毎に形態・調整・素材等で分類し、図化できなかつた多くの石器について基礎的なデータを提示する。
- 石器の分類は基本的には多量の石器を出土した中部高地（特に長野県）の縄文時代遺跡の調査報告書で使用されている分類方法⁽¹⁾を援用し、データの利用の便をはかる。なお、本報告書独自の分類基準も併用している。

記述にあたっては石器の種類毎に、分類の基準・石器の概要を中心述べることにする。文中の石器を説明する数字は図番号である。また、分類の基準の説明の中の（ ）は石器一覧表で使用している分類項目の略号である。なお、石質鑑定については太田守夫氏のご教示を受けている。

①石槍（1） チャート製。全長8.17cm、幅3.14cm、主さ34.55kgの有茎の石槍。中央やや下寄りに最大幅をもちそこから下に凸形の茎部が続いている。

②石鎌（2～71）

分類の基準

- 基部の形状による分類：凹基（凹）、平基（平）、円基（円）
- 茎部の有無による分類：有茎鎌（有）、無茎鎌（無）

3) 側刃の形状による分類：五角形（I）、内湾（II）、三角形（III）、最大幅下端（IV）、最大幅下方（V）

4) 破損部位による分類：完形（O）、先端（A）、片脚（B）、両脚（C）、先端と片脚（D）、片側刃（E）、基部（F）、先端と基部（G）、縦に半欠（H）

石器の概要 246点が出土している。石材は黒曜石製186点（75.6%）、チャート製60点（24.4%）である。有茎鐵（71）が1点あるだけで、他はすべて無茎鐵（216点）である。基部は破損品・未成品を除いた190点のうち、凹基161点（84.8%）、円基5点（2.6%）、平基24点（12.6%）である。側刃はIII～V類が多い。破損状況については、先端と片脚を破損しているもの（A・B・D類）が多いが、特に身の薄い部分なので、使用～廃棄～出土の間にも破損の機会がある点を考慮しなければならない。なお、縦に半欠する石鐵（H類）が7点出土している。これらは先端からの加熱によるリング・フィッシャーをもつことから、未成品を除く4点については使用の際に破損したものと考えられる。特徴的なものとして小形の剥片鐵（66）、長脚鐵（70）がある。

③石錐（72～88）

分類の基準

1) 形態による分類：棒状錐（棒）、つまみをもつ錐（つ）

2) 錐部調整による分類：片面加工（片）、両面加工（両）

石器の概要 44点が出土している。特に第18号住居から5点、第20号住居から7点とまとまって出土している。石材は黒曜石製28点（63.6%）、チャート製16点（36.4%）である。形態からみると、棒状錐は18点、つまみをもつ錐は23点が出土している。つまみは明瞭なつまみをもつもの（73・77・78など）と錐部から逆「八」字状に広がって、頭部と錐部の境界が不明瞭なもの（75・83）などがある。錐部の調整については、両面加工が36点で、片面加工はわずかに7点であった。一般に棒状錐の錐部への調整は細かく丁寧であるのに対し、つまみをもつ錐の調整はあらい。使用痕については、錐部先端の剥離面の稜に摩耗のあるものが10点ある。特殊なものとして87は両端に錐部をもつものである。凸基・有茎鐵の可能性もあるが、断面が厚みのある菱形を呈することから錐として扱った。なお、棒状錐の錐部は、断面が三角形・菱形・不整四辺形が一般であるが、幅広肩平な錐部をもつもの（82他）がある。穿孔用の錐ではなく剥離の機能をもつものかもしれない。

④ピエス・エスキュー（89～115）

分類の基準

1) 剥離方向による分類：上下端の剥離（I）、上下端と左右のいずれか（II）、上下端・左右端（III）

2) つぶれの位置による分類：上縁（△）、下縁（▽）、上・下縁（○）、上下縁と側縁（●）

石器の概要 89点が出土している。石材は黒曜石87点（97.8%）、チャート製2点（2.2%）である。おおむね長さ2cm前後の四辺形を呈するが、縫についても剥離による破損のため一定していない。側面の形態については、上端に打面状の平坦面をもち逆三角形を呈するもの（91・92他）と上

下端が薄い紡錘形のものがある。上下端に剝離をもつもの（I類）は70点（78.7%）ある。平面形は方形、台形状を呈するものが多い。なお、113・115は、両極剝離のない1辺が片面加工で連続する剝離が施され直線的に成形されている。上下端と左右いずれかに剝離をもつもの（II類）は14点（15.7%）出土している。左右いずれかの剝離痕は上下の剝離痕に比べて短いものが多い。この剝離については、平面または断面を調整するために施された剝離と考えている。上下と左右端に剝離があるもの（III類）は5点（5.6%）が出土している。2cmを超える比較的大きなものが多い。縁部のつぶれは32点にみられた。このうち上縁につぶれ痕をもつものは25点ある。特に、上縁のみが15点、上下縁にみられるもの8点が多い。

⑤石匙（116～136）

分類の基準

- 1) つまみと刃部の位置関係による分類：横形（横）、縦形（縦）、斜形（斜）
- 2) 刃部の形状による分類：外湾刃（外）、内湾刃（内）、直刃（直）
- 3) 刀部調整による分類：片面加工（片）、両面加工（両）

石器の概要 21点が出土している。これらはチャート製の小形・精製の石匙（16点）と硬砂岩・ホルンフェルス（砂岩製）の大形・粗製石匙（5点）に分類することができる。

前者は横形7点・斜形5点・縦形1点がある。刃部調整は片面加工で片刃状を呈するものが大半である。これらは、すべて主要剝離面側から剝離が施されている。両面加工で紡錘形の両刃を呈するものは119・133のみである。両面加工で片刃を呈するものはすべて背面側の剝離面が刃部を形成しており、腹面側の不連続な剝離は整形が主な目的だったのではないかと考えている。素材剥片については122が縦長剥片を素材にしているほかは、横長または不整方向の剥片を利用している。大形粗製の石匙は、さらにその中でも大形の一群（123・130・132）と小形の一組（135・136）に分けることができる。これらは、横形を呈し、腹面側は素材剝離時の剝離面を大きく残している。直またはわずかに外湾する刃部をもつものと考えられるものである。

⑥スクレイパー（137～153）

分類の基準

- 1) 刀部の形状による分類：外湾刃（外）、内湾刃（内）、直刃（直）
- 2) 刀部調整による分類：片面加工（片）、両面加工（両）
- 3) 素材による分類：縦長剥片（縦）、横長剥片（横）

石器の概要 連続する剝離を加えて刃部を形成しているもので、つまみのないものをスクレイパーとしている。なお、破損品の中には石匙の刃部が含まれている可能性がある。31点が出土している。これらは、石匙と同様に小形・精製品と大形・粗製品の2種類がある。

小形・精製品は26点出土。チャート製21点、黒曜石製5点である。刃部は直刃が大半で、外湾刃・内湾刃は少ない。刃部調整は、片面加工・両面加工とあるが、両面加工でも背面側の剝離面は大き

く連続するのに対し、腹面側の剝離面は小さく差であり、片刃を意識して剝離調整を行っていると考えられる。素材は継・横長・不整形な剝離片が使用され、いずれも剝離面の末端に刃部が作り出されている。なお、143・148は刃部のなす角度が約55°～65°と他のスクレイパーに比べ急斜度で、いわゆる搔器の刃部を有している。また、153は急斜度の外湾する刃部をもつ親指状搔器である。

大形・粗製品は5点あり、すべて硬砂岩製である。刃部の形状・素材等は、バラエティーにとんでいる。142は刃部と、両側刃の剝離面の縁に摩耗痕がみられる。後者については着柄または手で保持した際に生じた痕跡と考えられる。なお、スクレイパーについては、石材・刃部のあり方が石匙と共に通しているので機能的には同種のものと考えたい。しかし、石匙とスクレイパーがつまりの有無だけで、用途を異にしていたかは今後の課題である。

⑦打製石斧 (154～186)

分類の基準

- 1) 平面形による分類：撥形（撥）、短弔形（短）、分銅形（分）
- 2) 刃部の形状による分類：円刃（円）、直刃（直）、偏刃（偏）
- 3) 使用痕による分類：つぶれ（○）、摩耗（●）
- 4) 破損状況による分類：先形（O）、胴～刃部欠（A₁）、下半欠（A₂）、刃部欠（A₃）、頭～頭部欠（B₁）、上半欠（B₂）、頭部欠（B₃）、頭・刃部欠（C）、縦に半欠（D）、その他（E）

石器の概要 212点が出土している。石材は14種類が利用されているが砂岩製63点・硬砂岩製89点で7割以上を占めている。このほかにホルンフェルス製21点・千枚岩製8点・粘板岩製7点・玢岩製7点・輝緑凝灰岩製6点などが多い。なお、蛇紋岩・石墨片岩・綠泥片岩製が1点ずつ出土しているが、松木平周辺では産出しない岩石なので、石材～製品の段階で搬入されたものである。

平面形でみると撥形81点、短弔形47点、分銅形16点がある。刃部は偏刃50点、円刃47点とほぼ同数あり、直刃は19点と少ない。

破損状況をみると、先形品が44点(20.8%)と多い。着柄部を残すと考えられるA₁～A₃が58点であるのに対し、刃部を残すB₁～B₃は72点と多い。このことは打製石斧の出土が遺構よりもグリッド内から大量に出土していることと関連があるかもしれない。このほかに使用による下からの打撃で縦に半欠したもの（D類）2点が出土している。

使用痕については刃部に使用痕と考えられる摩耗、頭部に着柄痕と考えられるつぶれのあるものが多い。特に、前者については線条痕の観察から使用方向が推定できる。多くは石器の長軸方向と平行もしくはわずかに傾く程度の方向が観察される。なお、頭・頭部の片面または両面に摩耗痕をもつものがある。これらは刃部のような線条痕は観察されない。おそらくは、着柄して使用している際に、柄や紐などがこすれて生じたものと考えている。

⑧磨製石斧 (187～213)

分類の基準

1) 形状による分類：定角式石斧（定角）、乳棒状石斧（乳棒）。このほかにノミ形石斧（ノミ）を設定している。ノミ形石斧は側面に平坦面をもつが、定角式に比べて狭長で両側に刃部をもつものが多い。

2) 破損状況による分類：打製石斧の分類と同じ。

石器の概要 78点が出土している。定角式石斧は42点が出土している。石材はほとんどが蛇紋岩製（39点）であるが、輝緑岩製1点・閃綠岩製2点も利用されている。これらは、面取りされた側面をもち、わずかに外湾する刃部をもつ点が共通している。定角式石斧はさらに、大小に分類できる。大形品は3点（211他）あるが、いずれも破損品で全形をうかがえない。長さ5cm未満の小形品は7点（191・199・203他）が出土している。これらの小形石斧は、木材加工用と考えるのが妥当である。なお、199は完形品で長さ3.7cm、重さ5gしかなく実用品とは考えがたい。上記以外の石斧を中形品として扱った。以上のほか、特徴的なものについて述べる。190は、中程で破損した面に敲打痕が観察され、破損した頭部を新たに再生しようとしたものである。194はカンナ状の薄い刃をもつ直刃の石斧である。208は片面が刃端から7mmのところに稜をもち明瞭な片刃を呈するものである。なお、体部中央には擦切による溝が施されている。209は刃部の約2cmから上の側縁に敲打によるつぶれがあり、着柄痕と考えられる。

乳棒状石斧は6点出土しているが、すべて破損品である。石材は閃綠岩製3点・輝緑岩製2点・砂岩製1点である。側辺部には製作時の敲打痕を残すものが多い。202は上半を失った破損品の破損面を敲打して石斧を再生しようとしたものである。

ノミ形石斧は5点出土している。狭長な長方形を呈し、両端に刃部をもつ小形石斧である。石材は蛇紋岩製4点、輝緑岩製1点である。これらは、両側に刃部をもつため中央部に最大幅・最大厚をもつ。刃部は直線状またはわずかに外湾する両刃をもつ。200を除くと、幅1~2cmの非常に小形の石斧である。197-207には刃端部に光沢痕がみられる。特に207は両側の刃部に比較して、側部に顕著な線条痕がみられ、着柄部と考えている。

3種類の磨製石斧の破損状況については、柄が装着されていたと考えられるA₁~A₃が27点、刃部側のB₁~B₃が27点と同数である。

④石錘（214~223）

分類の基準

1) 挟りの製作法による分類：打ち欠き石錘（I）、切り目石錘（II）、有溝石錘（III）

2) 挟りの位置による分類：上下（A）、上下・左右（B）

石器の概要 橋円～円形の自然礫に研掛け用の挟りを作り出しているもので、魚網錘と考えられているもの。総計10点が出土している。石材は砂岩製6点のほか、輝緑凝灰岩・石英閃綠岩・ホルンフェルス（砂岩）・同（粘板岩）がある。石錘の重さについては、最小が8.50g、最大が72.55g

と幅があるが、40㍉未溝のものが大半である。縁に剥離を加えて抉りを作出している打ち欠き石鏟（I）は6点出土、抉りを上下にもつもの4点、上下・左右にもつもの2点がある。前者の223は剝離による抉り成形の後に研磨を加えて、抉りを平滑にしている。また、表面・側面に研磨を加えて扁平な直方体に成形している。擦切施溝により抉りを作出している切目石鏟（II）は3点が出土している。抉りを上下にもつもの2点、上下左右にくるもの1点である。215については擦切施溝の前に剥離調整を行っている。擦切による溝が縁の周囲をめぐる有溝石鏟（III）は1点出土している。219は長楕円の縁を素材にし、表面を研磨して側面をつくり出し断面を長方形に仕上げている。施溝順序は横→縦方向である。

他凹・敲・磨石（224～246）

一般に凹石・敲打石・磨石などと区別して呼ばれているものである。これらの石器はそれぞれ単独で使用痕（凹部・敲打痕・磨面）をもつものは少なく、複数の使用痕を併せもつほうが多い。そのため、本項では「凹・敲・磨石」として一括で扱った。

分類の基準

1) 使用痕による分類：凹部・敲打痕・磨面（一覧表では種類別に使用痕の項目を設定し、該当する使用痕があれば○で記載している。なお、凹部については個数と箇所を（ ）で表している。たとえば（1×2）は1つの凹部をもつ面が2面あることを、（1+2）は1つの凹部と2つの凹部をもつ面がそれぞれあることを意味している。

なお、実測図では磨面を———(平面)・←→(断面)、敲打痕は———(平面)・←→(断面)、特殊磨石の機能磨面はスクリーントーン(平面)・←→(断面)、調整磨面は←→(断面)で表現している。

2) 素材による分類：球形または不整な塊状の縁（A）、平面が（長）楕円形を呈する厚さ4cm以上の縁（B）、同形で厚さ4cm未溝の縁（C）、平面が楕円形で、周囲が側面をもつ石輪状の縁（D）、平面が円形を呈する厚さ4cm以上の縁（E）、同形で厚さ4cm未溝の縁（F）、断面が円形または方形の棒状縁（G）、断面が偏平な棒状縁（H）、断面が三角形を呈する棒状縁（I）

石器の概要 376点が出土している。石材は13種類が利用されているが、砂岩213点(56.6%)、安山岩67点(17.8%)、石英閃緑岩49点(13.0%)で87.4%を占めている。使用痕については、単独で使用痕をもつものが凹部7点(1.9%)、敲打痕14点(3.7%)、磨面107点(28.5%)である。2つの使用痕をもつものは、凹部+敲打痕17点(4.5%)、凹部+磨面97点(25.8%)、敲打痕+磨面43点(11.4%)があり、3つの使用痕を併せもつものが91点(24.2%)である。このことから、凹・敲・磨石は複数の機能をもつものが一般的であったことがうかがえる。なお、凹部は浅い不定形なものが大半で、短側面や湾曲面上に凹部をもつものも多い。これらのことから凹部については石器使用の際に縁を保持するための指掛けの可能性を考えている。

素材については、楕円縁（B類59点、C類66点）、棒状縁（G類80点）が多い。後者については端

部に敲打痕をもつものが多い。球・塊状礫（A類19点）は磨面または敲打痕を単独でもつものが多い。なお、断面三角形の棒状礫（I類）は特殊磨石に特徴的な素材である。

なお、図示していないが赤色顔料が付着していると考えられるもの1点（No.126）が出土している。

⑩石皿（247～252）

8点が出土している。すべて破損品で全形のうかがえるものはない。石材は砂岩製4点、安山岩製4点である。これらはいずれも端部が肥厚し、磨面との境界は明瞭である。磨面はよく使い込まれていて平滑になっているものが多い。247・249～251は手前で幅を狭める橢円形の人形の石皿破片と考えられる。なお、247は側面に文様が掘り込まれている。礫の表面は被熱により赤色化している部分がある。

⑪砥石（253～261）

分類の基準

素材による分類：平面が（長）楕円の扁平な礫（A）、断面が台形または四辺形の棒状の礫（B）、断面が方形を呈する直方体の礫（C）、すべて破損品のため全形はうかがえないが厚さ3、4cm以上の両面に平坦面をもつ礫（D）、その他（E）

石器の概要 49点が出土している。石材は砂岩製32点、硬砂岩製4点で73.4%を占める。このほかに石英閃緑岩製7点（14.3%）が多い。砥石には手持ち砥石と置き砥石がある。前者は8点あり断面台形または四辺形の棒状礫（B類）を素材にしているものが多い。後者は楕円形の扁平大形礫（A類）14点と両面に平坦面をもつ礫（D類）10点が多い。なお、D類を素材にする砥石は大形品で周囲を破損しているものが多いが、あるいは自然礫を適当な大きさに打ち欠いて集落内へ搬入したものかもしれない。

⑫研磨礫（262～274）

小形の自然礫の表面に研磨による線条痕がみられるものを研磨礫とした。海浜部で採集できるような摩耗の進んだ楕円礫が多い。なお、線条痕をもたないものは海浜石として石製品の項で扱っている。総計24点が出土している。石材は多彩であるが、蛇紋岩が11点（45.8%）と半数を占めている。このほかに黒曜石・チャート・砂岩・頁岩・粘板岩・白色凝灰岩・緑色凝灰岩・閃綠岩などがある。これらの多くは、平面・断面とも楕円形を呈す礫を選択しているものが多い。これらは長さ4～5cm・幅3～4cm・厚さ1.5cm前後のものと、長さ3～4cm・幅1～2cm・厚さ1cm未満のものに大きく2分できる。前者は、全面に線条痕を残すが、特に礫の側縁部に線条痕が集中するものがある。特に262・264・266では、側縁が面取りされて稜線が生じるほど研磨が行われている。後者も全面に線条痕がみられ、やはり周縁に研磨が集中している。このことについては、小形礫を手で保持しながら、研磨をすれば指が中央部に当たるために必然的に生じる結果と考えている。これらの用途については、定角式・ノミ形磨製石斧や装身具の素材または工具が考えられる。磨製

石斧の素材の可能性については、蛇紋岩製1点、緑色凝灰岩製の271のほかは、寸法からみて小さすぎる。装身具の素材については、265が硬玉製大珠の形態に類似しているほか、小形・扁平な蛇紋岩砾を素材にすることは可能である。しかし、蛇紋岩以外の素材も多いこと、蛇紋岩製の装身具がほとんどのことから装身具の素材の可能性は少ないと考えている。工具については、土器のミガキ調整などに使用される丸石などが考えられよう。特に前述の262・264のような側縁が面取りされたような研磨跡はその可能性がある。こうした砾は、弥生時代まで残るようである⁽³⁾。これらのほか特殊なものに、湾曲している棒状砾に研磨が施されている263がある。特に内湾する部分は砾の表皮の色が周囲と異なるほど研磨が顕著に行われている。

⑩不明石器 (275) 器種不明の磨製石器1点が出土している。両側を破損しているため全形はうかがえない。全面に研磨がされているが、特に下側には研磨による刃付けが施されている。背側は扁平で、石包丁のような平坦面はみられない。

⑪原石・石核

黒曜石・チャート製の石核・原石が総計28点(1134.43g)出土している。これらは、石錐・石錐などの定形的な石器のほか使用痕のある剝片の素材であると考えられる。

石核はすべて黒曜石製で7点(306.5g)、遺構からの出土は住居址2軒と土坑2基から出土している。このうち、第13号住居址からは石核2点のほかに多量の剝片が出土している。おそらくは住居址内で石器の製作が行われたか、あるいは保管されていたものと考えられる。石核の剥離方法は規則的なものではなく、都合のよい打面を求めて打面転移を繰り返している。

原石は21点が出土している。内訳はチャート1点(107.08g)・黒曜石20点(720.85g)である。黒曜石については最大86.02gのものがあるが、40g前後の握りこぶしよりひと回り小さなものが大半である。

このほかに、ヒスイの原石2点(44.05g)、蛇紋岩の原石1点(67.35g)が出土している。

註1 石器の分類項目の設定にあたっては以下の報告書で行われている分類方法を一部採用している。

長野県教育委員会 1982『長野県中央遠隔文化財交流会発表会報告書』(以下同)⁽¹⁾

同 1982『長野県中央遠隔文化財交流会発表会報告書』(以下同)⁽²⁾

2 打ノ内面跡から以前にも剥離文様のある石核が出土している。

東京都考古部・松本市上田資料収集会 1973『東風原郡・松本市・根城町出土第2興歴史上』? 243

3 長野県立歴史博物館の住居址から研磨によって削出された小形石円盤が出土している。

松本市教育委員会 1990『松本市別町史跡』

2. 石製品(第168図)

総計32点が出土している。種類別では装身具、石棒・石刀、海浜石などがある。整理にあたっては海浜石を除く石製品のうち、全形のうかがえるもの、特殊なものを中心に13点を実測・掲載している。また、すべてについて出土地点・寸法・石質等を一覧表に登載している。記述は図示しているものを中心に、種類毎に梗概を記すにとどめている。文中の石製品を説明する数字は図番号である。また、実測図の縮尺は装身具が1/2、石棒・石刀の小・中形品1/3、大型品が1/5である。

①装身具（1～3） 3点が出土している。1は砂岩製。平面が円形の自然縫の片側寄りに直径1.7cm 前後の片面穿孔の穴がある。孔の内面は平滑であるが、回転穿孔痕の痕跡は観察できない。表面は研磨されて平滑になっている。2はホルンフェルス（硬砂岩）製の块状耳飾。厚さ3.3mm の薄い板状を呈し、穿孔部で約1/2が破損している。表面は研磨されて黒色を呈し光沢を帯びている。左上端にはくびれが作り出されているが上部の形状は不明である。また、下端部には両面からの擦切途中痕が残されている。3は蛇紋岩製で块状耳飾と考えられる。下面是平坦であるが内側が外側よりも高く、最大厚13.8mm を計る。

なお、発掘区周辺で硬玉質の装身具1点が表面採集されている。

②石棒・石刀（4～13） 石棒10点・石刀3点の総計13点が出土している。石材は安山岩製5点、（硬）砂岩製4点が多い。このほかに輝緑凝灰岩・頁岩・石英閃綠岩・礫岩がある。これらは小形品と大形品に分類できる。前者は4・9・12のように最大幅3cm 未満のものが多い。これらはいずれも下側が失われているが、先端部を残すものは2点ある。9は断面が偏鋸錐形を呈するので石刀としたものだが、先端部に顕著な敲打痕が残されている。12は先端部が研磨されて平坦面を有している。大形品は亀頭部を作り出しているもの（8・10）と無頭のものがある。前者は2点とも安山岩製で、表面はよく研磨されている。後者の5は全長47.4cm、重量5350gの完形品である。表面はよく研磨されているが研磨方向は不明である。なお、5・8・10の先端部はいずれも被熱していて、縫の表面に変色部分が観察される。11は先端部に敲打痕を残すものである。石棒の製作途中品かまたは敲石への転用品と考えられる。

③海浜石 松本平周辺の河川では採集することが不可能な楕円縫で、河川の下流や海浜部で採集することができるような自然の縫を海浜石として扱っている。総計16点が出土している。石材はチャート8点・蛇紋岩4点が多く、このほかに砂岩・硬砂岩・石灰石・石英が各1点出土している。このうち蛇紋岩については本地域周辺では産出しないものである。これらの縫は角がとれて丸みを帯びた円～楕円縫が多いが、研磨縫と比較してやや小形である。機能・用途とも不明であるが、蛇紋岩縫が多いので研磨縫の素材、または小形の定角式やノミ形の磨製石斧の素材の可能性も考えられる。

第5表 石製品一覧表

No.	地點	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	破損状況	備考
1	土坑301	腰身只?	(4.19)	3.87	2.32	(40.30)		砂岩		
2	N41E26	狹式耳鉢	(4.58)	(2.49)	0.33	(6.15)	ホルンフェルス(硬砂岩)			
3	N41E30N	#	(4.71)	(2.26)	(1.38)	(16.10)	蛇紋岩			
4	2住P13	石刀	(11.69)	(1.87)	(1.16)	(45.60)	輝緑岩火岩	両側欠		
5	6住N4	石棒	47.40	1.28	7.80	5350	砂岩	丸形	先端被熱	
6	7住P16	#	(10.21)	(2.55)	(2.65)	(119.02)	石英閃綠岩	両側欠		
7	9住S	#	(2.03)	(3.17)	(1.13)	(10.30)	安山岩	枝片		
8	19住N32	#	(9.51)	(3.31)	(2.41)	(118.06)	硬砂岩	両側欠		
9	7住N13	#	(7.82)	(8.05)	(4.93)	(550)	安山岩	#		
10	8 21住P20N4.1	#	(21.60)	14.15	(13.85)	(3850)	#	下側欠	角端部	
11	土坑40.5	#	(13.22)	6.07	5.7	(550)	漂岩	#		
12	9 土坑N1	石刀	(8.74)	(2.51)	(1.62)	(52.80)	頁岩	#		
13	上坑N1.2	石棒	(14.20)	(8.15)	(5.98)	(900)	安山岩	先端残	丸頭部に平机面・被熱	
14	11 土坑N8N2	#	(21.40)	(12.55)	(10.97)	(4800)	#	下側欠		
15	12 棘	#	(12.85)	(2.10)	(2.00)	(88.04)	硬砂岩	#	小形石棒・頭部平机面	
16	13 配石群N4	石刀	(4.69)	(4.09)	(1.66)	(41.55)	#	両側欠		
17	2住P36	商民石	2.90	1.97	0.84	6.40	砂岩	丸形		
18	3住W	#	3.01	2.85	1.64	21.10	チャート	#		
19	3住	#	4.10	2.33	1.85	26.40	#	#		
20	4住N E	#	3.88	2.63	1.70	24.15	#	#		
21	10住P25N2	#	4.06	2.81	0.92	17.65	鈍鉄岩	#		
22	21住P32N1	#	4.28	2.57	1.91	30.30	チャート	#		
23	21住N1	#	5.43	3.20	2.61	72.35	#	#		
24	21住NW	#	3.32	1.73	0.99	7.80	蛇紋岩	#		
25	上坑30	#	4.15	2.23	1.13	15.70	チャート	#		
26	上坑49.1	#	2.63	1.97	0.88	7.30	石灰岩	#		
27	土坑81.6	#	1.76	1.71	0.97	3.90	チャート	#		
28	P36.1	#	7.12	5.91	2.90	174.50	蛇紋岩	#		
29	N43E26	#	0.68	0.54	0.27	0.15	砾石(石英)	#		
30	N45E22	#	3.61	3.13	2.12	35.45	(硬砂岩)	#		
31	N45E36	#	(2.44)	(2.81)	(0.79)	(8.25)	蛇紋岩	残欠		
32	N47E25	#	0.80	0.79	0.34	2.36	チャート	丸形		

第6表 石器一覽表

① 有地

No.	器 種	分 類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	断面 状況	備 考
1	石室	石室	北242	8.17	3.14	1.52	34.55	チャート	丸形	
1	門	石室	北242	8.17	3.14	1.52	34.55	チャート	丸形	

◎有聲

◎石錄

地名	分類	層位	山上地點	高さ		幅		面積 (ha)	石質	特徴	備考	
				高さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	面積 (ha)					
1	?	内 西	10番P-18	23.87	1.51	0.51	{1.90}	風化石	上端斜 ア	未踏査		
2	72	?	P-24	12.78	1.10	0.58	{1.85}	チャート	ア	上端斜、濁れ沢		
3	73	?	10番P-25	13.78	2.00	0.70	{4.50}	ア		津波駆逐	津波駆逐、厚さ約1.20m	
4	?	?	10番P-26	14.24	2.00	0.54	{3.00}	風化石	ア	未踏査、無厚さ		
5	24	?	P-N	3.00	0.70	0.30	{0.45}	ア	?	未踏査		
6	75	?	10番N-E	3.72	1.30	0.08	{0.40}	チャート	?	踏査駆逐		
7	26	?	e-S.E.	7.21	0.57	0.47	{1.70}	風化石	同上	同上		
8	66	?	10番P-27	12.50	1.00	0.68	{1.00}	チャート	ア	踏査駆逐	駆逐厚0.1mm	
9	66	?	10番P-28	12.50	1.00	0.68	{1.00}	チャート	ア	駆逐駆逐	駆逐厚0.2mm	
10	29	?	e-e	2.80	0.90	0.47	{1.50}	風化石	ア			
11	60	?	内 西	2.81	1.14	0.52	{2.25}	ア	ア			
12	81	?	P-28	2.60	0.91	0.44	{1.00}	チャート	ア			
13	64	?	10番P-29	13.00	1.00	0.60	{1.00}	風化石	ア			
14	65	?	20番	2.27	1.47	0.20	{2.95}	ア	?	未踏査		
15	64	?	10番E	3.00	2.54	0.95	{5.75}	ア	ア			
16	64	?	内 東	3.00	1.00	{0.30}	{0.30}	風化石	ア	傾斜厚0.3mm		
17	64	?	内 東	2.80	1.42	0.40	{2.00}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
18	64	?	内 東	2.80	1.42	0.40	{2.00}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
19	55	?	P-26	1.90	1.30	0.25	{0.70}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
20	55	?	N-E	2.60	1.20	0.25	{1.15}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
21	55	?	N-E	3.41	1.90	0.79	{2.35}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
22	55	?	N-E	3.00	1.50	0.73	{1.95}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
23	55	?	N-E	3.00	1.50	0.73	{1.95}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
24	55	?	N-E	2.82	1.40	0.76	{1.35}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
25	55	?	N-E	4.53	0.87	0.69	{2.70}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
26	55	?	N-E	3.70	0.71	0.62	{1.18}	チャート	ア	?	未踏査	
27	55	?	N-E	2.29	0.81	0.48	{1.20}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
28	55	?	N-E	2.29	0.81	0.48	{1.20}	ア	ア	傾斜厚0.2mm		
29	55	?	N-E	2.10	0.76	0.26	{0.70}	風化石	ア	?	未踏査	
30	55	?	N-E	1.58	0.48	0.29	{0.20}	ア	ア	?	未踏査	
31	55	?	N-E	2.71	0.80	0.53	{1.35}	ア	ア	?	未踏査	
32	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
33	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
34	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
35	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
36	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
37	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
38	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
39	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
40	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
41	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
42	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
43	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
44	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
45	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
46	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
47	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
48	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
49	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
50	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
51	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
52	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
53	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
54	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
55	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
56	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
57	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
58	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
59	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
60	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
61	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
62	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
63	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
64	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
65	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
66	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
67	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
68	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
69	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
70	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
71	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
72	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
73	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
74	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
75	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
76	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
77	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
78	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
79	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
80	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
81	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
82	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
83	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
84	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
85	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
86	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
87	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
88	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
89	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
90	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
91	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
92	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
93	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
94	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
95	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
96	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
97	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
98	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
99	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
100	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
101	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
102	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
103	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
104	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
105	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
106	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
107	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
108	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
109	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
110	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
111	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
112	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
113	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
114	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
115	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
116	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
117	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
118	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
119	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
120	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
121	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
122	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア	?	未踏査	
123	55	?	N-E	2.00	0.51	0.30	{0.80}	ア	ア			

④ピエス・エスキュー

No.	固 定 部 位 置 No.	分 類 地 点 No.	上 部 点 位 置 No.	高 度 (m)		幅 度 (m)		深 度 (m)		石 質	状 況 状 況	解 説
				前	後	左	右	上	下			
1	99	1	○	1	1.91	1.04	0.82	1.95	—	砂岩	平	—
2	99	2	2件P4	2.41	1.05	0.91	0.95	—	—	—	—	—
3	99	2	2件	2.47	1.05	0.92	0.95	—	—	—	—	—
4	99	2	2件E	2.82	1.08	1.01	1.00	3.30	—	—	—	—
5	99	2	4往SW	2.65	1.06	0.88	4.45	—	—	—	—	—
6	99	2	4往SE	2.42	1.05	0.80	1.40	—	—	—	—	—
7	99	2	7往N	2.42	1.04	0.80	0.95	—	—	—	—	—
8	99	2	7往S	2.42	1.04	0.89	0.95	—	—	—	—	—
9	99	2	9往N	1.42	1.10	0.27	0.45	—	—	—	—	—
10	99	2	9往S	2.07	1.14	0.49	1.15	—	—	—	—	—
11	99	2	10往N	2.21	1.47	0.68	1.75	—	—	—	—	—
12	99	2	10往S	2.21	1.47	0.68	1.75	—	—	—	—	—
13	99	2	12往P4	2.47	1.06	0.82	1.80	—	—	—	—	—
14	99	2	12往P5	2.47	1.06	0.82	1.80	—	—	—	—	—
15	99	2	12往P6	1.57	0.90	0.82	0.65	—	—	—	—	—
16	99	2	12往P7	1.59	0.91	0.58	0.85	—	—	—	—	—
17	99	2	12往P8	1.62	0.75	0.49	0.62	—	—	—	—	—
18	99	2	12往P9	2.38	1.70	1.38	4.75	—	—	—	—	—
19	99	2	12往P10	2.35	1.70	1.29	1.42	—	—	—	—	—
20	99	2	12往P11	1.79	1.52	0.41	2.22	—	—	—	—	—
21	99	2	12往P12	1.75	1.15	0.87	1.85	—	—	—	—	—
22	99	2	12往P13	2.18	1.45	0.82	1.65	—	—	—	—	—
23	99	2	12往P14	3.52	1.83	5.95	4.35	—	—	—	—	—
24	99	2	12往P15	1.51	0.90	0.82	0.52	—	—	—	—	—
25	99	2	12往P16	1.36	1.40	2.45	1.20	—	—	—	—	—
26	99	2	12往P17	2.13	1.02	0.56	0.15	—	—	—	—	—
27	99	2	12往P18	1.74	1.53	0.75	0.35	—	—	—	—	—
28	99	2	12往P19	2.18	2.00	0.58	3.75	—	—	—	—	—
29	99	2	12往P20	2.18	2.04	0.45	2.05	—	—	—	—	—
30	99	2	12往P21	1.96	1.97	0.47	1.45	—	—	—	—	—
31	99	2	12往P22	1.75	1.48	0.77	1.95	—	—	—	—	—
32	99	2	12往P23	2.32	1.12	0.43	1.65	—	—	—	—	—
33	99	2	12往P24	2.36	1.26	0.61	1.75	—	—	—	—	—
34	99	2	12往P25	1.97	1.90	0.75	1.15	—	—	—	—	—
35	99	2	12往P26	2.36	1.26	0.56	3.40	—	—	—	—	—
36	99	2	12往P27	2.85	1.74	0.95	3.05	—	—	—	—	—
37	99	2	12往P28	2.30	1.62	0.38	1.70	—	—	—	—	—
38	99	2	12往P29	1.54	1.66	0.33	1.95	—	—	—	—	—
39	99	2	12往P30	2.92	1.42	0.35	2.15	—	—	—	—	—
40	99	2	12往P31	1.65	1.25	0.25	2.20	—	—	—	—	—
41	99	2	12往P32	1.66	0.91	0.66	1.00	—	—	—	—	—
42	99	2	12往P33	2.83	1.72	0.91	2.35	—	—	—	—	—
43	99	2	12往P34	1.84	1.14	0.35	1.00	—	—	—	—	—
44	99	2	12往P35	1.72	1.44	0.79	2.25	—	—	—	—	—
45	99	2	12往P36	1.26	1.25	0.25	1.25	—	—	—	—	—
46	99	2	12往P37	2.99	1.31	0.38	1.80	—	—	—	—	—
47	99	2	12往P38	1.65	1.84	0.39	2.55	—	—	—	—	—
48	99	2	12往P39	1.80	1.33	1.00	0.30	1.25	—	—	—	—
49	99	2	12往P40	1.74	1.53	0.22	1.35	—	—	—	—	—
50	99	2	12往P41	1.80	1.74	0.25	2.15	—	—	—	—	—
51	99	2	12往P42	1.75	1.58	0.25	1.85	—	—	—	—	—
52	99	2	12往P43	2.31	0.84	0.67	1.15	—	—	—	—	—
53	99	2	12往P44	2.93	1.73	0.78	3.30	—	—	—	—	—
54	99	2	12往P45	0.81	0.18	0.69	1.30	—	—	—	—	—
55	99	2	12往P46	1.25	1.27	0.21	2.00	—	—	—	—	—
56	99	2	12往P47	1.86	1.28	0.21	1.10	—	—	—	—	—
57	99	2	12往P48	2.80	1.17	0.47	1.70	—	—	—	—	—
58	99	2	12往P49	1.24	1.25	0.28	0.85	—	—	—	—	—
59	99	2	12往P50	2.39	1.32	0.63	3.85	—	—	—	—	—
60	99	2	12往P51	1.84	1.05	0.38	1.85	—	—	—	—	—
61	99	2	12往P52	1.84	1.05	0.38	1.85	—	—	—	—	—
62	99	2	12往P53	2.14	0.94	0.46	0.75	—	—	—	—	—
63	99	2	12往P54	2.43	1.17	1.11	3.25	—	—	—	—	—
64	99	2	12往P55	2.00	1.66	0.64	2.00	—	—	—	—	—
65	99	2	12往P56	2.38	1.53	0.70	3.05	—	—	—	—	—
66	99	2	12往P57	1.80	1.25	0.25	2.50	—	—	—	—	—
67	99	2	12往P58	1.75	0.92	0.76	1.00	—	—	—	—	—
68	99	2	12往P59	2.69	1.00	0.78	1.80	—	—	—	—	—
69	99	2	12往P60	1.80	1.44	0.65	0.95	—	—	—	—	—
70	99	2	12往P61	2.17	2.03	1.14	3.85	—	—	—	—	—
71	99	2	12往P62	1.80	1.34	0.25	1.25	—	—	—	—	—
72	99	2	12往P63	2.73	2.35	0.94	4.25	—	—	—	—	—
73	99	2	12往P64	2.07	1.49	0.90	3.00	—	—	—	—	—
74	99	2	12往P65	1.80	1.30	0.72	1.40	—	—	—	—	—
75	99	2	12往P66	1.88	1.36	0.82	1.70	—	—	—	—	—
76	99	2	12往P67	1.85	1.00	0.70	1.25	—	—	—	—	—
77	99	2	12往P68	1.79	0.97	0.54	1.20	—	—	—	—	—
78	99	2	12往P69	1.87	1.03	0.27	0.70	—	—	—	—	—
79	99	2	12往P70	1.66	1.30	0.64	1.40	—	—	—	—	—
80	99	2	12往P71	1.84	1.15	0.50	1.05	—	—	—	—	—
81	99	2	12往P72	2.00	1.58	0.81	1.15	—	—	—	—	—
82	99	2	12往P73	1.74	1.27	0.71	2.30	—	—	—	—	—
83	99	2	12往P74	2.05	2.07	0.46	0.80	—	—	—	—	—
84	99	2	12往P75	1.79	1.02	0.86	1.85	—	—	—	—	—
85	99	2	12往P76	2.09	1.23	0.58	1.40	—	—	—	—	—
86	99	2	12往P77	2.00	1.71	0.54	2.05	—	—	—	—	—
87	99	2	12往P78	2.19	1.45	0.45	2.15	—	—	—	—	—
88	99	2	12往P79	2.03	2.49	0.88	3.00	—	—	—	—	—
89	99	2	12往P80	1.47	1.82	0.96	1.80	—	—	—	—	—

⑤石場

No.	固 定 部 位 置 No.	分 類 地 点 No.	出 生 地 点 No.	高 度 (m)	幅 度 (m)	深 度 (m)	石 質	状 況 状 況	解 説
1	116	標準	固	2件P13	3.50	0.30	0.71	1.70	チャート 片側斜面
2	117	標準	固	2件E13	3.82	4.82	0.85	3.35	—

地 点	分 類	出 土 地 点	高 さ (cm)	幅 さ (cm)	厚 さ (cm)	水 さ	石 質	破 損 状 況		備 考
								付 合	附 属	
3	118	?	ナ545	(3.70)	(0.70)	(16.01)	チャート	刃部欠		
4	119	直 線 壁 裏	ナ579	2.57	(5.70)	0.58	チャート	刃部欠失		
5	?	?	ナ580	0.50	(0.50)	0.50	チャート	刃部欠		
6	120	内 縫 合	ナ584	(3.88)	(2.78)	0.50	チャート	刃部欠		
7	122	直 線 壁 裏	ナ589	(2.98)	(5.20)	0.57	チャート	刃部欠		
8	123	?	ナ593	(7.39)	(6.50)	1.20	チャート	刃部欠		
9	124	?	ナ594	4.34	2.10	0.64	チャート	刃部欠		
10	125	?	ナ595	2.11	(2.00)	0.50	チャート	刃部欠		
11	126	?	ナ598	(2.80)	(3.00)	0.67	チャート	刃部欠		
12	127	直 線 壁 裏	ナ599	5.27	0.99	0.81	チャート	刃部欠		
13	128	内 縫 合	ナ600	3.70	(6.10)	0.87	チャート	刃部欠		
14	129	内 縫 合	ナ601	3.20	(5.00)	0.50	チャート	刃部欠		
15	130	直 線 壁 裏	ナ604	7.68	0.50	0.50	チャート	刃部欠		
16	131	内 縫 合	ナ604	(6.23)	7.69	1.47	チャート	刃部欠		
17	132	内 縫 合	ナ605	(5.19)	6.60	0.55	チャート	刃部欠		
18	133	外 縫 合	ナ607	1.17	(0.20)	0.50	チャート	刃部欠		
19	134	?	ナ612	3.32	(3.40)	0.53	チャート	刃部欠		
20	135	?	ナ613	0.50	(0.50)	0.50	チャート	刃部欠		
21	136	?	ナ614	14.92	(5.00)	0.65	チャート	刃部欠		
22	137	?	ナ617	(4.38)	(5.70)	0.70	チャート	刃部欠		

⑥スクリイバー

①打製石斧

No	分類	測定地點	北		南		東		西		緯度	経度	標高
			(度)	(分)	(度)	(分)	(度)	(分)	(度)	(分)			
1	154	切 底	2°27'P	6	(8.46)	3.98	1.27	(83.35)	ホルンブッシュ	○	B ₁	A ₁	
2	?	?	5	(8.71)	(3.60)	(90.94)	(26.90)	ヒン吉	●	B ₂			
3	155	内 海	2°22'P	12	(8.44)	4.42	1.27	(83.35)	サボテン	○	A ₂	A ₃	
4	?	?	5	(8.47)	3.95	1.27	(83.35)	ホルンブッシュ	●	A ₄			
5	156	4 (S) M	16.32	5.19	1.72	116.04	サボテン	○	西				
6	?	?	12 (SW)	(—)	(—)	(—)	(41.25)	千葉野	●				
7	?	?	5	S	(—)	(—)	(—)	リンドウ	○				
8	157	?	5	(8.45)	3.92	1.27	(83.35)	リンドウ	●	B ₄	R ₄		
9	10	?	5	(8.48)	3.93	1.26	(83.35)	リンドウ	○	R ₄			
11	158	寒 露	13 (EP)	2	13.86	6.28	2.45	47.05	ホルンブッシュ	●			未成品?
12	14	寒 露	14 (EH)	1	11.35	3.63	1.53	40.09	ヒン吉	●			未成品?
13	159	?	15 (EW)	W	(7.87)	(4.96)	(1.98)	(96.40)	?	○	O ₄		
14	160	?	16 (E)	W	(7.88)	(4.97)	(1.98)	(96.40)	?	●			
15	161	分 離	9	S	(13.03)	6.49	1.22	(117.09)	ホルンブッシュ	●	B ₄		
16	162	?	5	S	(7.89)	35.04	(2.93)	(169.66)	リンドウ	○	R ₄		
17	?	?	5	(9.41)	4.07	(2.88)	(136.99)	リンドウ	○	C			
18	163	?	5	EP	(7.83)	(4.31)	(1.57)	(76.32)	ホルンブッシュ	○	A ₁		
19	?	?	5	(8.23)	(3.60)	(1.57)	(76.32)	?	○	B ₂			
20	164	?	5	(8.43)	3.98	(1.69)	(81.10)	?	○	B ₃			
21	165	?	5	N	0.77	5.43	1.42	76.97	?	●			
22	166	?	5	EP	(9.45)	4.13	1.27	(83.81)	ホルンブッシュ	●	B ₄		
23	167	?	5	(4.37)	(4.34)	10.78	(23.20)	?	○				
24	168	?	5	(9.46)	4.13	1.27	(83.81)	?	●				
25	169	?	5	EP	(5.20)	(2.79)	(1.75)	(45.90)	?	○			
26	170	?	5	(8.36)	(3.18)	(1.68)	(81.96)	?	●				
27	161	?	5	S	(6.85)	(4.07)	(1.95)	(48.30)	?	○			
28	171	?	5	EP	(4.28)	5.09	(1.68)	(58.30)	?	●			
29	172	?	5	(8.02)	5.09	(1.45)	(116.01)	?	○				
30	173	?	5	(9.12)	3.65	2.27	(165.22)	?	●				
31	174	?	5	(—)	(—)	(—)	(30.59)	?	●				
32	175	?	5	S	(8.93)	(4.50)	(1.90)	(81.95)	?	●			
33	176	?	5	EP	(4.06)	5.09	(1.68)	(58.30)	?	○			
34	177	?	5	(8.30)	5.09	(1.76)	(137.03)	?	●				
35	178	?	5	(10.01)	5.07	(0.98)	(88.05)	?	○				
36	179	?	5	(10.57)	(4.68)	(2.82)	(26.08)	?	●				

年 代	分 類	出 土 地 点	高 さ (cm)	幅 さ (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (kg)	材 質	組 合 成 分		被 覆 状 況	備 考
								組 成 部 分	組 成 率		
139	青 銅 器	N441 E36	7.85	14.65	1.93	106.00	銀鉄	○	●	B ₂	
139	青 銅 器	N447 E36	11.32	7.91	2.25	341.01	カルシウムカル シウム	○	●	A ₂	
140	?	?	6.25	13.52	0.93	26.60	半軟陶	○	●	A ₁	
140	?	N449 E42	9.79	16.35	2.07	371.00	硬陶	○	●	D ₁	
140	?	N447 E20	9.18	9.40	1.18	74.45	砂	○	●	C ₂	
141	?	?	6.25	13.52	0.93	26.60	半軟陶	○	●	A ₂	
141	?	?	7.65	13.10	1.03	79.70	砂	○	●	C ₂	
145	内 門 内	N441 E30	7.70	5.21	1.72	87.01	銀鉄	○	●	B ₂	
145	内 門 内	N447 E34	7.83	14.20	1.49	53.15	銀鉄	○	●	A ₂	
147	?	?	5.53	14.51	1.49	47.00	銀鉄	○	●	C ₂	
149	E18	?	5.53	14.51	1.49	47.00	銀鉄	○	●	B ₂	
149	E18	?	11.21	4.48	1.65	86.07	砂	○	●	B ₂	
150	内 門 内	N443 E24	8.93	4.80	1.24	45.03	砂	○	●	B ₂	
151	内 門 内	N445 E24	10.64	5.80	1.03	116.07	砂	○	●	B ₂	
152	内 門 内	N447 E24	10.45	4.80	1.24	45.03	砂	○	●	B ₂	
152	内 門 内	N447 E25	10.25	5.27	1.24	106.03	銀鉄	○	●	B ₂	
154	内 門 内	N445 E30	10.30	6.83	2.05	277.05	砂	○	●	B ₂	
155	内 門 内	N445 E34	—	—	—	—	銀鉄	○	●	B ₂	
156	内 門 内	N444 E34	10.53	5.25	1.07	67.02	銀鉄	○	●	B ₂	
157	内 門 内	N445 E25	10.45	5.25	1.07	67.02	銀鉄	○	●	B ₂	
158	内 門 内	N449 E25	10.91	5.60	1.00	74.95	チタニウム	○	●	C ₂	
159	内 門 内	N445 E26	11.71	6.20	1.03	118.04	銀鉄	○	●	B ₂	
159	内 門 内	N445 E26	8.93	4.80	1.18	47.00	銀鉄	○	●	B ₂	
160	内 門 内	N445 E26	10.58	6.40	1.18	87.04	銀鉄	○	●	B ₂	
161	内 門 内	N445 E24	10.34	4.64	1.67	86.07	銀鉄	○	●	B ₂	
162	内 門 内	N445 E24	9.02	5.25	1.24	54.83	銀鉄	○	●	B ₂	
162	内 門 内	N445 E24	10.45	5.25	1.24	54.83	銀鉄	○	●	B ₂	
164	内 門 内	N447 E24	10.53	4.64	1.67	86.07	銀鉄	○	●	B ₂	
164	内 門 内	N447 E24	9.35	4.97	1.75	59.03	銀鉄	○	●	B ₂	
165	内 門 内	N449 E28	5.95	5.87	1.30	39.40	銀鉄	○	●	B ₂	
166	内 門 内	N449 E28	5.95	5.74	1.58	88.05	砂	○	●	B ₂	
167	内 門 内	N445 E21	7.93	4.30	1.29	74.10	銀鉄	○	●	B ₂	
168	?	?	7.62	5.20	1.00	35.58	砂	○	●	B ₂	
169	?	N447 E24	11.01	5.25	1.24	114.43	砂	○	●	B ₂	
170	?	N447 E24	11.41	5.38	1.45	25.06	カルシウムカルス	○	●	C ₂	
170	?	N447 E24	11.41	5.38	1.45	25.06	カルシウムカルス	○	●	C ₂	
171	?	N445 E30	11.54	4.36	1.65	56.02	砂	○	●	A ₁	
171	?	N445 E30	10.45	5.25	0.67	336.07	砂	○	●	A ₁	
172	?	N445 E30	10.45	5.25	0.67	336.07	砂	○	●	A ₁	
173	?	N443 R30	5.243	3.940	1.205	116.85	研究者	○	●	B ₂	
173	?	N443 R30	5.243	3.940	1.205	116.85	研究者	○	●	B ₂	
175	?	N449 E24	8.40	5.58	1.82	155.04	砂	○	●	B ₂	
177	?	N445 E21	7.109	6.27	0.80	116.04	研究者	○	●	C ₂	
178	?	N445 E21	6.059	3.322	1.265	24.85	砂	○	●	C ₂	
179	?	N445 E21	5.703	3.57	0.90	72.00	砂	○	●	C ₂	
180	?	N445 E21	33.553	5.44	1.95	181.03	半軟陶	○	●	A ₁	
181	?	N445 E21	14.943	5.45	2.55	179.00	半軟陶	○	●	A ₁	
182	?	N445 E21	14.943	5.45	2.55	179.00	半軟陶	○	●	A ₁	
184	?	?	8.57	4.38	1.25	58.80	銀鉄	○	●	B ₂	
185	?	?	12.05	6.45	1.92	222.08	石炭酸鉄	○	●	B ₂	
186	?	?	7.692	4.12	0.72	31.25	銀鉄	○	●	B ₂	
187	?	?	11.39	5.66	2.15	317.25	砂	○	●	B ₂	
188	?	?	8.053	2.45	1.28	43.25	砂	○	●	B ₂	
189	?	?	8.23	2.92	1.03	40.55	銀鉄	○	●	B ₂	
190	?	?	8.07	3.49	0.62	13.65	砂	○	●	B ₂	
191	?	?	9.443	4.92	1.82	99.50	砂	○	●	B ₂	
192	?	?	9.443	4.92	1.82	99.50	砂	○	●	B ₂	
194	?	?	16.013	4.960	1.05	71.36	砂	○	●	B ₂	
195	?	?	13.57	7.09	3.55	36.90	砂	○	●	B ₂	
197	?	?	6.301	4.61	2.01	70.76	砂	○	●	B ₂	
198	?	?	6.962	4.67	2.05	55.25	砂	○	●	B ₂	
199	?	?	6.962	4.67	1.25	63.85	銀鉄	○	●	B ₂	
200	?	?	6.402	4.050	0.93	15.85	銀鉄	○	●	B ₂	
201	?	?	6.213	5.38	1.76	77.65	銀鉄	○	●	B ₂	
202	?	?	8.21	5.49	2.06	193.07	銀鉄	○	●	B ₂	
204	?	?	6.465	4.55	1.46	73.95	銀鉄	○	●	B ₂	
205	?	?	6.603	3.05	1.05	31.25	銀鉄	○	●	B ₂	
207	?	?	5.113	4.365	1.21	38.55	銀鉄	○	●	B ₂	
208	?	?	12.55	5.46	2.30	277.05	銀鉄	○	●	B ₂	
209	?	?	6.243	4.920	1.06	35.85	銀鉄	○	●	B ₂	
210	?	?	6.705	4.24	1.03	37.50	銀鉄	○	●	B ₂	
211	?	?	13.40	2.80	2.16	88.05	銀鉄	○	●	B ₂	
212	+323	?	9.42	5.15	1.32	78.85	銀鉄	○	●	B ₂	

◎ 磬製石斧

种	属	分属	土壤产地	风化壳		厚度 (cm)	风化 (度)	风化 带	成因 认识	地 带
				风化壳 (cm)	风化壳 (mm)					
1. 1. 1. 1.	1. 1. 1. 1.	1. 1. 1. 1.	1. 1. 1. 1.	11.22	5.03	2.29	(196.68)	1. 1. 1. 1.	1. 1. 1. 1.	A ₁
2. 2. 2. 2.	2. 2. 2. 2.	2. 2. 2. 2.	2. 2. 2. 2.	12.93	6.10	2.45	(1.45)	2. 2. 2. 2.	2. 2. 2. 2.	A ₁
3. 3. 3. 3.	3. 3. 3. 3.	3. 3. 3. 3.	3. 3. 3. 3.	12.23	5.03	2.45	(1.45)	3. 3. 3. 3.	3. 3. 3. 3.	B ₁
4. 4. 4. 4.	4. 4. 4. 4.	4. 4. 4. 4.	4. 4. 4. 4.	—	—	—	—	4. 4. 4. 4.	4. 4. 4. 4.	B ₁
5. 5. 5. 5.	5. 5. 5. 5.	5. 5. 5. 5.	5. 5. 5. 5.	6.79	4.75	1.94	(99.63)	5. 5. 5. 5.	5. 5. 5. 5.	B ₁
6. 6. 6. 6.	6. 6. 6. 6.	6. 6. 6. 6.	6. 6. 6. 6.	7.21	4.75	2.00	(100.60)	6. 6. 6. 6.	6. 6. 6. 6.	B ₁
7. 7. 7. 7.	7. 7. 7. 7.	7. 7. 7. 7.	7. 7. 7. 7.	5.57	4.69	2.30	(38.99)	7. 7. 7. 7.	7. 7. 7. 7.	A ₁
8. 8. 8. 8.	8. 8. 8. 8.	8. 8. 8. 8.	8. 8. 8. 8.	5.20	4.69	2.30	(38.99)	8. 8. 8. 8.	8. 8. 8. 8.	A ₁
9. 9. 9. 9.	9. 9. 9. 9.	9. 9. 9. 9.	9. 9. 9. 9.	4.78	4.69	2.30	(38.99)	9. 9. 9. 9.	9. 9. 9. 9.	A ₁
10. 10. 10. 10.	10. 10. 10. 10.	10. 10. 10. 10.	10. 10. 10. 10.	6.42	3.11	1.39	36.86	10. 10. 10. 10.	10. 10. 10. 10.	O
11. 11. 11. 11.	11. 11. 11. 11.	11. 11. 11. 11.	11. 11. 11. 11.	11.94	4.88	1.64	187.40	11. 11. 11. 11.	11. 11. 11. 11.	S
12. 12. 12. 12.	12. 12. 12. 12.	12. 12. 12. 12.	12. 12. 12. 12.	7.04	5.93	2.53	162.04	12. 12. 12. 12.	12. 12. 12. 12.	S
13. 13. 13. 13.	13. 13. 13. 13.	13. 13. 13. 13.	13. 13. 13. 13.	4.60	1.70	0.79	(8.45)	13. 13. 13. 13.	13. 13. 13. 13.	S
14. 14. 14. 14.	14. 14. 14. 14.	14. 14. 14. 14.	14. 14. 14. 14.	10.40	4.75	2.00	(100.60)	14. 14. 14. 14.	14. 14. 14. 14.	B ₁
15. 15. 15. 15.	15. 15. 15. 15.	15. 15. 15. 15.	15. 15. 15. 15.	10.14	4.69	2.00	(99.63)	15. 15. 15. 15.	15. 15. 15. 15.	B ₁
16. 16. 16. 16.	16. 16. 16. 16.	16. 16. 16. 16.	16. 16. 16. 16.	10.14	4.69	2.00	(99.63)	16. 16. 16. 16.	16. 16. 16. 16.	B ₁
17. 17. 17. 17.	17. 17. 17. 17.	17. 17. 17. 17.	17. 17. 17. 17.	3.05	0.36	0.03	(16.90)	17. 17. 17. 17.	17. 17. 17. 17.	B ₁
18. 18. 18. 18.	18. 18. 18. 18.	18. 18. 18. 18.	18. 18. 18. 18.	10.89	4.39	0.09	(3.90)	18. 18. 18. 18.	18. 18. 18. 18.	S
19. 19. 19. 19.	19. 19. 19. 19.	19. 19. 19. 19.	19. 19. 19. 19.	10.89	4.39	0.09	(3.90)	19. 19. 19. 19.	19. 19. 19. 19.	S
20. 20. 20. 20.	20. 20. 20. 20.	20. 20. 20. 20.	20. 20. 20. 20.	6.36	5.71	0.23	(176.05)	20. 20. 20. 20.	20. 20. 20. 20.	A ₁
21. 21. 21. 21.	21. 21. 21. 21.	21. 21. 21. 21.	21. 21. 21. 21.	7.64	2.62	0.68	26.60	21. 21. 21. 21.	21. 21. 21. 21.	O
22. 22. 22. 22.	22. 22. 22. 22.	22. 22. 22. 22.	22. 22. 22. 22.	3.26	0.15	0.73	9.65	22. 22. 22. 22.	22. 22. 22. 22.	A ₁

地 名	分 類	固 定 地 點	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (kg)	材 質	機 械	規 格	
									寸 法 (mm)	規 格 (mm)
186	?	186	(—)	(—)	(—)	(—)	鐵筋板	板		
197	冰角	197	5.45	(4.82)	(2.25)	(88.06)	鋼筋網	A ₁		
202	x	202	6.85	3.73	1.51	(75.40)	鋼筋網	A ₂		
203	x	203	6.85	(5.51)	1.51	(80.57)	鋼筋網	B ₁		
194	?	194	6.84	(5.51)	0.69	(15.45)	?	B ₂	聚丙	
207	P 10	207	6.85	4.17	1.91	(99.39)	?			元成品
25	?	25	6.85	3.56	1.51	(88.06)	砂岩	A ₃		
26	?	26	6.85	3.56	1.51	(88.06)	鐵筋板	S ₁		
27	196	27	6.85	3.56	1.51	(88.06)	鐵筋板	S ₂	成筋板的加工	
197	?	197	6.85	3.56	1.51	(88.06)	鐵筋板	O		
22	冰角	22	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₃		
23	?	23	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₄		
24	?	24	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₄		
25	?	25	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₅		
26	?	26	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₆		
27	196	27	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₇		
197	?	197	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₈		
28	冰角	28	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₉		
29	?	29	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₀		
30	196	30	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₁		
31	?	31	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₂		
32	?	32	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₃		
33	?	33	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₄		
34	?	34	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₅		
35	?	35	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₆		
36	?	36	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₇		
37	196	37	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₈		
38	?	38	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₉		
39	?	39	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₂₀		
40	?	40	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₂₁		
41	?	41	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₂₂		
42	?	42	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₂₃		
43	?	43	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₂₄		
44	?	44	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₂₅		
45	?	45	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₂₆		
46	?	46	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₂₇		
47	?	47	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₂₈		
48	?	48	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₂₉		
49	?	49	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₃₀		
50	?	50	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₃₁		
51	?	51	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₃₂		
52	?	52	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₃₃		
53	?	53	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₃₄		
54	?	54	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₃₅		
55	?	55	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₃₆		
56	?	56	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₃₇		
57	?	57	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₃₈		
58	?	58	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₃₉		
59	?	59	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₄₀		
60	?	60	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₄₁		
61	?	61	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₄₂		
62	?	62	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₄₃		
63	?	63	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₄₄		
64	?	64	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₄₅		
65	?	65	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₄₆		
66	?	66	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₄₇		
67	?	67	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₄₈		
68	?	68	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₄₉		
69	?	69	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₅₀		
70	?	70	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₅₁		
71	?	71	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₅₂		
72	?	72	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₅₃		
73	?	73	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₅₄		
74	?	74	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₅₅		
75	?	75	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₅₆		
76	?	76	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₅₇		
77	?	77	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₅₈		
78	?	78	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₅₉		
79	?	79	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₆₀		
80	?	80	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₆₁		
81	?	81	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₆₂		
82	?	82	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₆₃		
83	?	83	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₆₄		
84	?	84	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₆₅		
85	?	85	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₆₆		
86	?	86	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₆₇		
87	?	87	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₆₈		
88	?	88	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₆₉		
89	?	89	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₇₀		
90	?	90	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₇₁		
91	?	91	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₇₂		
92	?	92	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₇₃		
93	?	93	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₇₄		
94	?	94	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₇₅		
95	?	95	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₇₆		
96	?	96	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₇₇		
97	?	97	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₇₈		
98	?	98	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₇₉		
99	?	99	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₈₀		
100	?	100	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₈₁		
101	?	101	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₈₂		
102	?	102	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₈₃		
103	?	103	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₈₄		
104	?	104	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₈₅		
105	?	105	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₈₆		
106	?	106	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₈₇		
107	?	107	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₈₈		
108	?	108	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₈₉		
109	?	109	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₉₀		
110	?	110	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₉₁		
111	?	111	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₉₂		
112	?	112	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₉₃		
113	?	113	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₉₄		
114	?	114	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₉₅		
115	?	115	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₉₆		
116	?	116	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₉₇		
117	?	117	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₉₈		
118	?	118	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₉₉		
119	?	119	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₀₀		
120	?	120	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₀₁		
121	?	121	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₀₂		
122	?	122	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₀₃		
123	?	123	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₀₄		
124	?	124	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₀₅		
125	?	125	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₀₆		
126	?	126	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₀₇		
127	?	127	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₀₈		
128	?	128	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₀₉		
129	?	129	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₁₀		
130	?	130	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₁₁		
131	?	131	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₁₂		
132	?	132	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₁₃		
133	?	133	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₁₄		
134	?	134	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₁₅		
135	?	135	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₁₆		
136	?	136	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₁₇		
137	?	137	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₁₈		
138	?	138	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₁₉		
139	?	139	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₂₀		
140	?	140	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₂₁		
141	?	141	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₂₂		
142	?	142	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₂₃		
143	?	143	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₂₄		
144	?	144	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	A ₁₂₅		
145	?	145	6.85	3.56	0.99	(15.25)	?	B ₁₂₆		
146	?	146	6.85	3.56						

No.	用 所	種 用 施			高 度 (m)	標 高 (m)	面 積 (ha)	有 質	耕 地 形 式	備 考
		固 形	面 積	面 積						
225		O (1×2)	○	○	D	N45 E24	(6,260	7,691	3,17	雪山林
226			x	x	D	" "	(6,260	7,160	2,26	樹林
227		O	○	○	I	H 445 E36	(5,220	5,953	2,78	樹林
228			x	x	I	" "	(5,220	5,953	2,78	樹林
229		O (1×2)	○	○	G	A 345 E25	(4,260	4,600	3,39	石楠灌叢
230			x	x	G	" "	(4,260	4,700	3,00	灌叢
231		O (1×2)	○	○	C	B 345 E22	(4,260	4,700	3,00	灌叢
232			x	x	C	" "	(4,260	4,700	3,00	灌叢
233		O (1×2)	○	○	G	D 349 E34	(4,260	4,700	3,00	灌叢
234			x	x	G	" "	(4,260	4,700	3,00	灌叢
235		O (1×3)	○	○	G	E 343 E22	(4,260	4,700	3,00	灌叢
236			x	x	G	" "	(4,260	4,700	3,00	灌叢
237		O (1×1)	○	○	H	F 365 E25	(1,450	4,320	2,36	灌叢
238			x	x	G	" "	(1,450	4,320	2,36	灌叢
239		O (1×2)	○	○	G	G 345 E22	(1,260	4,05	3,40	灌叢
240			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
241		O (1×2)	○	○	C	H 449 E42	(1,260	5,743	3,40	灌叢
242			x	x	C	" "	(1,260	5,743	3,40	灌叢
243		O (1×2)	○	○	G	M 447 E30	(1,260	5,743	3,40	灌叢
244			x	x	G	" "	(1,260	5,743	3,40	灌叢
245		O (1×3)	○	○	G	S 449 E34	(1,260	5,743	3,40	灌叢
246			x	x	G	" "	(1,260	5,743	3,40	灌叢
247		O (1×3)	○	○	G	T 443 E22	(1,260	4,700	3,36	灌叢
248			x	x	G	" "	(1,260	4,700	3,36	灌叢
249		O (1×2)	○	○	G	H 449 E50	(1,260	4,320	2,36	灌叢
250			x	x	G	" "	(1,260	4,320	2,36	灌叢
251		O (1×2)	○	○	G	G 345 E22	(1,260	4,320	2,36	灌叢
252			x	x	G	" "	(1,260	4,320	2,36	灌叢
253		O (1×2)	○	○	G	H 449 E30	(1,260	4,320	2,36	灌叢
254			x	x	G	" "	(1,260	4,320	2,36	灌叢
255		O (1×3)	○	○	G	G 347 E38	(1,260	4,320	2,36	灌叢
256			x	x	G	" "	(1,260	4,320	2,36	灌叢
257		O (1×2)	○	○	G	H 443 E24	(1,260	4,320	2,36	灌叢
258			x	x	G	" "	(1,260	4,320	2,36	灌叢
259		O (1×2)	○	○	G	G 345 E18	(1,260	4,320	2,36	灌叢
260			x	x	G	" "	(1,260	4,320	2,36	灌叢
261		O (1×2)	○	○	G	H 449 E30	(1,260	4,320	2,36	灌叢
262			x	x	G	" "	(1,260	4,320	2,36	灌叢
263		O (1×2)	○	○	G	G 343 E22	(1,260	4,320	2,36	灌叢
264			x	x	G	" "	(1,260	4,320	2,36	灌叢
265		O (1×2)	○	○	G	H 443 E24	(1,260	4,320	2,36	灌叢
266			x	x	G	" "	(1,260	4,320	2,36	灌叢
267		O (1×4)	○	○	G	H 367 E22	(1,260	4,05	3,40	灌叢
268			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
269		O (1×2)	○	○	G	H 360 E30	(1,260	4,05	3,40	灌叢
270			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
271		O (1×2)	○	○	G	G 345 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
272			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
273		O (1×3)	○	○	G	H 367 E32	(1,260	4,05	3,40	灌叢
274			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
275		O (1×2)	○	○	G	H 363 E30	(1,260	4,05	3,40	灌叢
276			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
277		O (1×2)	○	○	G	H 367 E24	(1,260	4,05	3,40	灌叢
278			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
279		O (1×2)	○	○	G	H 360 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
280			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
281		O (1×2)	○	○	G	H 367 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
282			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
283		O (1×2)	○	○	G	H 363 E30	(1,260	4,05	3,40	灌叢
284			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
285		O (1×2)	○	○	G	H 367 E24	(1,260	4,05	3,40	灌叢
286			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
287		O (1×2)	○	○	G	H 360 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
288			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
289		O (1×2)	○	○	G	H 367 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
290			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
291		O (1×2)	○	○	G	H 363 E30	(1,260	4,05	3,40	灌叢
292			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
293		O (1×4)	○	○	G	H 367 E24	(1,260	4,05	3,40	灌叢
294			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
295		O (1×2)	○	○	G	H 360 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
296			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
297		O (1×2)	○	○	G	H 367 E26	(1,260	4,05	3,40	灌叢
298			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
299		O (1×4)	○	○	G	H 363 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
300			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
301		O (1×2)	○	○	G	H 367 E30	(1,260	4,05	3,40	灌叢
302			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
303		O (1×2)	○	○	G	H 363 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
304			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
305		O (1×2)	○	○	G	H 367 E30	(1,260	4,05	3,40	灌叢
306			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
307		O (1×2)	○	○	G	H 363 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
308			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
309		O (1×2)	○	○	G	H 367 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
310			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
311		O (1×2)	○	○	G	H 363 E30	(1,260	4,05	3,40	灌叢
312			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
313		O (1×2)	○	○	G	H 367 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
314			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
315		O (1×2)	○	○	G	H 363 E34	(1,260	4,05	3,40	灌叢
316			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
317		O (1×2)	○	○	G	H 367 E30	(1,260	4,05	3,40	灌叢
318			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
319		O (1×2)	○	○	G	H 363 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
320			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢
321		O (1×2)	○	○	G	H 367 E36	(1,260	4,05	3,40	灌叢
322			x	x	G	" "	(1,260	4,05	3,40	灌叢

No.	国	使 用 瓶			土 士 地 点	高 度 (m)	幅 宽 (m)	厚 度 (m)	角 度 (°)	石 质	破損状況	備 考
		内 部	瓶口部	瓶 体								
222	O(1×2)	○	○	G	N43 E15	34.95	5.00	3.77	405	砂岩	普通	
224				s	N49 E40	(7.72)	4.20	2.20	(284)	*	丸太	
225				G	N39 E20	11.31	30.47	5.90	808	石灰閃綠岩	普通	
226	O(1×3+2)	○	○	○	G	N45 E20	16.30	6.22	8.70	808	砂岩	普通
227	O(1×1)	○	○	G	N43 E25	15.23	6.81	4.85	425	砂岩	普通	
228	O	○	○	G	N43 E44	7.70	5.95	1.00	120	緑閃石片岩	普通	
229				G	N43 E20	(4.80)	3.00	1.00	211	砂岩	普通	
230				G	N39 E20	9.34	8.37	4.64	529	雲母	普通	
231				G	N47 E35	20.23	5.94	2.50	274	砂岩	普通	
232				G	N42 E22	7.80	5.59	1.92	139	石灰閃綠岩	普通	
233	O(1×2)	○	○	s	N39 E18	(4.10)	6.20	4.17	(283)	*	砂岩	
234				s	N39 E20	(4.80)	5.90	2.00	208	*	砂岩	
235	O(1×2)	○	○	s	N39 E20	(9.45)	8.10	5.40	420	*	砂岩	
236				s	N39 E20	9.34	7.34	2.00	22	*	砂岩	
237	O	○	○	G	N39 E21	(8.80)	5.40	2.50	(260)	*	石灰閃綠岩	
238				G	N41 E35	(9.30)	5.20	3.20	(289)	*	砂岩	
239				G	N41 E20	(4.80)	5.00	2.00	(260)	*	砂岩	
240				G	N49 E42	5.50	3.79	5.00	808	石灰閃綠岩	普通	
241				G	N43 E20	(5.45)	4.00	0.01	(285)	*	砂岩	
242	O(1×3)	○	○	D	s	(6.80)	8.10	4.20	(264)	*	石灰閃綠岩	
243	O	○	○	G	N43 E35	(7.40)	4.00	1.00	(285)	*	砂岩	
244				G	N42 E34	(7.20)	4.20	1.00	(287)	*	砂岩	
245				G	N41 E20	(8.20)	5.90	5.20	(280)	*	石灰閃綠岩	
246				G	N41 E20	(11.40)	6.00	3.00	(280)	*	砂岩	
247	O	○	○	G	s	(8.80)	9.60	5.20	(260)	*	石灰閃綠岩	
248	O(1×2)	○	○	G	G	2.60	9.20	5.10	729	*	砂岩	
249	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
250	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
251	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
252	O(2×4)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
253	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
254	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
255	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
256	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
257	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
258	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
259	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
260	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
261	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
262	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
263	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
264	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
265	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
266	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
267	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
268	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
269	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
270	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
271	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
272	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
273	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
274	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	
275	O(1×2)	○	○	G	G	1.10	9.20	5.10	729	*	砂岩	

⑪石皿

No.	地	出 土 地 点	高 度 (m)	幅 宽 (m)	深 度 (m)	石 质	破損状況	備 考
1	217	2 番P 1	(19.30)	< 0.00	1.00	砂岩	無	無
2	248	2 番P 8	(25.30)	1.00	0.00	砂岩	無	無
3		18番	(18.50)	1.00	0.00	砂岩	無	無
4	249	+34番N 1	(16.30)	1.00	0.00	砂岩	無	無
5	250	16番 E 30	(25.90)	1.00	0.00	砂岩	無	無
6	251	19番 E 26	(15.80)	1.00	0.00	砂岩	無	無
7	252	15番 E 26	(15.80)	1.00	0.00	砂岩	無	無
8		丸太 (1)	(17.30)	1.00	0.00	砂岩	無	無
9		丸太	(16.60)	1.00	0.00	砂岩	無	無

⑫砾石

No.	国	内 容	出 土 地 点	高 度 (m)	幅 宽 (m)	厚 度 (m)	重 量 (kg)	石 质	破損状況	備 考
1		A 2	1 番H 14	(19.30)	0.10	0.60	0.30	3.70	(360)	砂岩
2		B s	2 番 N	16.00	0.20	0.60	0.20	465		砂岩
3		B 2	2 番	25.30	0.20	0.60	0.20	750		砂岩
4		C 2	3 番H 1	(18.10)	0.40	0.60	0.20	3.70	(360)	砂岩
5		C 2	3 番 H 1	(18.10)	0.40	0.60	0.20	3.70	(360)	砂岩
6		C 2	4 番H 9	25.00	0.20	0.60	0.20	200		砂岩
7		D (1)	2 番 H 10	(18.30)	0.20	0.60	0.20	3.70	(360)	砂岩
8		D (2)	2 番 H 10	(18.30)	0.20	0.60	0.20	3.70	(360)	砂岩
9		A 2	4 番	(18.30)	0.20	0.60	0.20	3.70	(360)	砂岩
10		B 2	6 番H 5	(18.30)	0.20	0.60	0.20	3.70	(360)	砂岩
11		C 2	10 番	(18.30)	0.20	0.60	0.20	3.70	(360)	砂岩
12		E 2	10番H 1	(18.30)	0.20	0.60	0.20	3.70	(360)	砂岩
13		E 2	2 番	21.80	12.22	11.70	3000	花崗岩		花崗岩
14		D D	2	(21.10)	0.30	2.00	0.20	(360)	砂岩	無
15		A 2	11番H 6	(21.70)	0.10	1.00	0.20	(360)	砂岩	無
16		A 2	11番H 5	(21.70)	0.10	1.00	0.20	(360)	砂岩	無
17		K 2	2 番H 10	(21.80)	0.10	1.00	0.20	(360)	砂岩	無
18		K 2	2 番H 10	(21.80)	0.10	1.00	0.20	(360)	砂岩	無
19		D (3)	2 番H 13	(21.80)	0.10	1.00	0.20	(360)	砂岩	無
20		R 6	1 番H 6	20.10	6.90	2.34	375	花崗岩		花崗岩
21		A 2	20番H 5	20.30	10.20	3.10	1000	石英閃綠岩		花崗岩
22		A 2	2 番	(22.80)	0.10	1.00	0.20	(450)	砂岩	無
23		D (1)	21番H 3	(23.20)	0.00	0.20	0.20	(220)	花崗岩	無
24		A 2	2 番	(23.70)	0.00	0.20	0.20	(220)	花崗岩	無
25		H (2)	2 番H 1	(23.30)	0.00	0.20	0.20	(220)	花崗岩	無

No	No	岩相	組成	出土地点	高さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	露呈 (m)	心 露	地質状況	備 考
26		A	2	北上	(21.30)	(13.80)	(3.80)	(3.60)	砂岩	断層	
27		C	2	土+3	(9.90)	(2.00)	(2.80)	(0.80)	サ	風化	手筋も
28		E	(2)	+250N	(17.90)	(14.70)	(0.60)	(0.60)	石灰岩鉱物	風化	
29		D	2	上250	(11.90)	(9.90)	(2.10)	(0.60)	寒山岩	風化	
30		A	2	土	(19.90)	(19.90)	(3.80)	(0.60)	砂岩	風化	
31		D	1	土250	(20.90)	(12.70)	(2.10)	(0.60)	石灰岩鉱物	風化	
32		A	(2)	北275	(22.70)	(21.60)	(4.10)	(0.60)	砂岩	風化	
33		?	(1)	北280N 6	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	
34		B	(2)	大274	(27.15)	(10.80)	(1.80)	(0.60)	砂岩	風化	
35		D	(1)	9.704	(23.30)	(7.80)	(3.80)	(0.60)	石灰岩鉱物	風化	
36		A	(2)	1.705	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	
37		?	(1)	上250	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	
38		s	(s)	北264	(—)	(—)	(—)	(—)	ドン	風化	
39		s	(s)	N49 E34	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	
40		E	(2)	北244	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	
41		E	(2)	北250	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	
42		E	(2)	N49 E40	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	
43		s	(1)	N36 E32	(13.70)	(12.80)	(5.40)	(0.60)	サ	風化	
44		D	(2)	N32 E24	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	
45		C	(1)	N45 E20	(11.07)	(4.05)	(4.10)	(0.60)	寒山岩	風化	
46		R	(2)	N45 E18	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	
47		D	(2)	N43 E26	(16.90)	(4.40)	(2.70)	(0.60)	石灰岩鉱物	風化	
48		A	(2)	N43 E26	(16.90)	(4.40)	(2.70)	(0.60)	砂岩	風化	
49		T	(1)	N45 E20	(—)	(—)	(—)	(—)	砂岩	風化	

⑩研磨場

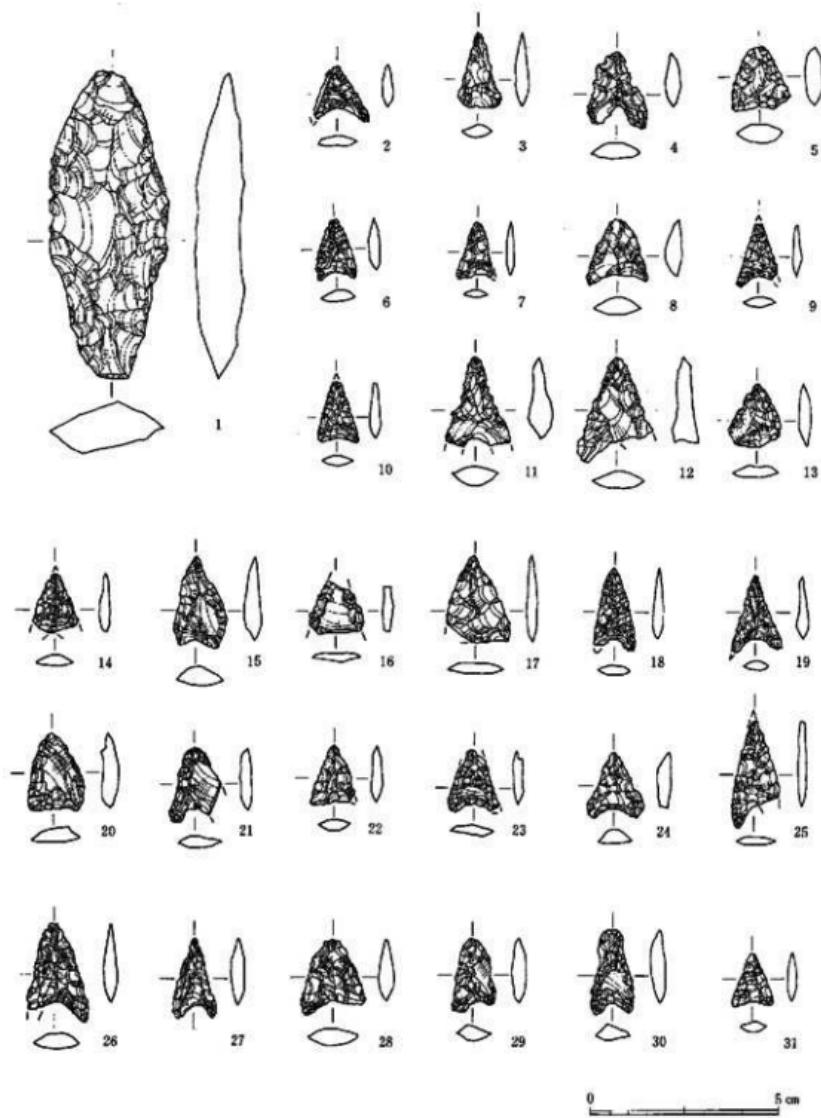
No	No	出土地点	高さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	露呈 (m)	石 質	地質状況	備 考
1		1.15N	2.27	1.40	0.45	3.00	軽粗面	突起	
2		2.15N NW 5.3	6.44	2.50	0.87	5.00	ホルンフェルス	サ	
3		7.15N	8.30	2.50	1.08	31.90	(火成岩)	サ	
4		2.04P 27	5.12	2.50	0.84	11.00	蛇紋岩	サ	
5		2.05 P 26	7.16	2.50	2.11	60.00	砂岩	サ	
6		s = N 26	7.93	2.80	2.81	129.35	サ	サ	
7		1.15N NW	1.30	0.80	0.64	4.10	サ	サ	
8		1.15NW 5.5	5.78	3.10	1.43	37.30	砂岩	サ	
9		1.15N 5.5	4.26	3.10	1.46	41.00	砂岩	サ	
10		2.05 P 27	5.69	2.50	2.80	56.70	鈍頭岩	サ	
11		1.15NW 1	5.10	4.50	0.91	24.90	砂岩	サ	
12		2.05 NW 2	3.67	3.10	1.22	19.85	蛇紋岩	サ	
13		2.05 NW 2	5.94	3.10	1.75	1.90	砂岩	サ	
14		4.15	3.09	3.00	0.80	5.40	砂岩	サ	
15		2.70	2.47	1.50	0.80	2.50	砂岩	サ	
16		土79	8.47	1.80	0.57	4.40	サ	サ	
17		土79	8.60	3.20	1.10	69.05	緑色泥灰岩	サ	
18		土417	4.38	3.20	1.83	24.10	チャート	サ	
19		N 41 D 28	3.97	3.20	1.03	7.95	チャート	サ	
20		N 49 M 26	3.87	1.50	0.50	9.00	チャート	サ	
21		鷹石	(2.90)	(1.80)	(0.20)	(0.30)	鷹石	鷹石	
22		鷹	5.54	3.27	2.87	77.70	蛇紋岩	鷹石	
23		?	2.60	2.18	0.51	4.90	砂岩	サ	
24		土 7	4.06	3.15	2.58	41.10	四輪岩	サ	

⑪不明石器

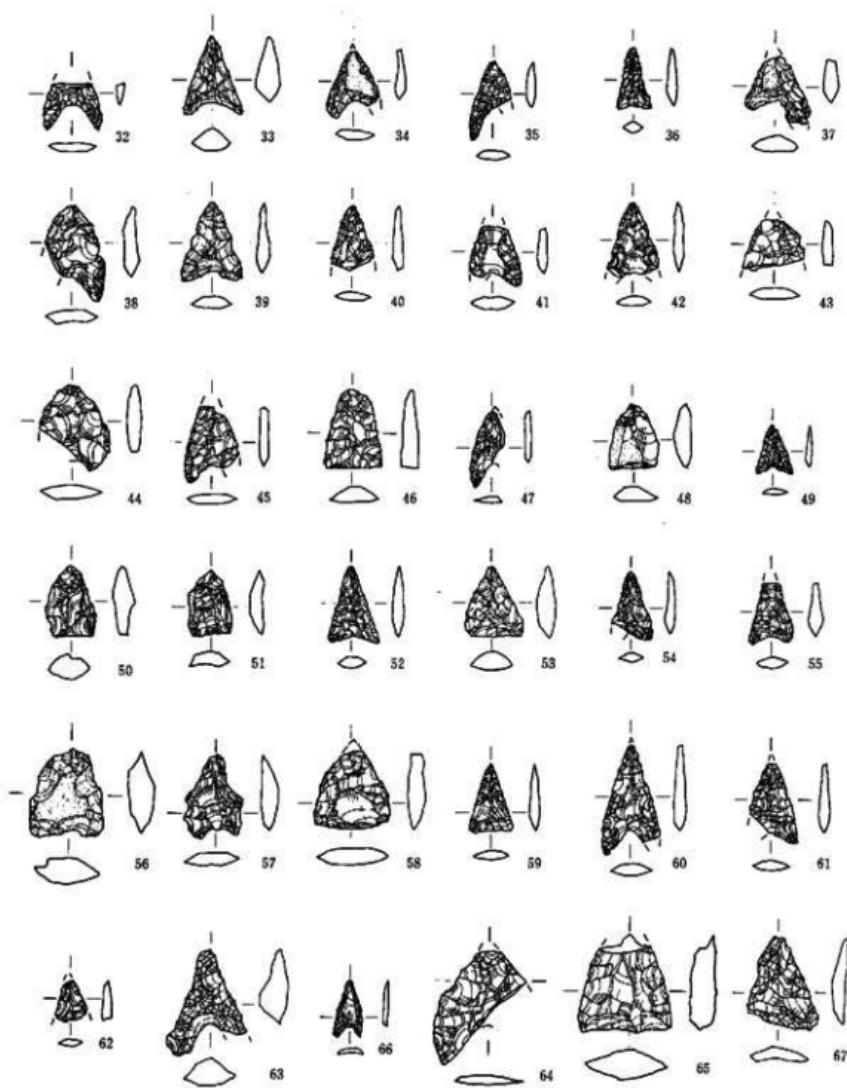
No	No	出土地点	高さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	露呈 (m)	石 質	地質状況	備 考
1	275	3供 P2A	(1.05)	(0.30)	(0.20)	(0.20)	頁岩	風化	

⑫原石

No	No	出土地点	高さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	露呈 (m)	石 質	地質状況	備 考
1		3供 NW	1.65	3.30	3.00	32.40	馬鹿岩		
2		7供 NW	4.00	3.20	2.25	27.80	サ		
3		7供 NW	3.90	2.60	1.90	25.70	サ		
4		1.15P 25	5.30	3.25	2.66	57.20	透明白雲母		
5		1.15W	9.00	4.00	4.00	60.90	馬鹿岩	透明白雲母	
6		1.15W	6.33	5.10	3.80	107.00	チャート		
7		1.15E	4.00	2.50	2.00	37.50	黒雲母		
8		1.15E	4.10	2.50	2.00	37.50	黒雲母	透明白雲母	
9		1.15 NW 5.5	6.00	2.72	2.65	39.80	サ		
10		2.05 P 4	1.77	0.80	0.34	0.70	ニスイ		
11		土28	6.55	3.80	3.80	93.00	細面岩		
12		*	4.40	3.00	2.00	69.70	サ		
13		*	2.50	2.50	1.00	24.40	サ		
14		土 54	7.73	1.54	1.82	60.40	サ		
15		土 217	4.31	2.30	1.44	18.20	サ		
16		土 238	4.02	4.20	2.39	43.60	サ		
17		1.15E	4.08	1.40	2.00	48.20	サ		
18		土 41	5.10	3.00	1.00	47.70	サ		
19		北494	3.60	1.00	0.80	39.20	サ		
20		北513	3.67	1.76	1.70	13.30	サ		
21		北613	6.00	5.90	2.36	6.60	サ		
22		北708	6.38	3.00	0.94	32.10	サ		
23		?	4.90	2.00	0.92	13.90	サ		
24		1.15P	3.80	2.14	0.80	37.70	サ		
25		1.15E	3.35	1.77	1.00	13.50	サ		
26		N 41 E 90	4.60	3.00	2.24	37.20	サ		
27		N 42 E 26	3.14	2.23	1.48	16.90	サ		
28		N 42 E 28	5.18	2.00	2.00	31.90	サ		
29		N 45 E 28	4.28	2.70	2.00	24.80	サ		
30		?	3.29	6.76	3.20	56.60	サ		
31		?	4.06	3.38	2.47	43.35	ニスイ		

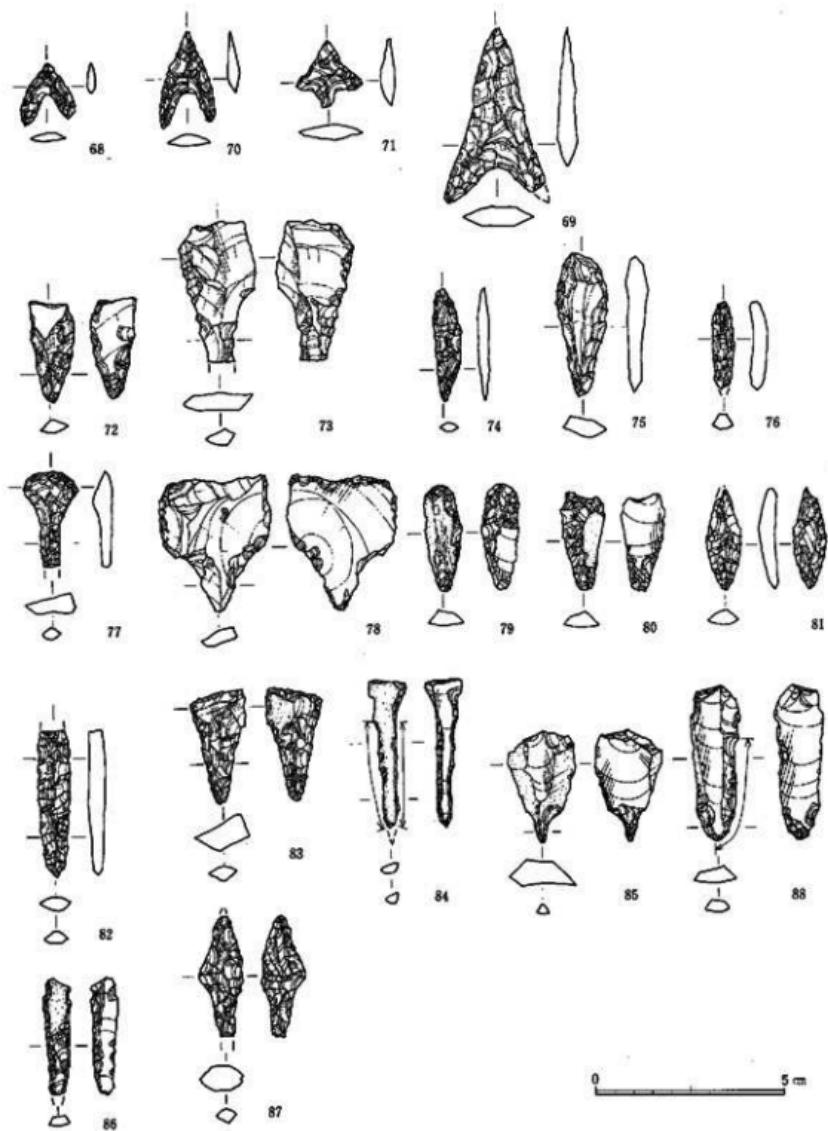


第151図 石器 (1) 石核(1) 石鏃(2~31)

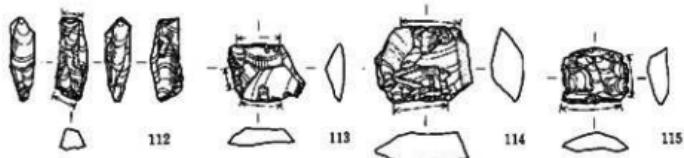
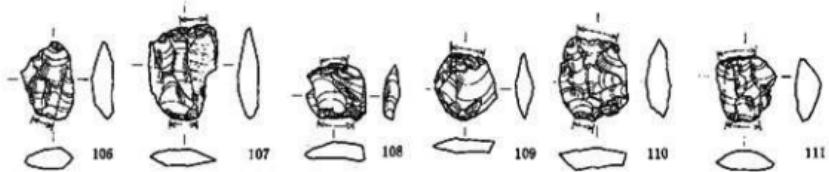
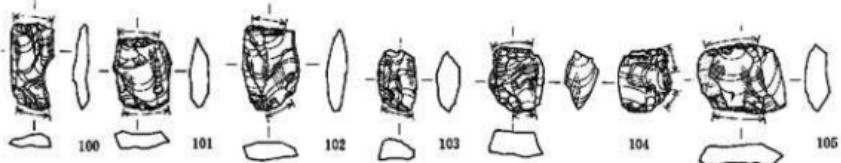
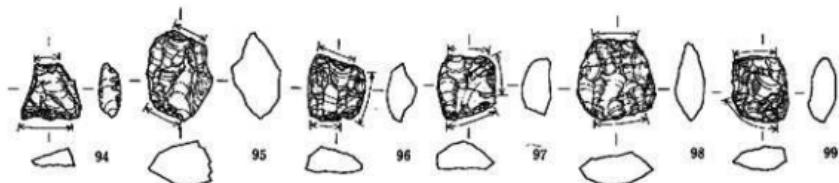
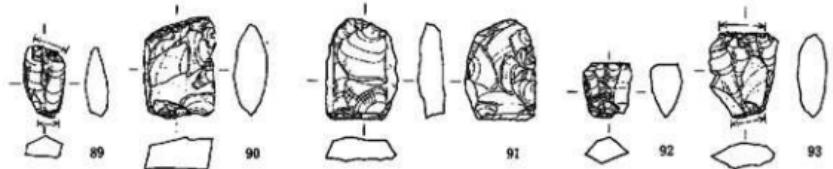


0 5 cm

第152図 石器 (2) 石鏃(32~67)

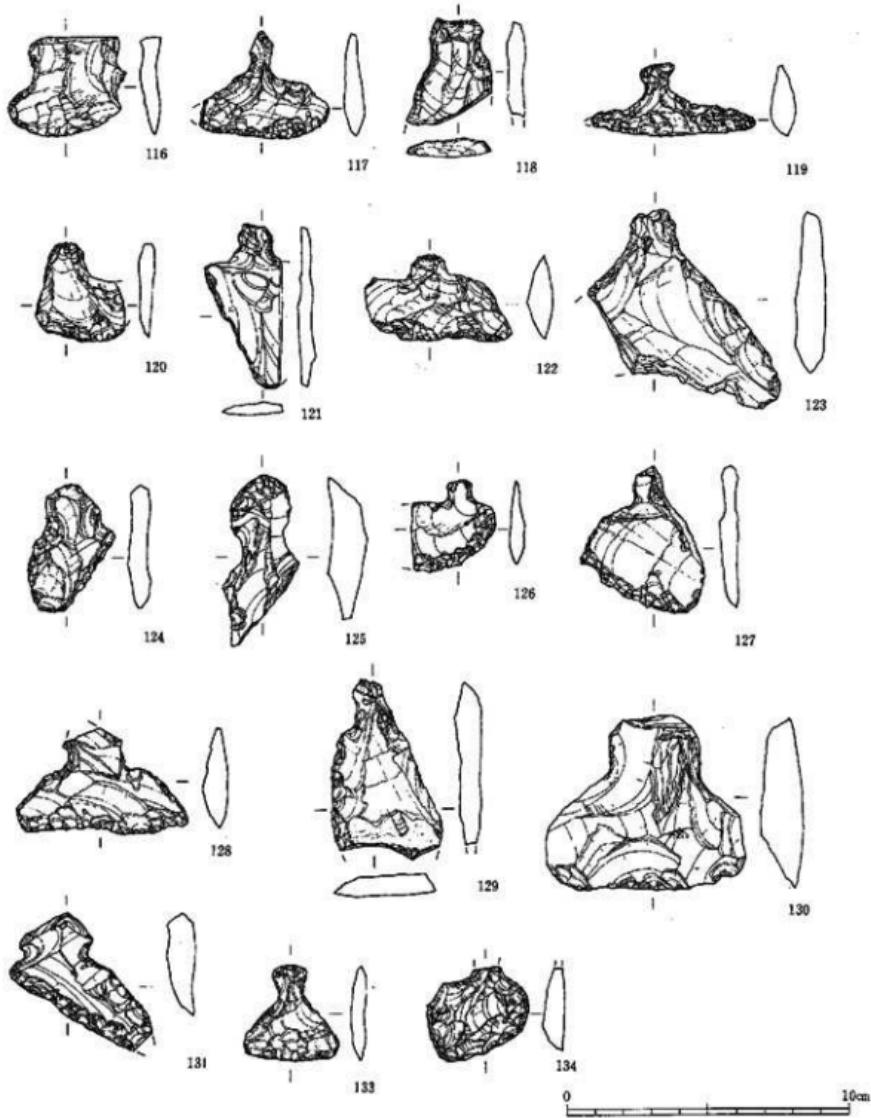


第153図 石 器 (3) 石錐(68~71), 石錐(72~88)

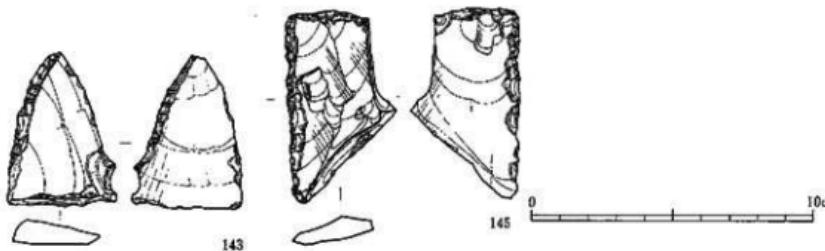
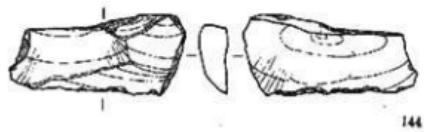
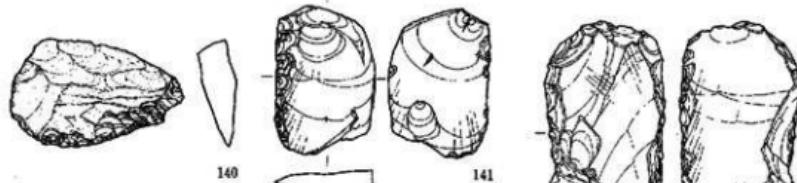
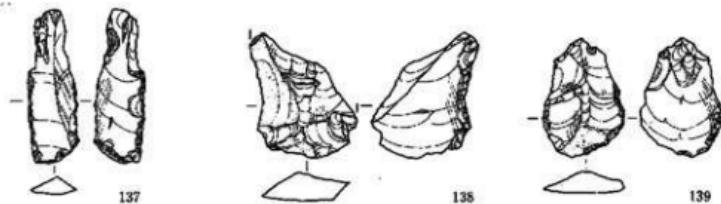
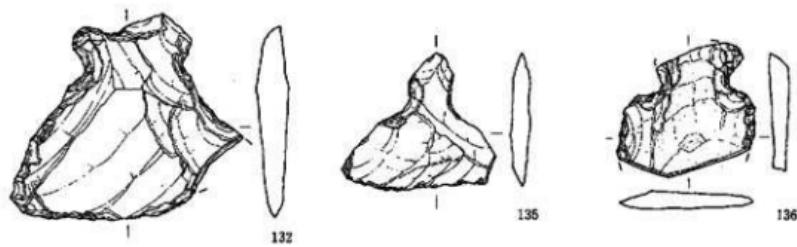


0 5 cm

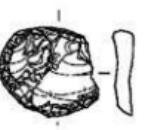
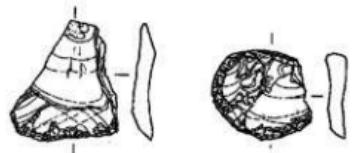
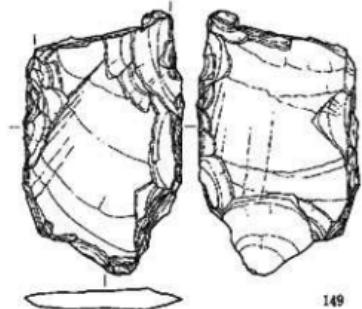
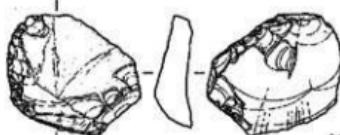
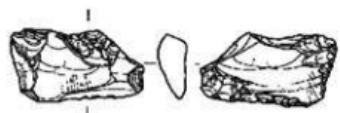
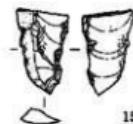
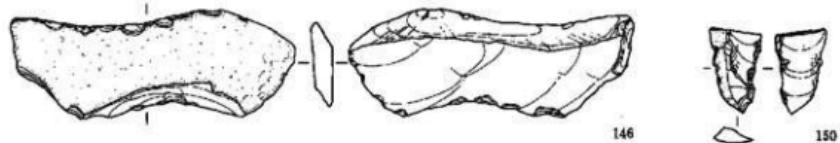
第154図 石 器 (4)ビ・ル・エスキユ (89~115)



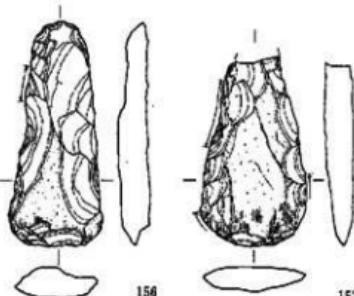
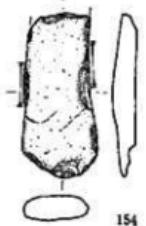
第155図 石器(5) 右脇(116-131・133-134)



第156図 石 器 (6) 石鉗(132・135・136), スクレイバー(137~145)

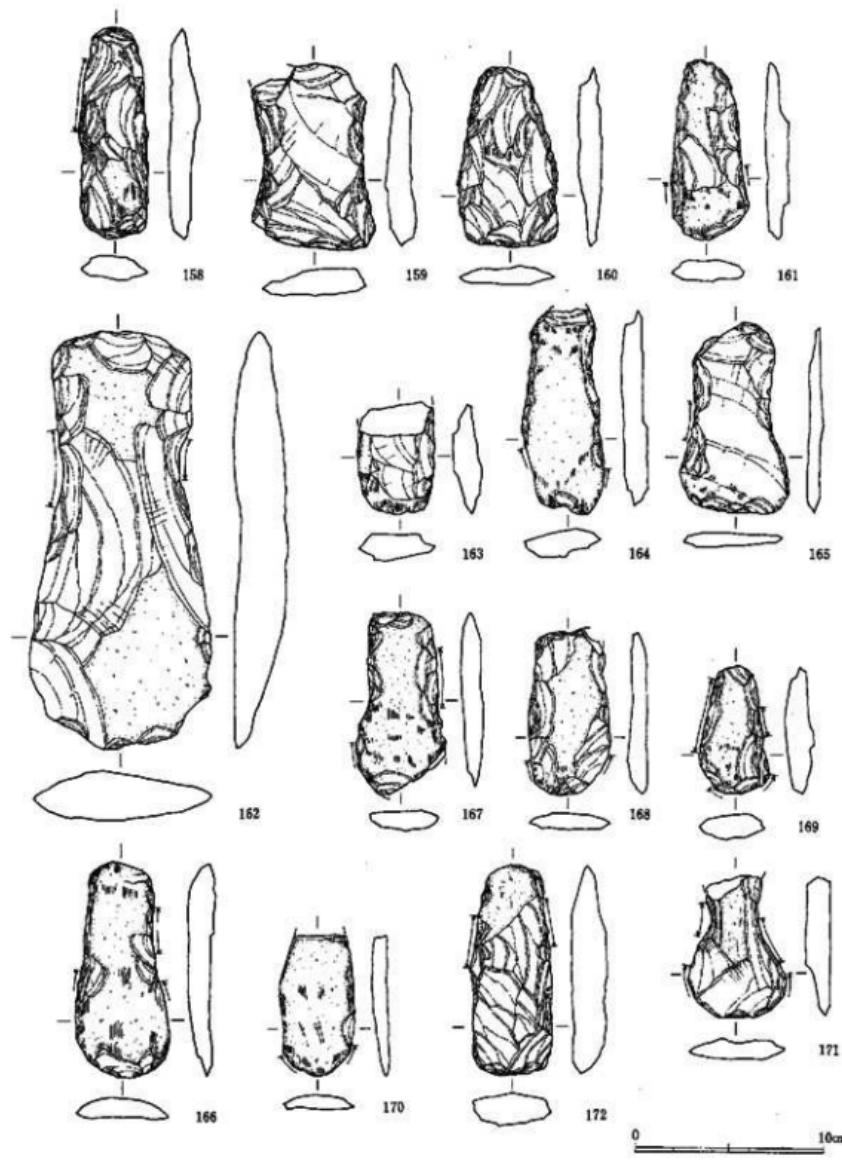


0 10cm

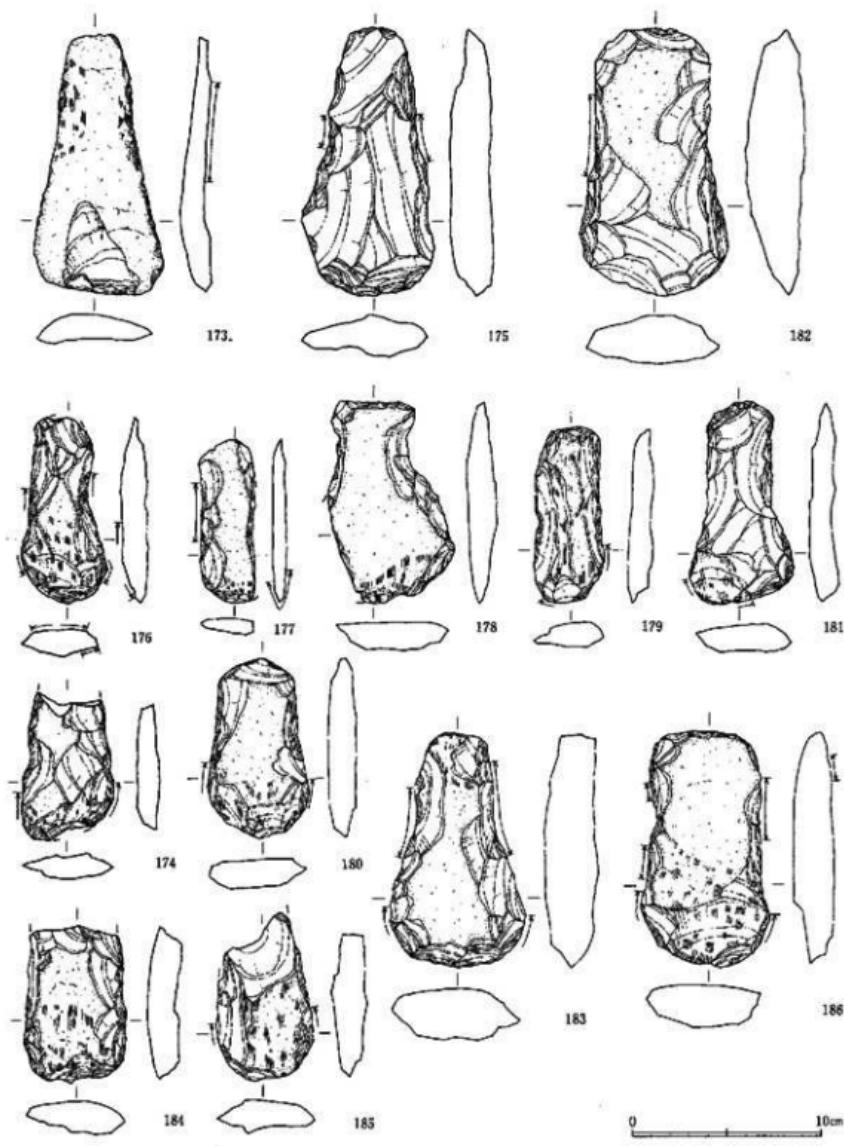


0 10cm

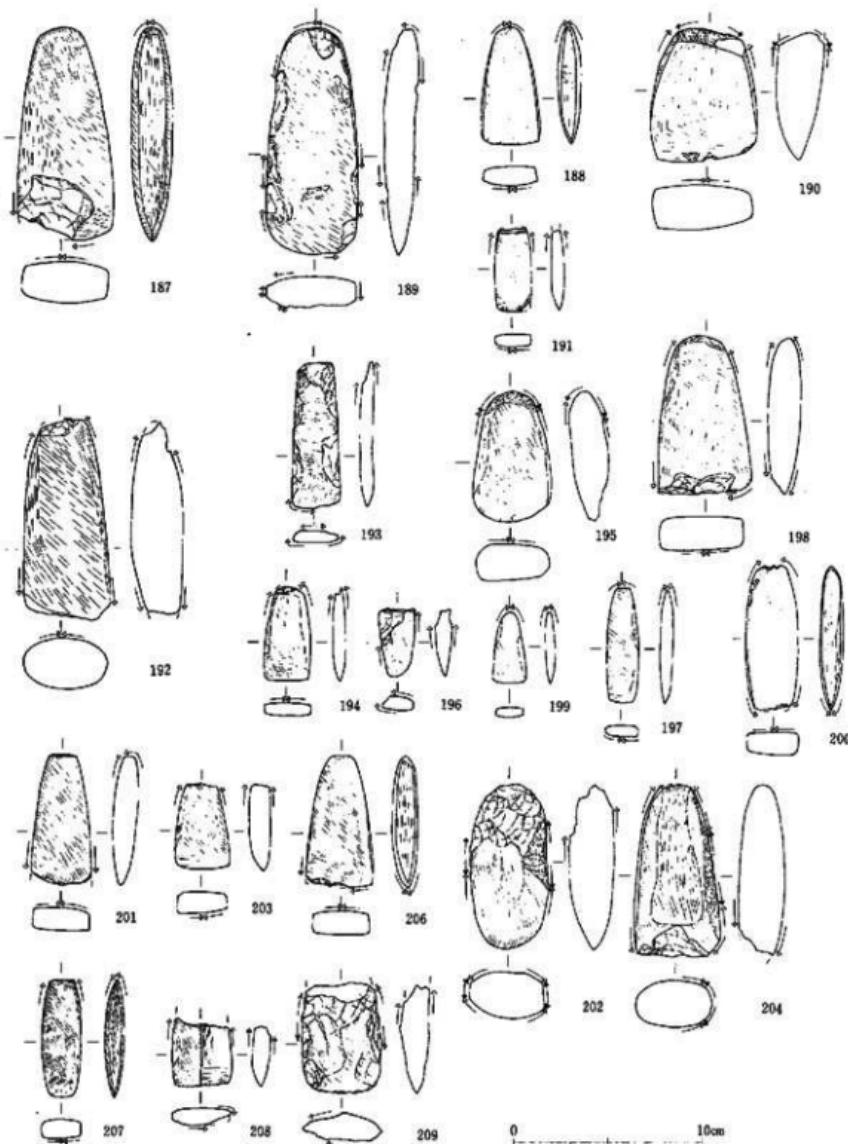
第157図 石 器 (7) スクレイバー(146～153), 打製石斧(154～157)



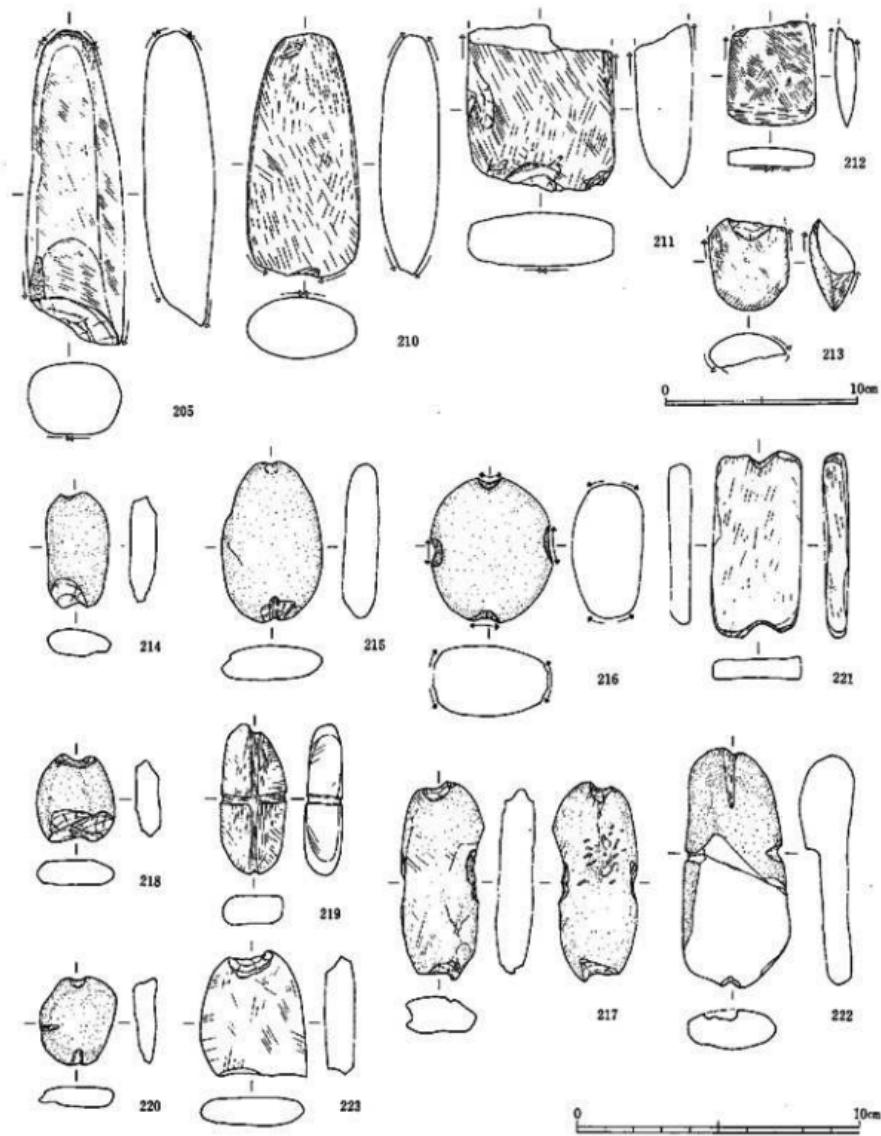
第158図 石器 (8) 打製石斧(158—172)



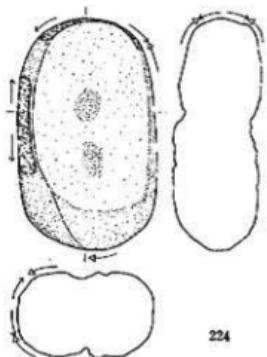
第159図 石 器 (9) 打製石斧(173~186)



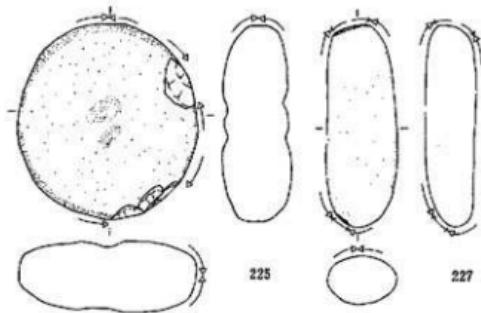
第160図 石器 10 流製石斧(187~204・206~209)



第161図 石器 (II) 打削石斧(205・210~213), 石錘(214~223)

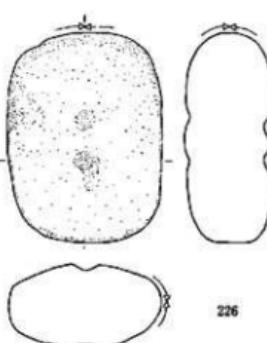


224

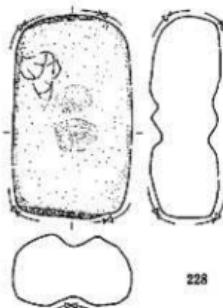


225

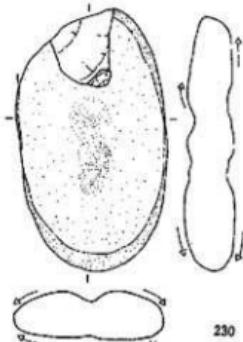
227



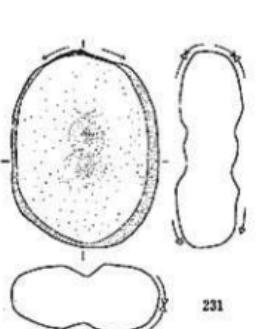
226



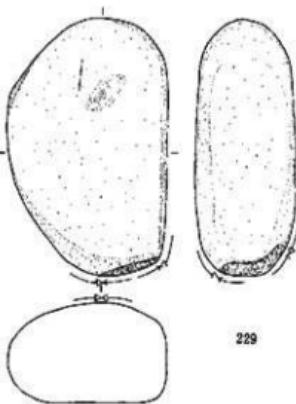
228



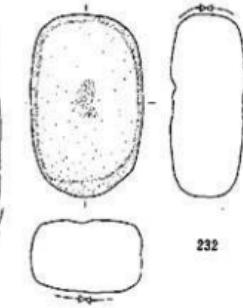
230



231



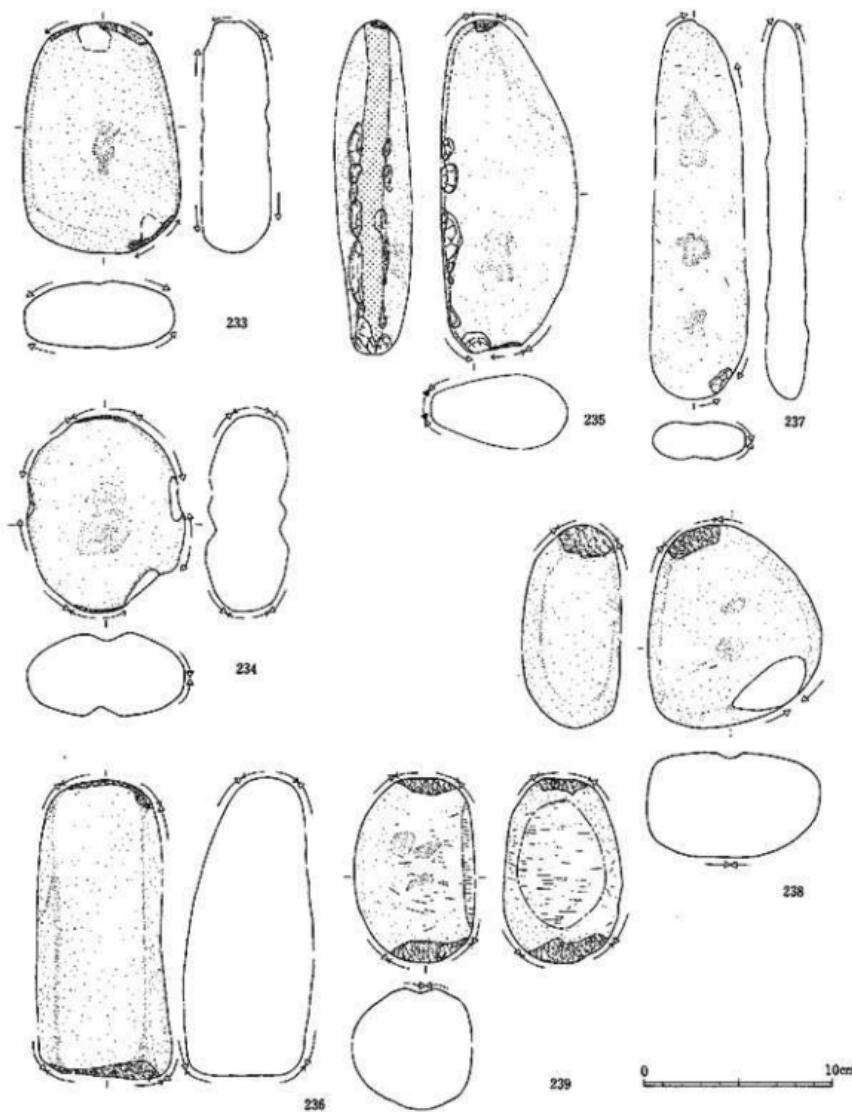
229



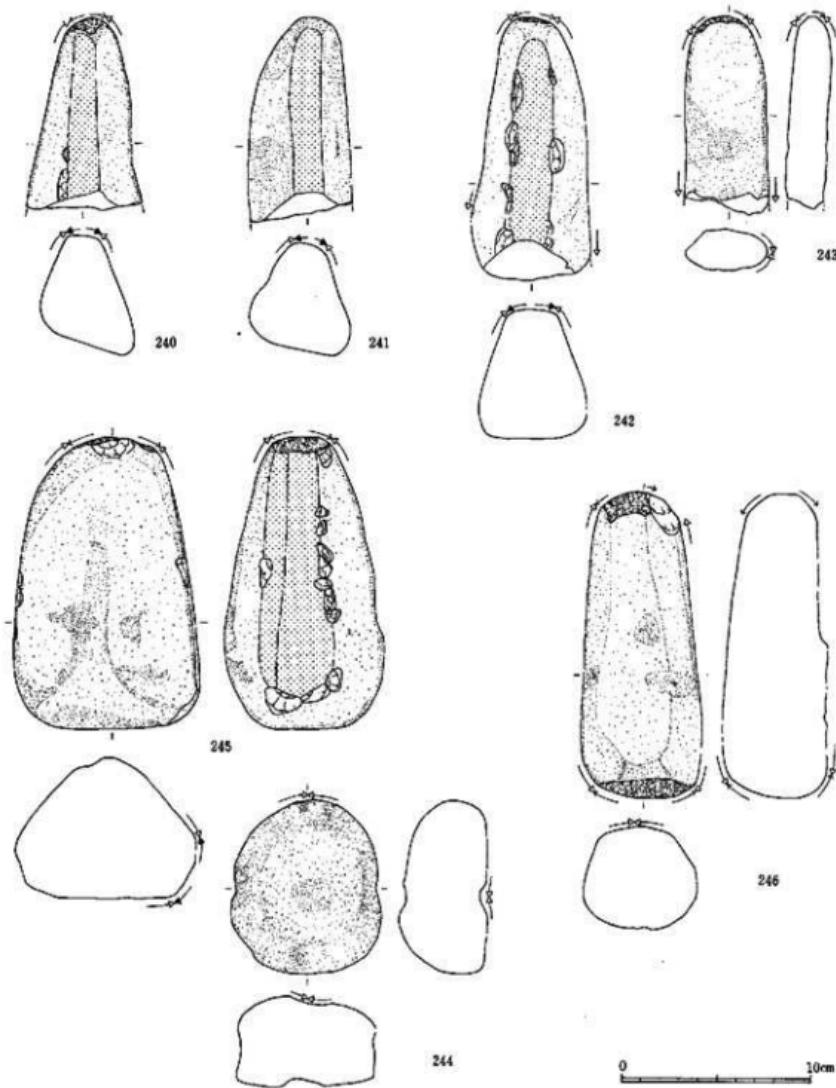
232

0 10cm

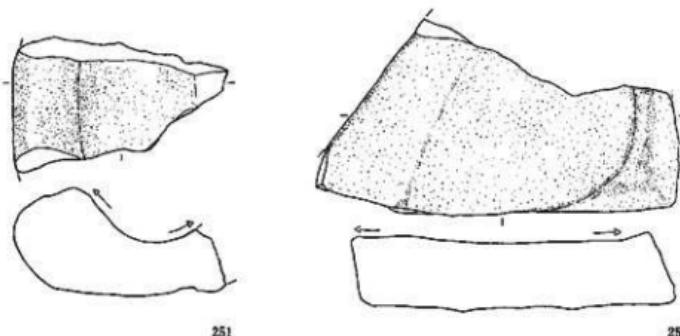
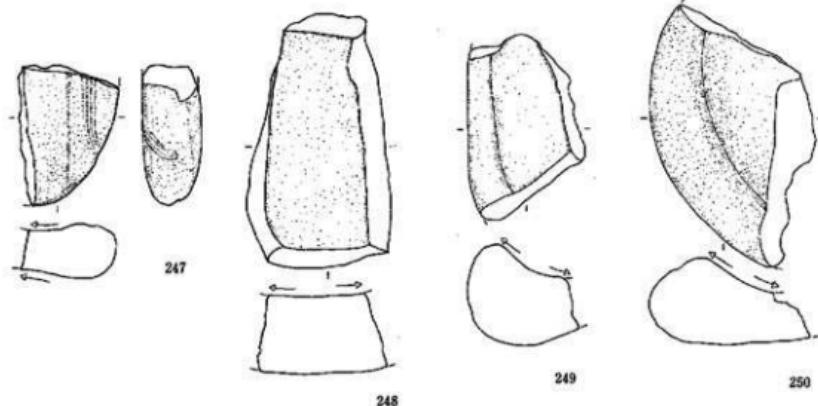
第162図 石 器 (12) 匣・鏡・磨石(224~232)



第163図 石 器 (13) 四・五・六・七石(233~239)

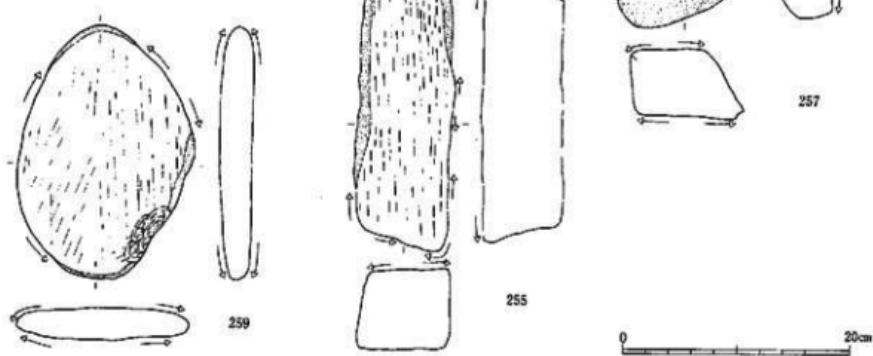
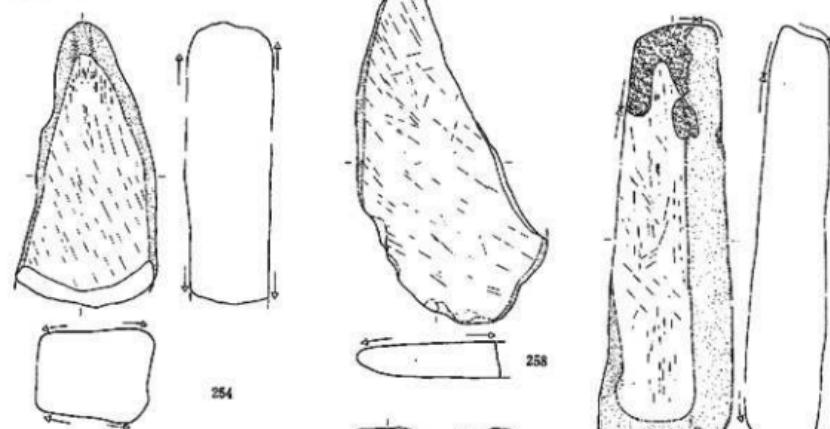
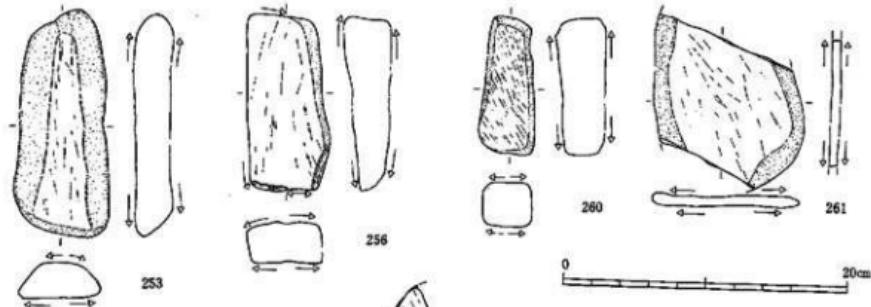


第164図 石 器 14 凹・鼓・削石(240~246)

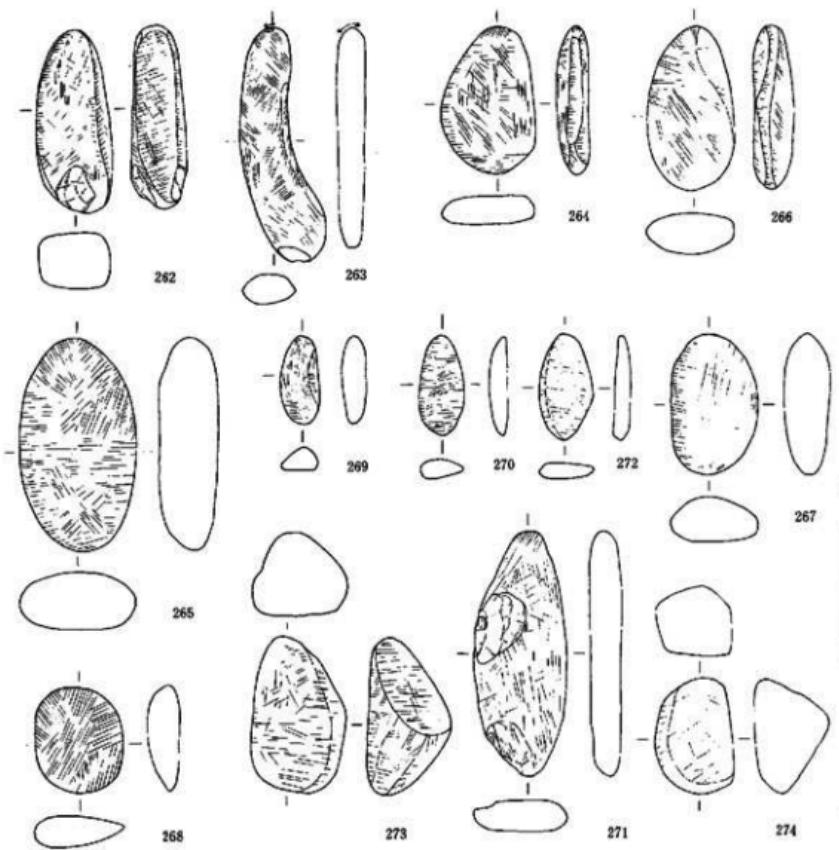


0 20cm

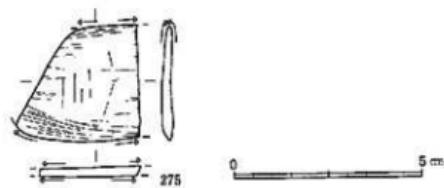
第165図 石器 (19) 石皿(247~252)



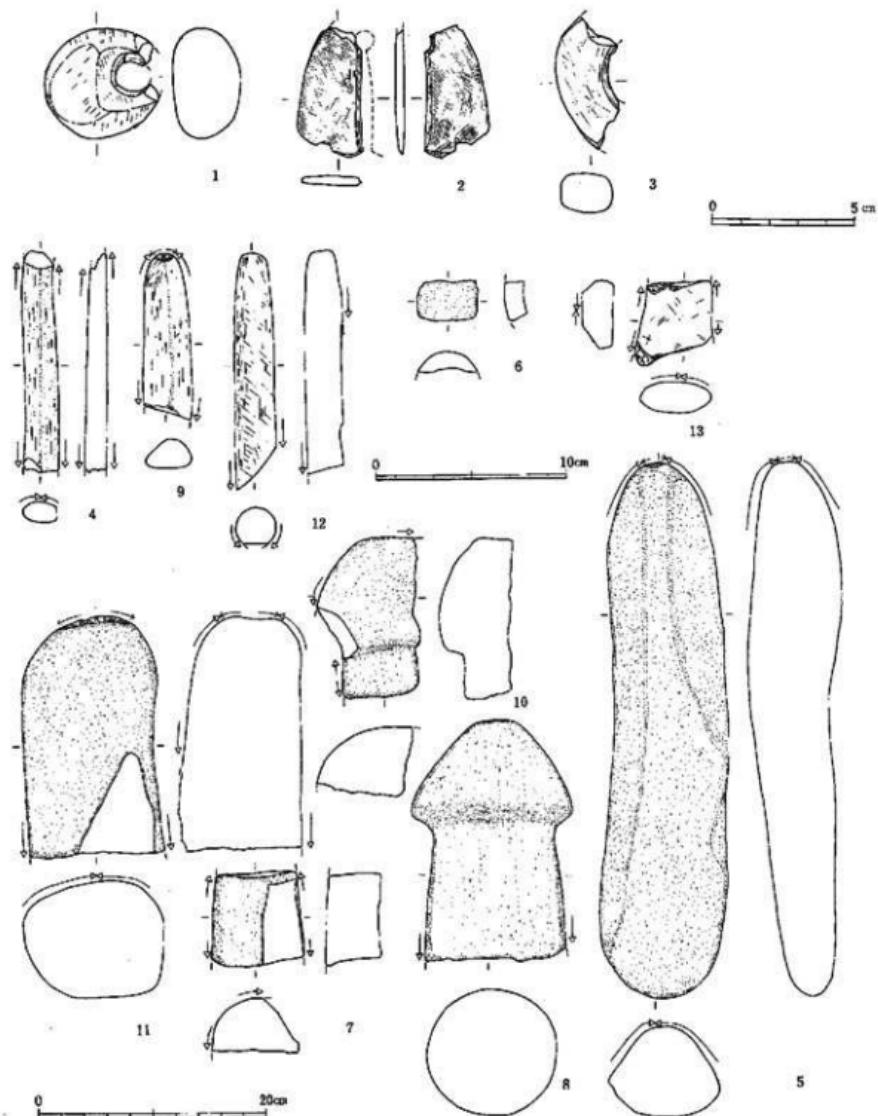
第166図 石器 (16 基石(253~261))



0 10cm



第167図 石 器 (17) 研磨器(262~274), 不明石器(275)



第168図 石製品 波身具(1~3), 石棒・石刀(4~13)

第7節 その他の出土遺物

1. 坪ノ内遺跡の出土骨について

本遺跡の多数の住居址・土坑・広範な各地点から、それぞれ微量ながら骨類が検出された。これらの骨はすべてが焼けた獸骨と見なされるものであり、燃焼の結果、著しく破碎が進行し、きわめて細かな骨片となって残存するものである。

骨の形態から観察できる動物種や部位、頭数などの詳細は一切不明であるが、わずかに形状を保つ骨片からは、シカの骨格の各部位が大多数を占め、イノシシが少量存在する傾向がうかがえる。中・小動物で部位を残す骨片は皆無であり、その混在を辛うじて指摘できるに止まる内容である。

このような様相は、捕獲した動物を各遺構内で直接的に解体処理や火焼を行なった状況とは言い難く、二次的に土中に取り込まれた一部の骨片の残留の結果を窺わせるものである。

以下、各遺構からの出土骨のうち、多少の内容を含む骨について略記する。

●住居址出土骨 骨の検出は計20基ほどの住居址で認められた。微量な骨粉状のものから、やや細片が一括されるものまで、それぞれ量的に多寡がみられる。

第1号住居址（P 4 =住居址内のP 4 からの出土骨を示す）ほとんどがシカのツノの断片で、角幹や枝の分歧部、先端部分などが一括されて比較的多量である。すべてが長さ2、3 cm程度の破碎片である。骨の細片は少ない。

第2号住居址（P 1、4、13）ツノの断片が一括される。シカの尺骨切痕部分（？）の他に長管骨の破片が残る。

第7号住居址（P 2、3、6 覆土内）平たい板状骨は大型獸の頭骨であろうか。シカの指骨（末節骨）が完存。他は不規則な形で薄い緻密質部分などの小片のみである。

第8号住居址（P 2、7）ツノが1片、シカの寛骨片？、シカ指骨（中節骨の破片）1個の他は大型獸の管状骨片が少量残存する。

第10号住居址（P 25、床面）全体としてやや多量のツノの断片が一括される。他に板状の骨片や、大型獸の管状骨片がわずかに残る。なお、埋甕内からの検出として僅量の骨片が認められるが、動物種等などは不明である。P 25のミニチュア土器内の骨片も細片のため動物種等は不明である。

第12号住居址（P 1、床面）床面出土のものにツノの大形片や断片が多く残り、1頭分のものとみられる。他は少量の細片のみ。

第19号住居址（覆土）シカの指骨（末節骨）1個、長骨片の他はわずかな細片のみ。埋甕内からは微量の骨片が検出されている。

その他の住居址（第3、4、9、11、13、14、15、16、21、22、25号）からの検出骨はすべてがきわめて微細な骨片が、わずかに認められる程度である。

配石群出土骨 各配石にツノが含まれている。これらは骨幹の太い部分や、2、3 cm くらいの縦割された断片などに一括される。シカの尺骨切痕部分、イノシシの肩甲骨の頭部より関節への部分などの他は、少量の細片のみ。

●土坑出土骨 計20基の土坑から骨片が検出されている。ただし、多くの土坑で極めて微量な骨片の残存が認められる程度で、一括された状態での出土骨は全くない。量的にやや多い骨片が検出された土坑は以下の通りである。

土坑361 シカの頭骨の板状骨片、同下顎骨の一部、ツノの小破片、同大腿骨の骨頭(成長線から外れている)、指骨2片などの他は細片のみであるが、やや多量である。

土坑366 板状・管状のやや大形の破片が残り、他は細片のみ。

土坑348 シカのツノの小片のみが一括される。

土坑498 ツノの複数片。イノシシの脛骨上関節部(成長線から外れている)。他はやや大形の長骨片がわずかで、細片が微量に残るのみである。

他の土坑の骨はすべて少量の細片ないし骨粉状に残る程度である。

土器集中区出土骨 およそ60ヶ所以上の地点において骨片が検出されている。量的に多く、部位の判明する出土地点の内容を略記する。N-39・E-22 やや大形(長さ3.5cm)の管状骨片や、厚い緻密質を有する大形獸の長管片など。N-43・E-30 シカのツノが断片状ながらほぼ一括され、細片も含まれる。N-43・E-26 シカの指骨(末節骨)が完存する。他は細片のみ。N-41・E-30 ツノの断片が3、4点。N-41・E-28 シカの上腕骨の滑車部分、指骨(末節骨)は完存する。N-45・E-28 シカのツノが一括される(やや大きい断片と3、4片のもの)。他に管状骨片が含まれる。N-41・E-34 シカの指骨(基節骨)の近位端など。N-47・E-26 シカの指骨(中節骨)の近位端はやや原形を保つ。N-41・E-36 大形獸の管状骨片など。N-41・E-20 シカの尺骨(左)、下端関節部分がほぼ残存する。N-51・E-34 ツノが一括される。骨幹と枝の分岐部が大形片で残存し、他は断片状であるが、やや多量である。中手(足)骨の下端関節部が含まれている。

その他、検出面からの出土として、シカのツノが角座から離脱した部分、イノシシの下顎骨の一部で、右犬歯の歯槽をわずかに残すものがある。他に赤色顔料の付着した貝殻が1点出土している。細片のため確定できないが、イヨスダレガイと推定される。

2. 坪ノ内遺跡出土の炭化材について

本遺跡出土の炭化材はいずれも小片で全体の量は少ない。種類別にみると、クヌギ、クリ、コナラが主体で、他に数種が存在する。以下出土位置と樹種を列記する。

住居址 4住覆土: サワグルミ、7住P27: コナラ、8住覆土: クヌギ、P9: コナラ、19住埋甕1: ケヤキ、21住P23: クリ **土坑** 35: コナラの実、62: コナラ?樹皮、146: ハンノキ、417: クリ、582: 不明、**土器集中区** N45E26: コナラ

第6章 考 察

1. 坪ノ内遺跡における縄文時代集落の変遷

I期（早期末葉～前期前葉）（第169図）

遺構は調査区の北西部に土坑がわずかに散在するのみであり、生活の場はどこにあったのか不明である。土器集中区では、南側から中央部にかけて多量の土器が出土している。遺構の数にくらべ土器の量が、あまりにも多いため、台地上の調査区以外の場所、もしくは近接する他の場所に生活の場があったものと思われる。

II期（前期後葉～中期初頭）（第169図）

遺構は調査区の南西隅に2軒の住居址があり、その周辺と調査区の西侧の平坦部に土坑が散在する。この部分は調査区西侧の平坦部の端で、地形が斜面に向けて移行する部分にあたっている。同時期の他の集落の例などから、この時期の集落は、今回の調査区の西侧に隣接する斜面の上部に展開する可能性が高いと思われる。土器集中区は、土器の分布はI期と、ほとんど変わらないが、量は、かなり少なくなる。

III期（中期前葉～中期中葉）（第170図）

遺構は調査区の中央部と北西部に土坑が、わずかに散在するほか、第1号住居址に切られて、壇設上器が単独で存在しているのみで、量は非常に少ない。土器集中区では、中央から北部にかけて多量の遺物が出土しており、I、II期よりも北側に範囲が拡大している。遺物の量は時期別では最も多い。台地上の調査区以外の部分からの、この時期の遺物の出土量は非常に少ないとから、本遺跡に近接する他の場所に生活の場があったものと思われる。

IV期（中期後葉）（付図2、第170、171図）

遺構は調査区の西侧の平坦部に、住居址、土坑が環状に展開している。中央の1965年調査時のDトレンチと推定される部分の南端付近を中心とし、その周囲の直径約15mの範囲に20数基の土坑が分布し、回りに遺構のない空白部分がある。さらにその回りに調査区の外縁に沿うように土坑が分布している。土坑より出土した土器は明確に時期を決定できるものが少ないため、中期後葉のものは一括し、それ以上の細分は行なっていない。この時期の住居址は6軒あり、いずれも外縁部の土坑群の中及び、やや外側に分布している。分布の状況より、調査区の北及び西側にも、この時期の集落が展開していたものと推定される。調査区の東側及び、北側のII区にも土坑が分布し、台地のさらに高い部分や、北側の谷に近い部分の両側にも生活の場が拡大していたと推定される。外縁部の南側にも土坑は分布しているが、南端の第11号住居址と第17号住居址の間の部分にも住居址が存在したかは不明である。

6軒の住居址を時期別に細分すると、およそ3つのグループになる。各時期ごとの住居址と、それに伴なう、土偶、石棒等の遺物のあり方を概観してみたい。なお本項では住居址の名称を第〇号住居址→〇住と省略する。(以下同様)

1段階(曾利Ⅲ式期)(第170図)

この時期の住居址は、9住・11住の2軒である。入口の方向は9住が南西、11住は南である。9住は7基、6個体の埋甕をもち、南側の覆土中より、石棒の小片が出土している。11住は南側が調査区外のため、埋甕の有無は確認できない。土偶はいずれの住居址からも出土していない。

2段階(曾利Ⅳ式期)(第171図)

この時期の住居址は、19住・25住・18住の3軒である。18住と19住は切り合っているが、時期差は、ほとんどない。18住の時期は曾利Ⅳ式でも終りに近い段階であり、本段階から切り離し、全体を4段階とすることも可能である。埋甕は18住と19住にあり、18住は建て替えに伴い、切り合って2基、19住は同時か時期が異なるか不明であるが、2基ある。25住は入口部の遺存状態が悪く、存在したのかは不明である。土偶は、19住より3点、18住より1点出土しており、25住にはみられない。石棒は19住より1点出土している。その他の遺物は、18住では炉の奥部の床面よりミニチュア土器が1点、覆土より土鉢が1点、土製耳飾が1点出土している。19住では、南壁沿いのP17より土鉢が1点出土している。

3段階(曾利Ⅴ式期)(第171図)

この時期の住居址は17住1軒のみである。入口の方向は南西で埋甕はない。覆土より土偶の手が1点出土している。

IV期全体をみると調査区外の部分に存在が推定される未知の住居も合わせて、1時期に2または3軒以上の住居址が集落を構成したと推定される。住居址の入り口は、どの段階も東側の外縁部の住居址は南西を、西側の外縁部の住居址は南東を、南側の外縁部の住居址は南を向いている。つまり全ての住居址が南に近い方向を入口としている。埋甕も遺存状態の悪い住居もあり確定はできないが、全ての住居址に存在するものではない。なお全ての住居址の床を剥いだが、伏甕等の施設は検出されていない。住居址の規模を比較すると、同じ段階の住居では南側のものの方が、やや大きくなっている。土偶や土製品は、すべて集落の西側の住居址に集中している。これに対して石棒は東側の9住と、西側の19住から1点ずつ出土しており、集落の中でのあり方が異なっている。土器集中区では遺物の量はⅢ期に比べると少くなり、分布は北側に多くみられるようになる。また埋設土器(1段階)や集石が集中区の中に作られており、単なる廃棄の空間という以外の意味をもつようになっている。遺物の時間を見ると、中期後葉の初めと終末のものがほとんどを占め、住居址の存在する時期のものは、後葉終末のものを除き、ほとんどみられない。このことから考えると土器集中区の土器は、未調査部分に、その時期の遺構が存在し、そこからもたらされたものかあるいは、この集落には、その時期の遺構はなく、近接する別の場所から持ち込まれ、廃棄された

ものと考えられる。いずれにせよ、集落と土器集中区の関係が注目されるものである。

V期（後期初頭～後期前葉）（付図3、第172図）

遺構は調査区の中央部の平坦部と、その上下の斜面に、11軒の住居址が分布している。北側は土器集中区となり、南側は調査区外となるため、切れているが、ほぼ環状に巡るものと考えたい。中期の環状集落よりは、一段高い所にあり、一部が重なっている。土坑の分布は中期の集落とは異なり、住居址群のある調査区中央の平坦部では、中心部にはみられず、住居の周辺に散在するのみである。住居址群より一段低い、中期の環状集落のあった平坦部では、中期の集落と同じく環状に土坑が分布している。土坑の時期は、後期初頭のものは、ごくわずかで、ほとんどが後期前葉のものである。中期の土坑と同様の理由で、それ以上の時期別の細分は行なっていない。調査区の東側にも、わずかにこの時期の土坑がみられるが、北側のII区には、みられない。

11軒の住居址をさらに細分すると、明確な時期が不明な4軒を除き、2段階に分けられる。中期の集落と同様に各段階ごとに概観してみたい。

1段階（堀之内I式期）（第172図）

この時期の住居址は1住・12住・15住・24住・5住の5軒である。入口の方向は、1住が南西、12住・15住・5住が西、24住が南で、中期の集落のように明瞭な規則性はない。埋甕はいずれの住居址にも、みられない。土偶は24住より1点、12住・15住より各2点出土している。石棒は、いずれの住居址からも出土していない。

2段階（堀之内II式期）（第172図）

この時期の住居址は、2住・7住・10住の3軒である。入口の方向は2住が西、7住が南、10住が南西と不規則である。埋甕は10住のみにあったが、この時期の埋甕は検出例が少なく、貴重なものである。土偶は全ての住居址より出土し、2住からは4点出土している。石棒は2住のピット内より1点出土したのみである。

その他

後期前葉に属するが、細分できないものを一括する。8住・16住・21住・22住・23住の5軒である。入口の方向は16住が南西、他の4軒は南である。埋甕、土偶はいずれの住居址にもみられない。石棒は21住の奥部のピット内より出土している。

V期全体をみると各段階ごとの住居址の数は中期の集落より増え、1時期に4、5軒以上の住居が存在している。この違いは中期の集落に比べ、未調査分が少なく、ほぼ全体を調査できたためかもしれない。住居の分布している広さを比べると、中期の環状集落より、ひと回り小さくなっているようである。住居址の入口の方向をみると、西側の7住・8住・24住は南、北側の2住・5住・21住・22住・23住は西、東側の10住・16住・20住は南西を向き、1住を除いて3つのグループに分かれれる。おそらく住居址の立地に何らかの理由があるためと思われるが、住居址群の中心の広場を意識したと思われる中期の集落とは、大きな違いが認められる。埋甕は10住で確認されたのみであ

る。遺物の出土状況をみると土偶の量が多く、いずれも西側の住居址より出土しており、東側の住居址には、みられない。両者の間に何らかの性格差があったのではないかと推定される。

この時期の土器集中区の状況をみると、遺物の量はIV期と同程度であるが、櫛形を復元できるものは、少なくなっている。遺物の分布は、土器集中区の北東部が中心となり、IV期と同様に、配石、焼土などの遺構がみられる。遺物の時期を細かくみると、住居址のない後期初頭のものが多く存在しており、中期と同様に集落との関係が注目される。

VI期（後期中葉）（第173図）

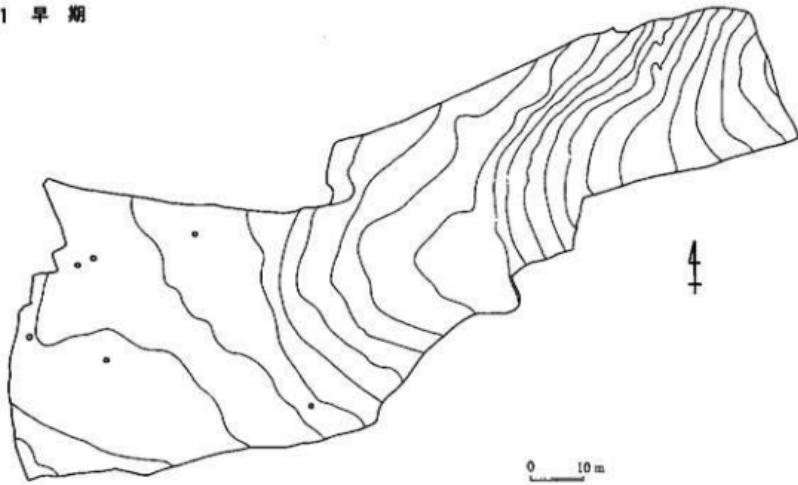
遺構はIV期に続き、住居址が調査区中央の平坦部に展開する。土坑は住居址群より低い調査区西側の平坦部に分布するが、環状には展開せず、西側を中心に散在している。住居址は3住・4住・6住・20住の4軒で、入口の方向は、3住・4住が西、6住が南でIV期と同様の規則性を示す。土偶は西側の2軒にあり、3住より4点、6住より1点出土している。この西側の住居にのみ、みられる傾向は、IV期と同様で、この遺跡の後期集落の特徴といえる。石棒は6住と20住から1点ずつ出土している。土器集中区では、遺物の量は非常に少くなり、分布も散在する程度になる。

この遺跡の縄文時代後期の集落は、台地上の平坦部から斜面に移行する部分の特定の場所に、住居址が作られている。住居址は、ほとんどが切り合っており、中には時期差が極めて少ないものもある。また中期の住居址のいくつかでみられた建て換えが、後期の住居址では、まったく見られず短い期間で住居が廃絶され、同じ場所に、あまり間を開けることなく再び築かれていたと推定され、住居を作る場所にも、何らかの意味があったと思われる。住居址の平面形は遺存状態が不良で全形が判らないものも多いが、柄鏡形のものと、そうでないものが混在している。敷石は後期前葉の1住・7住・15住・22住の4軒に認められた。いずれも遺存状態は不良だが、全面ではなく、部分的に敷石があったものと推定される。またいずれの住居址も廃絶時には敷石を剥いで廃棄している。遺物等の分布をみると前述のように、土偶は西側の住居址に集中しており、東側には、みられない。石棒は2、6、7、20、21住より各1点出土しており、土偶のような分布の傾向はみられないが、切り合っている住居址群の中では、新しいものから出土しており、全体に大型のものが多い。

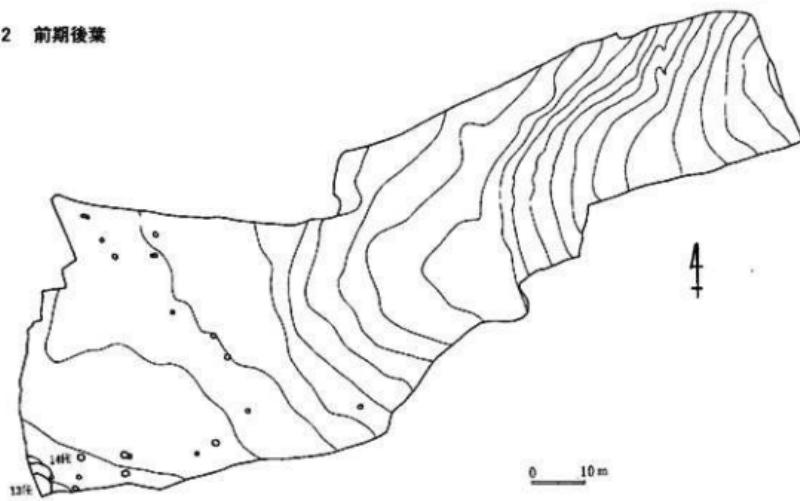
以上縄文時代の坪ノ内集落の変遷を概観してみたが、この台地の上には、縄文時代早期に、初めて人の姿が現われ、それ以来何度も途切れた時期もあったものの、非常に長い期間に渡り、人々の生活が営まれている。台地の上での生活の場は時期によって変わり、生活の空間のあり方も、様々な変化をみせており、その背景としての居住者の意識の違いを感じることができる。

土器集中区は、一部に炉などの遺構もあり、確認できなかったが、住居址等の生活の空間が存在した部分もあったものと考えられる。しかし出土した遺物の量は、あまりにも膨大であり、出土状況をみても、破損しないままで斜面に捨てられたと感じられるものが多く、性格としては、土器磨拭のための空間という印象が強い。時期により差はあるものの、早期から後期の非常に長い期間にわたり、この空間に対して同じ意識をもっていたことが窺われ、非常に興味深い。このような土器

1 早期

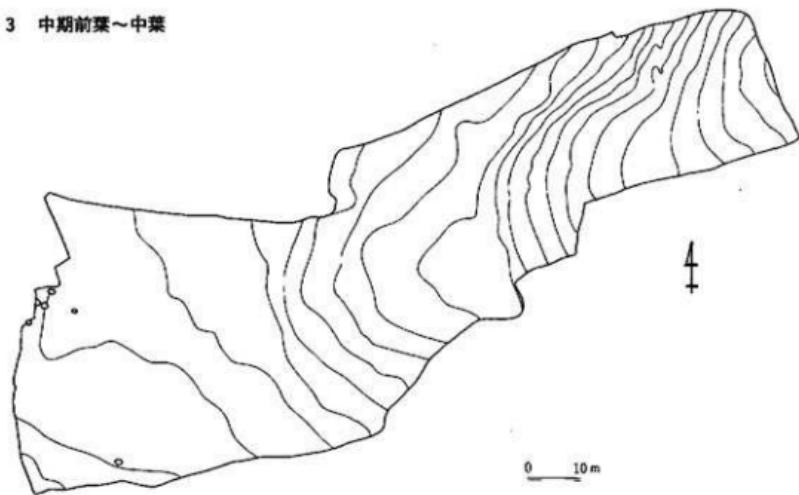


2 前期後葉

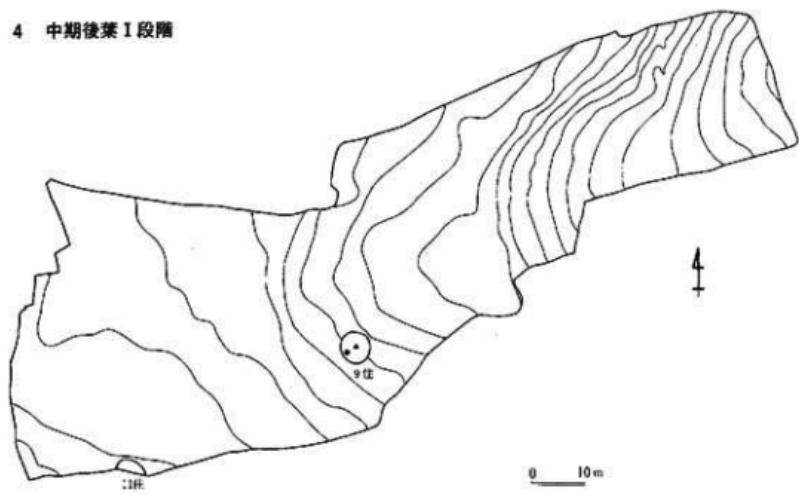


第169図 集落変遷図 (1)

3 中期前葉～中葉

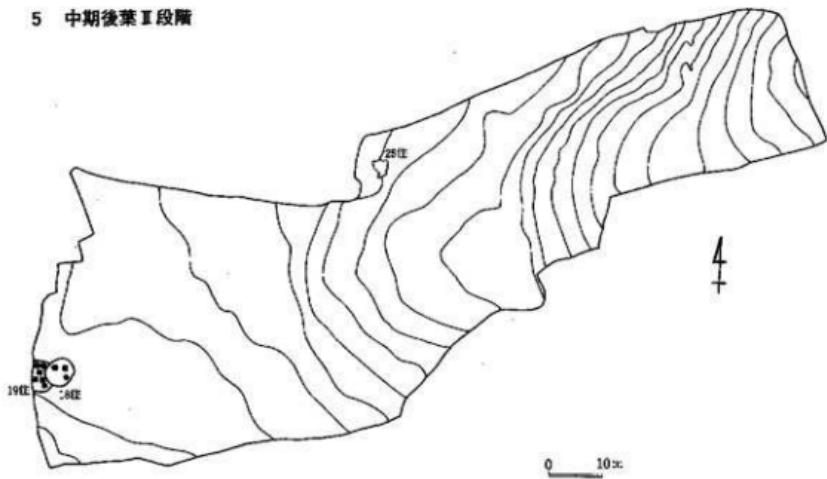


4 中期後葉 I 段階

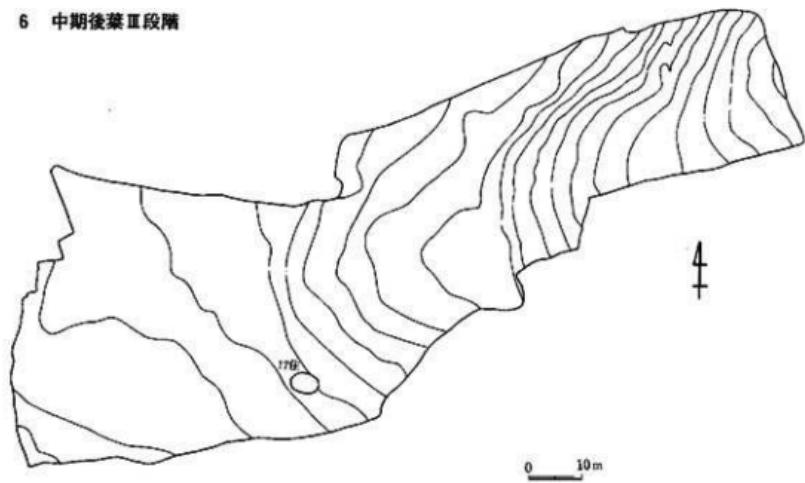


第170図 集落変遷図 (2)

5 中期後葉Ⅱ段階

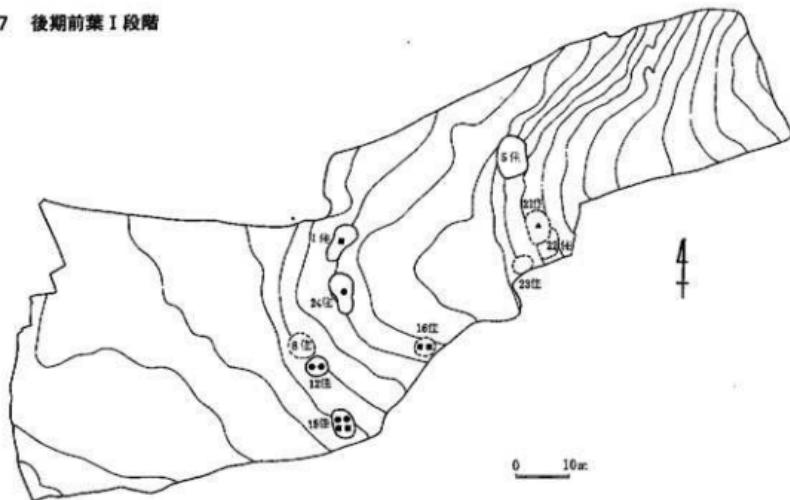


6 中期後葉Ⅲ段階

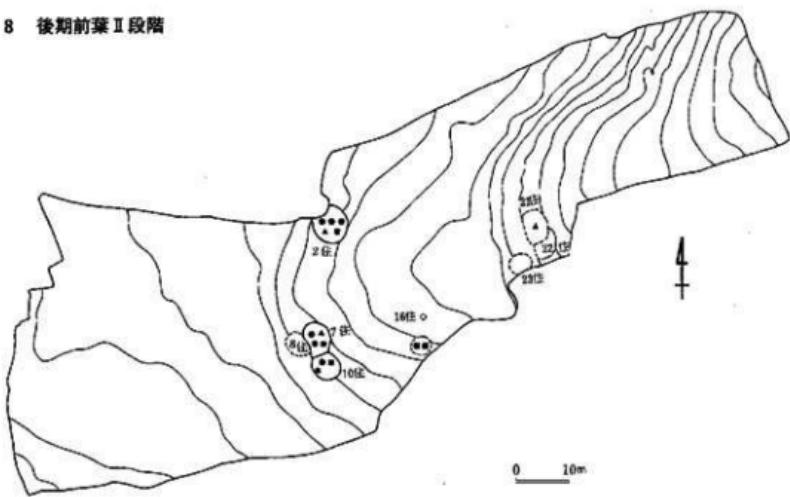


第171図 集落変遷図 (3)

7 後期前葉 I 段階

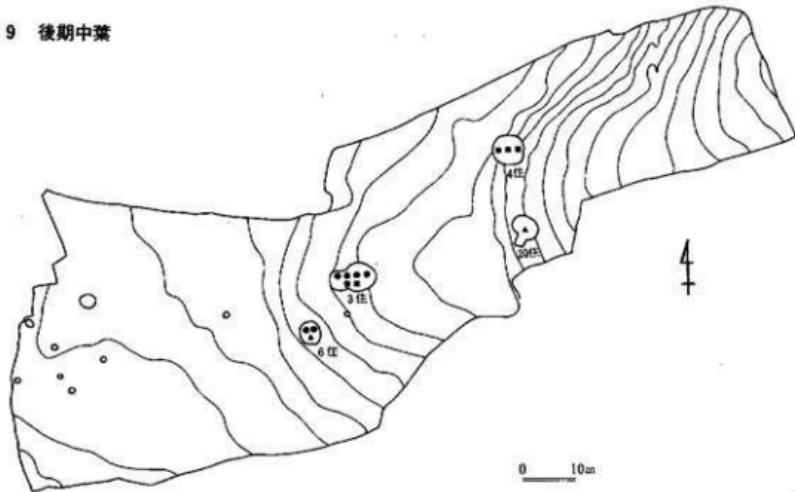


8 後期前葉 II 段階

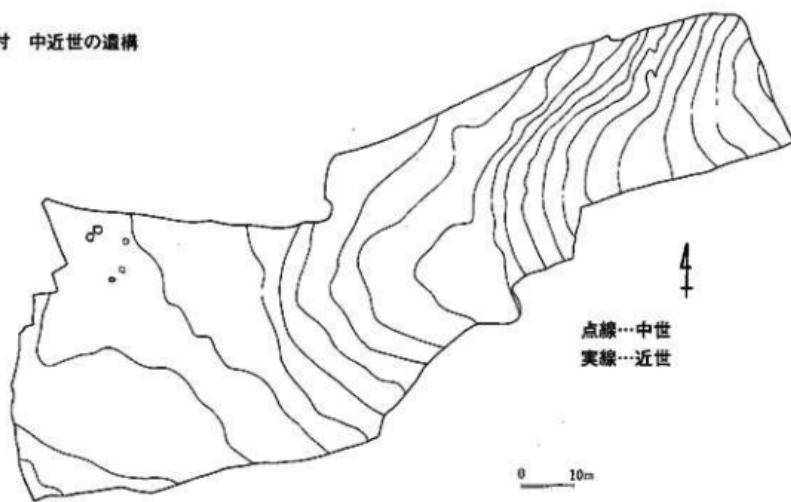


第172図 集落変遷図 (4)

9 後期中葉



付 中近世の遺構



第173図 集落変遷図 (5)

廃棄の空間の調査例は、いくつか報告されているが、本遺跡のように規模が大きく、長い期間に及ぶ例はない。また時期別に概観した中でも述べてきたように、集落内の遺構のあり方と、土器集中区内の土器のあり方には、大きな違いがみられ、両者の関係は非常に興味深いものである。集落の未調査部分があるため確実ではないが、土器の出土量、未調査部分の面積や地形などを合わせて考えると、周辺の集落から土器が持ち込まれ、廃棄された可能性が強いものと思われる。なお土器集中区の覆土中には、少量の焼けた骨片や炭化物が混在したが、これらと土器の廃棄との関連は不明である。

2. 坪ノ内遺跡における縄文時代後期の住居址に関する諸問題

今回の調査では縄文時代後期の住居址が17軒検出された。ここでは、それから得られたいいくつかの問題点について若干の考察を行なってみたい。

1. 住居址の主軸上にみられる施設について

今回調査された住居址は、そのほとんどが廃絶時に破壊されており、本末の状態が不明のものが多い。しかし、このことにより、ともすれば見逃しがちな本来の床面の下の施設を調査することができた。幸い本遺跡の地山は二次堆積ロームのため、これらの施設の検出は比較的楽であり、調査の結果、非常に興味深い所を見得ることができた。

本遺跡の縄文時代後期の住居址には、主軸上に大型のビットが並ぶものが多く、そのうちのいくつかは、その中から特殊な遺物が出土している。以下事例をあげてみたい。なお住居址名は、第〇号住居址→〇住と省略する。また各項の住居址は、時期順のため番号の順はバラバラである。

1住では主軸上に大きなビットが3つ並ぶ。主体部中央のP3は非常に深く埋土中に炭化物が多く混入している。この奥にあるP4は敷石の下にあり、ここからほんの一頭分の焼けた鹿の角が出土した。柄部の端のP1は柱痕状に中心部と外部の土層の差異が認められる。

24住は、主軸上に入口部から順にP12、P13が並ぶ。遺物の出土は特にみられない。

2住では主軸上に大きなビットが2つある。奥のP13からは、微量の骨片が検出されている。

10住では主軸上からは、ややズレるが、中央奥部の敷石下と推定されるP25から、ミニチュア土器に入った骨片、研磨礫、磨製石斧、蛇紋岩の原石が出土した。ミニチュア土器は口縁を石でふさがれた状態になっており、骨片は焼けていた。

3住では、主体部の炉を挟んだ前後に大きなビットがある。奥のP18からは、被熱した粘土の塊が、P42からは微量の炭化物が検出された。

6住では入口部と奥壁部に大きなビットがある。奥壁部のビットは非常に深く、ビットの上には配石があった。

20住では主体部と柄部の接点に大型のビットがあり、中からは炭と焼土が少量検出された。

これらのビットに共通するのは以下の点である。

1) 住居址の主軸上に位置する。

- 埋土の状況や、敷石との関係から、住居址が作られる時に設けられ、住居址使用時には、埋められていた可能性が高い。
- 中から出土した遺物は、非日常的な様相が強い。また焼骨など、火との関連が強いものと考えられる。

縄文時代中期後葉から後期にかけての住居址内の諸施設のあり方については、多くの先学により様々な研究がなされている。筆者の考え方によれば、それらを概観すると次のようになる。中期後葉の住居址では入口部に埋蔵が、炉を挟んだ奥の壁ぎわには石壇が設けられるものがある。次の段階には炉辺部に石棒が立てられるようになり、さらに後には入口部へ移る傾向がみられる。これとほぼ同じ頃には、住居址の入口部が張り出しをもつようになり、炉辺部に敷石をもつものが現われる。^{註1} やがて両者が結びついて柄鏡形の敷石住居へ発展してゆくというものである。この流れをみてみると、該期の住居址において主軸上の空間が重要な意味をもち、そこで何らかの儀礼行為が行なわれていたことが窺われる。特に近隣の東筑摩郡波田町草原遺跡や、塩尻市平出遺跡の敷石住居の事例にみられる主軸に沿って設けられた敷石は、このことを明確に示すものと思われる。本遺跡の後期の住居址の主軸上にみられるピットも、その流れの中での位置付けが可能なものと考えたい。^{註2}

ピット内からの出土遺物をみると、焼土、炭化物、被熱粘土塊、焼骨、焼陶角など、火と強い結びつきを持つことが見える。かつて桐原健氏は、中期後葉の住居の石壇について、炉の火により清めたものを供獻した施設との卓見を示しているが(桐原1969)、本遺跡の例も火で清めるという点での類似性を考えたい。またミニチュア土器や研磨器の存在は、この施設の非日常性を示すものである。これらのことより、この施設の性格は、直接物語る資料はないが、住居の建築時に行なわれた、何らかの埋納を伴なう儀礼に関わるものと考えたい。

このような施設の類例は、松本市林山腰遺跡第4号住居址の柄部の敷石下よりピットが検出された例がある。林山腰例は、主体部と柄部の接する付近の床面の敷石の間に2本の石棒が立てられ、その下部が床下のピットに入ったような状態となっている。主体部では、主軸上ではないが敷石があったと考えられる下から2つのピットが検出されている。これらからは遺物の出土はなかった。また塩尻市御堂山外遺跡第5号住居址(長野県埋蔵文化財センター1988)では敷石の下から、それに沿うように巡る溝が検出されている。多くの資料にあたっていないため、過去の調査事例のうち床下の施設例として提示できるのは、この2例のみであるが、敷石住居を調査した場合、敷石上面までの調査のみで終わっている例が多く、このような施設は、かなり存在したものと思われる。今後の敷石下の調査例の増加を待ち、さらに検討してみたい。

註1 中期後葉の住居址の施設については1989年調査の本遺跡に近接する高島山遺跡で良好な資料を得ているので、その報告の中で触れる予定である。

註2 報告中では石臼となっている。

2. 坪ノ内遺跡の敷石住居址の構造と廃絶のあり方について

今回の調査で検出された敷石住居址は、敷石の一部が残っていた確実なものが、1住・15住・22住・10住の4軒、敷石と思われる石が破壊され残っていた可能性の高いものが、3住・7住・16住の3軒である。いずれも、後述するように廃絶時に破壊されており、本来の状態の復元は困難であるが、これらの住居址の構造について考えてみたい。

住居址の平面形をみると、3住・7住・1住が楕円形、15住・10住が橢円形（10住は、わずかに入口部に張り出しをもつ）、16住が円形、22住は不明である。割平等により、不明瞭な部分も少なくないが、これらに時期や集落内での位置による明瞭な差は認められず、両者が混在していたと考えたい。

敷石の状況をみると、廃絶後に石を持ち出した可能性もあるが、敷石を破壊したと思われる住居址でも、覆土中にあった敷石に使用されたと思われる石の量は全体に多くなく、敷石は住居址の床面全体ではなく、一部にのみあった可能性が高い。敷石に使用されている石は、1住・22住が鉄平石（安山岩の板状節理）、他は石英閃緑岩である。鉄平石は最も近い安山地が、本遺跡の北東の美ヶ原高原であり、いずれにせよ、かなり遠くより搬入されたものである。石英閃緑岩は、遺跡の周辺で多量に産出している。石の敷き方は、いずれも単層のみであり、22住の奥壁部に立石状の石英閃緑岩がある以外には、特に変わったものはない。使用されている鉄平石は、いずれも小さく、最大のものでも、30cm×20cm程度にすぎない。本遺跡への搬入は、中期後葉の土坑582の配石に使用されていることより、中期後葉より行なわれていたと推定される。また遺跡全体での遺存量も少なく廃絶された住居の覆土中の遺存量も少ないので、廃絶時の持ち出しや、他の住居での転用の可能性もある。使用された石の種類と分布の関係をみると、後期の集落の東側及び北側の住居が鉄平石を使用し、南側の住居は石英閃緑岩を使用している。時期別でみると鉄平石を使用している2軒は1住が洞之内I式期、22住は、後期前葉のものという以上の時期の決定ができない。このため両者が併存したのかは不明である。

住居址の廃棄の状況をみると、敷石を剥いだと推定されるもの、火災により廃絶されたもの等がある。

1住では、敷石が一部剝がされ、覆土中に多量の礫（石英閃緑岩、以下同じ）が投入されている。15住は火災により廃絶されている。敷石も一部表面の凹凸が著しい部分があるが、故意によるものかは不明である。

7住は火災により廃絶されている。覆土中には多量の礫が含まれている。

10住は敷石の一部が、おそらく故意に剝がされたあと、火災により廃絶されている。覆土には礫が少量混入していた。

16住・22住は覆土中に多量の礫が投入されている。

3住は敷石が全て剝がされていた。覆土には礫が少量混入されている。

6住は火災により廃絶されている。

この遺跡の後期の住居址の廃絶の特徴として、敷石住居の石を剥いでいることがあげられる。本遺跡で住居址の敷石が剥がされているとした根拠は、以下の点である。

1住では、2住に切られた部分の覆土中の壁に、1住の敷石に用いられたと思われる鉄半石が、床から浮いた状態で混在していた。

10住、22住も1住とはほぼ同様の理由による。

3住では、覆土中に敷石の一部とみられる礫が含まれており、床としてとらえた面（掘り方の底面と考える）と炉とのレベル差があまりにも大きい。

しかしいずれも焼ぐという行為を明確に証明できるものではなく、石を剥いだというのは推測の^{註1}域を出ないものである。他遺跡での事例としては、長野市平芝平遺跡の事例などがあり、さらに検討を要するものの、石を剥ぐという行為は存在した可能性が高いと思われる。

10住の場合、石を剥がされたあとに焼けており、焼くこと自体も何らかの意味をもち、故意に行なわれていた可能性が高い。廃絶の標の投入も合わせて考えると、敷石を剥ぎ、火をつけて焼き、さらに石を投入するという廃棄のパターンが存在したのかもしれない。これらのことと合わせて考えると、さらに多くの住居址に敷石が存在した可能性も考えられる。集落の中での分布の状況をみると、火災により廃絶されたと推定される住居址が集落の南西部に集中している他には明確な傾向は把握できない。またこの廃棄と、それぞれの住居址の施設や集落内での性格との関連についても不明である。

以上集落の変遷と住居のあり方について総合的な考察を行なったが、いずれも分析が不充分で中途半端なものとなってしまった。特に多くの事例を検証できなかった点が悔やまれる。今後さらに分析を深めてゆきたい。

註1 平井彰氏の脚書きによる部分が大きい。

註2 長野市平芝平の脚書きによる。

主要参考文献

- 田原道 1969 「绳文中期に見られる室内装飾の一実例」『古代文化』21-3、4
柳村達 1975 「绳文中期後半の室内装飾遺物」『どるめん』6
山本輝久 1975 「敷石住居址のもの意味」『古代文化』28-2、3
松本市教育委員会 1988 『林山遺跡』
長野県県立文化財センター 1986 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2
平井彰 1982 「信濃の昭和後期文化」『平出遺跡考古博物館ノート』2

第7章 調査のまとめ

今回の調査では、古くから多量の遺物の出土が知られていた坪ノ内遺跡の実態を把握し、そこに長期に渡って展開された集落の変遷を明らかにすることができた。以下時期ごとに成果と課題とすべき点をあげてみたい。

縄文時代早期末～前期初頭では検出された遺構は、わずかであるが、土器集中区より、多量の土器が出土した。長野県内のこの時期の土器様相については、近年の資料の増加により、次第にその様相が明らかになりつつあり、中信地方でも近年いくつかの調査例が報告されている。本遺跡の資料は層位的把握が困難な状況での出土であったが、量は非常に多く、また東海系の上器を多量に伴出している点からも、該期の良好な資料といえる。しかし集落内の遺構の数は非常に少なく、これらの土器が、どこからもたらされたのかは、今後の周辺遺跡の調査等を含めての解明に期待したい。前期末～中期初頭では2軒の住居址が調査された。この2軒は切り合っており、いずれも調査区外に延びていたため、完掘できなかったが、出土した土器は該期の良好な資料である。また土坑の分布等と合わせて、この時期の集落の展開を予察することができた。

中期中葉では土器集中区より多量の土器が出土したことが特筆される。その量は時期別でも最も多く、復元できたものも多数あり、松本平でも有数の好資料となった。しかし早期末～前期初頭と同様に、検出された遺構は非常に少なく、土器集中区の土器が、どこからもたらされたのかは、今後の大きな課題である。

中期後業では、調査区の西部で環状集落の展開を明らかにできた。外縁部は調査区域外のため、一部を調査するにとどまったが、中心部の全容を調査することができた。台地上の平坦部の外縁に沿って土坑と住居址が巡っており、その変遷については、ある程度の傾向を把握することができた。同期の集落を、これだけの規模で調査できたのは、松本市では初めてである。住居址から出土した土器をみると、従来の松本平の該期の様相と同じく、曾利系、唐草文系、加曾利E系の土器が混在する。このうち第18号住居址では、埋甕のみ唐草文系の土器、他は加曾利E系の土器と区別されている。このような異系の土器の用いられ方については、光学により指摘がなされているが、近年報告された塩尻市上木戸遺跡（長野県埋蔵文化財センター1988）の事例では、ほぼ同時期の住居址でのみ同様の傾向がみられており、より多くの資料の検討はできなかったが、松本平の東山麓という地域、あるいは時期によるあり方として把握が可能かもしれない。

後期前葉では、調査区の中央部で環状集落を検出した。中期後業の集落と比較すると、立地や集落の構造などに大きな違いがみられ、大変興味深い。特に住居址群と土坑が別の平面面に展開していることは、2つの時期の人々にとっての、空間の機能や、それに対する意識の差を想定させられ

るものである。土坑の性格が直接特定できるものはないが、他遺跡の事例などから考えると墓であった可能性が高く、住居址のある面より一段低い平坦面に墓域があったものと推定される。住居址は廃絶時に破壊されており、また斜面に位置するため削平され、全体に遺存状態は不良である。このため個々の遺構の本来の状態を明らかにすることはできなかった。しかし逆に床が破壊されているため、ともすれば見通しがちな床下の施設の調査ができ、興味深い資料が得られた。集落の中では住居址はいくつかのグループに分かれ、遺物のあり方などにも、グループにより違いが認められた。これもまた当時の生活の一端を窺わせるものと言えよう。

各時期を通じて存在した土器集中区は集落の変遷の項でも述べたが、規模、時期幅とともに類例のない大きなもので、その全容がある程度であるが解明できたことは特筆すべきである。土器は時期別にみてもバラエティに富み、各時期の様相を窺うことができた。また各時期とも在地以外の土器が存在し、当時の他地域との交流の一端を窺わせるものである。

土製品では上例の量が非常に多いことが特筆される。一遺跡での出土数は松本平では最も多い。

石器、石製品は非常に多く、通常の绳文時代の遺跡でみられるものは、ほとんど揃っている。特徴的なものでは海浜石、研磨漆の量が多いことがあげられる。また、それに伴なうと推定される砥石の量も多く、この遺跡の中で加工が行なわれていたと思われる。

中、近世の遺構は、わずかに検出されたのみである。いずれも墓と推定されるが、中世では調接する向畠遺跡の大土坑墓群との関係が注目される。近世では土坑145の副葬品の多量の錢貨のありが非常に興味深い。

今回の調査の概要については、1989年夏の信濃史学会若手研究者の研究発表会で報告を行ない、席上、桐原健、百瀬新治両氏より様々な御教示をいただいた。また調査、整理を通じ、多くの方々より多大な御教示、御協力をいただいた。特に原稿の執筆をお願いした方々には、御多忙の中、何度も足を運んでいただいた。執筆に際しては非常に短い時間での作業となり、多大な御迷惑をおかけしたことを、おわび申し上げたい。

坪ノ内遺跡の調査が、もたらした問題は非常に多い。限られた時間と何より担当者の能力不足により多くの問題を充分に消化できず、雑多に問題点を提起することさえできたのか疑問である。また多くの方々の御教示を充分に生かすことができなかつた責任を痛感している。これらの点については今後の課題とし、究明につとめて行きたいと思う。

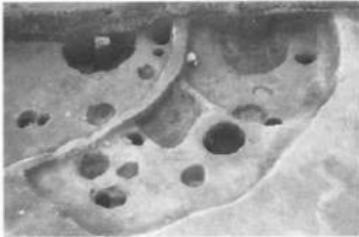
坪ノ内遺跡の調査は膨大な量の遺物との果てしない格闘であった。ここに一冊の報告書として、まとめることができたのは、多くの方々の御協力のおかげによるものである。最後に、今回の調査にあたり惜しみない御理解と御協力をいただいた中山土地改良区をはじめとする諸機関、地元の方々、暑い夏の日から、雪の舞う冬の日まで調査に参加された方々、報告書の作成にあたっては過日の深夜に及ぶ作業を共にしていただいた方々に心よりお礼を申し上げ、結びとしたい。



図版1 坪ノ内遺跡全景航空写真 1988.12.23撮影



調査区全景 東側より 1988.12.24



第14号住居址



第13号住居址



第9号住居址遺物出土状態



第9号住居址 完掘



第9号住居址 炉



第9号住居址 埋甕3・4



第9号住居址 埋甕1・2



第9号住居址 埋甕6



第11号住居址



第11号住居址 炉



第19号住居址 遺物出土状態



第19号住居址 完掘



第19号住居址 炉



第19号住居址 土錦出土状態



第25号住居址

図版3



第25号住居址 炉内遺物出土状態上層



第25号住居址 炉内遺物出土状態下層



第17号住居址 完掘



第18号住居址



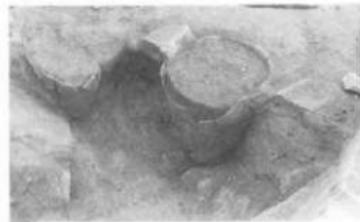
第18号住居址 炉内遺物出土状態その1



第18号住居址 炉内遺物出土状態その2



第18号住居址 炉完掘



第18号住居址 埋甕



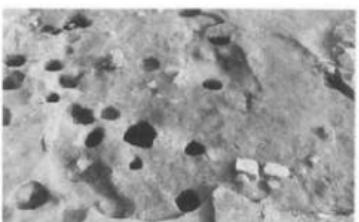
第1号住居址 遺物出土状態



第1号住居址 完掘



第1号住居址 P₄鹿角出土状態



第12号住居址 完掘



第15号住居址 遺物出土状態



第15号住居址 完掘



第24号住居址 完掘



第2号住居址 完掘



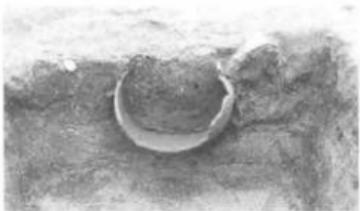
第10号住居址 遺物出土状態



第10号住居址 完掘



第10号住居址 級石（部分）



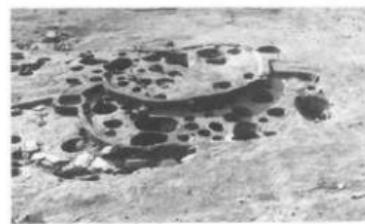
第10号住居址 埋甕



第10号住居址 P₁₅遺物出土状態



第16号住居址 完掘



第20・21・22号住居址



第20号住居址



第21号住居址



第21号住居址 P₂₆石棒出土状態



第22号住居址 遺物出土状態



第22号住居址 敷石（部分）



第22号住居址 完掘



第3号住居址



第3号住居址 炉



第3号住居址 ミニチュア土器出土状態



第4・5号住居址 完掘



第4号住居址 炉



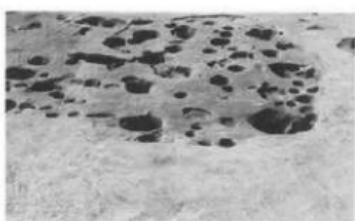
第4号住居址 炉内遺物出土状態



第4号住居址 土製スプーン出土状態



第8号住居址 完掘(手前)



第7号住居址 完掘(手前)



第6号住居址 遺物出土状態



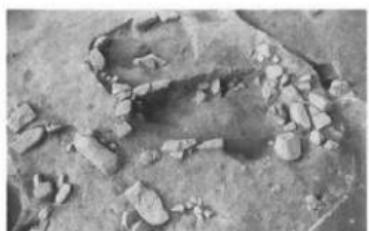
第6号住居址 完掘



第7号住居址 遺物出土状態



配石群 検出状態



配石1・2 完掘



配石1・2 完掘



配石5 完掘



土坑601 埋設土器



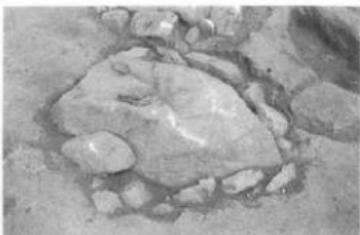
土坑803 埋設土器



土坑370



土坑450



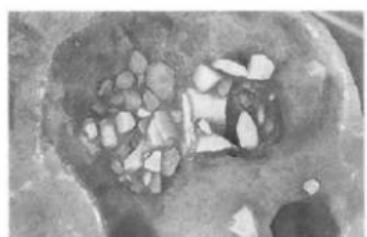
土坑312



土坑311



土坑582 上层



土坑582 下层



土坑582 完掘



土坑490 完掘



土坑145 完掘

圖版10



土器集中区全景 東側より



土器集中区内配石



土器集中区内配石



土器集中区内焼土



土器集中区内炉



土器集中区内埋設土器土偶出土状態



土器集中区 土器出土状態 (No.216)



土器集中区 土器出土状態 (No.50ほか)



土器集中区 遺物出土状態



13住-6



14住

9住-埋甕6
119住-埋甕1
719住-埋甕1
11

19住-埋甕2



9住-埋甕3

图版13



18E-7



25住



25住-5



10住-埋甕



1住-1



22住-1

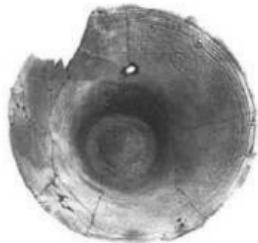


土152-1

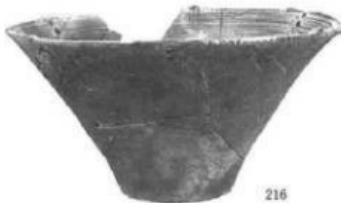


土493-1

土803
埋設土器



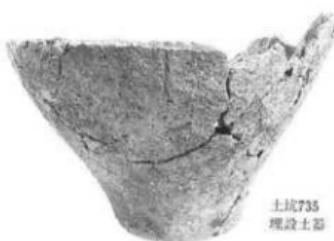
土602-1



216



N45E20配石
埋設土器



土坑735
埋設土器



土720



土859-1



N45E30
理設上部



3



5



8

圖版16



11



10



4



13



16



14



18



21



24

圖版17



39



36



41



50

圖版18



26



40



42

图版19



27



56



28



55

图版20



25



51



52



53



63



62



30



69



64

图版21



68



71



73



65



70



101



96



105



110

图版22



103



109



108



77

図版23



80



93



95



99

図版24



91



81



219



153



123



151

圖版25



137



145



139



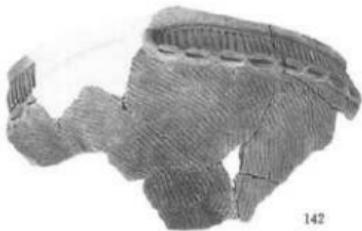
146



140



147



142



124



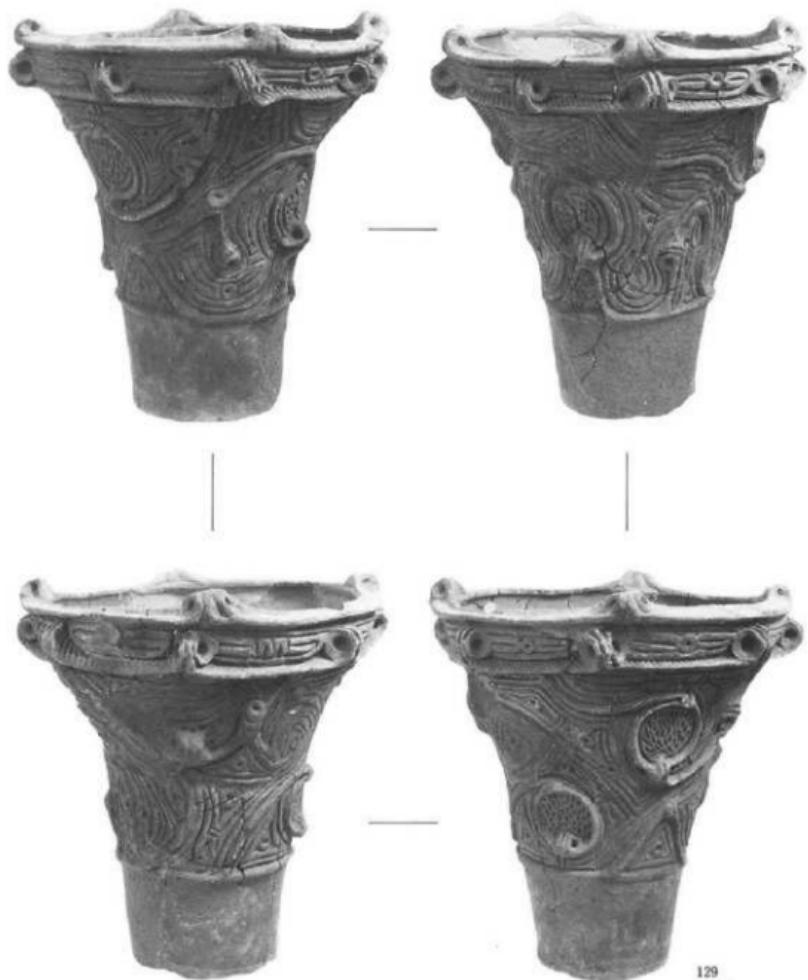
125



—



126



129

图版28



127



131



113



112

图版29



155



167



161



189



218



未同化 A
既出品



未同化 B



未陶化C



未陶化D



未陶化E



图版32



土偶（23）正面



側面



土偶（20）正面



背面



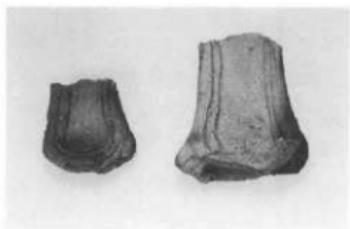
土偶（7）正面



背面



土偶（17-28）正面



背面